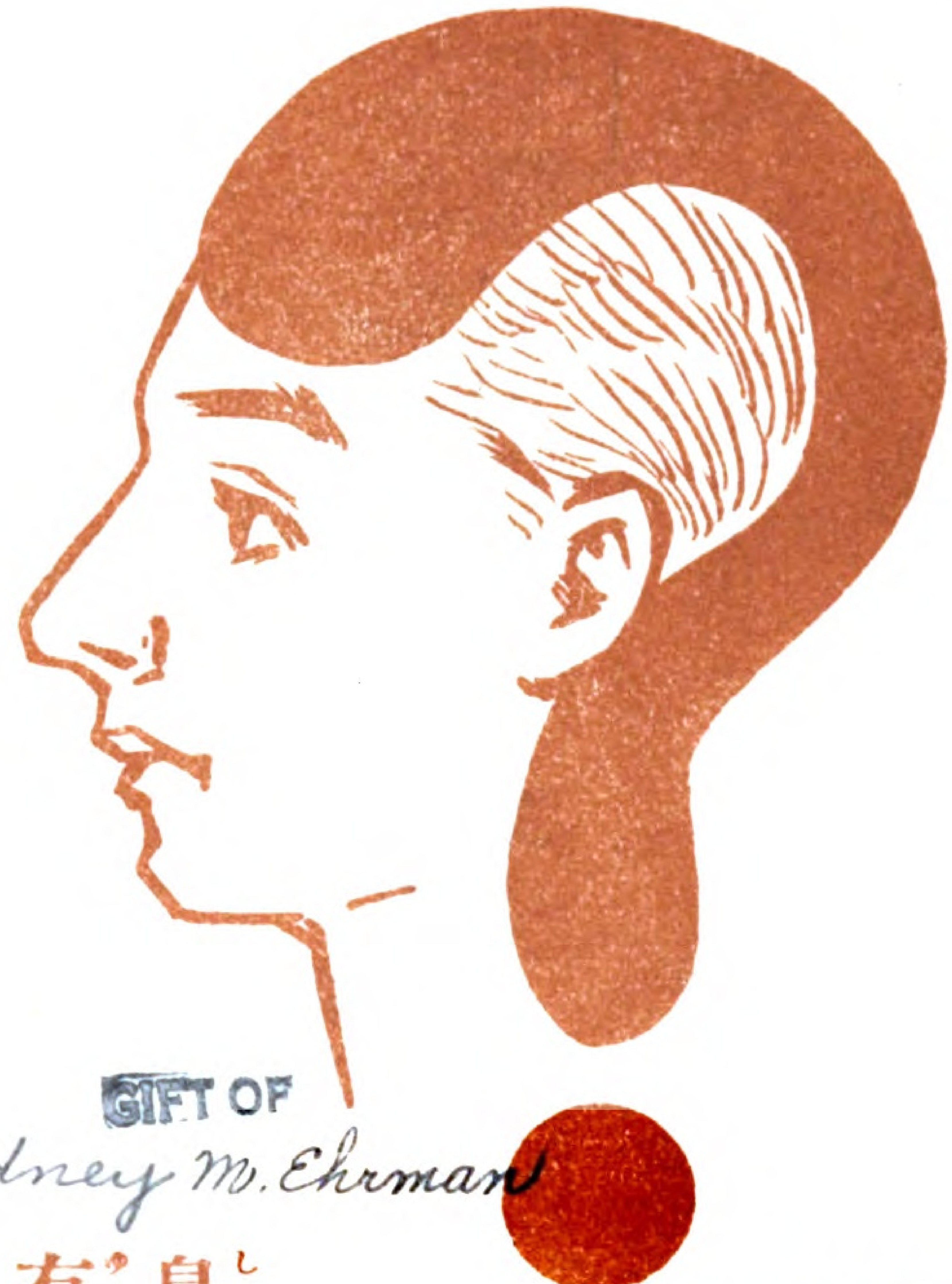
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十一月號

第三十三年第十二號 第三百六十三號



腦神經病に適藥ありや？

コヽに最良の適藥あり

島村博士有効證明

健腦丸を服め!!

コンナ兆候はありませんか？

▲頭が變で重い物被つた心地はありませんか
▲頭痛眩暈がして眠むられぬ事ありませんか
▲氣分惡しく逆上せて便祕に苦む事ありませんか
▲仕事も手に付かずクョ〱思ふ事ありませんか
▲記憶力が薄くなり決斷力が乏き事ありませんか

コレ腦神經病の症候也健腦丸服用あれ

島村博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

健腦丸を常用せば逆上を引下げ頭痛眩暈を治し、腦充血を快治し便通をよくし、怖る可き中風卒中を未發に豫防し、記憶力增進頭腦明快の効あり。

藥價　半週分四十錢　五週分三圓八十錢
　　　一週分七十錢　十週分五圓
　　　二週分一圓卅錢　到る處にあり

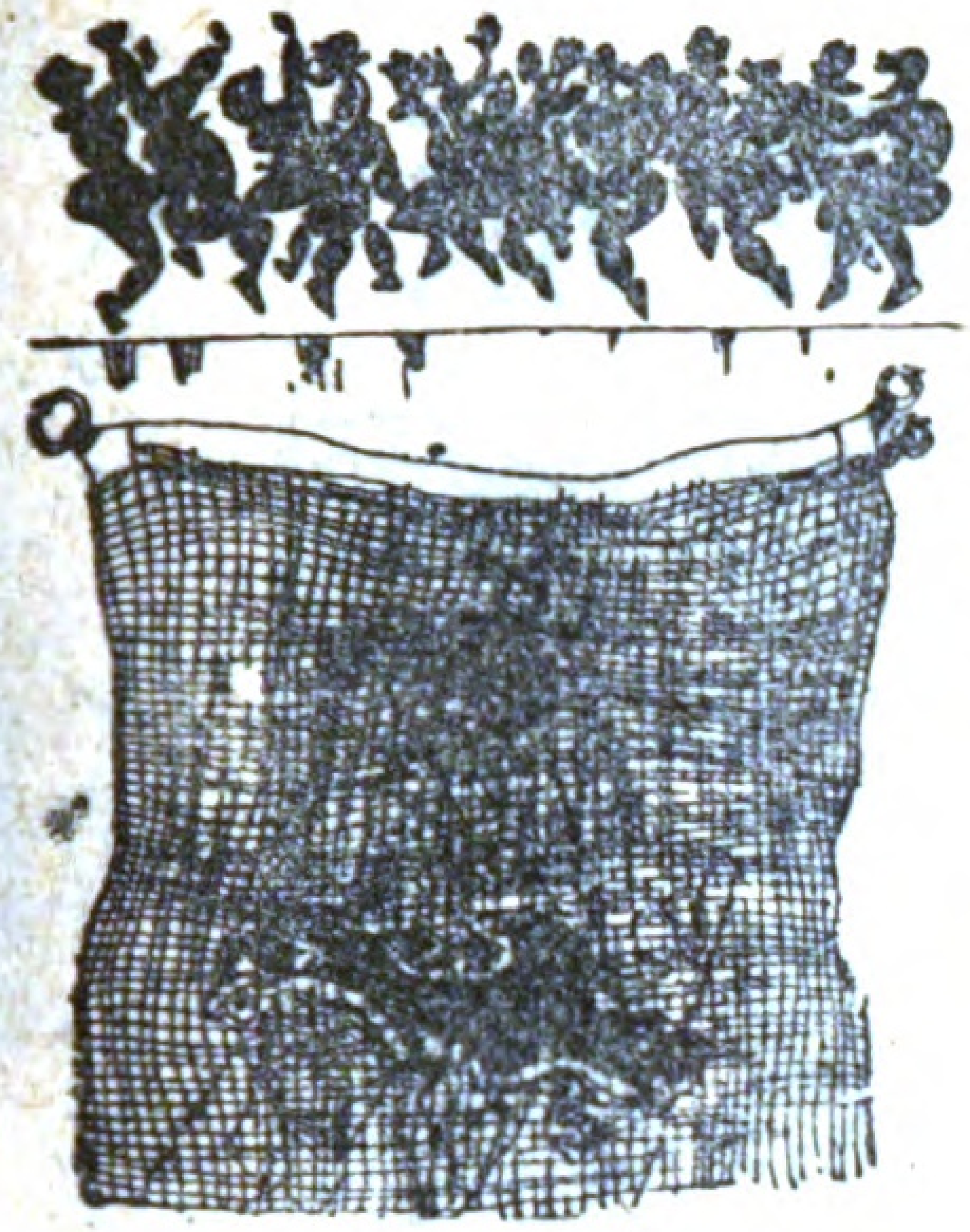
本舗　大阪 東京　丹平商會藥房

廣津和郎氏著 （長篇小説）

二人の不幸者

大阪特製美本
定價九拾錢
郵送料八錢

廣津和郎氏の第一の長篇である。性格破産者なる二人の青年の、徒らに惱み多く苦み繁き生活を中心とし、紛雜を極め汚濁を極めたる現代生活の各方面に對し、精到なる描寫と鋭利なる批評とを加へたるものスケエルの大なる、作意の複雜なる、種々の意味に於いて、若き文壇の生める近來の大作と許し得るであらう。作者は本篇の主人公たる二人の青年に就て曰く、「かういふ性格の破産の狀態が何處から來たか、又かういふ性格破産の狀態をいかにすべきか、これは現在の日本に取つて最も重要なる問題である。それの解決を急ぐ前に、かういふ問題が現存の日本に取つて最も重大である事に、人々が心の底から考を向けるやうになるのが何よりも必要である」と。新人の手に成る一篇の社會小説として大方の精讀を乞ひたい。



夏目漱石原作　近藤浩一路氏畫

漫畫坊っちやん

▼特製極美本　▼定價六拾五錢　▼郵送料六錢

現代漫畫家として獨歩の稱ある浩一路氏が漱石先生の『坊ちやん』より百數十のシインをとり來りて各々一幅の繪となす。篇中諸人物の風丰と動作と、幾多滑稽なる場面の見事に漫畫化されたるを看よ。

東京牛込矢來　振替東京一四七二番　**新潮社**　電話番町八〇九番　電話番町八九九番

田山花袋氏新著

最新 紀行文集

湖のほとり

津田青楓氏装幀

文壇の巨頭田山花袋氏の新著出づ氏の紀行文集多しと雖も本書の如く新生面を開拓したるものは空前と稱すべく、眞に最新の名に負かざるものなり。

○極彩色布表装○箱入美本○定價一圓三十五錢送料八錢

佛文豪グルモン作

石川戯庵氏譯

（忽再版）

小說 神人問答

神と人との問答に托して皮肉辛辣の人生觀を說き花の如き美人を加へて熱烈なる戀愛を點綴したる奇小說なり

四六判クロース箱入

定價一圓參拾錢

送料八錢

正宗白鳥氏新著

小說集

烈日の下に

正宗得三郎装幀

現今小說壇の大家として筆致愈渾熱し觀察益透徹せるは白鳥氏なり。本書は氏が特異の個性と藝術とを表現せる最近の傑作を輯めたる小說集なり。

四六判全装箱入

定價一圓五十錢

送料八錢

東京麹町區飯田町一丁目二番地 株式會社 天佑社 振替東京一〇一二八番 電話番町一一七九番

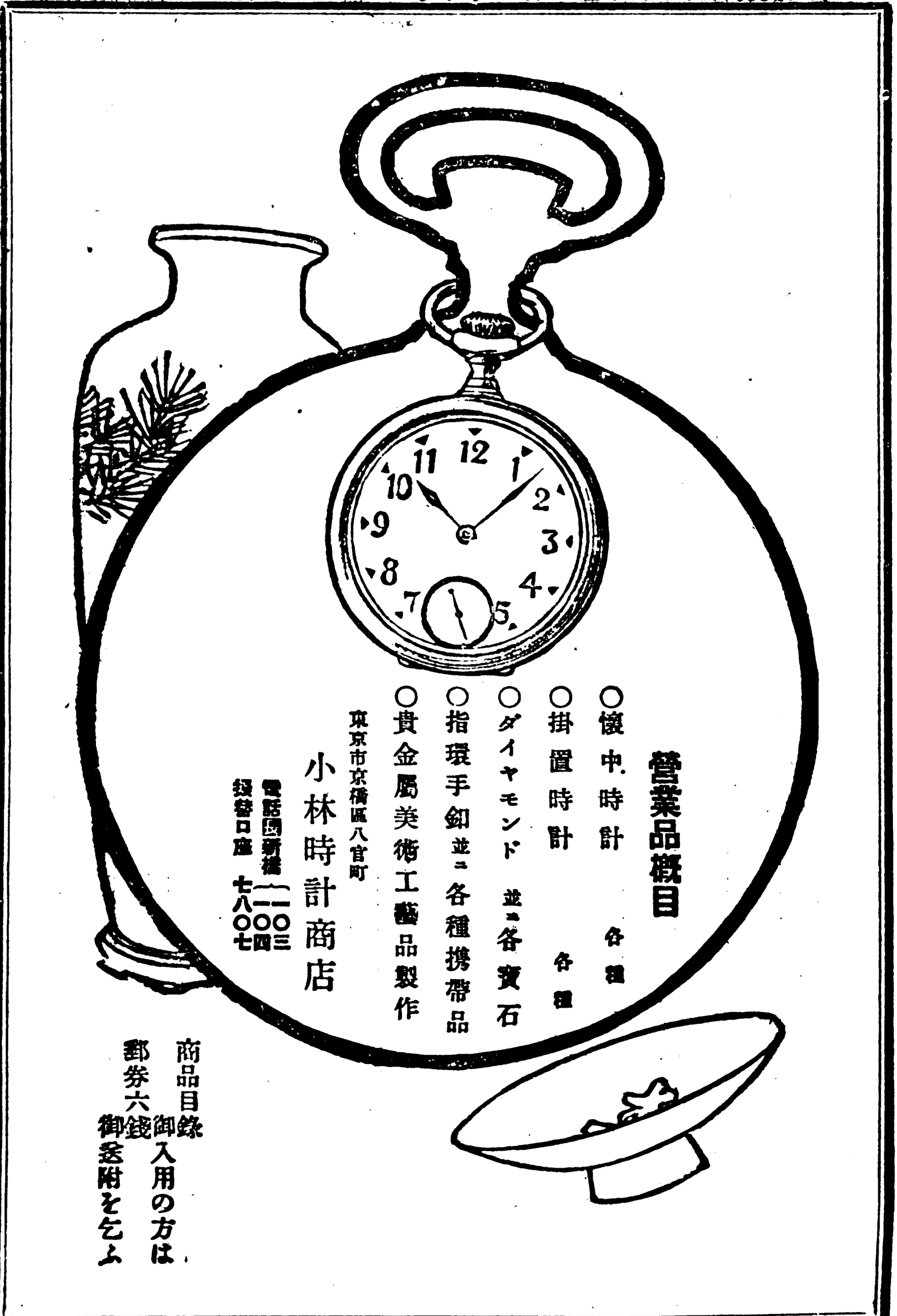


中央公論第卅三年十一月號目次

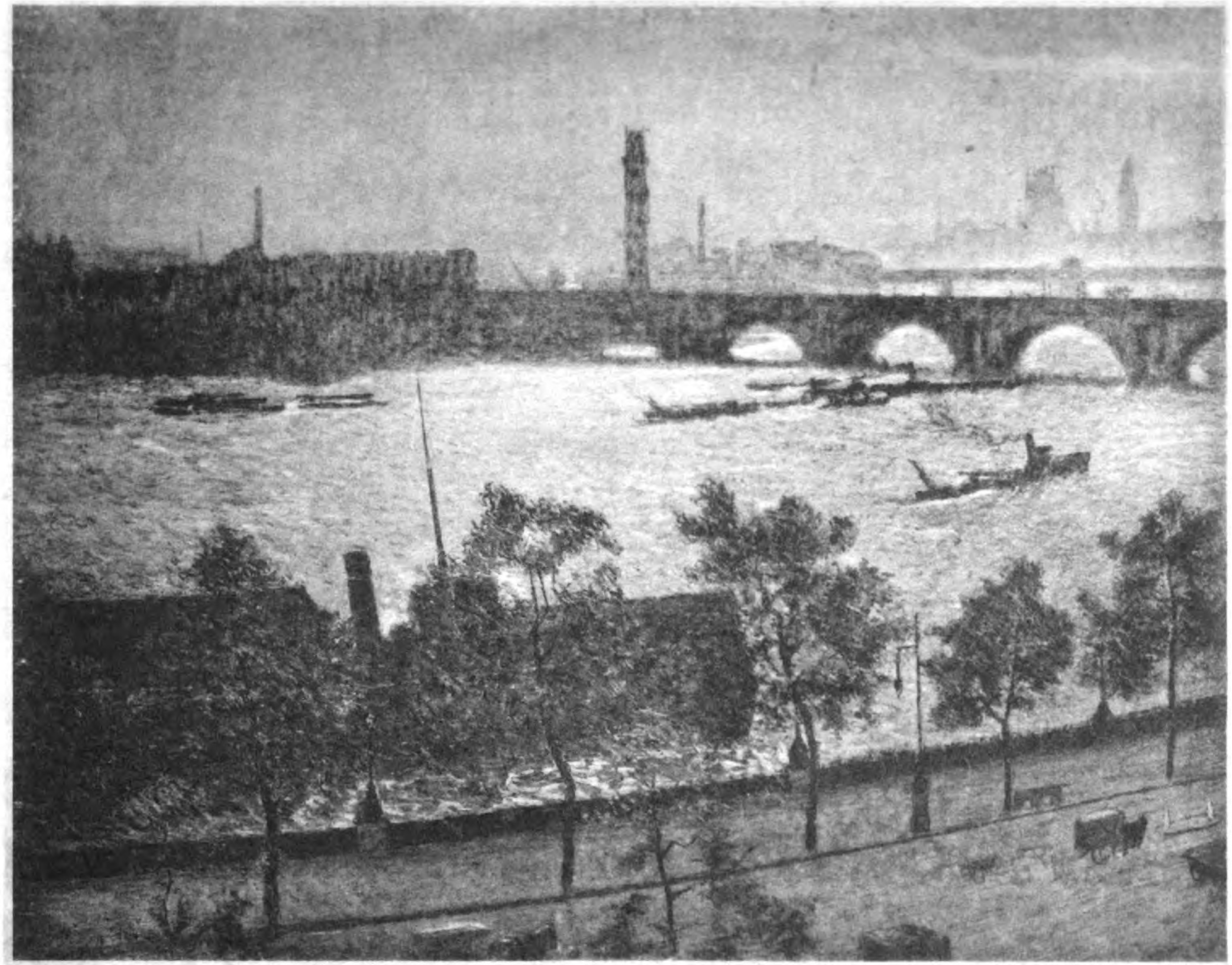
▼公論



廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店鋪及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"NOVEMBER"
EMILE CLAUS

何ぞ速に其政綱を發表せざる

國民の輿望を負うて生れたる原内閣は、國民の期待に背きて未だ何等の纒りたる政綱を發表しない。不言實行の常套語の裡に、彼れ遂に國民の耳目を瞞かさんとする乎。

原首相は言ふ。我黨は之れまで屢々主義政見を公表した。臺閣に上つたとて俄に復た之を繰り返すの必要はないと。敢て問ふ、從來何の政綱を以て國民に訴へた事がある。又一領袖某なる者大阪の某新聞記者に語りて言ふ。局に當つた度毎に事々しく政綱を發表するは、國民的基礎に立たざる官僚政府に取つてこそ必要なれ。民意其者の代辯者たる政黨内閣に政見公表を迫るの必要は何處にある。政黨内閣が政權を取つた度毎に其政綱を發表するといふ事は、西洋諸國に在つても未だ多く其例を聞かさる所であると。知らず、民意代表の關係に於て我が政友會は何れ丈け政黨本來の面目を發揮して居るかを。西洋の例を云々するに至つては、知らずして之をいふならば滑稽である。知つて之をいふならば其の白々しきに呆れざるを得ない。

今や吾人は曠古異常の時局に際會して居る。異常の時局は自ら幾多異常の大問題を提供して吾人の解決を迫つて居る。平時精細なる政綱を發表して居る場合と雖も、今は特に異常の政策を掲げて、一には以て時局の急に應じ、又一には以て國民指導の任を盡すべきの秋ではない乎。況んや平素何等纒りたる政綱を公表せざるに於てをや。庶莫、國民は今や政友會の過去の疎慢を深く咎めずして、只切に異常の時局に應ずる其異常の政策を與り聽かんとして居る。故なくして此期待に背くは斷じて許し難い。

且つ夫れ國民が寺内内閣を葬りて原内閣を迎へたるは、前内閣の内外の失政に厭き、政界の面目一新を冀つたからに外ならない。從つて何を以て這の國民的冀望に應ずべきやは、原内閣の速に國民に公表するを要する所である。加之、政友會は過去に於て幾多の失態を重ねて居る丈け、國民の之に對する信頼の念は、決して十分とは言へない。寺内内閣の後を承けて彼の臺閣に起つを認容したのは、決して彼と彼の頭首とを信用したからではない。從つて彼を迎へつゝ國民は仍然多少の不安と疑惧とを彼の前途の上に繋けて居る。而して政友會にして這の不安と疑惧とを一掃せんと欲せん乎、則ち敢然として堂々の政綱を天下に發表し、其責任を將來に負擔するの決意を明にする外に途はない。

若し夫れ更に政界の大局に就いて言はん乎、政府先づ精細の政綱を發表して之を天下の群議に諮るは、政治的智見の啓發の上に資する事亦極めて大なるものがある。原内閣にして仍然時勢の趨向に目を蔽ひ、右顧左眄一日の苟安を偷むを欲せざる限り、何を苦んで政綱の公表を躊躇するの必要がある。言質を取られ、頑迷者流の反感を挑發するも苦しからうが、態度を曖昧にする事に依つて、民衆侮蔑の裡に不信を他日に醞釀するの更に怖るべきは、打算に聰明なる白頭總裁の固より知らざるべからざる所である。

中央公論



第卅三年第拾貳號
十一月號
第三百六十三號

日本に於ける 生活狀態の改善

柳澤健

一

ピエル・ロチの『お菊さん』や『日本の秋』やを讀んで、日本の生活を夢想してきた多くの西洋人が、横濱か神戸に上陸して、そこにある建物、人、街路、電車、汽車などを眺めたとき、餘りにその夢想と違ひ過ぎる日本を發見して、ロチの筆の荒唐無稽だつたことを憤るか、若しくは、現實の日本人の生活のあまりに低調に墮してゐることを憫れむか、どちらにせよ、激しい不滿不足を胸中に起さぬものは一人も無いと言つて宜しいのである。

併し、西洋人などの不滿不足は、差當り我等にとつてはどうでもいいのである。殊に、ドン・キホーテまがひの考を持つて遣つて來る西洋人が、横濱の伊勢佐木町通や、東京の銀座通をいくら見廻はしても、春信や歌麿の畫いた軟弱淫靡な姿が見當らなかつたと言つて、日本の歐化を慨嘆するやうな口吻は、我等には何等の痛痒もないことである。從つて、自分は、『世界の一等國として、西洋人に見られて恥かしいぢやないか！』といふやうなこの邦流行の標語に就いては、些かの同感をも持てないのである。

併しながら、西洋人が見て不滿不足を感じてゐるこの日本現代の生活狀態に對して、怡然として愛撫自足し得る確信を自分は持つてゐるであらうか。否、日本幾千萬の誰かゞ、その確信を持つてゐるであらうか。西洋人が感じてゐるよりも、もつと深く、もつと現實に、不滿不足を痛感してゐるものは、日本人それ自身でありはしないか！と言つても、それは誇張であると辯駁し得る人が我等のなかにあるであらうか。

まつたく、日本に於ける生活狀態は、いろ〳〵の惡い形容詞のどれを當てはめても間違ひぢやないと思はれるほど、致命傷的な病狀にある。それに對して、不滿と不安を感じない者は、勘くも精神的睡眠を貪ぼつてゐる者を除いては、一人もないと言つて宜しいのである。全ての方面に於て、全ての人の口から、この不滿の聲、不安の呻きを、我等は聽いてゐるのである。

この安定を失つてゐる生活狀態を、如何にして理想化すべきか！　この命題は、我等日本人六千萬の民衆の眼のまへに、墨黑々と書き出してある。この命題を解決することは、六千萬の民衆の前に横はつてゐる『往來止め』の柵をば撤去することである。更に、その凄まじき民衆の生活力を、『一歩天に高く、』また、『一歩地に深く、』進ましめることになるのである。

この生活狀態に關する問題は、自分の確信するところでは、日本に今生じつゝある全ての問題の基礎となるものである。價値の尺度が自分に許されるならば、この生活狀態の問題は、當今流行の米の問題や、西比利問題や、對支問題や、また、日本のみの關係する汎圍では世界戰爭の媾和問題やに比べても、優りこそすれ劣るやうなことは全く無いことを示してゐるのである。その理由は、特に書くまでもない程、我等の胸に『親しみ多き慘めさ』を以て、暗示してゐるであらう。この生活狀態の不整齊が齎らす我等の體力並びに心力の損失は、我等の天授の活動能力をして、殆んど半減せしめるまでに、影響する。この量るべからざる損耗は、自分にとつては、量らんとすれば量り得る西比利の利權問題よりも、獨逸の殖民地問題よりも、杳かに根本的であり、永久的であるのである。

斯うした緊要な問題が、我等を脅かし惱ましめてから、最早數十年の年月を經過したと言つてもいいであらう。この問題も、政治上經濟上、さては思想上のあらゆる問題と同時に、かの維新の黎明から始まつてゐる。それから今日にいたる約五十年の間、ある時は强き疼痛を以て、ある時は鈍き刺擊を以て、絶えず、日本人を脅威してきた。不滿、不安の氣は、一杯にこの日本に漲つたのである。併しながら、五十年の間の脅威は、不滿不安の氣分を津々浦々まで瀰漫することに充分であつたと倶に、また一方では、まあ諦めるより致方あるまいといふ殊に日本人に特有な運命論的自諦を醸成するに到つた。それにしても、自分の衷心遺憾とするところは、この眞の國民的大悲劇の出生に際して、我等の記憶に殘るやうな努力を敢てした先覺が殆んど一人も無かつたといふことである。政治の方面に於て、外交の方面に於て、財政の方面に於て、或は、思想の方面に於て、心血を注いだと見らるる先覺が相當な數に上つてゐるにも拘はらず、この根本的な大問題——一般民衆にこれほど緊密な近狎な問題はないとともに、國家としてこれほど基礎的なアプリオリ的な問題はないのである——に於て、眞にその解決の爲めに心血を注いだと見られる先覺は全く無かつた。それと同時

に、條約改正とか、政黨撲滅とか、選擧干渉とか、出兵問題とかに對して、夢中になつた政府はあつたらうが、この大問題を眞に大問題なりとして、當今流行の何々委員調査會と言つた風なものでもいい、兎に角さうしたものでも敢て起した政府が嘗てあつたであらうか。なるほど、今日の新聞を見ても、新内務大臣が地方長官に與へた訓示なるものが載つてゐるなかに、『……一般國民は今の時宜しく益々自重自制の精神を發揮し且つ生活狀態の改善を圖るべく漫に詭激の思想に驅られて輕躁に趨り常軌を逸するが如きことなきを要す……』といふ字句があるを以て見れば、既に政府はこの問題に對し徒に拱手傍觀してゐるのではないやうにも思はれる。併しながら『如何なる方嚮に、如何なる手段を以て、生活狀態を改善すべき乎』が、眞先の問題であつて、方向も指示せず手段も與へないで、徒らに、生活狀態の改善を叫ぶことは、唯一片の敍情詩に過ぎないのである。西洋人の日本生活狀態の觀察ならば敍情詩で充分結構であるが、日本人自身にとつては、現實過ぎるほどに現實な問題なのであつて、實行力を具へた合理的な論文以外の何ものであつてもならないのである。

二

久しく希臘文化の影響の下にあつた羅馬帝國が、かのヘブライの文化の襲撃を突然に受けた當時の混亂騷擾よりも、更に劇しき混亂騷擾を味つてゐるのは維新以來の日本人ではないだらうか。羅馬の夫れは、例へば、わが邦の佛教傳來の夫れに等しく、偏に純粹なる文化的革命と言つて差支へないものであつた。然るに、我等が現代に於て痛感してゐる所のものは、單に文化的革命に止まらずして、あらゆる方面のあらゆる革命である。そこに存するものは、あらゆる時代錯誤であり、あらゆる土地錯誤であり、あらゆる雜駁、あらゆる混線である。疊の上に籐椅子があり、床の間には油繪がかゝつて居り、食卓の上には櫻正宗に竝んでオムレツの皿があり、下駄棚のなかには、疊付の下駄と雪駄と靴と容

氣草履がはいつて居り、本箱のなかには『ポケット論語』とトルストイの『復活』に並んで『國譯大藏經』がある。電鈴附きの格子戸を開けて一歩外に出れば、丸髷の奥樣の淑やかに乘つてゐる自動車が路傍の泥を勇敢に投げ飛ばしながら疾驅して行き、電車が一町にも亘つて停電して居り、街角の救世軍軍人の演説をば用達に出た小僧がぽかんとして聽き惚れて居り、その向ひの蓄音機屋からは加賀太夫の新内の明烏が悲鳴を擧げながら音波を攪がらせてゐる。何々軒を會場とした宴會にでも行つて見れば、定刻が過ぎて一時間にもなるのに未だに開會されない。それかと言つて、不平を言ふ人もなく、當り前の顏付をしてゐる。その癖、その胸間には、寸秒の間違ひもないといふ保證附のヲルサムの金時計をぶら下げてゐる。發起人の英語交りのテーブル・スピーチがあるかと思へば、餘興として貞山か誰かの赤穗義士の仇討美談がある。それとも、ずらりと並んでゐる椅子に凭りかゝつて、長唄何連中とかを聽いてゐるのである。……

斯うした社會百面相を事新らしく書き出すことは、讀者にとつて迷惑に相違ない。それ程、誰も彼もが、日常起臥の間に、耳目に觸れ過ぎてゐる現象になつてゐるのである。かゝる奇異な混雜は、自分には全く、日本二千五百年の歷史の上を探してもこれと匹敵し得べき時相を發見し得ないと倶に、また、萬國史の上に於ても何時の時代、何れの國を問はずこれを發見し得ないのである。

斯かる多種多錯の時相を示してゐる雜駁な生活狀態をば、一つの秩序のなかに整齊して、これに一定の方向を與ふることは、恐らく萬人の翹望して止まない所であるに拘らず、事實上に於て絕對に不可能に邇(ちか)いことは、また萬人の均しく認めてゐる所であらう。支那に於ける南北妥協の如きは、中外の認めて以て緊要事なりとしてゐるに拘はらず、數年を經過せる今日未だその解決を見るに至らないではないか。況んや、この生活狀態を革めんとする問題は、到底、支那南北妥協や、または、かの外交調査會に於ける西比利出兵妥協やの如く、感情の上の行き掛りや、單純なる見解の相違

などに基礎を置いてゐる所の問題とは、日を同じうして語り得べきものではない。兎に角、それは、難と易との程度ではなくて、不能と可能との差異ではないかとさへ、自分には思惟さるるのである。

佛蘭西の樂匠エクトル・ベルリオスの『メモアル』に依れば、彼は嘗て巴里の樂壇に於て、千數百人より成つてゐる大管絃樂をば指揮したことがあつたといふ。而もその折、彼の身軀は、感激と恐怖とのために、水を浴びたるが如く流汗を以て濡れ、指揮臺にありて、その衣を更ふるに至つたといふ。理性の澄徹と意力の剛毅なる點に於て儕輩を拔いてゐた彼ベルリオス、稀代の天禀を有せることを自覺して、凱旋の將軍の如く敢然と指揮臺に立つ決心をした偉大なる樂匠彼ベルリオスにして、千幾百人の樂器を整齊するに、衣を更ふるほどの激しい流汗を以てしたことを考へれば、幾千萬から成つてゐる樂器を、しかも各自異れる樂譜を讀みつゝある樂人の上にあつて、指揮棒を持つて整齊するといふ業は、神か天才か、各れにしても常識には理解し得ざる秘策を以てせねばなるまい。

思ふに、感化院の敎化は、幼稚園の敎化よりも杳かに困難であると同じく、既存狀態の革新・整齊は、未存狀態の育成・創設よりも杳かに困難である。從つて、宇宙のケオスの時代に當つて隨意に世界を創造したエホバの仕事は、メデュサの頭にある無數の蛇に喩へてもいゝ現代の日本の生活狀態をば理想的に整齊する仕事と比べれば、杳かに容易であると言つても間違はない。新聞紙の傳ふる所に依れば、山本內閣の秕政を匡すために大隈侯が內閣を組織して、約一年有半に亘つて整理を爲したといふ。また、寺內伯の內閣も、前大隈內閣時代の弊政を匡すにその在職年月を費やしたといふ。現代の大政治家と稱ばるる上記の如き人にして、一二ケ年に過ぎない間の秕政を匡し、正軌に復させるためには、矢張同様の年月を必要とするのであつて見れば、過去五十年に亘つて混亂騷擾の限りを盡してゐる生活狀態を正軌に匡すためには、是非とも、更に五十年の年月がかゝることを必要條件とするのみではなく、その匡正者としては稀代

の偉人を必要とする譯であらう。

斯く思ひ來る毎に、自分は、案を叩いて長嘆息霎時ならざるを得ない。現在の渾沌としてゐる生活狀態を一眼の下に指揮して、玆に一の壯麗なる管絃樂を生れさせることは、到底夢想に過ぎない。メヂユサの頭の蛇を一つ一つ殺戮してしまつた上でなければ、到底、一束のなかに纏めてその頭を並べさせることも難かしい。

玆の論點に達したときに、始めて、武者小路氏などの『新らしい村』や、ムーアの『ユートピア』やが考へ付くのである。その言ふところは、現在の生活狀態の改善に絶望して、消極的に人跡の絶えてゐるところに『新らしい村』を創り出すか、または、積極的に現在の生活狀態の破壞を遂行してその跡に『ユートピア』を創り出さうとするのである。それは、現代の生活狀態の致命傷的病況に匙を投じたものの行爲なのである。

現代の生活狀態の致命傷的病況を認識することに於ては、自分は、武者小路氏や、ムーアやに負けはしない。全く、理想のみで物を言ふことを許されるならば、自分は、先づ、かの皇帝ネロの空想と勇氣とを以て高く叫ぶであらう。『燒け。現在眼に見ゆる古き都を燒き盡せよ。而して、その灰を掃つて、更に新らしき都を建てよ！』

この混亂を極め、無秩序を極めたる生活狀態が、綺麗に一掃されて了う。そして、その跡に、透徹せる科學的精神と灼熱せる藝術的精神とを鎔合したる眞に威力ある新生活狀態が、若さと雄々しさと、且輕やかさを以て創造される！おゝ、何といふ燦ゆい光景であらう。何といふ生々した光景であらう。

斯うした想像は、自分を上氣させ、興奮させるに充分である。併しながら、この想像を實行することは、新露西亞の黎明を望んで起した革命が、曩昔よりも一層濃い闇黑を招致して了つた以上に、もつと思ひ掛けない悲劇を招致するだけであるといふことを、自分の理性は明確に宣言するのである。

即ち、玆に至つて我等の採るべき道は、ユートピアたらずして、明かなる眼前の事實からその方策を案出せねばならぬといふことである。換言すれば、現在の生活狀態を防護しつゝ、その改善策を徐々に且確實に案出せねばならぬといふことである。

三

我等の態度は、玆に於て確定する。詩人風の華やかなる幻想を捨てゝ、實務家風の着實な、大地に接いた論理を辿つて行かねばならない。長短を比較し、優劣を考量して、漸を追ふたる改善を實行して行くほか、採るべき策は無いのである。

併し乍ら、自分の言ふ言葉の意味は、かの庭師が鋏を持ちて庭樹に對する如く、こゝを切り彼處を曲げて、單純なる外形を齊へやうとするのでないことは、無論のことである。先づ何よりも第一に、胸中に燃ゆるやうな改革の情熱が要る。それとからみ合つて、『如何なる方嚮に、到來の生活狀態を導くべき乎』といふ確實にして合理的なる解決を持つことが必要である。兎に角、深き考慮の末に『選びたる道』があり、その道を遂行し得る情熱があり、而して、その遂行に際しては、着實なる打算があるといふことが、自分の腦裡に嚴存する『理想的な生活狀態改善論者』の典型なのである。

扨て、然らば、如何なる方嚮に、その『選びたる道』は走つてゐるであらうか。換言すれば、現存の生活狀態は、如何なる方針の下に改善せらるべきであらうか。

これに對して、百人百種の見解が成り立ち得る。その一人は、公園のベンチが、一朝國家有事の秋に際して軍隊輸送の汽車に於るベンチとなるといふやうな獨逸風の軍國主義的設備に適應できるやうに日本の生活狀態を導いて行かうといふ見解を持つであらう。幼にしては、フィヒテの唱道したやうな硬教育によつて軍國主義的鍛鍊を充分に受け、壯年

に至れば所謂間諜制度（スパイシステム）の普及に依つて常に軍國主義的活動を爲して時の政府を支持するといふやうな獨逸風の遣り方に從つて、この雜駁を極めてゐる日本の生活狀態を統括して見やうといふ見解である。更にその一人は、英國風の個人主義的な、極めて巧利的な見解を採つて、富める個人、富める國家を成して見やうといふ論者であらう。獨立自尊といふ標語（モットー）を作成して、日本に於ける生活狀態の改善を企圖したかの福澤氏の如きは、思ふにこの見解の論者であつたらう。また更にその一人は、佛蘭西風のあの親愛な市民的感情を基礎として、多數が同時に快適な生活を爲し得るやうな社會を生み出さうといふ見解を採るであらう。また、狹量にして愛すべき美術家は、美術的にのみ生活狀態を革變せんことを冀望し來るであらう。また、科學者は、科學的に律（のつ）とることに依つてのみ、生活の改善が完了せらるゝものであることを主張し來るであらう。

斯くの如き多數の見解のうち、果して我等は何れを採るべきであらうか。

自分は、この一見難問らしき質問に對して、極めて容易に答へることが能きると思ふ。それは、『その總てを採れ！』といふ答である。

斯うした答は、自分が前記して置いた『深き考慮の末に選べ』と言つてることを無慘にも裏切つた言葉ではなからうかといふ讀者の疑念に對して、自分は、人間そのものを考慮し、それと同じ意味に於て今問題としてゐる社會をば考慮せよといふ言葉を以て酬ゐんとするのである。

思ふに、人間ほど微細・複雜を極めてゐる者はほかには無い。平和を愛好する念慮と、爭鬪を愛好する念慮とが同時に潛在し、善を喜ぶ心と惡を喜ぶ心とが同時に竝存し、人類愛の念と倶に嫌人（ミサントローブ）的の性情が交り合つてゐる。かうした照應は、訓練を重ねた人間ほど著しくなつてゐる。しかも、此の複雜は、人間の『死』を現はすものではなくて、實に

人間の『生』を現はしてゐるのである。それ等の一見雜多に簇がつてゐるところの特質は、實は無秩序・無整頓の散在ではないのであつて、大きな人間の調和樂を組立てゝゐるところの夫々に肝心な樂器の役割をつとめてゐるのである。一つは一つに響き合ひ、他は他に凭り掛かつて、渾然とした活動機體を創り出してゐる。生命の流れが、沸々として湧き出で、赤熱して燃え上り、盡きざる力を以て世界を前方に押し進めて行くその偉大なるフワクションこそ、實にこの『複雜なる整頓』の働きにほかならない。

この人間の活動能力の基礎は、また、社會の活動能力の基礎となつて行く。社會の生命も亦その『複雜なる整頓』あるが故に創り出される。

『その總てを採れ！』と言つた自分の言葉は、實にこれを意味するのである。軍事的方嚮に、日本の生活狀態を調節改善して行くとともに、經濟的方嚮に調節改善して行くことは、尠くも日本が活動能力を生み出だすに堪え得る限りは、決して不可能ではない。それと同時に、文化的方嚮を採らうとするのも、また、科學的方嚮を採らうとするのも。

斯くして、日本の生活狀態は、見た眼に於て、或は現在の雜駁な狀態より、更に叢錯したものになるかも知れない。併しながら、それは單に見た眼の上に映る現象に過ぎない。深く見詰むる眼には、その叢錯のなかに微妙なる脈絡が首尾照應して存在することを發見し得るであらう。美くしい管弦樂がその底に響き亙つてゐるのが感知できるであらう。

斯く論じ來つて、自分は、漸く本論の中心に逢着能きたのである。

改善されたる生活狀態は、總ての方嚮に對して柔軟なる適應性を持つてゐなければならない。而して、その柔軟なる適應性は、要するに、その社會に充分の活力あることを意味する。充分に豐滿した活力が、あらゆる方嚮に遺憾なく行き渡つて、現世的繁榮と永遠的福祉とを樹立するものでなければならない。活力を有する社會！ 活力を生み出すやうな

生活狀態！　快活の氣象と心身の健康とを有してゐる生活狀態こそ、實に自分が羨望し居るところのものである！

扨て、この希望を胸に抱いて、自分は、眼のまへに展開してゐる現在の日本人の生活狀態をば、つくづく眺めやうとしてゐる。

四

自分は横濱の土地に住むやうになつてから、一年半を經過した。その間に見且つ聽いた在留外人の生活狀態は、自分に強い暗示を起させて呉れた點で、永く忘れ得ざる印象を殘してゐる。その數々の暗示のなかで、特に自分の心を惹いた一つを語りたいと思ふ。

午後四時になると、あの本町(メーン・ストリート)通りから海岸(ウオーター・ストリート)通りと稱(よ)ばれてゐる外人商館の櫛比した街路をば、一日の勞務を爲し終つた快活さを顏付と足どりとに現はした數多くの外人が、各自山手の自分の住宅に向つて歸路に着く光景を想像して貰ひたい。その生々(いきいき)しさ、その健やかさに溢れた光景は、疲勞と困憊とを何よりも強く感じさせる日本人の歸宅する光景と比べて何といふ對照を爲すものであらう。兎に角、自分はいまかうした外人の群の跡を追ふて行く。その外人の一部分は、オリエンタル・ホテル若くはグランド・ホテルの宏壯な建物の玄關のなかに姿を消すのである。言ふまでもなく、綺麗に飾られたティ・ルームのなかで、海景を眺めながら、熱い紅茶に唇を濡して、一日の勞務と次いで來る樂しい悦樂の間に一線を劃さうとしてゐるのである。美くしいウエトレスと、美くしい音樂と、それに甘い菓子がある。併し彼等は、三十分より長く止まらうとしてはゐない。何となれば、彼等には、次に爲すべき事柄が待つてゐるからである。ホテルには立ち寄らずに、自分の住宅に眞直に歸つて、そこでティ・タイムを過した人々とともに、彼等は、いま、公園のなかのテニス・コートに急いでゐるのである。または、海岸のヨット・ハウスに急いでゐるのである。

白い運動服と同じ色の靴とを着けた數多くの外人の男女が、あの緑の柔らかい芝生のコートの上で、ラケットを振り廻してゐる夕暮の光景、それから、氣象報知標のある邊の海を薄れ行く殘照のなかに數多いヨットを走らせてゐる外人の男女の樂しげに響きわたる笑聲、――それ等の展望をうしろにして、自分は、日本人がその時何をしつゝあるかを眺めたい。

會社なり役所なりから、疲れた足をさも重げに運ばせながら自宅に戻つて來た大多數の日本人は、泣き叫ぶ子供の聲、喧嘩し合ふ子供の聲も毎度のことであつて見れば左程苦痛にもならず、一合と極められてゐる酒を手酌に、はや陶然として柱に身體を凭せかけ、祖先傳來の謠曲でも唸つてゐる時ではないか。やがて日が沈む。夕刊が配達される。眞先に續物の講談を讀んで、それから株の欄の米相場を見、續いて三面記事を最後の一行まで讀み終る頃には、酒の醉が睡眠を呼ぶのである。そして、滿足らしく寢床のなかに這入るのである……

その頃になつて、外人は漸く運動服を平服に着換へて食堂の人となるのである。明るい燈火と綺麗に輝く食器、そして賑やかな會話。一時間か一時間半の長い時間を、そのなかで費やす。もう、時間は夜九時に近い。山手のゲーティ座には、佛蘭西協會の素人芝居がかゝつてゐる。九時に始まつて十一時には必ず終になる。二時間の間の心からの笑ひに輕く身體は疲れて、自分の邸宅へと妻の手をたづさへて戻つて來るのである。

『能率』といふ言葉をこの場合に持ち來るならば、その『能率』の増進方法に於て、即ちその時間の利用方法に於て、その活力を創り出す方法に於て、實に低調なる生活狀態に沈潜してゐる日本人一般の企及し得ざるところではないか。

此等の對照を自分が口にする毎に、『外人には金があるからね』と簡單な言葉で以て一切を解決して了はうとする人に幾度となく自分は逢つた。併し、自分はさうとは思はない。何となれば、かうした外人並みに資産を持つてゐる日本人

の生活狀態を考へても、決して、多數日本人の生活狀態より改善されたものがあるとは認められないから。

金があるから、無いから、の問題では全く無い。能力があるか、無いか、實行的意思があるか、無いか、の問題なのである。第一段に金を造つて、それから第二段として生じて來る問題ではなくて、今日唯今からでも、その能力と意思とさへあれば、容易に能きることであると思ふ。

外人にとつて一日が廿四時間であるならば、日本人にとつても同じく廿四時間ではないか。外人のみが暇が多くて、日本人に暇が無いといふことは、また決して理窟にならない。晩酌を遣つて宵の八時頃には床にはいる日本人の生活狀態を其儘にして夏休みの二個月も取つて輕井澤や箱根やに赴く西洋人の『暇の多い生活』を羨むのは、差當りイソツプ物語にざらに出てくる寓話の一つであらう。また、正午の十二時から午後の二時迄食事の時間として一切の來訪すらも受付けない外人の商館などの生活を目して、『暇な勤人生活』だと羨やみ、自分の方は食事の休も取らないは勿論、退廳時間も六時か七時かではないかと言つて零してゐながら、實は、上司の者が未だ退廳せないからといふだけの理由で、煙草を呑みながら一時間も二時間もぼんやり時計の表ばかり見てゐる內情を知つてゐる者にとつては、これ亦イソツプの寓話の一つではないか。

兎に角、日本人の生活狀態は、周到ならざる耕地整理によつてすら、素振らしい金と時間との收獲を見ることが能きるものと自分は確信してゐる。日本に不足してゐるものは、米計りではない。從つて、增收問題は、又、米計りではない。

五

日本人の衣食住の問題を考究するに際して一番自分に參考になりさうに思つたのは、西洋人を妻とした日本人の生活

であつた。併し、狹い自分の見聞內では、案外に何一つ參考となつたものは無かつたと言つてよかつた。たゞそこで見られるものは『日本に於ける西洋』に過ぎなかつた。內面的の調和があるかはりに、外面的の混合がそこにあつたに過ぎなかつた。

從つて、自分自身の考案を提出するほか致し方無いのである。併し、衣食住に關する廣汎な汎圍の問題を玆で盡さうといふことは、紙面竝びに自分の知識がこれを許さないことは當然である。自分の記述は、唯日常生活のなかに頻繁に現はれる現象のなかの三四の思ひ付きに限られてゐる。

第一の衣服の問題に付ては、所謂急進主義を唱へてゐる人達に雷同して、二重生活の打破論をやらうとは考へてゐない。洋服と和服と兩方それぞれに宜しいではないかと思はれる。人間は一晝夜働き續けるものではない。活働と休息とは半ばしてゐる。從つて、活働服としての洋服と、休息服としての和服と、これほど適切にその目的に叶つてゐるものはない。この簡明な理由にすら故意に反對する所謂急進主義者の常識なるものを自分は怪しむ。況んや、和洋兩服二重作製は、經濟上苦痛を感じさす所であるといふが如き稚見は、辯駁の必要もないまでゝある。稚氣愛すべきわが急進論者は、半日にして脫するも一日通じて身に着くるも、衣服の消費は同樣であると考へてゐるのではあるまいか。

婦人としての洋服着用は、國粹論者の心配するまでも無く、大丈夫此國に行はるゝことはあるまい。何故といふに、近來外人の纒ふ婦人服はます／＼その裾を短かくし、ます／＼その胸背の露出部を擴大してきてゐる。日本婦人にして、その太き足と、その肉付（モデリング）の非美術的なる胸背とに、自信を生ぜざる限りは、假令日本語のかはりに英語を喋べる時代にならうとも、その婦人服だけは纒はぬことゝ思はれる。

子供の西洋服は、誰もが一樣に言ふて居る通り、その行動の自由を縛らない點で申分無い。また、經濟上の點から言

つても、申分無い。寐るときの着物をのぞいては、絶えず輕快な西洋服を纏はして置くがいゝ。但し、日本風な良妻賢母を養成することに心血を注いでゐられる所謂女子教育家の立場から言へば、尠くも女の子にだけは、轉んでも獨りで立ち上れないやうな日本固有の着物を着けさせて置きたいものである。快活な風に哺育された女は、最も良妻賢母とは緣が遠くなるからである。――

第二の食物の問題に付ては、なるべく粗食に甘んじない方針をとつて行きたい。近代の科學に從へば、何と言つても食物が血ともなり肉ともなるのである。而して、外人などに比較して最も日本人の見劣りされるのは血の色の拙さと肉付の貧しさではないか。兎に角、肉無日(ミートレスデイ)とか熱無日(ヘートレスデイ)とかが來るまでは、各自の財政の許す限り、食物の贅澤を許ることにしたいと思ふ。

一體、日本人には儒教の到來から取り別け、食物に對する正確な觀念を失くして了ふやうになつたのではないかと思はれる。三度三度の食事は、唯、腹が一杯になればそれで目的を達したのである。味なんぞはどんなでもいゝ、唯腹さへ張つてゐれば滿足したのである。併し、その結果は、『眼光熒々、顏色蒼黑、形容枯槁』といふやうな所謂古武士的體格を作つて了つたのである。我等は、かゝる古武士的體格の美を鑑賞することを敎へらるゝ前に、林檎のやうな眞紅な頬、花色をしたほんのりした顏、靭やかな腕と肢、寬やかな胸廓に對する美感の方にいち早く惹き付けられて了つた。さうなつた上は、何とかして、これ等の匂ほやかな鮮やかな色彩と、柔靭にして彈力を帶びた肉付とを、自分たちの所有にせねばならないではないか。

兎に角に、美食は、ある意味で日本人の生活狀態の改善の基礎となるものである。健康と快活、それは最も直接に美食から求めることができるのである。

食事そのものを贅澤にすることに改善する計りでなく、自分は、食事時間をも極めて贅澤に費やすことに改善したい。日本に於ける『嚴格なる家庭』の食事の一例を引けば、子供に對して發言權を奪つてゐる所さへある。『食事をしながら、お喋べりはお止しなさい！　そら、御飯が滴れるぢやありませんか！　どうしてこの子はお行儀が惡いでせう！』からした彈丸が、可愛さうに切角話を切らうとしてゐる子供の上にと母親の口から烈しく飛んで來るのである。止むを得ないから、子供は、たゞもう一生懸命に食べる。五分間位で『お湯を頂戴！』になるのである。然るに父親と母親との間にも格別の話はない。せいぜいあつて、お米が高くなつたとか、何處の誰さんの帶は綺麗だとか、家の猫が先刻鼠をとつたとか位の話題である。そして矢張り五分か十分で、萬事片が付いて了う。

日本人一般に見られる斯うした『食べるためのみの食事』を廢して、『樂しむための食事』に代へたいといふのが、自分の主張である。さうして『樂しむための食事』は、單に口腹の滿足を與へるに止らないで、また精神の糧ともなるであらう。そして、結局、心身の活力を創り出す最も肝心な準備（プレパレーション）となるであらう。

この食事のために潤澤なる時間を割けといふ自分の主張は、潤澤なる時間を『惡用』して、多く食へといふことに解釋されては大變である。元來、日本人の食物攝取量は歐洲列强のうち最もその量が多いと稱せられてゐる。獨逸人よりも更に多いさうである。從つて、世界各國のうちで、日本人が最も大食である譯である。この大食は、最近の米騷動を惹起する動因となつてゐるのは言ふまでもないが、更にもつと〳〵根本的に日本人を害ねてゐることは、既に專門の醫學者にとつては陳腐の發見である。聽くところに依ると、今次の世界大戰に際して聯合國殊に英國の海軍が、敵國獨逸に對し食物封鎖を敢行して獨逸人を窘窮せんとしたところ、その『止むを得ざる大食制限』を獨逸人が採用したゝめに、獨逸人の健康狀態は一般に戰前に比して頗る良好になつたといふ。玆に至つて自分の願ふところは、近次の米價暴騰に

對して、日本人一般が『自主的大食制限』を各自に實行せんことである。それは單に米價の低下や各家庭の支出の減縮やを來すばかりでなく、永久的に日本人の體格の改善を來す機因ともなるであらう。

而して、その大食制限の方法として自分は、各自の食卓に於て、西洋皿を飯椀として使用することを主張する。小さな從來の飯椀は、他人の眼を脱れ易いと同時に、また自身の眼をもぐり易い。從つて、一杯位の多少は、自他の留意を惹くに足りない。若し代ふるに西洋皿を以てし、これに一杯しか採らぬことに限定すれば、容易に一定量制限を實行し得るであらう。而してこの事は一方に於て主婦若しくは女中の手を夥しく略くこととなる。從つて、主婦も、心を飯を盛ることに集中せしめらるゝ必要もなく、靜かにくつろいで食事の會話を樂しむことができるであらう。

次に住所の問題に移らう。

住所の問題の改善は、衣食住の三問題のうち、最も困難を極めてゐる。衣服や食物は、他と交渉すること無く改善を企つることが能きるけれど、住所の問題は、兎もすれば他との交渉が必要となる。從つてこの改善は、能き得べくんば、政府自身主唱者となり實行者となつて、——例へば獨逸の建築條例の如きものを發布することによつて——强制的にその遂行を命令することが理想的である。商業地、工業地、住宅地の區劃、樹木の配列、共同竈の設備、さうした社會政策的の主題は、是非政府自身の施設に俟つを當然とする。しかも、その施設の着手は、一日でも遲ければ遲いほど、困難の度が增して來る。從つて、若し、政府當路者に直ちに着手すべく理想的の考案がないのならば、一種の懸賞圖案募集を遣つてでも、その施設を急ぐ必要があると思ふ。兎に角、議院建築や、繪畫館建築の圖案募集の企圖よりは、重大な企畫である筈である。

唯他人との交渉を必要とせずして單獨に改善し得る設備の一つとして、自分は、日本風の板戸の改良を主張したいと思

ふ。あの板戸なるものは、その開閉について、一日二回夥しく女中等の手を煩はすものとなつてゐる。これを廢することは、頓がて女中を樂にすることになる計りではなく、更に進んで女中その者をも必要とせなくなる端緒ともなり得るのである。即ち、生活の簡易が、そこに實行されることになる。而して、その板戸に代ふるに、西洋風の窓とカーテンとを以てすることにせば、子供の手によつても容易にその開閉が能きるであらう。

また、疊を使用することについても、能きるならば、大部分の部屋を單に疊表を布くだけで充分であるといふことにしたいと思ふ。普通のあの重い疊は、大掃除の都度日光に露すといふもの丶、あの裏を點檢すれば、到底年に一二度の大掃除丈で、安心されないと思ふ。あの汚らしさ、あの濕氣を帶びた匂ひ！　あ丶した上二三寸のところに、日本人が起臥してゐて、しかも健全だといふやうなことは、決して誇りにはならない勇氣である。日本人の家庭で座蒲團を用ゐる限りは、あの疊表だけを布くことにしても一向差支へはないではないかと思ふ。況んや、問題は保健上計りではなく、取扱上も簡易であれば、また經濟上の支出から言つても極めて好都合の筈である。

疊は、薄くしても、厚くして欲しいのは蒲團である。大食をして煎餅蒲團にくまつて寐る日本人の大部分には、眞に安臥といふことはあり得ない。電車や汽車に乘つて、眼に付くあの夥しい居眠り！　せめてあの居眠りの時間でも讀書や思索のために代へる爲めに、自分は、多數の者が、寐る時だけは充分快適な安樂を享受できるやうにしたいと思ふ。その爲めには、寐具の贅澤といふことである。休息と悅樂の宮殿、而して、精力の發電所たる寐所に欲しいのは、軟かくして溫かき蒲團、匂ほやかにして新らしき蒲團である！

六

衣食住の問題は、生活の全體では決して無い。殊に、日本人の生活狀態の改善を論ずるに當つては、このほかに、公

的生活を形成してゐる役所や會社や學校やの方面があり、料理屋、芝居、自動車、カッフェ、活動寫眞等の諸の設備がある。その根本をなしてゐる思想的の方面がある。併し、此等を縦貫して、その改善方法を力說することは、到底この小論を以ては盡し難いとゝもに、社會的經驗の微弱なる自分の知見を以ては盡し難い。

併し、自分の前述し來つた改善意見は、一つの羅針盤を爲すものであることは確く自信する。快活な精神と健康な體軀、そして、望むところは現世的繁榮と永遠的福祉、その爲めには、取り敢へず、日本現在の生活狀態の上に巨大なる耕地整理を施こし、以て、徒費されつゝありし金錢と時間と精力とを回復せよ！　といふのが、常に自分の考へのライト・モチフなのである。

軍團假面の陸軍大擴張案を難ず

逸名氏

一

數年前に二個師團を率ゐて世に現はれ來りたる田中義一君は、今や二十五軍團を提げて、所謂政黨内閣の舞臺に、仁王立ちをしてをる。座元たる政友會は、此の役者に藝を演らせる積りであらうか、國民は今見物人として、その成行きを凝視してをる始末である。消息通の證言を待つまでもなく、陸軍二十五軍團編成、二十五個年繼續事業、總經費二十億圓に對する大正八年度割一億餘圓を計上せる豫算の、既に大藏省へ廻送されあることは、殆んど周知の事實である。勿論該豫算の大藏省への廻送その事は、夙に豫知され豫想されてゐたことで、言はゞ豫定の事實である。唯問題は原首相が、如何に此の軍閥の鋭鋒に對すべきかに在る。則ち豫期豫定の事實であつただけに、原首相の腹には内閣組織の際、既に十二分の、若くは相應の腹案があるべき筈である。何故となれば閣員として田中義一君を受取つたといふことは、即ち二十五軍團問題を受取つたに等しいからである。併し言ふまでもなく、之を受取つたといふことは、之を是認したといふことではない。それ故に受取つてから後には、尚ほ幾段も方式がある。直截簡明に拒否すること以外に、延期すること、骨拔きにすること、陸軍擴張反對の民論を盛ならしむること等、種々の忌避方法が見出される。まさかに今更藩閥者流と妥協默契して、二十五軍團案を其儘是認するほどの原首相でもあるまいとすれば、之が拒否方法を如何にせんとするであらうか。

然るに一方陸軍閥側の二十五軍團問題に對する意氣込と計畫は、中々に强甚にして根强いものである。僅か二個師團の問題でさへ、數年間の起伏變幻を極め、内閣を更えたほどの歴史がある以上、二十五軍團案のための奮鬪には、彼等も十分に度胸を据えて掛つてをる。その畫策の一端としては、山梨を陸軍次官に、福田を參謀次長に据えただけでも、田中君の決心のほど

が窺へる。山、福兩人は田中君の股肱であつて、最も忠實にして有力なる羽翼を成すものである。則ち陸軍内部の陣立に一分の隙もないやうにして、二十五軍團案のために、外に對して奮鬪する覺悟と知られた。今年春寺内大將が元帥に列して、元帥が海軍の三人に對して、陸軍の六人と爲つて、之にて先づ元帥府の權衡が陸軍に偏し、先月本郷大將が軍事參議官に新任されたことに依て、軍事參議官の總員が十五名となり、內海軍四、陸軍十一と云ふ偏數となつた。否、啻だに四對十一といふ偏數に止まらぬ、即ち軍事參議會議には、法規上元帥も之に加はるべきものであるから、元帥の三對六人を之に加へて、實に海軍の七に對する陸軍の十七人といふ不平衡になつてをる譯である。即ち此事は陸軍閥の深い畫策であつて、山縣寺内兩先輩の考案の產物である。そして此事が亦二十五軍團案戰に對する、高級司令部內の陣立であることは、明白に看取される。

二

軍團編成問題の內容如何、流石は秘密を生命とする陸軍だけに其內容の精細な點は、可なり陸軍の事に精通し、可なり重要幹部へ懇親のある記者の間にも、分つて居らぬ。併し現に九月の末に大藏省へ廻送されてある、大正八年度陸軍豫算の中に揭けられてあるものから推すと、勢自づから二十五軍團案の內容も推算せられ得る譯である。或人の推定に依ると、今の田中陸相が、先年軍務局長として二個師團增設問題を騷ぎ廻つた際、田中君の胸算には旣に軍團編成の理想があつたと言ふことであるが、是れは恐らく義一君を買被つたもので、軍團編成といふことが陸軍主腦部連の頭へ映じたのは、如何にしても現歐洲戰以後の事である。ツマリ現歐洲戰が二個の理由に因つて、我が陸軍閥者に、軍團編成てふ名義の陸軍擴張を想ひ着かせたのである。即ち米國の海軍擴張が、太平洋問題に反影し、其結果我が海軍力の充實が、我國の國民的大問題と爲り來つた爲めに、陸軍は反撥的に、又自衞的に、陸軍擴張を案出したことが一ツ。今一ツは歐洲戰爭の敎訓として、兵數の多大、武器の精銳、三單位編成の優勢、而して獨逸東侵力の波及などゝ云ふことに、無理に推論を及ぼしての、軍團編成案の着想である。隨て格別先見の識に富んで居りもせぬ田中君が、二個師團問題の當時から、軍團編成を理想に描いてゐたなどゝ云ふことは、殊更らに彼を大にせんとする者の、故意の掛け値に過ぎぬ。

尤も歐洲の兵學界には、所謂三單位編制を有利とするの議論が、現大戰の少し前から行はれてゐた。隨て三單位編制といふことは、我國でも數年前から、陸軍大學校の敎官連の間などに

は、研究問題とされて來た。併し三單位編制と軍團編成問題とは、全然別個のものである。然るに陸軍としては前述の理由からして、陸軍擴張の必要に遭遇した爲めに、その主眼たる擴張の爲めに、軍團編成と三單位編制とを、巧みに合一することに考へ着いた次第である。而して此の考案の發企者こそは、即ち田中現陸相其人である。夫れ故田中義一君に、此の問題に關して手柄がありとすれば、陸軍擴張といふ不人氣な名稱を避けて、素人に分り難くして、而かも軍理上如何にも正當らしき、三單位編制と軍團編成といふ看板を、表面に揭げ得た巧智其ものに過ぎぬ。

曾て二個師團問題で、軍務局長としての田中義一君が、手を焼いた際に、先日參謀次長に新任した福田君が、極く親しい陸軍出入の記者に、微笑を帶びて斯く語つたといふことである、即ち『二個師團問題の今度の田中の蹉跌は、朝鮮に於て師團を殖すなど〻、特に朝鮮に於てと、餘計なことまで言明したのが原因である。朝鮮と言ふことも必要がなく、二個師團といふ言明も必要がない。只徐々に兵員增加の經費を要求すれば、問題はアレ程目立たずに解決されたに相違ない』と。如何にも智言である。そして此の智言と、蹉跌の教訓とは、如何にも頴敏に、今度の軍團編成問題即陸軍擴張案の上に、細心の警戒を加へてゐる。言ひ換へれば、陸軍擴張といふ赤裸々の姿で飛出さずに、三單位編制といふ上衣と、軍團編成といふ外套を纏ふて、徐々と現はれて來た。田中君は軍務局長から陸相までに、數年の日子を要したが、此間に鍛へた腕の冴えは、確かに此の上衣と外套を纏ふた處に見出される。

三

其處で一應所謂軍團編成案なるものを吟味する。現に陸軍提案の軍團編成なるもの〻內容は、其の主たる點大約左の如きものである。即ち

一、帝國陸軍の標準兵力を二十五軍團とすること。
一、二十個年繼續事業として之が完成を期すること。
一、三單位編制は當分聯隊以下に止め、漸を以て正規に復すること。

陸軍が此の計畫を確立したのは、實に大正五年である、歐洲戰爭の第三年目であつた。即ち同年の冬に、千葉縣下に三個聯隊編成の師團對抗演習を行つて、これで愈々三單位編制の有利であるといふ實驗を經て、爰に三單位編制軍團組織の基礎を確立した次第である。

其處で此の二十五軍團案の兵力と、現在帝國陸軍の二十一師

團——廿五師團計畫中の既成せるもの——の兵力とを比較して見ると、

廿五軍團＝五十師團＝百五十聯隊
廿一師團＝八十四聯隊

即ち増加兵數は

二十九師團　六十六聯隊

と爲る。斯く算へ來るといふと、愈々以て所謂軍團編成案なるものゝ、陸軍擴張案であることが、容易に看破される。數年前には僅かに二個師團の擴張さへ、アレ程一國の問題となつたが、今度の案に至つては、二個師團どころか、實に二十九師團の増兵擴張である。假令二十年繼續事業であるにしてもが、毎一個年に平均一個半師團の擴張案である。これが陸軍の大擴張案に非ずして何であるか。

何故從來の師團編制は廢せねばならぬか、何故軍團編制を必要とするかと云ふことに就ては、野戰が今日の如く大軍と爲つた結果と言ふに過ぎぬ。即ち一軍が六、七師團から成り、之に騎兵集團、砲兵旅團其他種々なる軍團直屬部等が附屬すると、命令單位が可なり多數となつて、之が統帥は容易でない。隨て實際上からも、學說上からも、國軍の大なるに伴れて、軍團編制の採用を要すと云ふことは、歐洲兵學家の間に、殆んど定論と爲つてをると言ふのが、我國軍團編制論者の、唯一の理由である。勿論此の議論の基礎は、如何にも正しいものである。去ればこそ獨佛始め歐洲列強の陸軍が、戰前から夙に軍團制を採用してゐた次第である。隨て吾人も、我陸軍の軍團編制其ものを非とするのではない。たゞ軍團編制に事寄せて、陸軍擴張を行はんとするのに反對するのである。若し又現在の二十一師團の兵數其儘にては、軍團編制の必要もなく、餘地もないと云ふならば、吾人は單純な軍團編制をも不必要なりとするものである。

次には三單位編制の解釋である。之が編制は當分聯隊以下に止め、漸を以て正規に復すると云ふは、當分は二個師團を以て軍を編成するが、漸次に改正して、三個師團編成の軍編制と爲さんとするの謂であるか。此邊は十分に陸軍當局者の底意を、今から精査して置く必要がある。或說に據ると、三單位制の三個師團より成る軍團では、我國内では勿論の事、東洋の野に於ては、斯く長徑の大なる軍團の運用を容すまい、即ち用ふる場所がなからう。夫故に已むなく三單位制の二個師團より成る軍團編制を、永久に採用する所以であるとも言はれる。愈々以て不用なる程度の陸軍擴張の底意が閃めいてをる。大軍を收用し得る大平原さへあれば、三師團より成る軍團編制が、我が軍閥

者の徹底的理想であることが看取される。

四

日英同盟の可能が、英人の頭に描かれたのは、團匪事變に北淸派遣の日本軍隊の實力に、英人が感歎したのが其基を成してをると言ふのが、我國陸軍閥者の年來云爲し來つた自慢である。馬蹄銀一件で軍法會議までも累はし、當時の第十一師團長乃木將軍の辭職さへ惹起した、不紀律千萬な軍隊が――若くは上長官が――其一部分に在つた當時の我が北淸派遣軍に、若しも英國人が夫れ程までに惚れたとすれば、英人も中々に物好きなものである。しかも日英の間に同盟關係の出來上つたのは、決して左樣な單純な出來心からではない。則ち日本の文化の度が進み、一方には極東狀勢の變化が之に順應するに至つた爲めに、英國が我國に握手を求めるに至つた次第である。然るに我が軍閥者流の考慮は、何時でも又何事に對しても、此の流儀であつて、萬事を陸軍本位から打算する。夫故に「國威の發揚」も、彼等に從へば軍威兵力に依らざるを得ぬ。「國利民福」も勿論堅甲强兵を國家が擁することに依りて、初めて確立されると、眞面目に考へてをる。英國や米國の義勇兵本位の軍隊が、現に百萬二百萬と出來て、立派に軍隊として實戰部隊として、西部戰線に好績偉動を奏してゐても、尙ほ我が陸軍閥者の頭には、獨逸兵の訓練的であることを尊重する僻が、固着してをる。之を約言すると、國家防衛のための陸軍ではなくして、强兵に依つて國家の權威をも隆昌をも收め得べしとするのが、彼等の理想である。

斯く[illegible]が陸軍閥者の胸底には、陸軍萬能論、陸軍本位論が牢乎として固着してをる。隨て十九師團で滿足出來ぬために、二十一師團と爲り、廿一師團で滿足出來ぬものが廿五軍團とまで昂進し來つた次第である。併しながら國家に取つて必要ありてこその兵力である。用ふるに處のない、卽ち的のない兵力と其の擴張とは、何としても無用の長物であらねばならぬ。吾人は今極東の現勢――就中革命勃發以後の民主的趨勢に支配され來れる、極東露領の現在及將來の趨勢に鑑みて、我國陸軍力の最早何等の兵力增加を、必要とすることなき所以を力說して、我が陸軍擴張の國策上不必要である所以を略說して見ようと思ふ。

我國の國防上、其の陸軍は專ら露西亞と支那とに、對するものであることとは、專門家も素人も、其見を一にする所である。現に我國陸軍の發達を、歷史的に見來ると、明治維新より二十七、八年までは、支那を標的として、敵國的敵愾心の下に、發

達を遂げてをる。明治二十七、八年から三十七、八年まで、而して更らに現大戰前までは、孰れも露國を標的として、其の前者は臥薪嘗膽的に、其の後者は復讐戰警戒的に、陸軍力の充實が圖られてをる。畢竟我國陸軍の發達は、從來露西亞と支那との爲めに、要促され來つた次第である。而して此の兩國に對する國防上の必要が、我が陸軍の發達を促進せしめたと云ふことは、卽ち我國として其陸軍が、專ら對露及び對支の國防力であることの、何よりの證據である。

そこで軍國露西亞の崩壞が問題になる。卽ち軍閥的、侵略主義的の專制露西亞が滅びて、新たな民主國が興つたといふことが、直ちに我が對露政策の上に影響する。そして其結果國防上に至大の變化を齎すべきことは、寔に睹易き道理である。更らに委しく言ふと、ザーの露國と其官僚、及び哥薩克こそは、强暴として隣境の侵略を事としたが、民主的に徹底した新露西亞は、一に平和を理想とした郷土であらねばならぬ。其處に隣國としては、何等の威嚇もなく、危惧もない筈である。西伯利は戰後に於て、經濟的にこそ大施設を加へられるであらうが、舊露國時代のやうに、武裝した西伯利は跡方もなくなるに違ひない。或る一部の人士は、西伯利に對して獨禍の東漸を言ふ者がある。併しながら獨逸が東方に對する戰後の計は、波蘭に對し、ウクライナに對し、高加索に對し、波斯に對するものであつて、決して西伯利に向ふものではない。勿論獨逸人にして、經濟的施設を西伯利に試みる者は、戰後猶ほ戰前の如く現はれるであらう。併しながら其點は米人も同樣である。否戰後の西伯利としては、米國こそは國家的に之が經營に當るであらうが、獨逸は單に個人的の施設を此處に見るに過ぎまい。

孰れにしても、戰後に在ては、軍國主義的な西伯利、卽ち危險性の西伯利は迹を絕つて、平和性の西伯利が發現することゝは、何人も今日に於て容易に看取し得る所である。則ち平和性の西伯利といふことは、日本の立場から言へば、北隣の露國に危險が無くなつたといふことである。卽ち我國の對露國防上、强敵根絕といふことである。然るに旣に平和性の西伯利が産れた戰後に於て、尙ほ我國が依然舊露國に對すると同一の考慮を續け、若くは一層大々的に陸軍力を充實して、之に對立の態度を持するに至つては、舊露國の精神を我國が繼承した姿になつて、極東に於ける危險の主體は、舊露西亞より我國へ乘遷つたやうに、一般に考へられるであらう。若し夫れ支那に對する我が國防に至つては、現在の二十一師團の陸軍力を以て、優に餘りあることは、殊更に說を要せぬであらう。

五

原內閣の軍團編成問題に對する態度に關しては、未だ詳細を知る由もなく、又恐らくは政友會としても原總裁としても、目下尙ほ頻りに考案中で、言はゞ芝公園と三宅坂との腹藝の最中であらうが、原內閣としては一個年延期說といふのが、目下の腹案らしく思はれる。これは勿論沒理想的にして、非條理千萬な腹案には相違ないが、原內閣組織に至るまでの徑路といひ、寺內閣の與黨であつた關係といひ、又藩閥軍閥の憲政會との握手を豫防する必要といひ、あらゆる利害の點からして原氏たるもの並に政友會たるものが、軍閥と手を切り得ざることは、別段怪しむに足らぬ。されぱと言つて一方國論と民望とは、飽までも之を取り收めねばならぬ。於是乎、落着く先きは、陸軍擴張案の一個年延期說である。

田中陸相と雖も增師問題當時に、苦い經驗は可なりに味はつた。當時に比して露國の狀勢と人心との變化した今日、對露的國防以外に、我國の陸軍擴張が殆んど意義を有せぬ以上、軍團編成問題の增師問題に比して、之が實現の一層困難であることは百も承知の筈である。隨て斯んな大擴張案が、提出された其の當年に、首尾好く通過しようと云ふことは、絕對に豫期しては居るまい。唯併し一二の强味とも云ふべきものが、其處に無いでもない。第一は原君が軍事上全くの素人であることである。同じく陸軍擴張の案を提出するにしても、寺內伯は本職が軍人だけに、餘りな誤魔化しは案の上に出す譯に行かぬ。然るに素人の首相に對しては、兵數上の魂膽から、軍隊の經費に至るまで、何とでも誤魔化しが利く餘地がある。軍事上の複雜な關係になると、門外漢には到底知ることの出來ない穴がある。其處で田中陸相始め軍閥の少壯連は、軍團編成問題は兎も角も此の原內閣を利用して、頭だけでも出させて置かうと、一致して腹を極めて居る次第である。

加之、第四十議會で、政友會は野田君を豫算第四分科主査に擧げて、陸軍豫算を擔當せしめた時分に、政友會としては陸軍當局の當時の計畫を、狹少なるものとして責め、進んで完全なる大計畫を要望するとまで言明した。此の一事は今となつては政友會の爲めに大なる累禍を成してをると同時に、田中陸相等の軍閥に取つては、至大なる寶物である。加ふるに政友會は、內閣組織の今日でも原首相の口から、其三大政綱の一として國防充實を宣してをる。所謂國防充實とは海軍擴張の謂であつて、陸軍のそれでないかも知れず。又所謂充實の字は、陸軍としても內容の充實を意味するのであつて、兵數の增加を意味するの

ではないかも知れぬが、何分にも第四十議會に於ける陸軍豫算に對する、政友會の言明なるものが祟を爲して、今後の政友會の累を爲すべきは巳むを得ぬ次第である。

そこで原首相の胸中に描かれたのが、恐らく一年延期案であらう。一方には軍閥共に向つて、現大戰の終局も近づいたから、軍事上の實驗やら、列强向後の軍事關係を見るために、擴張案は一個年延期せよと言ひ、他方では其延期間には、民間に陸軍擴張の反對論が、必ず熾烈に成り行くであらう。其結果は二年延期と爲り、遂には無期延期とも爲し得るに至るであらうと、斯んな胸算が恐らくは原首相の、軍團編成案に對する一個年延期案を產んだ、主なる事情ではあるまいか。

しかし國民は原君對軍閥の腹藝の芝居などを見る必要はない。軍國主義的露西亞の崩壞後に於ける、我國の陸軍擴張には、道理上から正面の反對を絶叫すべきである。增師問題から僅か數年ならずして、又復這の大擴張案に軍團編成などゝ云ふカーキー色の服を被せて、政黨內閣の劈頭に押し立てゝ現はれ來つた軍閥共を、見事に退治する降魔劍は、唯國民の手にのみ在つて、白紙と稱しながら動もすると灰色の紙を用ひたがる、政友會と其總裁とには、之を揮發す勇氣はなからう。軍團問題は國民が總掛りで、埋り去るべき大問題である。

●●
追記　本文には二十五軍團と書いたが、大藏省へ廻送の軍團豫算案には、二十一軍團とある。これは現在の二十一師團と殊更に同數にして、單に編成替へであつて擴張ではないかに、目先きだけの繕ひを、其後になつて試みたものである。四軍團の數を急に減少した處に、軍閥の「誠意」が見出される。

予の原首相及び原內閣觀

文學博士　三宅雪嶺

原敬氏が首相となつた事は、一應氏自ら本望を遂げたものであり、若干先輩の素志を果したと云へる。平田子が首相候補に推され、清浦子が首相として內閣の組織を試みた所から見れば、原氏が大命を拜したとて何の不思議なく、唯生れが盛岡と云ふ

位のものであるが、氏の背後の勢力となつた所は、由つて來つた所が遠い。氏自ら特別に考へて居るまいが、如何に薩長の勢力を押へようかとは明治維新政府の創設以來屢々企てられた所である。征韓論も或る點に於て其跡形がある。薩をして力を朝鮮に伸ばさしめ、以て長を押へ、而かる後に薩を制しようとした。薩は與みし易く、武を以て力を得るとも、之を制するの六ツかしくない事を認めた。次いで民選議院設立を建白したのは、明かに薩長の勢力を抑制するの意に出でゝ居る。自由黨の起つたのも、之れに關聯する。陸奥宗光が西南役に際して、陰謀を企てたのも之に外ならぬ。板垣伯が自由黨で奔走したのは、多少自由主義を念とし、一概に政權に與からうともしなかつたけれども、陸奥は目的の爲めに手段を擇ばずと云ふを事實にして居り、板垣も陸奥の態度を諒とした。陸奥は薩長の間に挾まつて相應に仕事を爲たが、何とかして薩長の勢力を覆さうと考へた。唯手段を擇ばぬので、服從の必要を感ずるや、頗る柔順にするを辭せぬ。

陸奥と意氣の合つたのは星亨であり、いよ〳〵政黨の力を以て政權に與からうと努めた。之れ亦手段を擇ばぬ方で、薩長と妥協にするの便利ならば、進んで妥協しようとする。何でも先づ政權に有付かねば何事も出來ぬとは、其邊で云ひ合はさずに一致して居つた。板垣では迚も政權に與る希望が無い。伊藤内閣に内相とし、大隈と聯立して内閣を組織さしても、思はしく行かぬ。元老に當るより元老を戴くに如かぬとて、自由黨を伊藤公の爲すが儘に委す事にした。實は「名よりも得を取れ」と云ふ考からである。伊藤は自ら總裁となつて政友會を作り、斷じて政黨の名を許さぬけれど、實は舊自由黨の變形に外ならぬ。星が實際に采配を揮つて居る。原氏は最初から此の組に屬して居たのでないが、陸奥に屬し、星に近づき、星が仆れた後に後繼者の位置を占め、何でも先づ政權を得やうとは其政治意見の根柢を形造つて居る。徒らに政權に焦つても詮がない。妥協すべきに妥協し、漸次我が力を伸すに如くはないと考へた。如何なる場合にも先づ政權に與からうと云ふを前提とし、苟くも之れに與るの機會あるや、之を取り逃してならぬと云ふのである。前に何と云つた事があらうが、世間の思惑が何であらうが、其機會に替へられぬとする。妥協して好ければ妥協する。元老に取縋つてよければ取縋る。而して目的は先づ政權に與り我黨内閣を作らうとするにある。其眼から觀れば議會で閥族と爭ふが如き、骨折損の草臥れ儲けと考へられる。果物は熟しさへすれば落ちる。急いで落すに及ばぬ、隱忍時を待つのが何よりであると爲し、よく忍耐した結果、思ふ儘に政友會總裁とし

て原氏が大命を拜する事になつた。先づ政權に與らう、得べくんば政權を握らうと云ふのは茲に事實となり、さぞかし本望を遂げたと悦び居らうと思はれる。

原氏が多年の希望は現在の位置に達するにあつて、藩閥攻撃者は氏に祝意を表すべきである。趨勢の然らしむる所であつても、趨勢に順應するに原の頗る適任なる事を否定する譯に行かぬ。氏の長所は順應して位置を高めるにある。若い時からそれで過ぎ來り、今や絶頂に達するを得た。祝着の至りとは正に其處で言ふべきである。けれども氏自らに取りてこそ目的を達したものとすべけれ、首相の職は氏一個の爲めに備へられて居らぬ。内閣を統卒する爲めであり、之を統卒するは中外の國政に愆なからしむるが爲めである。國内でも時々刻々變遷がある。四半世紀間に政府の歳出入が十倍したのでも、進歩の遲くないを察し得られる。到る所に成金の存在するも之に從ふ。獨り物質的に進歩したのみでなく、精神的にも相應に進歩がある。前と同樣に心得て居つては、時として驚くやうな事がある。國外は固より世界戰亂で、今後新たに均勢の成立すべき事になつて居る。一度び事を誤まれば取返しのつかぬ破目に陷る虞れがある。我帝國の將來は希望に充ちて居ると同時に、危險の伴ふを考へずには居れぬ。國民總懸りで事に當るべきであつても、少くも舵取りの名ある首相職に居る者は、力の限りを盡して事の宜しきを得るやうにせねばならぬ。多年希望した通りに、宰閣の最上位に登り得たと云ふを以て滿足すべきでない。前に之を目的としたのは惡くない。已に位置を得た以上、又別に思慮するを要する。原氏は物の分る方であり、此邊の事の分らぬ筈がない。位置を得るまでは如何に之を得べきかを考へ、既に位置を得た後に、如何に國政を進善しようかと云ふを專らにするであらう。

所で、何を以て首相職を完うすべきかと云ふ事になる。氏は尋常よりも智慧があるにしても、自づと得手不得手がある。強ひて不得手の事を爲すに效果無いよりは、十分に得手を伸すがよい。氏自ら之を承知して居らうし、又其外に出る事は出來ぬ。氏は從來大局を語らぬ。徒らに之を語るの益無いからでもあるが、語らうとしても旨く行かぬ。眼前に最善を盡すと云ふが、其性分であり信念である。外政及び内政に對して自ら方針を決定するが如き氏の領分でない。出來ぬ事は爲なくつて可い。閣員各分擔がある。各自の範圍内の事は其主任者に委すべきである。素人の大臣も有るけれど、夫れとて既に局に當つては原首相よりも心得て居る事が多い。原氏自ら之を知つて居る。内務上の事はお手の物と云へさうであるが、それとて全然内相に委

せた方が可い。財政經濟の事は其の向きに任せ、敎育の事又文相に委ねるがよい。外交は最も重大であるが、外交調査會があり、外務省内各々事を取運んで居る。原氏は調査會に列しても別段に意見を吐いた事が無い。自らの長短を知つて居るものである。自ら意見を吐かなくても、各委員の云ふ處に徴し、大體如何にするが最も適當であるかを呑み込み得ぬではない。首相としては特別に他に爲す處なく、各大臣をして各々十分に能力を發揮し、功績を擧ぐる事を得せしめれば夫れで事が濟む。ビスマルクの如く自分の一了簡で事をするは氏の柄でない。其處が短所でもあり長所でもある。唯目下内外頗る困難、各大臣をして好い加減に事を運ばず、分擔の業務に關して十分に働かしめるやうにすべきである。夫れも氏の力に限があり、餘計な事をして間違の起るよりも控へ目にして置く方が安全であると思ふならばそれで差支へない。職務上で能く閣員を纒めて行きさへすれば、從來の首相に劣る事がなからう。前には元老に順應するに務め、能く順應じて目的を達したが、今後同僚に順應し之をして國政に力を盡さしめれば、首相たるの職務を完うする事になる。自ら方針を定め閣員を指導するが如き、之を氏に望むは無理である。國務上に閣員を統率するを旨とし、夫れ以外は、今後憲政の運用を圓滑にするの準備に着手すべきである。

無爵の身を以て首相となつたのは他に何等の事情あつたにせよ、事の巧みなるものとせねばならぬ。藩閥と云ひ、閥族と云ひ、官僚と云ひ、兎角世に惡感情を促すものであつて、山縣系統で内閣を組織する限り、何處かで衝突が起り、隨分事が面倒にならうと憂へられたが、滑かに閥族又は官僚の名稱から離れる事が出來た。實際大なる變化無いに極つて居つても、その少しの變化を功績と見做し得られる。僅かの事で爵を授けられた例から見れば、此の手柄は確かに之等に優る。爵を授けられる關係に成つて居らぬ丈け面白い所がある。今後辭職する際、勢に逆戻りするか、又は益々勢を順調にするか、氏の手際に俟つ處無いともせぬ。今の所、後繼者として反對黨の首領を推すに六づかしくなつて居る。氏自らも好むまいし、政友會幹部も好むまい。憲政會は何とかせねばならず、智慧が有りさうで案外に乏しいのにも困る。今の狀態では次ぎに首相となるべきは、再び寺内伯に歸するか、又は薩派の牧野男を推すかと云ふやうな事になつて居る。寺内で人が失望したから牧野にして、依然政友會で援助する事になるらしい。政友會としては内閣と關係を繋ぐに利益がある。然し斯かる變則手段は大抵に廢止せねば、憲政の進運を促す事が出來ぬ。寺内でも牧野でも、首相になるならなるで可い。何の勢力を以て位置を占めて居るかを明白にすべきで

ある。政友會を基礎とするならば、政友會に入會すべきである。或は貴族院を背後に控へるとも云はうが、貴衆兩院の軋轢を未然に防ぐのも、原氏の幾らか力を致すべき所である。貴族院議員にも物の分つたのがあり、妄りに衝突しようとすまいが、分らぬのもある。衆議院に弊があつては、貴族院で之を匡正するに努むべきであるが、之れまで貴族院と衆議院と衝突するはさうとも限らぬ。或は貴族と民衆との衝突の伏線とならぬとも限らぬ。衆議院の弊を矯めようとするのはよい。何でも兩院權限を同じくするとて、事毎に啄を挿まうとしては誤る。貴族院は民衆を代表して居らぬ。少數貴族の代表者たるに止まる。之れも國政の要素であつても、已れ自らの立場を會得せねばならぬ。何でも同權限と云ふを振り廻しては種々の方面に迷惑を及ぼす。原氏が政黨内閣を作つた事には、貴族院で其邊を了解するやうに努めて然るべきである。而して今は憲政會が當面の敵であるものゝ、之れとて政黨相當の事を爲すが肝要である。政友會が天下の公黨である如く、憲政會も天下の公黨である。憲政會の首領が一大富豪と直接の關係があり、其首相と成るの曉、國政に弊害を貽すも測るべからざるかに思はれたりする。一層適當の首領を得れば幸であるが、當分さうは行かぬ。然し今のやうにして政友會に代るの日があるかどうか。國民黨さへ政友會に近づき、大政黨をして漸々大ならしめ、憲政會をして孤立に陷らしめる。當面の敵とは云へ、政黨として仲間同志である。成るべく良い政黨になるやうに望むべきである。敵に力を籍すは聊か異樣に聞えるが、帝國の政黨を改善するが爲めに、政友會を良くするに務めつゝ、憲政會に力を籍しては如何であるか。憲政會は力を籍らうとすまい、意地になつて拒まう。拒む事は拒むとし、何か黨運の拓けるやうに爲得られさうである。今のやうに惡凝りに凝つては發展も六つかしい。さりとて斯くて續けば内閣の顏振が代るばかりで、何時までも衆議院に政友會を基礎とする事になる。總選擧に政府黨が利益を得るは近來の慣例になつて居る。政友會として都合が好からうが、停滯して必ず國政を害する事になる。原氏は前に唯政權を得ようとし、今は政權を得て國務に誤りないやうにと骨折つて居らう。幾分か餘裕を得ば、憲政の將來を考へて貰ひたい。憲政會の首領及幹部とも知らぬ間柄でない。唯力を以て之を壓倒せず、動きのつくやうに力添へするが可からう。國務の事は分擔者各々出來る丈けの事をする。首相は之に任せ、事ある場合に責任を負ひさへせば足る。氏も其覺悟を定めて居らう。國務上に多く希望するは分外の事を望むやうになる。分内で爲し得さうな事を求めれば、玆に述べたやうな事である。首

相として畢竟何程の力を伸すであらうか。興味を以て待ち設けられて居る。

所謂教育者優遇問題

——吾人は單だ正義を要求するのみ——

三澤糾

生活の壓迫は忍ぶべく餘りに痛切である。

此上何時まで默つて忍んでゐたとて解決の見込はない。たゞ蔭で內輪で不平の言ひ合ひをするのは徒に人の氣を腐らすのみである。吾人は率直に大膽に天下の高處に叫ぶの必要と義務とを感ずる。全國二十萬の虐げられたる弱き者の爲に、その弱き者の手に由つて弱く育ちつゝある八百萬の可憐無心なる子弟の爲に、將た又我國の文明と國力と國民性との將來の爲に。長い間の、しかも年を逐うて加はりつゝある冷遇と侮辱と壓迫と虐待とは、獨り教育者の個人的品位と精神的向上の機會と其敎權と能率とを侵害蹂躪したるのみでなく、今や其家庭生活の安定をも脅かしつゝある。しかして彼れの胸中に盤屈鬱在する或感情と思想とは實に教育界の一大危機を藏して居ると思ふのである。請ふ吾人をして此潛めるものを顯はに語らしめよ。

吾人は特別の尊重優遇を求むるものではない。

吾人の求むるところは唯だ當然の待遇である。否近眼なる世人に由つて『木の端のやうに思はるゝ』位は吾人のよく忍びうる所である。併し乍ら、盡忠奉仕せんとする國家社會に由つて公的に冷遇虐待せらるゝに至つては、誰か之に堪へ得やうか。近時我國の朝野に於て頻りに『教育尊重』『教育者優遇』の論議を聞くことは、無論喜ぶべきには違いないが、若し夫れ其聲の高い許りで既に實行が出來たものゝやうに思ひなすものがあつたならば、それは自己幻覺に陷れるものである。一面から見

ば、『教育尊重』、『教育者優遇』の聲の高いのは、即ち是れ事實に於て教育蔑如、教育者冷遇の甚だしきものあることを證明して居るのである。勿論當局者としては、教育者に對する名譽上物質上の待遇を改善する十分の意志を有つて居り、又出來得る限り其意志を實行しつゝある積りであらう。併し乍ら、其執る所の手段は、吾人から見れば、『二階から目藥』的に餘りに手緩くして、且つ甚だしく公正を缺いで居る。國家の行動は凡て公正に基かねばならぬ。一切の社會は之を以て支柱とする。國家社會は此公正の上に立つて始めて人心を平にし、禍亂を未然に防ぐことが出來るのである。しかるに今や此公正の缺如は、堪へがたき生活の壓迫を通して教育者一般の腦裡にひし／＼と感ぜられつゝあることを認むる。これ吾人が教育界の危機を叫ぶ所以である。

公正の缺如は教育者の主觀的感情に過ぎないか

將た明白なる客觀的事實であるか。吾人をして二三の例證を指摘せしめよ。現今、小學校教師の報酬が日傭拵ぎの收入に如かず、中等學校教員の俸給が技術職工の賃銀に及ばざることは、さまで教育者の公正觀念を傷くるものではない。又た小學校長が三十年の特別なる功勞に由つて贏ち得るところの位階勳等が僅に軍人最下級の夫れに相當し、小中學校の教師が畢生の奉仕を以てしても何等の勳功を國家的に認められざることも、彼等にとつて忍ぶべからざる苦痛ではない。小學校教師として町村吏員の下風に立ち、中等學校教員として府縣屬官の下位に就かねばならぬといふことは、可なりの精神的苦痛であり、往々にして教權の傷害を來たすのである。併し乍ら恐らく之れは社會的因習の餘弊であつて、早晩除き去らるゝものであらう。しかるに、陸海軍將校と教育者、官吏と教育者とに對する實質的待遇の相違に至つては、獨り法令の改正に由つて矯正しうべき國家的不公正であつて、吾人は其不公正に對して、首肯すべき理由を見出し得ないのである。例へば中學校卒業後僅に二箇年の教育をへて任官する少尉は年俸四百八十圓であるのに比して、四箇年の專門教育をうけたる高師卒業生が月給四十五圓なるはまだ可しとして、其後一級五圓の增俸をなすに四箇年乃至六七年を要し、中等學校校員俸給の全國平均額が五十圓内外(女學校を除いて)といふは、果して是れ正當の待遇といふことが出來やうか。公立學校職員俸給令に據れば中等學校教諭の一級は年俸千八百圓となつてゐるが、實際に於ては三級俸を受くる者だに全國に一名もない。又た中等學校教諭にして學校長となるまでには、大學又は高等師範學校卒業後少くとも十年乃至十五年を要

する。そして彼等の經歷、識見、責任を以てして其待遇の一大尉に及ばぬ者が少くない。大佐の待遇を受くる者に至つては植民地を除いて絶無である。近年やゝ高級者を增したとはいへ、全國三百幾十の中學校長中一級（二千圓）のもの僅に一人三十年以上勤續、二級（千八百圓）の者十二人を出ない。實際に適用せられざる俸給令は教育者以外にないところである。しかも、現行の公立學校職員俸給令は明治三十六年の制定に係り、當時と今日とは物價の相違一に對する三になつて居る。（十月二日大阪朝日新聞參照）にも不拘、爾來未だ一回の改正をも經てゐないことは、實に驚くべき教育者の閑却といはねばならぬ。其間官吏に對しては俸給令の改正と共に一般的增俸のあつた際にも、教育者丈けは除外されたのである。今回の臨時手當に就いても、高等官、判任官及其待遇を受くる者に對して之れを給することをうることゝなり、官吏には最初は年俸九百圓、次いで二千二百圓を限度として四割乃至二割五分の增給があつたのに反し、待遇官たる教師の給與は其割合遙に少く、其範圍また遙に制限せられて居る許りでなく、府縣に由つて區々になつて居る。此の如きは其原因並に事情の如何なるにせよ、頗る不公正の感を與ふるものである。此他旅費支給規定の如き、恩給令の如き、皆教育者を遇することは、文武官吏及其待遇者中尤も薄いのである。

教育者は何故に此の如く繼子扱にせらるゝか。

長く說くべきことを短く言つてしまへば、社會が著しく近眼的であるからである。政治家が著しく自己本位的であるからである。教育者が反抗力なき弱者であるからである。教育は算盤珠にのらぬ不生產事業である、國家の起伏興亡に緣遠き閑事業であると思つてゐるのを、社會の近眼とはいふ。彼等は教育が彼等の算盤にのらぬ程の大きい生產事業たることが見えぬのである。國家の興亡や危急の由來するところ一日にあらざることが分からぬのである。かゝる近眼的社會を相手として一時の成效に腐心する政治家が、之れを閑却したとて其惡結果を自己の一身上に蒙らず、眞面目に事を圖る丈け却つて花々しい『手腕』が表はせない。『邦家百年の長計』といふ如きものに力を入れぬのは自然である。我國の政治家も、近時漸く舊き政爭の小天地を脫し、又外交、軍事、財政の問題以外更に別箇の國家的問題あることを覺るやうになり、國民生活の改善整理、所謂國家社會政策は彼等の新領域たらんとしつゝある。とはいへ是れ蓋し、所謂社會問題が特權階級の恐怖、政府の脅威、輿論の壓迫たらんとしつゝあるからであつて、全く自己本位主義の立脚地を脫却

したのではない、ところが教育の問題には、未だ此の如き壓迫脅威、恐怖がない。世人は慈惠の美名を知つて公正の嚴肅なる義務をそれ程に感じない。教育者の背後には組織的團體の威力がない。暴力反抗といふ最後の武器もない。加之、彼等は教育者てふ名の威嚴(ディグニチー)に由つて轉職と言論との自由をさへおさへられて居る。以上はこれ教育者が繼子扱をされる主なる原因ではなからうか。それに、世間では技術職工ほどにも教育者を大切に思はず、其仕事は少しく文字ある者ならば誰にでも出來る仕事、其補充は日傭挊ぎ同樣何時でも容易に出來るものゝ如く考へ、低廉なる賃銀もて之を傭ひ來るも能率に大差なきものとする謬想が、一種の潜在意識として父兄並に政治家の腦裡に横つて居るやうに見える。從つて有爲俊秀の人物が次第に教育界に拂底し來るの事實も、教育者轉職の頻々たる現象も一向彼等を驚かすに足らず、米國に於ける國民教育者の過半が夙に女子に由つて占めらるゝの殷鑑も、何等の警告たらずして、此悼ましき隣邦の現象の如きは、却つて模倣すべき理想として輸入せられんとしつゝあるのである。

併し乍ら教育者は何時までも沈默せる木魚ではゐない。

彼等の中にも新しい時代の流は通ふことを免れぬ。成程、暴力反抗は最後に至る迄彼等の武器にはなるまい。けれども、教育者てふ名の威嚴が永久に彼等の口を箝するに足ると思はゞ誤である。彼等の威嚴は既に蹂躪されてゐるではないか。教育者の背後には遠からざる將來に於て相當威力ある團體が組織さるゝに至るべきことを看得ざるものは盲者である。少くとも勞働者と同じ丈けの自家保護の本能が知的階級に働かない筈はなからう。彼等の轉職を補ふには常に廉價にして從順なる女子ありと安心するものは愚者である。『一葉落ちて天下の秋を知る』、英國に於ては已に女教師の一大同盟辭職さへ起つたとの報道は、決して滑稽の物語と聞くべきではない。むしろ吾人は最も弱き者の裏に存する悲痛なる生存と正義との要求を聽取すべきである。しかもこれは、全く吾等と沒交渉なる他國の出來事ではない。東西古今、人心の根本的要求は大して差異はない、たゞ社會的境遇と空氣とが違ふのみである。しかして此社會的境遇と空氣とは、變化の易くして迅かなるものたることを記憶せねばならぬ。

教育者といへどもパンなくては生きられぬ。

たとひ教育者自身は神たらしめ得るとするも、其尊族、其妻子、其係累者までを神たらしむることは到底出來ぬ。『妻臥病床

兒泣飢』をも顧みずして國事に竭すことは、稀世の志士といへども、國家存亡の秋にあらざれば出來ないところであらう。尋常太平の日に於て安んじて之をなすことを全國幾十萬の教育者に强ゆることは、果して無理でなからうか。吾人は今日の教育界に於ける轉職者の動機が一樣でないことを知つて居る。併し乍ら彼等の中には涙を揮つて其職と妻子とに訣れたる幾多の人士あることは察するに難くない。よし文字通りに『妻臥病床兒泣飢』の苦衷を嘗めたものは一小部分であるとしても、多少の程度に於て此種の消息を經驗しない教育者は、むしろ幸運に生れたる少數者であらう。妻は病むとも之に十分の治療と靜養とを與ふることが出來ず、人の子女には完全の發達を圖りつゝ自分の子女には必要の營養と高等の教育とをさへ與へ得ないといふのが一般の狀況で、今日の物價暴騰に際しては、如何にして米屋と家主との支拂に滯なからしめやうかといふことが問題である。勿論かゝる經驗はひとり教育者に限られたことではないが、全階級を通じて殆んど凡て此の如き狀況にあるといふことは、他の職業に於てあることであらうか。そしてそれが果して正當の狀態であらうか。他の職業に於ては貧苦は一時的の狀態で、或は自己の優越せる技倆に由つて、或は其勤勉努力に由つて、或は地位の自然的高上に由つて此境涯から脫し得る望があるが、教育者は以上の何れを以てしても其物質的境遇を變化せしむることの望がない。彼れは其職務の性質上自ら其物質的境遇を變化さすべく戰ふことが出來ない。自己の本務品位に忠實なればなる程さうである。彼をして貧苦から脫せしめ得る殆んど唯一の條件は親讓りの資產と家族の少數なることとであるが、前者の場合は教育者、特に中等教員に在つては寧ろ例外で、後者の場合は『律義者子澤山』の諺に洩れず、これまた甚だ少ないのである。それ故初任給の比較的良好なる割合に昇給の遲々として其額の甚だ少い彼等教育者は、年功をふるに從つて却つて家產の減少と家族及負擔の增加とに苦しむのが常である。人は一時的の貧苦や運命の數奇に對しては、隨分勇氣と希望とを以て抵抗奮鬪して行くことが出來る。けれども、永久的貧苦と、離脫し難き固定的運命との陰影に蔽はるゝとき、誰か其中に晏如怡々たることが出來やうか。教育者が絕えず生氣潑剌の兒童靑年に接しつゝ早く自己の生氣を銷盡するのは、其主因の一は確かに玆に在る。此意味に於て彼等は尤も憐むべき救濟事業の對象である。併し乍ら、教育者の求むるところは必ずしもパンのみではない。もし永久の貧民的生活が彼れの勤勞奉仕に對する至當の報酬であるならば、彼れは決して之に甘んじ得ないものではない。彼れが敢て執鞭の士となつて浮雲の富を求めは

いのは、其職に於て無限の樂を感ずるからである。但だ彼れの貧民的運命が其職務と社會的貢獻とに對する蔑視の表象として其肩に負はさるゝときに於て、彼れは其重荷の忍びがたいことを感ずるのである。國家社會の不公正に對して憤らざるを得ないのである。

教育者の蔑視冷遇には至當の理由がある。

彼等は其理想人格共に低く、其學殖識見共に淺く、其職務に對する熱誠と努力とに乏しい。其施すところの教育は、皮相形式に流れて實效少く、抑壓拘束劃一に陥つて青年の才能と情意とを殺すの傾があり、其働は僅に個人の立身出世に對する一層害を與ふるに止つて、國家國民の軍事、産業、政治と交渉するところ甚だ少い。此の如き教育者に對しては、今日位の待遇がいい加減なところであると思ふものもあるであらう。現今の教育及教育者に對する此概括的觀察は決して全く當らざるものではない。かゝる缺陷を尤も痛切に感じ尤も明瞭に認むるものは、恐らく教育者自身であらう。併し乍ら、現代の教育が皮相形式的であり、抑壓拘束的であり、國家及國民生活と沒交渉的であるのは、果して全然教育者の罪であらうか。むしろより多く國家教政の方針及法規の然らしむるところではあるまいか。しかも此事實は教育改革の理由にはなるが、教育者冷遇の口實にはなるまい。今日の教育者の人物、學識、並に其働き振が不十分であるといふことも亦、彼等を虐待する正當の根據になるまい。何となれば彼等が一向『ツマラヌ』といふことは、教育者たるものゝ理想に比して眞なのであつて、他の職業の人々に比して然りとは斷定出來ないからである、之を青年時代の素質から言つても、師範學校に入學し得るものは先づ概して小學時代の優秀生であり、高等師範學校に入學し得るものは中學及師範時代の優等生に屬するものであり、檢定試驗に由つて中等教師たるものは大抵特殊の秀才にあらざれば非常なる努力研鑽の人である。彼等はその同窓生の他の職業に向つたものに比較して決して遜色を感じたものではあるまい。然るに五年十年の後に於ける社會的他位の懸隔は如何。彼等の胸中の何處かに或種の不滿と憤りとが根ざしたとて、それは強ちに危險思想といふべきであらうか。教育者の性格なり才幹なりを他の職業者の眼より見れば、意氣地なく見ゆる點もあるであらうが、それは恐らく他の職業に於ける要求を標準としての批判であつて、教育者の側から他の職業の成功者乃至『ヤリテ』なるものを見ればこ彼等も『クダラナイ』低級の人間かも知れぬ。もし夫れ一切の職業關係を離れ、一個の人間として評價し來るときも尚、教育

者の多數が他の職業者に比して劣等無能であるとするならば、それは教育者の虐げられたる生活が人物の向上修養を不可能ならしむる爲である。高能逸足者が夙く他の社會に脫し去つた爲である。安物好みの家には良い代物が集らぬ爲である。それゆゑ。教育者劣等の事實は、薄遇虐待の理由たるよりも、むしろ其結果といはねばならぬ。社會にして若し眞に教育者の劣愚を歎くならば、速にその侮蔑冷遇を廢め、彼れに生活の安固を保證し、彼れに自由と權能とを附し、彼れに修養向上の餘裕と刺戟とを與ふるがよい。奴隷的待遇は斷じて奴隷を改善する所以ではない。社會はむしろ駿馬を獲んが爲に死馬の骨に千金を吝まなかつた古への賢者に學ばねばならぬ。併し乍ら教育者の求むる所は決してかゝる不當の優遇ではない。たゞ單なる公正のみである。或はいふ、尊重は精神にあり、物質的待遇を云々する如きはむしろ教育者の品位を侮辱するものであると。アゝこれ人を欺き自ら欺く僞善的美辭のみ。かゝる輩に對しては古き川柳の一句、轉借し來つて酬ゆるに妙なるを覺ゆる。曰く、

『先生といはるゝ程の馬鹿でなし』

古への君王の教育者を其國に聘するや、迎ふるに禮を以てし、待つに禮を以てし、弔するに禮を以てした。禮を以てするとは單なる精神的態度ではない。單なる形式ではない。物質的厚遇に表はれない敬意といふものはない筈である。併し乍ら吾人は敢て古への師道を今日に求むるものではない。現代教育者の態度はむしろ子弟に對する愛の奉仕、國家に對する忠の奉仕である。そして吾人は此奉任に對する報酬としてよりも、此奉仕を安全有效に遂行續行し得べき生活の基礎として、相當の待遇を求めるのである。しかも吾人が此相當の待遇の標準を一方今日の物價に置き、他方一般官公吏の水平に近からしめやうとするのは、決して不當でないと信ずるのである。吾人教育者は固より此至當の待遇を得ざるが爲に其奉仕の程度を加減しようとの意志を有するものではない。併し乍ら、人心の作用は機微隱約の間に動く。潜在意識と感情の力は、意志や理想の力以外且つ以上に働き、やがては行爲の上に影響するのである。蓋し外よりの如何なる勢力も、はた自己內心の如何なる力も此影響を制止し得ることは出來ない。吾人が教育界の危機を叫ぶのは之れが爲である。鬱伏せる不滿や、沮喪せる意氣や、冷却せる感激は、爆發せる不平よりも多くの危險を藏しないとは言へない。

教育者界も矢張同じ人間の群である

其呼吸して居る空氣。その住んで居る環境は、同じ『現代』

」である。そして敎育者界にも他の社會と同じ社會心理が働くの」である。尤も、敎育者界の『現代』に對する抵抗力は割合に强いかも知れぬ。けれども、矢張限りがある。生活の波は大抵の堤防を壞すに足りるのである。寺内前首相によつて慨歎せられた官紀の弛緩、吏道の頽廢が一般的事實であるとすれば、我敎育者界のみ、どうして之に洩れる筈があらう。二三十圓の俸給を以て優に公職の威嚴と生活の餘裕とを保ち得た時代と今日とを同一視して、官紀吏道の今昔を上下することは出來ぬ。もし官紀吏道を往時にかへさうと思はゞ先づ生活の安定を往時にかへさねばならぬ。禮節を求めんには先づ衣食を足らしめよとは、獨り下民のみに適用すべき法則ではない。古への士道といへども、武士階級の特權と俸祿となくして果して保たれ得たであらうか。まして今後の官公吏には、衣食の充足以外に其威嚴を支持すべき何等の階級的特權がないではないか。吾人はまた近時一般勞役者及事務員の能率低下の聲を聞く。事故、錯誤、怠慢、過失、澁滯、不正が著しく增加したといふ。幸に我敎育者界に於ては、まだ夫程劇しい變化を認めないとはいへ、兆候は旣にないではない。蓋し勞役者及事務員の能率低下に就いては、二樣の方面があらう。一は異常なる收入の增加に基く耽溺的生活の影響で、他の一は異常の物價騰貴に基く生活の壓迫である。後者を缺乏の疲れとせば、前者は飽滿の疲れである。しかも暴富者の奢侈に對する羨望嫉妬、勤勞報酬の不公正なる分配に對する不滿憤懣、より大なる收入の憧れに基く精神的不安定が誠實なる努力心を殺ぐ點は、飽滿せるものにも缺乏せるものにも共通の心理である。更に又、より高き地位に向つての頻繁なる轉移と需要の急激なる增加とに基く熟練者の缺乏、並に素質粗惡者の餘儀なき使用は、彼等の能率低下の一因たるに相違ない。吾人は官紀の弛緩、吏道の頽廢が如何なる點まで此等と共通の原因を有するかを檢覈したくない。國家の公職に在る者は、當然普通の勞役者や事務員と異れる責任觀念を有つべき筈である。が、彼等は全然違つた心理作用に支配さるゝ人間であると假定するのは謬である。今や世界の情勢と帝國の位置とは、官民一途、上下一心、大に紀綱を張り民心を作新して、國家一切の機能を旺盛ならしむべき秋ではないか。此時に於て人心の緩怠、官紀の弛緩を聞くのは、實に邦家民族の前途を憂へしむるものである。吾人は速に官紀振肅、吏道挽回、並に民心作新の根本策を講ずると共に、慈惠救濟の一對象たるに値するまでに薄遇虐待せられたる敎育者に對して公正を與ふるの一大急務たることを感ずるのである。

教育者薄遇の結果は獨り彼等の苦艱に止らぬ

國民教育の振興は一に教育者の向上と奮勵とに俟つことは、今更言ふまでもない。現時に於ける國民精神作興の要望の如きも、先づ國民教育者の精神を作興せしむるでなければ遂げらるゝことは出來ない。教育者の憧がるゝところ、豈功名利達にあらんや。人生の感激は意氣に存するのである。吾人は吾人の勤勞の社會的價値と國家的意義とが正當に國家社會に由つて認めらるゝとき、吾人の最大報酬を奉仕の悦びの中に求めて、その微力のあらん限りを國家社會の前に献げんとするものであるが、吾人は肯へて救濟を歎願せず、決して優遇を要請せず、吾人の主張は單だ公正の二字にあるのみである。

（大正七、十、二稿）

講和問題に伴ふ獨逸の政變

法學博士　吉野作造

（一）

ハートリングに代つた獨逸新宰相マックス公は、就任以來一ケ月に滿たずして亦辭職するの餘儀なきに至つたとは、近電の報ずる所である。同公の辭職は固より主戰的軍閥派復活の結果と觀るべからざるが故に、寧ろ之を國民が猶一層急速なる講和を要求して居ると云ふ事の徵象と觀るの外はない。同公が餘り遠くない過去に於て平和反對の意見を發表した事があると云ふ事が、社會黨方面からの厳しい攻撃の種となつて、辭職を餘儀なくされたと云ふ説の當否は姑く措いて、兎に角、平和促進の局に當るべく起つた同公が忽ち辭職したと云ふ事は、獨逸に於ける講和熱の昨今非常の速度を以て昂進しつゝあることを語るものと謂はねばならぬ。

マックス公辭職の後は果して何人が其任を繼ぐであらうか。

獨逸皇帝が退位すると云つて居る位であるから、皇帝親裁の制度の到底この上繼續すべからざるは云ふを俟たない。從つて從來獨逸を支配して居つた普魯西の貴族(ユンケル)が、再び勢力を振ふを得ざるべきもまた殆んど疑を容れない。常に彼等の味方となつて忠勤を抽んでゝ居つた國民自由黨の如きは、素より初めから問題とならない。然らば此等の官僚軍閥の一派に對抗して隱然一敵國をなして居つた舊教主義の中央黨は如何と云ふに、之れ亦新時代を支配すべき新勢力ではない、而して英國派の自由政治を主張する進歩國民黨は其勢力餘りに微弱であるから、結局差當りこの困難なる政局を收拾するの任務は社會黨の手に歸する外ないのではあるまいか。何れにしても、獨逸は近き將來に於て遂に社會黨の天下になる運命を有つて居るものゝやうに思はるゝ。

尤も社會黨と云つても今日は二派に分れて居る。戰爭以前は議會に百十有餘の議席を有する同國最大の政黨であつた。戰爭になつてから、戰爭其物に關する見解の相違の結果、分裂して二つとなつた事は既に人の知る所であらう。而して露西亞の過激派などのやうに絕對的非戰論を唱ふるリープクネヒトの一派は極めて少數であるから、他方の多數を擁する社會黨の方は、絕對的非戰論を排斥し、又非國家的見解を取らず、比較的穩健な政黨と云つて差支ない。故に此等のものが政柄を握つても、彼等が獨逸を導くにレーニンやトロツキーが露西亞を導いたやうな方法に出でざるべきは疑を容れない。然らば彼等がいよ〳〵政柄を握つたとすれば、獨逸は講和問題に對してどういふ態度を取るだらうか。又將來の獨逸帝國の經營に就いて彼等はどう云ふ考を有つだらうか。

(二)

此點を考ふるに就いて第一に闡明しなければならない點は彼等社會黨が從來獨逸舊來の官僚に對し餘りに妥協的態度を取つて居つたと云ふ事である。戰前に於ては社會黨は隨分時の政府と衝突した。けれども一旦戰爭になると、從來の態度を一擲し、戰爭繼續に熱中すること官僚軍閥と何の選ぶ所がなかつた。從つて獨逸の社會黨は、其實一個の帝國主義者にして、決して本來の主義に忠實なるものではないと云ふものすらあつた。果して斯くの如くんば、ハートリングやマックスが出て來ようが、シャイデマンが講和談判の衝に當らうが、我々に取つては何の異る所がない譯である。併しながら予輩の觀る所は全然此等の見解と同じくはない。何故なれば、獨逸社會黨の永い歷史に鑑み、又シャイデマン其他同黨の有力なる領袖連の人物

に照し、獨逸社會黨をば、さう譯もなく官僚軍閥の思潮に捲き込まるゝものと考ふることは出來ないからである。然らば彼等は何故に社會主義本來の理想に立つて堂々と非戰論を唱へなかつたか。少くともリープクネヒトの一派がかの非戰論一點張りの態度を宣明するに當つて、敢て之を排斥したのはどう云ふ譯か。是れ實に一見解き難き疑問の樣である。然し能く考へて見ると之には一つの深い理由がある。それは何かと云ふに外でもない、獨逸文化至上の確信である。獨逸人は一般に獨逸の文化を以て世界中の最も優秀なるものと信じて居る。此優秀なる文化を擁護し發展し且つ之を弘く世界に擴充することが彼等の天賦の使命だと信じて居る。而して此獨逸文化の發生々育する處は則ち彼等の郷土なるが故に、文化の擁護發展の爲めにはまた是非とも郷土其物を愛護せなければならない。此處に實に獨逸國民の一種の愛國心が根柢する。獨逸國民には忠君の念を認むる事は出來ないけれども、深き愛國心を有するの一事は之を爭ふ事は出來ない。而かも其愛國心たるや、徒らに感傷的たるに止らずして、實に逸獨民族の世界的使命と云ふ高い所に根據を有つて居るである。斯くて彼等は、此高尙なる使命の自覺からして、引いて獨逸文化の發祥地たる我祖國を蹂躙するものに對しては極力反抗するといふことにならざるを得ない。斯くして彼等は今度の戰爭に於て、其原因が何であれ、又其責任が何れにあるにしろ、兎に角我が祖國に刄向ふものに對しては極力抵抗せねばならないと云ふ道義的義務を感ずるに至つたのである。戰爭開始の責任の糾明を廻避し、且つ其責任に相當する制裁の甘受を拒むのは、世界の秩序を確立する所以に非ざる事に氣付かないのは甚だ遺憾であるけれども、兎に角彼等が世界を敵として戰ふ時に方り、少くとも當初、省みて良心の苦悶なかりし事だけは之を認めなければならない。哲人オイケンの如きまでが詭辯を弄して自國の態度を辯護したなどゝ英米などでは罵倒するけれども、よく考へて見れば、彼等の辯明は實に獨逸文化の世界的使命と云ふ深い且つ高い根據に立つて居る事を買つてやらなければならない。要するに、斯う云ふ確信の上に獨逸識者階級一般の戰爭觀が立てられて居り、オイケンの如き冷靜なる學者までが這の考で動いて居つた位だから、社會黨の領袖連が同じく斯種思想の外に出づること能はざりしは怪むに足らぬ。從つて社會黨が戰爭是認の決議をしたからと云つて、漫然之を官僚軍閥の爲す所を一から十まで裏書きしたものと見るのは正當でない。

尤も獨逸でもカール・マルクス流の所謂正統社會主義の立場から云へば、右の如き態度の是認し難きは云ふを俟たないのみ

ならず、又此點に就いて頻りに警戒の聲を放つものがなかつたではない。リープクネヒトの如きは卽ち其の最も著しき一人である。露西亞のトロツキーの如きは、其著書に於て、社會主義の理想の實現に對する最大の障礙は、國家乃至國民に執着する事であると力說して居るが、リープクネヒトも亦純乎たる國際主義を振り廻して、盛んに此點を說いたのであつた。けれども、此單純明白なる思想も、獨逸人として有する特有の祖國觀念には結局打ち勝ち難かつたと見える。獨逸の社會黨は到頭露西亞の過激派とはなり得なかつた。獨逸民族が事實優秀なる文化を有して居つた丈け、此點に囚はれたのは亦無理もない。

且つ又獨逸の社會黨中には、戰前に於て已に修正派なる一個特異の運動があつて、之が著しく獨逸社會黨の實際運動を穩和化し、又大いに實際の情況と妥協せしめて居つた事は爭はれない。每年の大會で、一部の人士は、斯かる妥協的態度を以て黨の面目に關する大事となし、之を非難するの聲が頗る高かつたけれども、それにも拘らず、此新傾向は、年と共に黨の大勢を風靡して、最近では、少くとも黨の約半數は、這の新傾向の賛成者であると云はれて居つた。之を以て觀ても、獨逸の社會黨全體の風潮が露西亞の社會黨などゝは全く違つた方向に走つて居つた事が明であらう。

（三）

右述ぶるが如く、獨逸の社會黨が當初戰爭反對の態度を取らなかつたのは、特別の理由に出づるものにして、必ずしも一から十まで官僚軍閥等に裏書きするものでないから、若し彼等が平和交涉の局に當るとすれば、案外早く話の纏るべき見込のないでもない。彼等はもと獨逸文化の擁護發展の爲めに、敵の侵入に對して一旦干戈を取つた。けれども純然たる防禦の外に彼等に特に期する所はない。而して官僚軍閥の一派の如く、種々の偏見に囚へられないから、文化の擁護、民生の幸福と云ふ大目的さへ達せらるゝなら、戰爭の責任者として當然要求せらるべき犧牲に對しても、案外深い未練を殘さないで講和の交涉に應ずるかも知れない。故に官僚の一派が其局に當るならいろ〳〵面倒な駈引もあらうけれども、彼等が當局者となれば、講和問題に關する其主張、其要求は、必ずや頗る簡明直截なものとならう。故に敵が勝に乘じて飽くなきの慾を逞うし、我の讓步を諒とせずして徒らに突進し來るが如き事なきの見極めがつきさへすればいゝ。此見極めがつかない以上は、社會黨と雖も、恐らく最後まで戰ふの決心を飜さないであらう。而して此の見極めは、米國大統領ウイルソンの數次の宣明に依つてついたと

思はるゝ。何故なれば、英佛の側では一定の講和條件を揭げないではないけれども、領土相接近し、且つ複雜なる利害衝突の關係があつた丈け、動もすれば勝に乘じて少しでも多く侵入すると云ふ態度を取りさうに見ゆるのに、米國は初めより確定不動の講和條件を擧示し、之を達するまでは一寸も退かないが、之さへ達すれば何時でも干戈を收める、決して無用の戰爭は爲ないと云ふ態度を明かにして居るからである。

尤も、最近西部戰場に於ける敗戰の結果、人民の講和熱が著しく昂騰したと云ふ事も、政治家を促して講和の途に一歩を進めしめた原因であるに違ひない。併しながら、獨逸のやうな上から下まで社會的に秩序の整つて居る國に於ては、上流識者階級の考が變らない間は下、民間の思想は容易に變るものではない。下、民間に於ては、生活の壓迫等の眼前の事實から促されて、平和希望の念が段々起つて居るに相違ないと思ふが、最近著しく平和熱の起つたに付いては、戰爭繼續の必要に關する上流階級の思想の變化の影響を數へなければならないと思ふ。而して上層階級をして、此上戰爭を繼續するの必要はない、今頭を下げても、敵は恐らく滅茶苦茶に我々を苦しめて、獨逸文化の成長發展の芽を永久に蹂み躪るやうな事はなからうと信ずるに至らしめたものは、云ふまでもなく米國大統領の態度である。陰謀詭詐を以て充滿する國際關係に於て、而かも兵火相見ゆるの間に於て、斯くの如き信賴の事實が彼我の間にあらはれたとすれば、之れ實に外交界の一新現象にして、また戰後に於ける道義的新局面の傾向を吾人に暗示するものである。

(四)

終りに、社會黨がいよ〳〵獨逸の政柄を握つたとして、彼等が戰後の獨逸國を如何に經營して行くかに就いて一言して置く。

ウィルヘルム二世陛下の退位は、最早疑ふべくもないらしい。傳ふる所に依れば、皇太子も亦繼承の權利を拋棄し、自然幼沖の皇太孫を位に卽け、皇弟をして攝政たらしむるべしとの事である。最近各聯邦王侯會議と云ふ特異の一會合を催したと云ふ報道に依つて觀ても、來らんとする獨逸元首の地位に何人を置くべきやが憲法所定の普通の原則に據らざるべきこと丈けは明かである。若し果してホーヘンツオレルン家が戰爭の責任を帶びて皇位繼承に關する憲法上の權利を遠慮するなれば、之が後始末をどうするかは、今後政柄を執る者の意見に依つて決まるものと謂はなければならない。從つて西電は、或は皇太孫の卽位を傳ひ、又或は第四皇子の擁立を報ずるなど、いろ〳〵

の擁壓膨潤を逞うするけれども、若し社會黨がいよ〳〵天下を執ることとなれば、恐らく右の如き解決法には出でないであらう。

予の想像する所に依れば、戰後の解決が社會黨の自由に所斷し得る所とならんか、彼等は恐らく、各邦の國體は其儘として、獨逸全體をば、帝國組織を改めて新たに共和組織に之を組み直すだらうと思ふ。言ひ換えれば二十二の君主國及び三自由市(アルサス・ローレンは佛蘭西に取らるゝかも知れないから暫く之を除く。依然獨逸に殘るものとすれば彼の運命は固より共和國である)を單位として組織されたる共和國となるであらう。皇帝は廢せられ、大統領は各邦君主中の名望ある者が終身を期として擧げらるゝを常則とするに至るかも知れない。併し政界の實權の全然議會に歸すべきは勿論である。現在の帝國議會並びに聯邦參議院の組織も之に應じて改正を加へらるゝだらう。斯くして獨逸は、之を組織する各邦の政體如何に拘らず、全體としては純然たる民本政治の基礎に置かるべきは疑を容れない。

今日世界に存在する共和國には、佛蘭西の如く市民を單位とするものと、北米合衆國の如く獨立國家を單位とするものとの二種類ある。而して此後種の場合に於ても、各聯邦はまたそれ自身市民を單位とする共和國なるを常とするが、各聯邦の大部分が君主國で、之が集つて共和的聯邦を作ると云ふ例は未だ曾てない。獨逸が若し斯くの如き組織を有するに至れば、之れ實に一つの新例を開くものである。併し新例だからと云つて、之には何等不合理な點もなければ、又實際上何等の不便不都合もない。

而して予が斯く觀察する所以は、單に一片の想像ではなくして、之には多少の根據がある。そは從來獨逸の社會黨では、所謂獨逸帝國の法律上の性質を、右の如く解釋して居つたからである。彼等は云ふ。獨逸は名は帝國と云ふも其實二十五の國家を單位として成り立つ共和國である。元首は名は皇帝と稱するも、其本來の性質は世襲の大統領に外ならないと。斯くして彼等は、現在の皇帝は普露西の王としては成程國君たるに相違ないが、獨逸皇帝としては、人君を以て我々に臨むべき者ではない。我々も亦君主の禮を以て彼を待つの必要はないと云ふ。斯くして彼等は、獨逸帝國刑法中より不敬罪の條項をすべて削除すべしとか、いろ〳〵の儀式に於て皇帝萬歳の三唱に和すべからずなどと云うて居る。皇帝萬歳唱和の禁は、宮廷伺候並びに豫算協贊の禁と共に社會黨三大禁令の一にして、最も嚴しく其勵行を黨員に迫る所のものである。社會黨の議員が、ともすれは、豫算案中皇室費の費目削減を主張して、皇帝の賃銀（アルバイツローン）が高

過ぎると云ふのも、畢竟彼を目するに國家の傭人を以てするからである。ハンブルグの如き自由市は共和組織であり、從つて**共市長は共和國の大統領に當る者であるから、彼が偶々皇帝の行幸を迎へ、貴紳を集めて盛宴を張るやうな場合に、市長の歡**迎辭の冒頭は、必ず「**陛下よ**」と初まらずして、「我同役よ」と始まるのも、皇帝を以て大統領と同視するの見解を取るの結果である。而して此等の見解に對して、皇帝も政府も、事實上更に之を爭はない所を以て觀れば、斯う云ふ考も、全然一に物好きの奇矯な言とのみ葬り去ることは出來ない。

何れにしても社會黨の天下となれば、獨逸帝國の國家組織は、決して今日の狀態を以て留まるものではない。而して若し予輩の推測の如く、平民の宰相が中央にあつて、各君主國を左右すると云ふ新例が開かるゝと云ふ事は、啻に獨逸に於て異常の出來事たるのみならず、或意味に於てまた將來に實現を期待されて居る世界的國際聯盟の一つの姿を我々に暗示するものと云ふ事が出來る。何故なれば此聯盟に於ても亦、君主國やら共和國やら種々雜多の、而かも古い歷史のある國家が、識見聲望の平民によりて左右さるゝの組織たるべきを以てゞある。



▽奥野他見男著

他見男さん物語

賣捌　東京堂、至誠堂、北陸館、上田屋、良明堂、東海堂、東文堂、盛花堂

最新刊

▽幾多の著書中著者の寫眞入は本書のみ!!!

▽之れ万天下の熱望せる所著者遂に發表す!!!

▽文と人と相俟つて興趣いやが上にも深し!!!

▽万都の人氣今や著者の一身に集まる!!!

就中內容「妹の結婚」の如きは著者畢生の名作とて文の妙味云はん方なく天下一品の稱ある著者をして縱横無盡に心ゆく迄其の才筆を振はしめたるもの、その面白さ！旨さ!!讀む者をして驚嘆おく能はざらしむるものある可し。

菊判半截形美本
定價金七十錢
送料金六錢

東京市淺草區馬道町一ノ十四
東京淺草出版社
電話下谷四五五二番
振替東京四三〇五九番

世界に向つて婦人問題を提供せる——
——北歐の大劇作家を見よ!!

——全部(六卷)完成廣告——

イブセン傑作集

1	島村抱月譯 人形の家	正價九十錢 郵税八錢
2	島村抱月譯 海の夫人	正價九十錢 郵税八錢
3	坪内士行 島村民藏譯 ロスメルスホルム	正價壹圓 郵税八錢
4	坪内士行譯 小さいアイヨルフ	正價九十錢 郵税八錢
5	坪内士行譯 野鴨	正價九十錢 郵税八錢
6	坪内士行譯 ヘツダガブラー	正價壹圓廿錢 郵税八錢

▲四六判總布製函入——全部六卷——每册寫眞版口繪數葉挿入▼

北歐ノルエーの僻地に生れ社會劇の大作を出して歐米の思想界を震撼したのはイブセンである。婦人の自覺、婦人の解放、婦人の獨立を題材とした「人形の家」が本譯書に依て屢々我が劇壇に演ぜられて女大學主義の守舊家を戰慄させた事は誰も知つてゐる。彼の作は何れも傑作ならぬは無いが茲に譯出した六作は傑作中の傑作である。而して譯者は我劇壇文壇に隱れもない島村抱月、坪内士行の兩氏及び島村民藏氏であるから其譯筆の如何は言ふに及ばぬ。

發行所 東京牛込早稲田 振替東京一二三 早稲田大學出版部

(賣捌) 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野 (其他)

新内閣の閣員諸公に呈するの書

原首相に呈する書

法學博士　古川學人

惟ふに國民の新内閣の首相原敬君の手腕に解決を俟つ問題は頗る多い。然れども個々細目の問題は一々之を列擧するの煩に堪へず、且つ又人各々其觀る所を異にするが故に、我の見を以て強いて之を君に責むる能はざるものもある。故に此等の點は暫く之を他日に讓り、今は唯立憲的内閣らしき内閣の初代の首班としての君に特に解決を俟つ所の大眼目について一言するに止めたい。獨り吾等のみならず國民の多數も亦君を俟つに種々の意味に於ける空前の宰相となし、以て從來の宰相に全く期待すべからざりし一大新問題の解決を密かに君の辣腕に托して居る。

●

君を首班とする内閣は如何にして生れたか。之を單に二三元老の推擧の恩に歸するのみとなさば大いなる誤りである。西侯の熱心なる推擧と山松兩老の裏書とは直接に原内閣の出現を促した原因には相違ない。けれども彼等をして此擧に出でしめたものは何と云つても時勢の進運並びに之に伴ふ國民の輿望である。所謂春秋の筆法を用ゆるならば、國民が實に寺内を斥けて君を迎へたものと云はなければならない。而して之れ實に時勢が少數官僚の壟斷に政權を托すべからざるの原則を確立せるものであつて、不知不識國民を促して多數民衆を基礎とする鞏固なる政府を有たざるべからざる所以を悟らしたものである。何れにしても時局の必要之を促して玆に到らしめた。大勢に逆行する反動的勢力は到底永く其存在を續くる事を許されない。

然れども時局の必要の我國政界に及ぼせる影響は必ずしも西洋諸國に於けるものと同一ではない。日本國民を適當に指導し、之をして世界の大勢に順應せしめんとするものは須らく此點に着眼しなければならない。何を以て斯く云ふか。西洋諸國に於

て時局の必要が特に促せるものは擧國一致精力を集中して最高の能率を發揮せん事である。併しながら擧國力を併せて精力を一點に集中するは政爭の極めて公明正大に行はれ、所謂民本主義の相當に徹底して居る國に始めて行はるべきである。民本主義の未だ十分に徹底せざる國に於ては、一足飛びに英米諸國に倣つて能率主義を發揮せんとしても、それは事實不可能である。之れ寺内内閣一派の頻りに哲人政治を提唱して遂に見事に失敗した所以である。されば我國の如き官僚藩閥の跋扈して居つた國に於ては、時局の影響は自ら、民衆に根據せざる超然内閣の、到底難局の切り盛りに堪へざるの事實を暴露するの方面に表はれざるを得なかつた。從つて西洋に於て能率主義の隆盛を促した同一の原因は、我國に於ては先づ民本主義の確立に依つて鞏固なる政府の樹立に努むべきを促す事になつた。國民一般が明白に此點を意識して居つたか否かは暫く別問題として、時局の促せる我國最近の政局の趨勢が徐らに此一點に馳つて居つた事は疑を容れない。之れ實に今度の政變を來さしめた所以ではないか。

果して然らば國民の眼ざす所は多數民衆に基礎を有する鞏固なる政府の樹立である。曠古異常の時變に際會して幾多の難問を裁決するの大任は、獨り之を鞏固なる政府にのみ托すべきである。而して今日の時勢に於て多數民衆に基礎を有せずしては如何なる内閣も之を鞏固なりと稱する事は出來ない。今頃之を知つたのは甚だ遲きに失するけれども、寺内内閣の失政に依つて國民は今や初めて哲人政治の迷夢から覺めた。斯くして君が新内閣の首班として迎へられたけれども、併しながら君の率ゆる政友會の迎へられたのは、實は議會に比較的多數の議席を有すると云ふ表面上の事實に基くに過ぎない。不幸にして我國目今の政情の下に於て、政友會の民衆の上に有する根據は事實に於て頗る淺薄なるの恨がある。何故なれば政友會の多數は即ち國民より與へられたる多數にあらずして、選擧法の不備に乘ずる悪辣不德の手段と、官憲の偏頗横暴の援助に依つて造られたる多數なるが故である。必ずしも政友會は多數の基礎に立たないとは云はない。唯眞に國民の多數に動かすべからざる根據を有するや否やは今日の所未だ明白ならずと云はなければならない。

故に吾人は改めて玆に原首相に望まざるを得ない。何ぞや。即ち表面形式上の多數の根據を具體的に實質的に充實すること即ち之れである。而して此方面に於て吾人の特に君の手腕を驗せんとするは、差當り選擧法改正の問題である。細目は今玆に論ぜない。只此點に關する何の經綸を有するやは我輩の切に與り

聞かんことを欲する點である。

次に予輩の原首相に望む所は、從來の因循を棄て、能率の發揮に意を用ひん事である。國家各方面の情力を集中して、全般的能率主義の發揮を今日に求むるの難きは止むを得ないとして少くとも君の統卒の下にある政友會內部に於て、大いに能率主義を發揮するは君に取つて素より一擧手一投足の勞に過ぎない。米國の政界に於ては平時に於てすら國家の運命を托すべき大統領の任務を、黨內功勞の士に授けずして時に一介の學究、例へばウイルソンの如きを擧ぐる事もある。而して君が閣員を詮衡するに當り、一部適材適所の妙を示しつゝ、一部多年の功勞に酬ゆるの趣意を以て、意外なる寧ろ滑稽なる役の振り當てをなしたるは、我輩の諒解に苦しむ所である。

併し乍ら既往の小過失は之を追はない。見樣によつては君の前途には尙縱横に手腕を揮ふべき十分の餘地がある。願はくは前記の根本的二大眼目に周到なる用意を傾けられんことを。此點に一大英斷を加ふるに躊躇するなら、君は畢竟平凡なるお座なりの政治家たるに過ぎない。空前の宰相として迎へたる君をお座なりの政治家として送り去らざるべからざるは我々の忍びざる所たるのみならず、又我國政界の進步の爲めに、殊に曠古の變局を眼前に控ふる今日誠に痛嘆の至りに堪へない。

田中陸相に與ふる書

大庭柯公

過去五十年の我國陸軍史を想ひ浮べて見ると、恰かも一大山系を見るの感がある。日本アルプスにも等しい、此の陸軍大山系中で、大村益次郎は豪宕雄偉な白馬岳と見られる。山縣公や故兒玉大將は、乘鞍、鎗ヶ嶽とでも言へよう。が併し白馬岳の雄大な山勢は見られぬ。世には足下を長閥の寵兒と稱し、軍閥の獨息子と考へてをる者があるが、是等の人々の眼には、恐らくは足下も亦此の陸軍大山系中の、何岳であるかに映ずるであらう。しかも吾人を以て之を見れば、我國の陸軍大山系は、御嶽より乘鞍に亘つて、日本アルプスが南北に盡きてをる如く、明治の初年より大正五六年に至る五十年に於て、全く盡き果てたと思ふ。

何故陸軍大山系が盡きたと云ふか。精兵主義の破滅と舊藩閥の崩壞とが、一朝にして我國陸軍の大山系を崩し了つたことである。我が封建時代に於ける士族の制は、即ち精兵主義の純なるものであつた。夫故に足下同鄕の先輩前原一誠の如きは、維新の當初徵兵令の公布に當つて、百姓共の兵隊が何になるかと

反對した。然るに此の前原の純精兵主義の間違つてゐたことは、明治十年の西南戰爭に於て、立派に證明された。即ち純の純たり精の精たる薩摩武士共は、前原が百姓兵と云つた四民混成兵隊の爲めに、見事に而かも規則正しく打破られて了つた。田中君足下、此の明治十年の證明を、今一段明瞭に且つ大規模に、證據立て得たものが、今度の歐洲戰爭であらうと私は思ふ。

米國參戰の當初には、誰れもが百萬以上の米國兵が、海を越えて西部戰線に立つなどゝ云ふことを豫想しなかつた。而かも米國の壯丁は、日本兵の今度の西比利出征に、決して劣らぬだけの熱烈な態度で、自由召募に應じて、現に戰線に立つて、精兵主義の獨逸軍と抗戰してゐるではないか。英國も亦然りで、當初吾々は實の處、英國の徵募兵を見縊つて居つた。而かも同しく精兵主義の佛國兵と立竝んで、相應な行動を健實な態度で演じてをるではないか。足下等の精兵主義者は、辯駁して言ふであらう、獨兵は今日疲勞の兵であり、英米兵は新手であると。然り、吾々の論點も其處である、即ち召募制度の國民皆兵主義の特徵は、新手から新手へと、次々へ打續くことであつて、而かも其個々が命令に依らず自發に、指導を待たず理會して、國難に赴くことである。英國兵は戰線の背後で、テニスを遊んでをり、米國兵は塹壕でココアを啜ると云つて、それを笑話の種にしたものは、五十年來精兵主義のみに慣されて來た吾々日人ではなかつたか。然るに召募制度の英國が、百五十萬以上の兵を戰線に立たせ、米國も亦百萬以上の大兵を、海の彼方に送り出したと云ふことは、舊來の精兵主義者に取つては、眞に驚異の事實ではないか。然るに足下は今我が軍閥を代表して二軍團編成と稱して、二個師團編成の二十一個軍團即ち二十一個師團の增師案、換言すれば現在兵數の倍加案を提げて、新内閣の陸軍大臣として國民の前に立たれた。時勢と事理に反抗するも亦甚しいではないか。

次に軍國主義下の舊露國が、一朝にして崩壞したことも、亦我國陸軍力の縮少を促すべき最大事實である。足下の同鄉にして先輩たる村田清風翁の歌に『西北の風よけをして蔀打てよ我が日の本の櫻見る人』と言ふがあるが、安政元年プーチャチンの來航以來、昨春露國革命の勃發して舊露國の解體に至るまで、我國々防の主力は、正しく西北隣境の露國に對するものであつた。永く安泰に櫻を賞せんとならば、西北の幔幕を張ることを忘れるなとの、清風翁の國民的訓戒は、眞に達識であつた。維新後五十年間、陸軍の大山系を形造つた足下の先輩共は、この訓戒通りにテントや幔幕を、專ら西北の風除けの爲めに張り通した。然るに露國軍閥といふ怖るべき風の神は、昨年三月に吹

往生を遂げて、隣國露西亞は永久に無風帶の、平靜な土地と成り行きつゝある。清風翁が製造して呉れた大幔幕は、過去七十年間立派なお役を勤めて、今は之を取除ける日が來た次第で、大正國民の吾等が其の取除け役を果すべき譯である。然るに足下は今、足下の先輩が打立てた幔幕に數倍するほどの大幔幕を、依然として西北に張るべく、二十一軍團擴張案を、恰かも事有りげに提げて、打つて出られた。理會ある國民は瞳を凝して、足下と其提案を視てをる。國民思へらく『風は全く凪ぎたではないか、幕を取拂つてもよいではないか、然るを何事ぞ、以前にも增した大幕を打張らんとは』と。足下の明敏なる、必ずや此の國民の所感を洞察するに容易であらう。

足下、四圍の事態の變遷は、單に以上の二ツだけではない。官僚に對する『民意の勝利』とでも名づくべき時代が、我國へも愈々到達したのである。私の所謂陸軍大山系を形造つた人々は、實にお山の大將であつた。彼等はお山の大將として、國民を眼下に見下して、自意のまゝに仕事を遂行した。過去の五十年間は、どうやら夫れで濟んで來た。然るに歐洲に於ては、從來相應に擡頭してゐた『民意』は、現大戰を機會に、其の神髓を發揚して、天下國家の萬事が、民意本位の決定に待つことゝなつた。而して此の世界の大勢は、容赦なく我國にも潮來して、政治も國防も皆民意本位の政治、國防と成り行かんとしてをる。言ひ換れば國防を軍閥の手から奪つて、國民の國防とせんとしてをる。前原一誠流義に觀れば、則ち百姓の國防と變化し行きつゝあるのだ。百姓の國防即ち國民全體が、其の必要と其の意思とに依つて形造る國防こそ、新時代が要求する國防に相違ない。お山の大將共が大山系の上で、勝手に幕張り計畫を立てた國防策は、新時代の國防ではなくして、民意に對する反逆である。

私は足下を今日の我陸軍中での雄才であると確信する。隨て國防の實施遂行に就ては、國民は足下を信頼することに於て十二分であると信ずる。唯國防策の基礎は、飽までも之を民意に置いたものでなくてはならぬ。私は此の意味に於て、足下が提出された軍團編成即陸軍大擴張案を、民意を無視した無謀な計畫であると斷定する。斯かる無謀な計畫は陸軍を大にする所以でもなく、又陸軍の基礎を萬全にする所以でもない。今は陸軍を國民の友とすべき時代である。否、國民全體を舉げて其意思に依つて、國軍を編成すべき時代である。今や原君の政友會內閣は、兎も角も民意の上に新政治を打樹てゝ、併せて世界の大勢に順應せんことを標榜されてをる。足下は今原內閣の陸相たり、陸軍部內の中心人物として、我が歷史ある陸軍をして健

實にして意義ある發達を遂げしめんとならば、大勢と民意を無視した軍閥編成ではなく、大勢と民意に適應した新陸軍を造ることであらねばならぬ。足下以て如何と爲す。

床次内相に上る書

高島米峰

一

床次内相閣下。

閣下。一黨の重望を荷ひ、我國最初の政黨内閣に、内相の印綬を帶ぶ、閣下の得意、眞に想ふべきなり。僕、これを慶賀するに於て、敢て人後に落つるものにあらずと雖も、古聖教へて、これを視せむよりは寧ろこれを誡めよと言へり、これを誡しむるが如きは、もとより僕の任にあらず、又、甚だ禮にあらず、たゞ、聊か、衷情を披瀝して、垂察を請はむと欲するのみ。その威尊を冒瀆するの罪の如きは、これを甘受するに吝ならざるなり。

閣下、既に内務大臣たり、誠に内政の樞軸に處する。その所管の政務の如き、最も多端にして、且つ最も重要なり。惟ふに、苟も大臣の職に在るもの、明察を要し、機略を要し、智勇を要することと勿論なりと雖も、しかも渾然たる人格と、遠大の理想と、敏活なる手腕とを要することは、更に一層切なるにあらずや。閣下が、低劣なる現實主義の黨人中にありて、獨り、高く理想の標幟を掲げて進み來れるは、眞に一個の異彩たり。今、閣下、海濶の雅量に信頼して、敢て進言せむと欲するもの、一曰はく信仰問題。曰はく敬神問題。

二

床次内相閣下。

閣下。想起すれば、既に數年の過去に屬せり、閣下が内務次官たりし時、閣下は、『宗教と國家との結合を圖り、宗教をして更に權威あらしめ、國民一般に、宗教を重んずるの氣風を興さしめむことを要す。』となし、且つ、『國民道德の基礎を造るには、必ずや、宗教と教育と相待つて進むを要す。是を以て、二者の結合を圖り、之をして、互に提携せしむるの實を擧げ、相道な[illegible]て以て、國民教育の上に竭さしむることを切望す。』と稱し、この目的を達せむがために、佛教神道基督教の代表者を、内務省に『召集』し、時の内務大臣をして、一場の『訓示』をなさしめむことを計畫せり。謂はゆる三教會同なるもの、即ち是れなり。而して、僕は、『國民道德の根柢が、宗教に在るべきは言ふまでも

もなく、政治も實業も教育も、すべてこの根柢の上に立たざるべからざるものを宿論とするもの、今にして内務相の一お役人より、かゝる説法を聽かむことを、甚だ以てこれを意外となし、寧ろ、國家が、曾て廢佛毀釋の暴行を敢てして、この國民道德の根柢を、動揺せしめたる罪過の、甚だ大なりしを謝するの誠意なかるべからざることを。』及び『教育と宗教との關係を、寺院教會と學校との上に結ばむとし、教師と僧侶との間に締ばむとするが如きは、何等有益なる結果を持來さゞるのみならず、却つて、諸種の弊害を釀して、結局、宗教と教育との混同に了るの虞なきにあらず。宗教を以て教育の根柢となすとは、さる淺薄なる、外形上の提攜を意味するにあらずして、深く、人心の機微に觸るゝの問題なり。法令の左右し得べき範圍内の事にあらずして、教育家宗教家の自覺に待つべき問題なり。たゞ、國家は、從前の如く、教育と宗教とを隔離せむとするの態度を、一變するを以て足れりとなすことを。』を理由として、内務省が、若し、宗教に對して、保護若くは干渉を加へむとすることあらば、これに反對すべく、又、神佛耶の人々を一堂に會して、一寸、晩餐を饗すといふ位のことならば、それは別に惡事と見るべきにあらざるが故に、これを默殺すべく、又、若し、三教徒を會同して、その上に、何等かの新事業を計劃せむとならば、その事の、必ず不可能なるべきを確信するが故に、寧ろ、内務省の不明を警策して已まむとすと主張せり。

　而して、尙、この論旨を徹底せしむるがために、閣下を、内務次官室に訪ひ、二時間に亘りて議論を上下したることは、僕の記憶にも、今尙、新たなるが故に、閣下も亦、明にこれを記憶せむ。殊に、その議論中、閣下が、言明せる『本計劃(三教會同)は、精神に關する事件なるが故に、如何なる政府の時代に在りても、其の方針を變更せざるやうにしたしとの考へなり。元老連に、豫め承諾を得たるは、之がためなり。』の一項は、閣下が、如何に本問題に關して、熱心なりしかを想像し得るに足ると共に、年々、必ず、この三教會同の愚擧を實行せむとするの頑冥に、喫驚せざるを得ざりしなり。然るに、事實は必ずしも然らずして、爾來、今日に至るまで、何の内閣に於ても、これを實行したるものなく、閣下が催したる第一回の三教會同は、正に、空前にして而して、絕後たらむとす。閣下が、時の元老連にまで、承諾を求めたりと言ひ、如何なる政府の時代にありても、その方針を變更せざらしめむとすと言へる熱誠も、今となりては、その意義の、甚だ捕捉し難きに苦しまざるを得ざるなり。

　閣下、今や、内務大臣たり。健忘症にあらざる限り、必ず、再び、三教會同を實行して、當初の理想を實現せむと試みるな

るべし。されど、閣下が、內務次官たりし當時は、宗教局は內務省中に置かれ、閣下支配の下に在りき。然るに、今や、宗教局は、文部省に移管して、文部大臣によりて支配せらる。內務大臣としては、閣下當初の企劃の如き、三教會同を行ふこと、或は困難ならむ。文部大臣を使嗾して、これを爲さしむるも、閣下の自尊心を傷くること、決して少しとせず。閣下、果して如何の方法を以て、自己の言責を明にせむとするか。

閣下、若し、今も尙、眞に『宗教をして更に權威あらしめ、國民一般に、宗教を重んずるの氣風を興さしめむ』と欲するの誠意あらば、僕に一策あり、冀くは、閣下のために、これを獻ずるの光榮を有せむ。曰はく、西園寺侯、曾て、每年一回、雨聲會といふ名の下に、現代の謂はゆる文士なるものを會して、一夕、談笑を縱にす。眞にたゞ、一夕の談笑を試みるといふのみにして、何等特別の意義ある會合にあらざりしと雖も、しかも、その現代文藝家の策進上、尠からざる好影響ありしを否む能はざるなり。今若し、閣下、一私人として、神佛耶三教界の中心人物……管長若くは宗務長の輩を指すにあらず……を招待し、一夕、その高說を拜聽せむといふが如き會合を催すこと屢屢ならば、單に每月一度の會合なりと雖も、その民心に好影響を及ぼさむこと、實に多大ならむ。夫の、曾て閣下が試みられたるが如く、官憲を以て管長を『召集』し、これに『訓示』を與ふるといふが如きことの、甚しく宗教の權威を傷つけ、宗教家の尊嚴を汚すに反し、これを招待して、親しくその『高說』を『拜聽』せむといふ、苟も此の如き趣意ならば、たゞ單に一夕の會合にもせよ、又、縱令『高說』なくして、低說愚說のみなりとせむも、會合せりといふ事實それ自身が、如何に民心に良好の影響を與へ、依つて以て、宗教の權威を高め、宗教家の尊嚴を維持するに力あるべきかは、眞に意量の外ならむなり。

三

床次內相閣下。

閣下。所管の內務省中には、神社局あり。神社は、宗教にあらずとの見解よりして、寺社奉行、社寺局を經て、遂に神社局、宗教局を別設し、等しく內務省中にこれを置きしが、更に宗教局を文部省に移して、いよ〳〵ます〳〵、神社の宗教にあらざる所以を明にせむと企てたり。僕は、種々なる理由よりして、此神社を宗教たらしむべからずと主張し來れるものなれども、今日、日本に現存せる神社の中には、宗教的なるもの甚だ多く、漫然、敬神思想の涵養を鼓吹するが如きことあらは、或は誤つて、信教自由の憲章に抵觸することなしとせざるなり。夫の、皇祖天照大神を奉ずる伊勢神宮の如き、神武天皇を祀れる橿原

神宮、その他歴代天皇の靈を奉祀する神社の如き、及び、臣下にても、國家に對して功勞ある偉人を祭れる神社の如き、もとより、報本反始の念を以て崇敬すべきものにして、宗教上に於ける信仰の對象にはあらざるなり。之に反して、夫の、蕃神を祀れる神社の如き、惡鬼怨靈を祀れる神社の如き、寶劍等の威力を認めて、これを神體として祀れる神社の如き、森羅萬象の自然力の偉大なるに恐怖して、これを神として祀れる神社の如き、明にこれ、一種の宗教なり。彼と此とを混同して、國民に對して、神社崇敬を强要するが如きは、頗る危險ならずとせず。殊に、「神と言へば皆等しくや思ふらむ鳥なるもあり虫なるもあり」甚だしきは、生殖器を神體とせる神社さへ無きにはあらず。敬神思想の涵養を急務とするの結果、或は、學童を率ゐて、生殖器の前に、最敬禮を行はしむるが如きことあらば如何。過ぎたるは猶及ばざるが如しとは、蓋し、此くの如きを言へるなるべし。

閣下、出雲大社の宮司千家氏は、同時に、大社教の管長たり。これ等は、神社と宗教との混同の最も甚だしき一例にして、神道家中、この類の兩刀使、決して少しとせず。僕の私見を以てすれば、單に、神社が宗教にあらざるのみならず、現に宗教局支配の下にある神道の中にも、これを宗教と見ること能はざるもの少からざるなり。否、寧ろ、謂はゆる神道を以て、これを宗教として待遇することの、皇室及國體上、諸種の危險を伴ふなきやを恐るゝものなり。日本の皇室と國體とは、世界無比と稱し、萬國に卓越すと稱せらる。而して、神道の根元と皇室の根元とは、これを同一なりと見ざるべからざる關係にあり。然し、信教自由の法文を盾に取りて、我は基督教の信者なり、神道言ふところの神の如き、これを信ずるにも及ばず、崇拜するにも及ばずと言はゞ如何。これ或は、皇室の祖先に對する不敬なるなからむや。これを以て、夫の神道の一派なりし神宮教の如きは、民法の實施と共に、公法人たる宗教を解散して、私法人たる財團となし、神宮奉齋會と改稱せるが如き、頗る、その要を得たるの措置と稱すべし。

閣下、現今の制度の上に於ては、神社と宗教とは明に區別せられ、神官と僧侶とも明に區別せられ、費用支辨の方法も、亦各明に區別せらると雖も、神官及神道家中、この區別を曖昧にし、敬神の事を以て、私腹を肥すの料となさむとするが如きものさへ、これなきにあらず。閣下、如何にして、この神社に關する根本問題を解決し、國民の敬神思想を健全に發達せしめむと欲するか。閣下、名案あらば、乃ち速にこれを施け。若し夫れなくば、僕に多少の策なきにあらず、閣下の需むるに應じ

て、敢て口を開いて、胸中の奇を吐出するを得む。

四

床次内相閣下。

閣下。孟子の言を聞かずや。曰はく、今之諸侯、無二大相過者一、以其皆好レ臣二其所一レ教、而不レ好レ臣二其所一レ受レ教、と。歴代の内閣、多く民意を尊重することを知らず、縱令、民意の尊重すべきを知るも、これを容るゝことを知らず、これを以て、民背いて從はず。歴代の閣員諸公、多く國民を指導せむと欲して、國民に學ぶところあらむと欲せず、これを以て、その施設、未だ國民を喜ばすに足るものあらず。閣下、坦懷宏量、能く、教を受くるところのものに接するを好み、人言に聽くに吝ならずむば、庶幾くは、大に治績を示すことを得む。僕の、閣下に進言せむと欲するもの、中産階級疲弊救治の問題、公娼私娼及一般風紀の問題、戰後に於ける勞働問題、選擧權擴張及婦人參政權問題等、その他、尚、多くこれあり。たゞ僕、文拙にして、意を盡さゞるを悲しむ。冀くば、更に、これを他日に期せむと欲す。妄言多罪、惶恐已む無し。（大正七年十月十七日）

中橋文相に呈す

文學博士　某大學教授

中橋文相閣下

閣下の就任を迎へて世上は等しく意外の眼を睜つて居る。併し閣下に何を望むべきかについては世論必ずしも同一ではない。大いに閣下に期待して居るものもあれば、又更に何の期待を置かざるものもある。併し公平に觀て文政の門外漢たる閣下に多大の期待を置くは固より誤りであらう。が又何等の期待を置かざるも正當の見ではあるまい。何となれば閣下の勃々たる功名心は、到底閣下をして無爲無能に畢らしめざるべきを以てゞある。

然しながら予輩は閣下が其功名心の逬るに任せて、柄不相應の突飛なる事件に意外の失敗を釀すやうな事なからん事を切望する。閣下にして無爲無能に終るを欲せず、又閣下に世上傳ふるが如き一個の手腕ありとすれば、吾人は閣下に向つて閣下の柄に相當する事業を指示して大いに功績を擧げさして遣りたい。是に於て予輩は閣下に對して教育者優遇問題を提供する。複雜なる專門的問題は暫く之を屬僚の研究立案に委し、願はく

は此簡單直截なる一問題に閣下の全力を傾倒して貰ひたい。之れ獨り閣下の名を成すの捷徑たるのみならず。國家の之によつて受くる惠福頗る大なるものがある。

教育者優遇問題ほど事理明白にして而かも等閑に附せられたものは無い。教育は國民元氣の源泉である。其源に於て國民の元氣を涵養せんと欲せば、先づ教育の振興を計るの外は無い。而して教育者優遇の途を蔑ろにして如何にして教育の振興を計る事が出來るか。然るにも拘はらず從來我國の制度は教育者たるの故を以て、同じく國家の公に奉任するものを特に虐待するの事實がある。公理の要求としても、教育者と普通官吏と同等に待遇すべきは當然である。而して現今行政部内に於ては明白に、教育者の待遇を高めて軍人や普通の官吏と同列に置くの必要が無いと云ふ偏見があるではないか。吾人は閣下に向つて先づ第一に此弊風を打破せられんことを望まなければならない。

我輩は更に一歩を進めて、教育者は特に普通の官吏以上に優遇するの必要ある所以に閣下の注意を傾けられん事を希望しなければならない。故に例へば、一般官吏の物質的待遇を高むるの必要あるに際し、若し財政の之を許さゞるものあらば、少くとも教育者の待遇丈けは他のものに先んじて之を爲すの必要あることに閣下の諒解を煩したい。斯くせざれば教育界に人才の集まる事を期し難い。待遇の勝れたる所に自ら人才の集るが人情の常なるは、昨今實業界に有爲の人才が雪崩れ込むの事實に觀ても明かではないか。人才の集まる所は活氣の橫溢する所が國民の元氣は斯くして初めて振興する事が出來る。今日のやうに獨り教育家を食ふや食はずの境遇に置いては、啻に貧すれば鈍するの諺を實現する計りではない。彼等の中に自然天下の公平を疑ふの危險思想を醸成するの怖れないでない。斯くして教育界に不眞面目の氣風を生じ、從つて國民元氣の頽廢を齎らすの憂ふべき結果を生ずやうになる。閣下の聰明は必ずや此單純なる道理の前に眼を掩ふ事は出來まい。

獨逸は歐羅巴の先進文明國中最も民智開發の後れたる國である。而かも學問發明の最も傑れて居るのは一に學者優遇の結果に外ならない。一般國民の着實勤勉なるも、亦普通教育の衡に當るものが其物質的待遇の潤澤なるの結果、泰然として大にしては國民の指導者たり、小にしては地方風敎の維持者たるの任を全うして居るからである。斯くして世人をして動もすれば誤つて獨逸が歐洲各國中最も智見の進步したる國民なりと誤解せしむるに至つた程、同國の教育者は上より下まで遍く厚き待遇を受けて居るのである。

要するに國民の元氣の振興は教育を振興するにあり、教育の

振興は先づ教育者の物質的待遇を良くするを以て第一の關門とする。凡そ教育を振興するの途は固より教育者の物質的待遇のみに限らない。教育の精神を說き、教育者の覺悟を論ずるも亦主要なる方策である。然しながら道德を說き教育の精神を論ずるは、先頃まで船會社の大番頭として惡錢に私腹を肥せる閣下の柄に相應はしくない。閣下が何の觀る所あつてか兎も角任に文相の地位を受けた以上、須らく其分を守つて、專ら教育者待遇の改善問題一點張りで傍眼も振らず突進して貰ひたい。之れ我輩の、文政の門外漢たる、而かも相應に働きのある閣下に望む唯一の問題である。

野田遞相に與ふ

前田蓮山

野田遞相閣下、遞信事務は遺憾の點多き我邦の行政中、比較的整頓發達したるものゝ一なり。殊に郵便事務の如き、親切周到、世界に其の匹敵を求むるも稀なりと申す。過日一通の書狀が十二年にして、發信者に戻り來れりとて、其の緩慢粗漏を非難したる者もあれど、是れ却つて其の親切なるを證するものとして、小生の感服する所に御座候。小生の一友人の語る所に依れば東京在住の一外人、屢々轉居の結果として、數葉の符箋あるはがきを受取り、大に日本郵便事務の親切なるに感激して、歸國の際、紀念として故國に携へ歸りたりと云ふ。小生等も十年以前に居住したる地より、廻はり廻はりて配達せらるゝ書狀を受取りし事一再ならず、常に感謝致し居り候。併し斯の如きは都會地にのみ見らるゝ所にして、村落に於ては、三等郵便局長なるものゝ不都合を聞知する事少なからず、十數年前の舊き例には候へども、或時小生東京に在りて病氣に罹り、人事不明に陷りたる際、友人より鄕里長崎縣の某村なる父に宛て發し呉れたる電信が、二十餘日後に配達されたる事あり(該電信は受信局より更に郵便に依りて配達せられたるもの)後歸鄕して調査せしに、件の三等郵便局長は政治などに奔走し、且つ大酒飮みの放埒者にて自ら事務を見ず、加之、配達夫に對する支給最も薄くして、之を虐使すること甚だしきが故に、配達の不確實なること、啻に二三の例に止まらずと聞けり。片田舍の三等局にては今日と雖も安心出來兼ぬる所も之れなしと言ふべからず、一層の御注意を促がし候。

更に一の新たなる註文は、重なる都會地と都會地との間に速達郵便を開始されたき事に候。例へば新聞の配達などは、汽車

發著の時間を計りて、極度まで遠隔の地に其の日の新聞が配達せらるゝ仕組と相成居り、此の一事は早速御研究の上、御實施あらんことを希望致し候。

電信は遺憾ながら頗る不充分に感じ候。近來の如き取扱ひ上の不都合は餘儀なき現象にして、一時的のものに存じ候べきも、小生は電信の大擴張即ち電線の大延長を希望して止まざるものに候。試みに東京近縣を旅行致し候ても、相應人口を有する村落にして、二里三里を行かざれば電信を發し得ざる所多く、遺憾千萬に候。小生の理想は三等局全部電信を取扱ふことに致したきも、夫れまでには行かずとも、今一層御擴張ありたきものに候。

電話完成に就ては既に田前遞相が其の案を立てられたる事なれば、違算なく御實行ありたく候。小生の考へにては、東京市に於ける電話は聊か濫設の傾きはなきや、其の一部は確かに一種の贅澤物たるの嫌ひ有之候。料理屋、待合、貸座敷、藝妓屋などの電話使用は、國家經濟上より見れば迷惑の話ながら、此等も營業なれば致し方なしとして、個人の所有にて、單に妻女の呉服註文や飲食物註文以外、さしたる必要なき者決して少からず、斯の如きは使用料の廉きに過ぐる結果にはあらざるべきか。故に現在にては度數制は不可なり、度數制は電話架設の完成したる後に於て實行すべし。

第一今日まで當局の不覺は、架設費を十五圓として放置したる事なり。元來架設料を十五圓と定めたるは、三十年前、政府が民間に奬勵して電話の普及に努めたる頃の事とか聞き及び候、然るに今日に至るまで之れを改めざりし當局の迂濶呆るゝの外なし。現に急設電話は三百圓にても申込み者雲集する有様ならずや。

電話交換手を遇するの方法に就ては大に考慮の餘地あるべし。電話交換の如き急激に神經を勞する仕事に從事する者は、其の疲勞を快復する方法に就て、醫師、心理學者等に於て綿密親切の研究をなし、電話局內に於て之れを實行するを要す。徒らに彼等の給料を增すとも決して能率を進むる道にあらず。

最後に御註文申上たきは、船舶管理令の運用其の宜しきを得るの一事なり。聞く所に依れば製鐵所の拂らふ鐵價は戰前に十倍し、此の如き鐵を以て建造せられたる船舶は、外國に賣却することに依りて利益を得べし雖も、內地の運輸業に從事せんには、運賃を十倍にせざれば引き合はずとは、往々當業者より聞く所の不平なり。商人の言ふ所、容易に信用し難しと雖も、斯くては運輸調節、物價調節の一手段として設けられたる船舶管理令も何等の效なきや明かなり。願くば充分調査の上、遺漏なきを期せられたし。申進めたき事多端なれども、今は唯だ一寸

思ひ浮べたる事のみに止め候。

若し夫れ閣下が今回五百萬圓を投げ出して從業員奬勵の資に充てられたるは、一般の歡迎喝采する所、其の使用方法に就て單に大綱を示し、各局長の運用に一任せられたる如き、流石は大塊居士の面目躍如として、禪機に悟入せるを見る。何卒此の調子にて萬事に當られたく、酸いも辛いも能く嚙み分けられたる老練の閣下に對し、小生等黄口の輩が申すにも及ばぬ事ながら、一言蛇足を加へ候、多罪々々

內田外相に與ふるの書

某外交通

一

子爵內田康哉閣下、閣下の外相就任は大分世評を買つた樣である、「非出兵論者、レニン同情者の閣下が出兵とレニン征伐が斷行せられた今日、外交の衝に當るのは、一大矛盾ではあるまい乎」と論ずるものがあり、「否な事情も大分當時と違つたから、出兵繼續其者は大した難問ではあるまいけれど、已に陸相に田中義一中將を擧げ、又た外交調査會を繼續して、寺內、後藤の兩前內閣員を新任した以上、原內閣の外交は餘程面倒で、種々紛糾する無きを得無いであらう、コウ言ふ事情を百も承知して飛び込んだ內田は冒險的獵官家だ」と說くものもある、或は「內田の事だから何か十分條件を附けただらう」と想像する者もある、我輩は原首相が閣下に十分の條件を附けしむる如き人とも想像せぬし、閣下が新政府外交の難關を解せぬ程に鈍な頭腦を持つて居るとも、又た其難關を知つて居乍ら猶且つ强盛な獵官慾から二つ返事で外相となつたとも考へ無い、寧ろ十分閣下に敬意を表して、閣下が世界の現局に鑑みた外交の重大なるを思ひ、一片報國の至誠、抑へんと欲して抑ふるを得ず、多少の難關を覺悟し乍ら「盡人事待天命」の決心で重職に當られたことと信ずるものである、彼の陸奥伯外相時代に原敬君と結んだ因緣、西園寺內閣外相としての政友會との接近の如きは、起立原因中の微小な分子に過ぎぬと思ふ。

於是乎、我輩は閣下に望を寄せ、其國家の爲めにも、閣下自身の爲めにも一大功業を樹てんことを熱望する、打ち明けて言ふと、閣下は之迄の處、何等特筆を値ゐする功業が無い、明治四十四年日米條約改正の功で子爵とはなられたけれど、其日米條約改正の誇りと稱せらるゝ舊條約第二條移民制限但書の削除は、全然「糊塗的」であつた、否な新條約條文の中から削除し

ても、之が附帶公文書で繼續せられて居るのだから、糊塗的とも言へぬ位であつた、又西園寺内閣の外相としても別段顯著な功業が無かつた、之は決して閣下を攻擊する譯では無い、加藤子、林子、石井子等、外交に依つて榮位に上れる人々の多くも之に愧しからぬ丈けの功業があるか疑はしい、併し我輩が玆に特に閣下に對し、此言をなすものは、閣下報國の至誠を信じ、且つ時恰かも重大の期たるを思ふて、閣下の奮勵を望むに外ならないのである。

然らば則ち我輩は何事を閣下に希望する乎、そは支那問題始め種々の重要問題があるのだけれど、玆に最要問題として一言し度いのは、講和會議及び之に對する準備である。

二

講和期接近は、最早や疑ひが無い、シエラダム君も指摘せる如く四箇年の戰爭で二百四十萬人の永久的損害を出し、又た國内では昨年七月議會多數派の平和決議以來平和熱日に昂進して居た所へ、今度勃牙利の降服で近東經營も、土耳其との聯絡も滅茶苦茶となつた獨逸は、遂に本年一月八日ウイルソン大統領宣明の十四原則を承認し休戰を請ふに至つたのである、無論今後種々難關があり、至急に運ば無いにもせよ、講和會議は結局は遠からず開會せられねばならぬと思はれる。

閣下よ、之に對して我輩は帝國側に於て此講和會議に望むの準備が出來て居るかを疑ふものである。

人或は言ふ、ウイルソン十四原則の第一は講和會議に於ける秘密外交排斥である、斯くの如き會議に望むに何の密策を弄することを要しやうと、之は無論である、我輩も秘密外交には大賛反對である、彼の十九世紀初年英墺兩國が敵國たりし佛蘭西と結んで露西亞、普魯西に反對する密約を結んだ如き、決して文明國の學ぶ可からざる所であらう、併し敵國との秘密協議若くは結托は武士道を重んずる大和民族として斷じて敢てす可からざる所であるにしても、同盟國間の打合せは最も必要な事件ではあるまい乎、已に打ち合せあり、協定が出來て居る場合にこそ、聯合國は講和會議に於て强硬に獨逸と爭ふことが出來るではあるまい乎、又維也納會議と言ひ、伯林會議と言ひ、其後の外交と言ひ、秘密分子が多く、比較的に公明だとの稱ある我が同盟邦英吉利さへも、伯林會議では土耳其其他との秘密協定があつた位であるから、今度多數邦國の大會議となつて見れば、誰もコウ言ふ事件無きことを保障し得るものは無いであらう、左れば我國の立場としては、問題も大分本場を離れた輕い問題であるから、同盟諸邦との間に完全な協定を得置くことが大切ではあるまい乎。

之も無理なこととは言はれぬ、又た聯合國側でも種々の先例が出來て居る、その一は伊太利である、伊太利と聯合國との間には、一九一五年アドリアチツク諸海島を始めダルマチア、北イストリア等を伊太利に附與するの約が出來て居た、其二は白耳義である、一九一六年二月英佛露三國が同國に對し「其獨立回復、領土回復、各種損害賠償を得せしむる保障、商業的回復を見せしむる爲め財政的援助を與ふる件」等を保障し、日伊兩國も此趣旨に賛成なるを言明したことは、衆人の知る如くである、此外に佛蘭西もアルサスロレーン回復の保障を得て居ると信ず可き理由がある、然らば則ち獨り我日本のみ、山東鐵道、膠州及び獨領マーシヤル諸島其他の問題に關して、何等かの了解を聯合國との間に成立せしめ置くことは、豈講和會議に對すの當然の準備ではあるまい乎。

三

無論、我輩は大隈、寺內兩內閣が此點に就て全然無爲であつたとは考へぬ、併しその活動が齎らした成果は果して滿足であつた乎、殊に昨年以來米國參戰し、支那も參戰したのである、我國民は毫も支那に異圖を抱くもので無く、日支親善を希望するもだが、それでも支那の參戰に依りて、膠州問題も、山東鐵道も、其奧地の鐵道線問題等も一層複雜の度を增加したことは拒否する譯には行かぬ、又た米國は我輩も最も尊敬する友國の一ではあるが、その國民の一部には比律賓、グアム、布哇を經て米國太平洋岸に達する聯絡問題を重視する關係から、日本に南洋諸島を獲得せしむるを以て、此聯絡を脅威するものある如く解釋して居るものがある、濠洲方面でも見當違いな對日本疑懼がある、蓋し米濠双方共に太平洋上から獨逸を驅逐することには贊成して居るやうだが、日本の南洋發展をば欣んで居無いことはドウも實際のやうである、之は日本の野心に對する馬鹿げた疑念だが、唯だ馬鹿々々しいと言つて放棄して置く譯には行かぬ。

閣下よ、之等問題につき聯合國間の打合を了して置くことは豈閣下――講和期接近の今日外相となつた閣下が進んで努力せらる可き所では無からう乎。

次ぎに閣下の注意を要するは、講和期に於ける我外交のオルガニゼーションであらうと思ふ。

蓋し歐洲に於ける講和會議の場合、歐洲諸國は近距離の事とて本國との交信上、非常の便宜を爲す、米國も太西洋海底電信(コムマーシヤル會社、ウエスターン、ユニオン會社等)八線あり、三四時間にて交信し得るのである、獨り日本は非常な遠隔の地にあるのみならず、往々交信中絶若くは遲延に惱まさるゝのである、從つて講和大使の責任も、仕事も一層重くなるのだ

から、その人選が頗る大切となるのである、又之に準じて外交機關の設備も一層大切となり、必要な情報を十分に蒐めることも大切となるだらう、知らず閣下は此點に於て如何なる成案かある、無論せめて聯合國協定が十分に出來て居れば、講和會議の難問も少いであらうが、その場合でも細目の如く見えて重大なる事項があるから、矢張り講和大使の人物も、情報機關も大切である、我等が閣下が此點に留意し、國家の大計を誤るなからんことを希望する、閣下も此希望に副ひ得てこそ、其難關多きを承知しつゝ、外相の地位に立たれた功能があると言へるのである。

以上は我が微衷を遠慮無く吐露したものである、書中不遜の點あらん乎、閣下江海の量、必らず之を寛恕せられんことを信じて疑はぬ、蓋し之れ草莽の士、亦國を愛ふの念、人後に落ちない爲め起つた飛沫に過ぎ無いからである。

高橋藏相の財政意見を叱正す

法學博士　堀江歸一

吾輩は高橋藏相に向つて、特に希望し、又は註文す可き何ものをも有せず、强ひて之を求むれば、氏が速に藏相の職を辭退して、其地位を他の適任者に讓るの一事あるのみ。蓋し我國今日の財政たる、第一前內閣の財政策放漫を極めたる爲めに、種々の方面に幾多の破綻を惹起せんとし、之を收拾すること容易ならず、第二戰爭は今や漸く其終熄期に入らんとし、我國の經濟社會亦反動的趨勢を免かれざるの際、確乎たる經濟上の政策を樹立して、過渡期に於ける變動を寡少ならしむるの必要あり、第三陸軍當局者は歐洲戰爭の結末に伴ふ狀況の不定なる今日、早くも陸軍擴張の要求を試みんとし、財政當局者にして之を承認せんか、歲計の均衡を維持するに、非常の困難を感ぜざるを得ず。數へ來れば近き將來に於て、我國財政の局面に幾多波瀾の重疊し來る可きは明白の事實にして、殆ど財政の危機到來するの遠きに非ざるを思はしむるものあり。此秋に於て財政を處理して、國運の將來を安泰ならしむるの策を講ずるが如き、非凡の手腕ある財政家に非ざれば、到底之を爲す能はず。斯る財政家は我國今日の狀況に於て、之を求むるに難しとすれば、吾輩は姑く一歩を讓り、健全なる知識を有する人物が局に當り、輿論の歸嚮する所に據て、財政策を樹立し、以て斯る難關を踰越することを望まざるを得ず。吾輩は高橋氏に一面の識を有せず、其人物性行の如き、何等之を明にせずと雖も、氏が決して

非凡の財政家に非ざることに就ては、種々の情報に基きて、之を斷定するに苦しまず、固より平凡なる財政家又は殆ど財政家を以て許す可からざる人物が我國に於て屢々財政の當局者たる地位を汚したるの事實は從來多々あるを以て、高橋氏が財政家として非凡なる何ものをも有せずして、藏相の職に就きたるは、必ずしも深く咎む可き所に非ず、唯吾輩が高橋氏の藏相たることに對して、恐るゝは氏が經濟上の常識を有せず、輿論を想察するの明を備へず、國民的利害を判別するの知慮を懷かず、漫に自家一流の偏見を固執して、之を實際政策に應用せんとするの一事是れなり。

前内閣が通貨政策の方針を誤まり、通貨の膨脹をして今日の甚だしきに至らしめたるの秕政に就ては、何人も之を認めて、疑を挾む者なし。現に前内閣の當局者亦其末路に臨んで大藏省をして發行せしめたる意見書に於ては、明に通貨膨脹の餘弊を承認し、其膨脹を制する爲めに、對外放資に力を致したることを擧げ、唯急劇に通貨を收縮する場合に、輸出貿易に不利の影響を及ぼすことを憂慮したる旨を述べて、以て辯解を試みんとしたり。斯る緩言に等しき意見書が何等識者をして首肯せしむるに足らざるは、論を俟たずと雖も、尚ほ當局者が通貨の膨脹に伴ふ弊害を認め、之を制せんとしたるは甚だ殊勝の次第にして、狗子に佛性の存する類なりとす可きか。然るに高橋藏相に至つては、前内閣當局者が通貨政策に就て有したる貧弱なる知識すら懷かず、依然通貨の增減と物價の騰落と相關する所なしと云ふ僻說を維持せんとするものゝ如し。高橋氏は平生の饒舌に似ず、内閣に入りてより其意見を發表すること極めて少なきを以て、氏が當今の財政經濟に對して如何なる觀察を下し、又如何なる政策を實際に行はんとするものなるや、明ならずと雖も、二三新聞紙に散見したる氏の財政意見若しくは十月二十一日工業倶樂部に於ける演說筆記に據れば、氏が通貨問題に就て、偏見を有すること依然として曩日の如し。然らば氏の藏相たる間、吾人は政府が通貨の膨脹を制し、又は之を收縮して、一般物價を調節し、國民生活の安易を謀るが如き政策を施すが如き、遂に之を望む能はざるは勿論、氏にして他の掣肘を蒙ることなく、自由に自家の所信を斷行せんか、或は生産資金の供給增加を口實とし、或は經濟社會の救濟を理由とし、機會の生ずる每に、通貨の膨脹を惹起す可き政策を講じて、憚らざるものと認めざる可からず。斯の如くして今日以上に一般物價を騰貴せしむるが如き、我國民生活を脅威するの甚だしきものにして、國民が一大藏大臣の偏見の犧牲に供せらるゝは、吾人の忍ぶ能はざる所なり。

高橋氏は曩日新聞紙に揭げたる意見に於て、今日物價の騰貴に苦しむ者は國民の一部にして、定額の俸給を受けて、生活を營む階級に止まり、他の產業に從事する多數の人民は寧ろ利益しつゝあるを以て、物價騰貴に對する方策の如き、單に一部人民の俸給を增加すれば、容易に解決するを得べきことを論じたり。吾輩は此放言に接して、氏の頭腦に故障の存するものなきや否やを疑ひ、實は今日に至るまで、此疑を解く能はざるなり。物價騰貴、之に伴ふ生活難に苦しみつゝある者の俸給に依て生活する者に外ならざるは、高橋氏の言の如く、又增俸は此困難を救濟する唯一の道なりと雖も、總て俸給に衣食する者に向つて、物價騰貴と同一の程度に於て、俸給を增加するが如き、果して實行し得る所なりや否や。所謂成金會社の如き、利益の豐富なるものに於ては、能く之を爲すを得べく、又實際に之を爲しつゝありと雖も、其他のものに至つては、同じく實業の一部を以て目せられながら、到底然るを得る能はず。況や商工業に關係なき事業に於てをや。政府が昨年來官吏の增俸を企てながら、其爲す所は二割增三割增と云ふが如き、些細の程度に止まり、物價騰貴の勢の急速なるに對して、步調を失するの一事に徵するも、增俸に依て、生活難を除却せんとするが如き、無責任者流の放論に過ぎざるのみ。高橋氏たるもの、責任ある地位に居りて、尙ほ曩日の放論を繰返するの勇氣ありや否や、若しも勇氣ありとすれば、匹夫の猪勇に過ぎざるのみ。

物價の騰貴に對して、產業に從事する者が何れも有利なりとしつゝありと云ふ意見も亦事實を誤まれる嫌なき能はず。物價が騰貴し、而して騰貴の勢の繼續する事の明白なる場合には、產業に從事する者が有利なる地位に居ること論を俟たずと雖も今や物價の騰貴は殆ど其頂點に達し、此以上に之を騰貴せしむるが如き、人力を以て容易に企つる能はず、將來に於ては其反動として下落を來すことある可く、少なくとも一進一退を免かれざるに於ては、當業者は前途に就て、恟々として安んずる能はざるものありとす可く、斯る場合には、寧ろ經濟社會を警戒し急劇の反動來を廻避するの方策を講ずるこそ、當局者の任務とす可き所なるに、此點に意を致さず、益々物價騰貴の勢を煽揚せんか、他日反動の恐る可きものあるや之を想像するに難からざるなり。

前內閣が輸出貿易の獎勵を急とし、爲替銀行に資金を供給し一方に正貨を其流入する勢に任せ、相率ひて通貨の膨脹を促したるは、吾人の眼前に橫はる事實なり。而して今や貿易の趨勢は聊か一變し、輸出超過の旺盛なること、必ずしも舊の如く爲らざる一方に、米國は絹織物の製造に制限を施し、爲めに我

國の生絲輸出に一大打撃の加はるものあらんとす。歐洲戰爭が近き將來に終熄し、米國亦斯る制限を解除すること速なれば、甚だ可なり。戰爭明年に及んで終熄せず、米國が不要事業に對する束縛益々急なるに至らんか、我國の對米輸出貿易は頓挫して、從來戰時經濟の下に、我國の收め得たる利益の如き、殆ど消散し去るを免かれず。又戰爭終熄して、斯る制限の解除せられたる曉に於ても、我國が戰時に於けると同樣の利益を輸出貿易に於て收むるを得るや否や、明ならず、一方に我國が戰時中立諸國又は殖民地に擴張したる新市場は如何にして之を維持す可きか、內國に生產業を振興し、內國に於ける物資の供給を豐富ならしむるには、如何なる政策を實行す可きか、前內閣の輸出獎勵策たる、苟も內國に存在する物資にして、海外に輸出するを得るものは、殆ど之を驅り盡して、以て海外に輸出し、內國の生產之に及ばずして、物資の供給を不足せしめたるの觀あるを免かれず。戰爭終熄して、國際間に於ける經濟上の關係の舊に復するの日に於ては、自ら輸入貿易の增進に依て、內國物資の供給を豐富ならしむるを得べしと雖も、此時の來る以前に、其豐富を期するの道なかる可からず。講和の到來は我國經濟社會の恐怖を以て迎ふる所なり。此事の果して道理ありや否やは別問題とし、經濟社會の講和を恐るゝこと斯の如くなる場合に之を自然に放任せんか、如何なる性狀の經濟社會に暴露するに至るや、未だ知る可からず。株式市價の低落は啻に投機業者を苦しむるに止まらず、資金の融通を梗塞し、新事業の發起を妨碍す可く、更に外國物資の輸入は新設代用工業の存立を脅すに至る可く、之に對して財政當局者が如何なる方策を施して、恐怖心を除却し、經濟社會の安全を期するや、一個の問題とせざる可からず。

吾儕が机上に於て卒然思索したる所を以てするも、近き將來に發生す可き經濟上の問題の饒多にして、其複雜なることと上記の如し。是等を解決して、我國經濟的運命の安全を謀るには、知識の豐富なる、判斷の明快なる、而して思慮の周密なる財政家に非ざれば、到底、其任を果す能はず。何人が果して是等の資格を具備する人なるか、吾輩の寡聞なる、之を知る能はずと雖も、少なくとも高橋氏が是等資格の一だも備へざるの人なることは、氏の從來の言論に依て、之を推すに苦しまず、氏にして自ら知るの明あらんか、宜しく大藏大臣の職を辭す可きのみ。吾輩は高橋氏に向つて、辭職を求むるの外に、何等言ふ可き所を知らざるなり。殊に陸軍に於て要求せんとする軍團組織に伴ふ經費なるものが如何なる形態を以て、將來の歲計に現出せんとするや、之を知らずと雖も、軍事費として、剩餘金の大部分

支辨せられ、經濟社會に於ける反動來の結果として、租稅專賣收益に減收を來し、而して金融市場の變調國債の募集を許さざるが如き時に於て、軍國組織に就て、最も多額の經費を支辨せざる可からざる秋に際會し、財政を苦しむるが如き、吾人の想像に上る所にして、此般の難關に處して、高橋氏の手腕は果して如何ある可きや。國民は帝國財政の處理を氏に託して、何等憂うるものなしとせざるや否や、吾輩の問はんとする所なり。

高橋氏の從來財政上に懷抱したる積極政策なるものが政友會に於て歡迎せられたるは、要するに其の政友會內に瀰蔓する利權獲得運動に便利なるが故に外ならず。氏か世間一般の期待に反きて、藏相の職に就きたるが如き、政友會內の空氣の然らしめたるものに外ならざる可し。氏が今日の時勢に於て臆面もなく、積極政策を實行して、寺內內閣以上に財政に放漫なる處置を加へんとするや否や、之を知らずと雖も、氏の如き常識に缺けたる人物の爲す所は殆ど之を窺知する能はず、況や政友會の利權獲得熱の之を促すものあるに於てをや。此點に就ても國民の警戒を要する所大ならざるを得ず。無能の藏相無識の藏相非常識の藏相は尙ほ之を忍ぶ可し。黨利に偏して、國民の利害を忘るゝ藏相に至つては、遂に之を恕する能はざるなり。

曩に原內閣の組織せらるゝや、世人は之を呼んで、平民內閣と云へり。或は政友會內の小策士が新內閣に對する世人の好感を繫がんが爲めに、斯る稱呼を弄するものなるやを知らずと雖も、單に閣員の多數が無爵者なるの故を以て、平民內閣と云ふが如き、當らざるの言とせざる可からざるのみならず、高橋氏の如き假令ひ其爵位を奉還し、一個の平民と爲りて、大藏大臣の職に就けりとするも、所謂平民內閣の平民藏相として、廣く四民の友と爲るを得るや否や、甚だ疑はしとす可し。英國に於てロイド、ヂョージ氏、財政改革を主義として、豫算案を編製するや、氏自ら之を平民の豫算(ピープルス、バヂエット)と稱したり。蓋し氏の如き人民に對して熱烈なる同情を有し、國民生活の事情を知悉し、國民の利益を增進するに就て、鞏固なる意思を懷くの人にして、始めて平民豫算の編製者たるを得べく、氏が內閣員として數年を經たる後に於て、財産の特に數ふ可きものを所有せざりしが如き、其心事の高潔なるを語るものならずや。高橋氏は果して平民內閣の平民藏相を以て、自任するものなりや否や、吾輩の相關する所に非ずと雖も、假初にも斯く自任するものならんか、自ら僭するの甚だしきを咎めざるを得ず。氏の編製する豫算が平民豫算たらざるは、尙ほ可なり、其富豪豫算たり、軍閥豫算たり、政黨豫算たるの日に於て、國民の指彈を招く可きや、吾輩の言說を要せざる所なり。

中央公論社は余に求むるに、高橋藏相に呈するの書を起草することを以てしたり。余不敏と雖も、閣員に向つて特に意見を陳述して、其採擇を求むるの要を認めず。公論社の所望に反くの恐ありと雖も、高橋氏の財政意見を叱正するの文を以て求むる所に應じたり。

加藤海相足下

鵜崎鷺城

一

我輩の知れる臨時外交調査會員の某氏は、足下の頭腦の冷靜明晳にして、國防計畫に對する識見、大局を見るの明あるを稱し、少くも前内閣の大臣中倶に談ずるに足るべき第一人とまで激賞してゐた。某氏は容易に人に許さず、大概の人間をボロクソに貶すを以て有名な人である。其の某氏が口を極めて推稱する所を見れば、略々足下の如何なる人物であるかを知ることが出來る。我輩の聞くところによれば、從來外交調査會に於ける足下の言議は常に傾聽せられ、之れに反して前陸相大島中將の意見は餘り重きを爲さず、一は頭が好く一は頭が惡いと云ふので、一つの對照(コントラスト)を爲してゐたのは事實である。

獨り某氏ならず、原敬氏の如きも足下を頼もしいと思つた一人であると云ふから、自然新内閣に留任を餘儀なくさるゝに至つたのである。有體に云へば今まで世間には、唯だ海軍大將加藤友三郎を知つて、足下が海相として何程の價値あるかを知るものが尠かつた。而も今日は海相として實質を認めらるゝに至り、少くも海軍部内に於ては海軍充實計畫の足下に俟つ所多きを思ふて、其の再任を歡迎してゐる。蓋し海軍は陸軍に比して人材に富むを誇り、他に出でゝ海相たるもの絶無と云ふにあらざるも、今日足下が最も適任なるを認められ、足下を措いて何人を任命すべきかと云ふ問題になれば、種々の事情に於て面倒がある。假りに何人かを詮衡しても、恐らく海相として足下の如く一般的に好評を以て迎へられることは困難であらう。尤も純理論から云へば足下の留任には多少議すべき所がある。

海軍大臣も陸軍大臣も等しく國務大臣であつて、凡ての法律勅令其の他國務に關する詔勅に副署して其の責に任ずとある以上、當然憲法の支配を受くべき道理である。而も實際に於ては内閣の聯帶責任以外に立つて、恰も治外法權と云ふ所がある。從來内閣更迭に際して次の内閣に留つたものは少くない。古い所では第一伊藤内閣の海相西郷が次の松方内閣に、第二伊藤内

閣の陸相桂が山縣内閣及び松隈内閣に、桂内閣の陸相寺内が西園寺内閣に各留任したるが如き、又た近くは第一西園寺内閣の海相齋藤實が、第二桂内閣、第二西園寺内閣、第三桂内閣及び山本内閣の四代に歴仕したるが如き例がある。足下は八代中將が大浦問題で加藤外相と共に辭職した後を承け、大隈内閣の末期に入閣して以來今日に及んだのであるから、通じて三代の内閣に仕へたことになり、對手變つても主は變らぬと云ふ所がある。斯くては國務大臣の聯帶責任は有名無實になつて、憲法上の理義に反した事であるが、實際論から云へば今までにも其の例があるから、差支へ無いとして、當人も世間も怪まず、此の變則な慣例は却て詮衡の面倒が無い丈け内閣組織に便なりとする所がある。少くも原首相は足下の留任に依て海相を物色するの面倒を免れ、特に足下の如き適材を留任せしめたと云ふことは確に原氏の手柄である。

唯だ然し足下の留任は、海軍計畫に關して原首相が何等かの希望を容れた結果であるか、若くは單に首相の懇望に餘儀なくされたと云ふに止まるのであるか、其の邊の仔細は得て知る所で無いが、足下の性格に徵すれば留任にはそれ相當の理由があるに相違なく、唯だ原首相が君に惚れたから殘つて與れと云はれた丈けで、左樣然らばと殘るような無意味な足下では無いと思ふ。理由と云つた所で所管以外に無く、無論海軍計畫を實行する上に於て足下自ら局に當るを便利なりとしたからでは無からうか。

二

初め足下が清浦内閣の海相たるべき交渉を受けたときは、第一艦隊司令官であつたと思ふが、當時の政局は海軍補充問題に關して面倒なイキサツがあつた。是れより先き山本内閣の提案した海軍補充計畫は例の海軍事件の爲めに累せられて豫算不成立となつた爲めに、海軍側としては勢ひ、補充計畫の保障を得んとする道理である。足下の條件は當然のものであつたけれども、清浦が臨時議會の現勢を悲觀して保障を與ふるに躊躇したので、足下は到底海軍補充の成立を期じ難いと見て入閣を非認した。清浦内閣の流産は他にいろ／＼原因があつたけれども、實は足下の入閣非認でギャフンと參つたのである。然るに八代中將の海相となるに及んで、海軍補充費は臨時議會を通過して漸く海軍の面目が立ち、更に第二の計畫に移らうとするとき、足下は八代に代つて入閣したのである。

足下が大隈内閣の海相を諾したのは無論海軍充實を急務として實行を期する爲めである。是れより先き前海相も補充計畫を立てたが、當時一方に增師案といふ大因緣附の難物を控へ、特

に海軍よりも陸軍の勢力が强かつたので、纒まつた計畫を延すの外なかつたが、足下が海相の任に就いた後は增師問題も解決し、特に海軍部內の廓淸を行ふて一般の感情が變化しつゝあつたから、足下が補充計畫に指を染めるには比較的都合の好い時であつた。足下が海相の任に就いて以來立てた計畫は大隈內閣時代に於ける八四艦隊と寺內內閣時代卽ち前議會に出した八六艦隊である。此の八四艦隊は當局者の國防見地から云へば滿足すべきもので無く、財政の事情の爲めに制せられた海軍國防計畫の最小限度に過ぎなかつた。是れは八代時代からチラホラ噂があつたが口を切つたのは足下である。次の八六艦隊は大正十二年に完成せらるべきもので幾分か國防能力を加へたことになり、此の計畫の爲めに新增稅となつて現はれたものであるが、然し日本の海軍力といふ上から論ずれば、不徹底にして姑息なる計畫である。それ故に議會に於ても其の姑息を非難する議論が各派から出た。足下としては是れ丈けを物にするについても最善の努力を費したのであらうが、果して此の程度の計畫で何日何時事變が起つても制海權を日本が得られると安心することが出來るだらうか。

加藤海相足下、歷代の政府は陸軍を主とし海軍を從として國防計畫を立てた。少くも海軍よりも陸軍の主張が多く通つた形があるので、外國には陸主海從のやうに見えたのである。而も世界の大勢から云ふも、帝國の地理的立場から云ふも、海主陸從でなければならぬことになつた。太平洋問題と云へば極めて廣汎な問題であるが、太平洋に於ける日本の地位を優越ならしむる所より云へば、第一の問題は此の方面に於ける國防を如何にするかと云ふことになり、國防と云へば海軍を如何にするかと云ふ問題に歸著する。軍備は戰爭の場合と平和の場合の兩方面から硏究せねばならぬが、日本が經濟的に對外發展する上から云ふも、相當の海軍充實を必要とするは、獨り國防當局者のみならず、少くも日本の位置と世界の大勢とを知る程のものは理解してゐる。然るに我が海軍力の實際を顧みるに、必ずしも貧弱とは云へぬけれども、國防上力强いものであるとは認められ無い。新に世界の海軍が製艦艇技術を競ふて日も維れ足らざることは、著々事實の示す所である。昨年精銳無比と稱せられた軍艦が今年は舊式に屬し、本年主力第一と認められたものも明年に至れば第二流第三流に落ち、殆んど滿足してゐる暇が無いといふ有樣である。帝國海軍の補充は最も緊急なりと云ふ足下に從へば、八四艦隊は無論理想で無く、八四が八六に改つたからとて恐らく是れも理想的のものでは無からう。然らば如何なる程度に海軍の勢力を維持すれば好いかと云ふが當面の問題であ

る。

三

海相足下、凡そ國防計畫には一つの標準が無ければならぬ。陸軍にせよ海軍にせよ謂ゆる假想敵國を有するを普通とする。或は戰略單位から艦隊を建造するとの議論も立たぬでは無いが、陸軍は兎に角四面環海の日本――特に東洋の海軍國として雄視する日本が何の標準も假想敵國も無しに艦艇を造ると云ふは、理由の根柢が少しく薄弱に過ぐ。固より海軍當局者としては何國を假想敵國とするが故に擴張の必要ありなどゝ露骨に云ふの外交上憚る所があるけれども、そこは言はず語らずの中に對象とべすきものを定むべきである。

目標を何に置くかとの問題に關し、從來或者は米國若くは露國をサツゼストし、又た或者は何國の海軍をも標準とせずとて無假想敵主義を云々し、ハツキリした所が無い。然し從來陸軍が虎の卷のようにしてゐた二十五箇師團計畫が露國の復讐戰に備ふると云ふ理由の既に消滅したと共に、海軍が露國を標準とする理由も全く無意味に歸してゐる。海軍の方では對外關係と對陸軍關係とから假想敵を明言するを避けたものゝ、内實は×國の海軍に標準を取つてゐるものと推すべき理由がある。海軍年來の主張たる八八艦隊も單に、兵術上の見地のみよりしたもので無いことは明かである。現に故秋山中將は×國を敵國と假想して、我が海軍力を守勢の位置から打算せば彼の三に對し二の力が我れにあれば對抗するに堪へるといひ、又た海軍當局の一人は嘗て×の戰艦二十一隻に對し、我の十二隻を以てせば勝算ありと云つたことがあると記臆して居る。成程日本と×國は共に太平洋の二大勢力であつて、而も兩者の利害は必ずしも一致すべきもので無い。今日は歐洲戰爭の爲めに協同の働を爲し、特に××宣言までしたから、ハースト一派の新聞も日本に對して毒筆を愼み、表面何等の蟠りも無いように見えるが、腹の中には鬼も棲めば蛇も住んでゐるかも知れぬ。少くも双互に何等かの疑惑と危惧とが心の奥に潜んで居りはせぬか。

吾人は今日の場合、×國に就て無遠慮な批評を加へることを避ける。出來得る限り彼我兩國は外交の力を以て親善平和の關係を長く保持するように務めたいと思ふ。然し國際關係を嚴密なる意味から云へば利害問題が主となり、利害が或る程度まで一致すれば結附くし、一たび利害相反すれば昨日の味方も今日の敵となるのが常で、個人と個人の間のように道義の力が國と國との間を律してゐないから國際聯盟には恒久不易が無いものと見るべきである。今日世界の爲めに民主主義を說き、一切の美德情操の結晶の如く云ふ國も、多量の商賣氣から利害の算

盤を叛いてゐるのである。普露西の軍國主義を攻撃する國其物からして軍國主義的色彩を帶びんとしつゝあるでは無いか。近年×國が大規模の海軍擴張を實行しつゝあるは日本に備ふる爲めであるか何うか知らぬが、×國の軍備擴張論の中には、日本に對する猜疑と警戒とが含まれ、少くも日本が突飛な國防計畫の出汁に使はれたのは蔽ふべからざる事實である。『ノース・アメリカン・レヴュー』主筆ジョーヂ・ハーヴェー氏の如きは日本の恐るべき國民なるを說いて海上武力の充實を鼓吹し、又た『アウトルック』の如きは『若し吾人が一等級の戰鬪艦隊を建造するにあらざれば、吾人の利害を無視せんとする國民に對して、吾人の權利を支持するを得ず』などゝ云つて暗に日本の爲めに軍備を說いてゐる。×國の海軍が何を目標とし、又た如何なる勢力のものであるかは局外者に比して一層の專門的知識を有する足下の既に充分知る所であらうと思ふ。

四

從來軍備と云へば陸が主位になつて海は從の地位に置かれ、何日も陸軍に上手を行かれた形があるのは、陸軍の勢力が海軍を凌駕し、陸の力の長に及ばなかつたことを反映してゐる。少くも海軍は陸軍に遠慮し、當然の主張も強硬に押通し得なかつたと云ふ所がある。現に海軍に氣力の足らなかつた證據には、陸軍の爲めに牽せられて計畫が頓挫勝ちであつた。然し最早今日は陸軍のみが得手勝手をすることが許されなくなつた。是れは海軍の氣力が強くなつたと云ふよりも、時勢が是れまでの如く海軍を陸軍の副物扱ひすることが出來なくなつた結果である。即ち海主陸從でなければならぬ事になつたからである。

前にも述た如く最早今日は日本の陸軍から露國といふ競爭對手が消滅し、さりとて支那を對手の計畫を立てるは猶更意味を爲さぬ。と言つて獨逸を陸軍擴張の理由とするのも薄弱である。米國に對して大陸軍を動かすと云ふことは議論にならぬ。差當り陸軍の勢力を算定すべき有力なる目標國が無いとすれば日本の國防は自ら海軍を如何にするかと云ふ結論に到達する道理である。それ故に國防充實といふ語の中には陸軍よりも海軍が多くの部分を占めてゐる。さりとて吾人は陸軍を不必要とするもので無いが、陸軍の必要以上に海軍が必要と云ふことになる。そこで日本が假りに米國の海軍を標準に取るとして、對等の競爭をして行けるかと云ふに、それは到底出來ない相談である。米國は殆んど無盡藏とも云ふべき金を以てドシ〳〵軍艦を製造する能力があるが、日本は第一それ丈けの金が無い。強いて競爭する日には國家は破產する。國は破產しても軍艦さへ作れば好ひとするは、身分不相應な家を建てゝ飲まず食はずに居

るのと同じで、是れでは眞に國防の理義に副はない。單に理想論から云へば八八でも充分とは出來ぬ。然し無い袖は振られぬとすれば財政力の許す範圍に於て、勢力を維持するに足るべき有利なる標準を立てゝ計畫を進めるより外に差當り手段は無いのである。

聞く所によれば足下は是れに關して確たる定見を有すとの事である。縱令ひ×國を假想敵國と見做しても、足下は消極的の標準を立てゝ之れに對抗し得ると考へてゐるさうである。事は多く軍機の秘密に屬するので、足下はまだ何人にも說明ぜず、外交調査會員にすら其の一端を漏らさないさうである。然し海軍充實の根本方針たる八八艦隊案は今日に於て變る所無かるべく、足下の考も結局は八八の範圍に於て海軍力を有利に働かさうと云ふにありはせぬか。

海相足下、從來國防計畫に累を及ぼしたものは何であるかと云ふに、薩長の權力爭ひが根本になつて陸軍と海軍が無意味な競爭をしたことである。其の結果は陸軍は陸軍、海軍は海軍といふ風に互ひに無けなしの豫算を奪ひ合ひ、海軍の方で充實計畫を立つれば陸軍でも擴張を策して敗けまいとする。そこで姑息なる均衡論が起り、鳥の兩翼車の兩輪などといふ不意味な語が口にせられたのである。從來增稅と云へば大概軍備問題の爲めであつて、多年國民に苦痛を與へたのみならず、歷代の內閣も一番此の問題に頭を惱まし、經濟上にも惡い影響を及ぼしてゐる。斯くの如く勢力爭ひが元になつての國防計畫であるから、陸軍には陸軍の計畫があり、海軍には海軍の計畫があつて、二者を通じて一貫した方針も無ければ統一も無い。而して此の弊は今猶ほ存し、現に昨年足下の海軍充實が容れられると本年田中新陸相は陸軍充實を要求せんとするやに傳へられる。眞に統一ある立派な計畫であれば、大した面倒も起らずに財政上の折合ひが附くし、國民も國防即ち國の存立の爲めに是非是れ丈けの兵備が必要であると云ふならば、脊に腹は換へられぬから多少の痛苦を忍んでも經費を負擔するが、唯だ勢力競爭の爲めに犧牲になるのは堪へ得る所で無い。要するに今迄の軍事當局者には國防上の定見と誠實なる精神とを缺いたから、自然擴張の理由が國民の頭に徹底しないのである。

五

足下は海相として國防を策するに當り、誠意が無いとは云はぬ。少くも國防上の理解と熱心とは確かに認められ、議會に於ける說明にも誤魔化しが無いようである。足下は現在の充實程度を以て滿足せず、財政上可能的の程度に我慢してゐるのだらう。固より國防には絕對の安心と云ふことは何の國にも無い

が、或に程度の安心が無ければならぬ。陸軍の計畫如何は未だ分らぬが、若し今軍團編制を行はんと云ふならば、是れは戰時に於ても爲し得られ、必ずしも平時に限らぬ。絶對必要のものは已むを得ぬとして、陸軍の輪廓を更に大きくするような計畫などは此の際見合せて、爾ういふ金を海軍に向けるのが帝國の國防上より多く必要であらうと考へる。

海軍は山本權兵衛去て以來、外に對して海軍を代表し、内を制馭する勢力家が無くなつたとし、足下ではまだそれ丈けの威望が無いから、國防上の正當なる見地より海軍の主張を貫くの力に乏しいと云ふものがある。成程足下は權兵衛に代つて海軍を自由にする程の大勢力も無ければ、外に對して大して睨みの利く方では無いかも知れぬ。然し足下は今日の海軍に是非缺くべからざる立役者である。從來足下は山本一派と相善く、山本の海相たりしとき、軍事課長及び教育第一部長を勤め、齋藤實が次官から大臣に進んだとき、假令ひ權兵衛の意、財部を次官に任ずるまでの中繼たりしにせよ、足下は彼の聲掛りに依て海軍次官となり、次いで呉鎭守府長官に進んで、先輩の出羽、瓜生等と位置を同じくするに至つた。山本は足下が日清戰爭中、吉野の砲術長として處置の好かつたことを恒に激賞し、其の大に用ゆるに足るべきを豫てより風鑑してゐた。それ故に權兵衛に引立てられた跡はあるにせよ、足下は權兵衛閥の色彩濃厚ならず、特に足下の淸廉なる、一時權兵衛一味は一齊に世間から疑惑の目を以て見られたに拘らず、誰れ一人足下を疑ふものは無かつた。

足下の海軍に於ける閲歴から云へば、極めて順調に進んだ倖運児である。形貌風采に武人的威嚴が無いけれども、頭が非常に冷靜で判斷力に富んでゐるから、如何程面倒な事件に處しても熱せず惑はず、恰も節々双を迎へて斷つが如く、著々と物を捌ひて行く。酒も可也飲むが、幾ら飲んでも平氣で、酔へば酔ふ程顔が蒼くなつて益々沈着を加へる。足下は、初瀬艦長としても日本海々戰に於ける東郷艦隊の參謀長としても、海軍次官としても、呉鎭守府司令長官としても、第一艦隊司令長官としても、又た海軍大臣としても、此の持前の冷靜と沈着と明敏とが事毎に顯はれ、武人肌の中に文治的の所がある。或者は足下を以て他の立てた計畫を克明に實行するも、自ら發案して仕事するの人でないと云ふものがあるが、少くも所管内の事については計畫力も相當にある。足下の天分は艦隊の長官に向くと共に軍政家にも適してゐる。唯だ餘りに冷靜で常識的であるから、無愛相で派手な所がなく、八代中將のような芝居氣は少しも無い。其處に亦た足下の特色がある。

海相足下、海軍充實は種々の事情があつて容易で無い丈け、足下の苦心も尋常で無いと思ふ。然し國防の局に當る足下としては誠意と決心を以て最善を盡すべきである。理想としてはそれ以上のものがあるにせよ、少くも八八艦隊が海軍の標準勢力にして、帝國の國防上是非必要であると云ふならば、之れが解決に骨折るべきである。十二年迄の繼續事業たる八六艦隊を變更して八八に手を附けても不可能の事であるまいと思ふ。足下が新内閣に留任したるは足下の海相たるを必要とするに出で、海相として留任したるからには海軍充實問題に關して國民を首肯せしめるようにして貰ひたい。是れ國民の要求にして又た足下の責任ではあるまいか。

原司法大臣に與ふる書

「法律新聞」主筆　安達元之助

（一）

原首相に對して原司法大臣足下と云ふことは、何となく變な感じがする、然し事實に於て法相は首相の兼任するところとなつて居るのみならず、原首相も司法省法學校の三年生であつた以上、法律に關しては滿更の素人でない筈である、依りて謹むで原司法大臣に向つて一書を呈する次第である。

法相の兼任と云ふことは、歴代の内閣構成の上よりしても珍らしいことである、ソレに政友會及び政友會系には、必ずしも司法大臣の適材に乏しくない、元田肇、小川平吉、小山溫、鵜澤總明の數氏を會内に有し、岡野敬次郎、倉富勇三郎、石渡敏一の數氏を會外に有して居る、然るに原氏が之を拔擢しなかつたのは、如何なる理由であらうか、傳ふるところに依れば、原氏當初の意向は小川氏にあつたらしい、然るに之れには同年度大學卒業の鈴木次官の反對ありて、原氏は一先づ手を引き、更に鈴木次官の親分である平沼檢事總長に交渉した、平沼氏は事實上に於て司法部の支配者であり、且つ閑散にして終身官、親任官である大審院長の地位が眼前にある、政治渦中に投ずることは、自ら好まざるところであらう、唯だ表面は未濟の懸案あるの故を以て辭退したとのことである、更に平沼氏の身代りの意味に於て鈴木次官陞進を企てたが、それは明哲保身の術を知つて居る鈴木氏の承諾を得ることが出來なかつた、結局は原首相の兼任と云ふことに終はつたのである、多年國民の怨恨を買ひつゝありし原内閣が、意外の好評を博したことも、無爵首相、政黨政治、平民内閣であるからだとするならば、民權に重大

の關係ある司法大臣の專任者を得なかつたことは、原首相の一大失策と云はねばならぬ、況むや之を自黨の蘊材より擢用することをなさずして、他に求めて然かも之を得ざりしが如き、吾々の遺憾千萬とするところである、唯だ眞實の問題は原內閣が司法部を如何に觀るかにある、司法省を通して如何に國民の法律生活、權利生活、乃至は其自由、其思想を保護せむとするかにある、吾人は此意味に於て原內閣の司法大臣に望むところ多大ならざるを得ざる次第であるが、今は暫らく其二三を提示するに止めて置く。

(二)

原內閣の司法大臣に向つて第一に希望するところは、司法部の官僚思想、閥族思想を一掃することである、一種の型に囚はれて居る官僚的氣分は、固より司法部の專有でない、然かも他の方面に於ては、其弊が漸次に芟除せられて居るにも拘はらず、司法部は依然として凝滯して居る、吾々は司法部に於ける八年生と帝大派との軋轢や、京大學士と東大學士の內部爭鬪や、若くは官學派と私學派との反目やを叙述するの煩に堪へない、此等の事柄は或意味よりすれば小なる問題である、唯だ全體を通ずる司法部の官僚臭味、換言すれば法令の解釋を精神的に觀察すること能はざること、事件事實を客觀視すること能はずして、法令の適用の爲めに事實を假造せむとする習癖、强ゐて國民を奴隸扱ひし若くは敵視せむとする態度、殊更に社會と離脫して實の生活に徹底せざること等は、速かに之を改めて貰はねばならぬ、司法部の人々は餘りに理解せざる唯我獨尊を持して居る、法律を背景としたる自己の權威を以て、自己本來の力と誤信し居る、辯護士の犯罪の最大量が、判檢事、行政官出身の辯護士であることは、色々の敎訓を吾々に與ふるものであるまいか、立憲政治は或程度迄は法律の政治であり、立憲國民の生活は或程度迄は法律生活である以上、司法部の人々は先づ第一に最も國民の社會生活を味ひ得るものでなければならぬ、寧ろ自ら自由、簡易、平等、深刻の生活に入らねばならぬ筈である、然るに官僚思想の弊は唯だ彼等をして壇上より國民を睥睨せしむるに過ぎない、官吏をして國民に接觸せしむることを以て有害なりとせる時代は既に過ぎ去つたのである、行政部に於ける秘密主義が、漸く撤去せられむとして居る今日に於て、司法部のみの秘密は無用である、司法部官吏の尊大も無用である、原內閣の司法大臣は先づ司法部の官僚氣分を改善にせねばなるまい、然らざれば一切の施設は無效であらう。

(三)

國民をして司法參加權を得せしむること、少くとも國民をし

て司法參加の實を得せしむることは、政黨政治、平民内閣を力說する原内閣の當然の職務である、立憲政治とは云ふまでもなく國民をして、一切の政治に參與し直面し交涉せしむることである、憲法發布、議會開設に依りて、今や日本國民は立法權に參加して居ることは云ふまでもない、國民の代表者たる衆議院議員は、法律制定の共同力たるのみならず、充分に行政上の監督をもなすのである、而して府縣郡にありては國民によりて選擧せられたる參事會員が、其自治行政に參加し、市町村に至りては市町村長以下多く公選に基くもので、此意味に於て立憲治下の國民は、行政にも參加して居ると云ふて差支ない、既に立法行政の參加權を得て居る國民が、司法參加權を護得せぬと云ふことは、一面に於て司法部を官僚的ならしむるものであると共に、一面に於て司法上の國民の利害を充分に保障せぬものである、吾々は必ずしも陪審制度、參審制度の採用のみに依りて、現在司法の缺陷が救濟せらるゝものと思はない、また此等の制度を採用せずと雖も、當局者の思考に依りて、司法の內容を國民的ならしむることが出來ると思ふ、假令へば司法上に於ける辯護士の地位を尊重すること、判檢事に辯護士を採用して、國民氣分を司法部に注入すること、裁判評決の基礎である合議に當該關係者を立會はしむること、豫審調べ、檢事調べに辯護人、關係者の傍聽、攻擊、防禦を許すこと等である、辯護士が或事件に關して證據を提出し、及び辯論をなすことを聽取するの判檢事が、其裁判上の意見を辯護士の關係者に秘密に附すると云ふことが種々の弊害を生ずると共に、國民を司法權より遠ざけむとする舊思想であるまいか、今や刑事訴訟法改正に際し、其草案に付きて國民の司法參加權を認めむとするの議論多しと聞く、民本政治を高調する原內閣の司法大臣は、大に此點に關する奮發をして欲しい。陸海軍の刑事審問、判決を改善することも亦た、司法上に於ける國民の權利を尊重する上に於て、極めて必要のものである、人權蹂躙の聲は近頃所在に起りつゝあるが、所謂軍法會議ほど舊時代的のものはない、軍機軍事に關することを陸海軍の將校が裁判することさへ、憲法第二十四條の精神と甚だ遠いものである、況むや古色蒼然たる陸海刑法、治罪法に依り、法律上の智識なきものが、軍人の普通犯罪を裁判し、然かも檢事とも豫審判事とも見るべき理事、主理なるものに依りて、事實上の判決意見が定まり、控訴上告を許さず、辯護人を附することを許さずと云ふに至りては、宛然封建時代の遺物であると云はねばならぬ、斯くの如き法律、審問手續が今日に存在するは、日本の政府か五十年間、軍閥を基本としたる官僚の手に操られ、軍人を一種の特別階級と看做して、國民の

手を染むることを許さなかつた結果である、無理解なる軍人の跋扈が、屢々内閣崩壊の因をなした我國の政治界にありては、陸海軍人の自由を保護する制度の改正は、頗る困難であるかも知れぬ、然れども軍法會議の判決が、其事實認定、刑罰量定等に於て、如何に不當であるかを知るものは、原内閣の司法大臣に向つて、先づ之を國民的裁判に移すことを要求せざるを得ないのである、陸海軍當局者は軍法會議に辯護人を附することに反對する理由として、軍事秘密の漏洩を數へたとのことである、然れども尉官、佐官にして守り得る秘密であるならば、辯護士其他の人々も守り得るであらう、國民をして其裁判に參加せしむるの機會を與ふることは、却つて國民をして陸海軍に近接せしむる所以である。

（四）

吾人は更に『仁の裁判』を要求する、裁判官、檢事をして一切の事件に同情同感あらしめむとするものである、沈靜なる研究、觀察も必要であらう、然かも事實の認定には情熱を要する、自ら事件の作爲者たることを要する、而して其事件關係者の人格、境遇、心理に共鳴し同化し咏嘆せねばならぬのである、憲法政治の基調たる三權分立の觀念は、東洋古代の智仁勇の思想に發したもので、智は立法權、仁は行政權、勇は司法權に該當するものであると云はれて居るが、司法そのものにも智仁勇の三德を要するものであることは、敢て多言を待たぬ次第である、先づ法律が智的分子を有することは、現時の社會科學中、法律が最も分析的なることに依りても、之を知ることが出來よう、其勇なる所以に至りては、所謂權勢富貴を以てして、尙ほ其常則を奪ふこと能はざる次第である、司法裁判の智的勇的なる發達は、明治大正の文化の進歩と共に、明かに之を認むることを得るが、不幸にして吾々は未だ『仁の裁判』を知ることが少ない、法律にも固より涙がある、民法、商法、刑法の條文を繙くものは、此等の諸法が如何に仁義に富むで居るかを認むることであらう、而して裁判所構成法第百二十二條は、裁判評議の際に於ける各判事の意見、裁決の方法を規定し、意見を述ぶるの順序は、官等の最も低き者を始めとし、裁判長を終りとする旨を定め、官等同じきときは年少の者を始めとし、受命の事件に付きては受命判事を始めとする旨を定めて居る、斯くの如きは下官のもの年少のものが、長官、年長の者の權威を恐れて、充分に其意見を發表すること能はざるの虞れあるを慮り、最先に其懷抱する意見を充分に陳述するの機會を與へたものである、換言すれば裁判にも仁愛あることを示したものである、此等の趣意よりするも、謂ふところの『仁の裁判』は最も國民生活に適

應するものであると云はねばならぬ、政友會は艱難蹉跎の間に生長した政黨であるのみならず、原首相は世海の幾波瀾を凌倒した人であるらしく思ふ、民本政治の實を司法方面に發揮せむとせば、先つ『仁の裁判』を訓令すべきであるまいか、司法大臣は伴食であると云はるゝが、原内閣の司法大臣にして、能く此一事を成遂するあらば、德化四方に及ぶものである。

（五）

若し夫れ吾人が多年提唱する言論文章の自由に至りては、功に之を司法大臣に要求するものである、立憲政治は卽ち言論文章の政治である、然るに大隈内閣以來、新聞雜誌の起訴せらるゝもの甚だ多く、啻に新聞紙法第四十一條の安寧、秩序、風俗の紊亂危害のみならず、第四十二條の皇室尊嚴冒瀆として裁判に附せられたものも決して少なくない、蓋し當局者は文章罪の違反は、敢て紳士の面目を毀損するものにあらずとして、其起訴裁判を輕忽に附するのであるまいか、言論文章の士は言論文章そのものが自己の生命であり生活である、ソレが法律に違反すると云ふことは、詐欺、竊盜の犯罪者よりも、苦痛であり不面目であらねばならね、此故に言論文章の士が安寧、秩序、風俗を紊るものとして處罰せらるゝと云ふことは、其執筆者發行者にありては、精神上の大打擊を受けると共に、物質上の損害も多大であるから、當局者に於ても充分に注意をして貰はねばならぬ、言論文章の自由が立憲政治、民本政治の理解と共に、爭闘の唯一方法となりつゝある今日に於て、輕々に其武器を奪ふと云ふことは、時代錯誤である、思想逆轉である、況むや皇室尊嚴冒瀆ありとせらるゝ事件を見るに、多くは統治機關の作用に向つて攻擊を加へて居るに過ぎぬ、皇室の尊嚴は何人も之を知る、忠愛なる國民は唯だ恐惶して居るのみである、大臣當局の輩、輔弼の責任を盡さず、國民の憤怒を買ふに當りて、激越悲歌の聲あるのみである、安寧、秩序、風俗を紊亂すると云ふことも、固より時代の眼を以て觀察せねばならぬ、讀者が何等の感得なきに係はらず、當局者は之を罰すべきでない、皇室の御稜威に關して、何等の疑念を誘引せざる記事に對して、新聞紙法第四十二條の違反ありとするものあらば、皇室尊嚴の冒瀆は却つて其方面に存することになるかも知れぬ、吾人は司法大臣が此點に付きて、政治との交渉點を見出し、執法官をして誤りなからしめむことを望むものである。

（六）

最後に吾人は八月暴動、卽ち騷擾事件の處分に關して、特に司法大臣に一言せざるを得ない、原内閣の使命は講和會議、對支政策、軍備擴張、物價調節、騷擾事件跡始末にありとせられ

て居る、而して騷擾事件は最も國民に適切現在なるものである、暴動當時に時て司法當局は頻りに嚴罰主義を宣傳して居つた、幸德秋水事件を惹起した松室致氏を司法大臣に有した寺內內閣にありては、何人も斯く信じたであらう、然しながら當局者は其後に於て之を否認して居つた、裁判は判事の司掌するところであつて、法相と雖も之れに干涉することが出來ぬ、若し騷擾事件を嚴罰すると云ふ訓示を差出したとすれば、ソレは司法權の獨立を害することになる、當局者は唯た全國の警察官、檢事に向つて、細擧主義を訓令したのである、有罪元兇を逸し、無罪小犯をのみ檢擧せぬやうに、充分の注意を以て細大洩さず檢擧せよと命じたのみである、其上の起訴は寛大にする、而して處罰量刑は判事の職權であると、成程ソレはそうであらう、然しながら全國の起訴數六千人と云ふことは、如何にも多過ぎるやうである、之れが裁判の局に當るものは、八月暴動の性質を徹底的に解剖して、正當なる判決を要するのである、其判決をして誤りなからしむべく訓令するは、固より司法大臣の職權に屬する、吾人は之を原內閣の法相に望むのである、抑も八月暴動は歐洲大戰に伴ふ經濟上の急速なる變動、之に對する當局政策の錯誤が、直ちに國民生活を壓迫した爲めであつて、其根本救濟は當然に社會組織の改善に待たねばならぬ、一時的の嚴罰主義は却つて國民を邪路に導くものである、犯罪は常に吾人の認識に基くことに依りて之を處罰するの必要を生ずるものである、然るに八月暴動の如きは、一種の群衆心理の作用に過ぎずして、個人犯罪と云ふよりも團體犯罪である、團體的作用なきときは發生せざる犯罪である、故に團體にして解消せむか、群衆は忽ち一個の良民と化し、刑法の目的とする危險性、反社會性を有せざるに至るものである、當局者の調査するところに依れば、大阪市に於ける異動の參與者は、其數二十三萬六千人であつたとのことである、大阪市の人口を百六十萬とすれば、其一割五分が暴動の關係者となる、當局者と雖も此等の者を犯罪的兇惡性を帶有するものと見ることが出來まい、此故に其結果の大なるに驚きて、濫りに之を嚴罰せむとするが如きは、現行刑法の骨子とする主觀主義を破壞して、舊刑法時代の客觀主義に墮せむとするものと云はねばならぬ、當局者が八月暴動の發生と共に、穀物收用令を公布した事實よりするも、八月暴動の眞の性質が分明するのである、幸か不幸か原內閣は其裁判に當ることとなつた、民衆を諒解するの司法大臣は、當該判檢事と共に此國民的裁判に付きて、深き注意と同情とを要する、騷擾事件の豫審決定は既に發表せられた、其被告の職業、其犯行の作爲よりするも、八月暴動は何等嚴罰に値ひするものでない、當局

者は寧ろ顧みて國民生活の改善を計るべきである。

（七）

吾人の司法大臣に望むところは、固より以上に盡るものでない、其他のことは從來の法相が爲さむとして爲す能はざりしことを斷行すれば足るのである、政友會出身の松田法相は、或る意味に於て好評嘖々たるものであつた、然し夫れは無理解無主張の賜であつた、新時代の新政治、新人の新思想と相距る遠きものであつた、原内閣の司法大臣は別に自ら民本政治の一體様としての司法事業を完成することを要するのである。

山本農相に上る書

法學博士　河津暹

山本農商務大臣閣下　閣下の施政方針については未だ之を明かにする機會が無いのであるけれど、恐らくは大體に於ては前農商務大臣の計畫に從つて、我國民經濟の發展を庶幾せらるゝ事であらうと信ずる。此處に改めて愚見を披陳する必要は無いと信じますけれども、我國經濟界が今や將に重大なる時機に際會をして居るからして、一言愚言を呈して御批判を仰がうと思ひます。

要するに我國の今日努むべき所は、平和克復後に起るべき經濟戰爭に對して十分なる準備を爲すべきものであらうと思ひます。之が爲めには我國經濟の基礎を鞏固にするといふ事が最も必要な事であるに相違ない。私の觀る所を以てすれば、我國經濟は三つの短所を有つて居ると思ひます。此短所があるが故に戰後の經濟競爭に勝ゆることが出來るかといふ事について、多少の心配をしなければならぬのであると思ひます。即ち我國の經濟が如何にも微弱であるといふ事であります。其經濟が微弱であることは、工業の原料の供給の點に於ても、又生產の規模が小さいといふ點に於ても、又生產額が少いといふ點に於ても、歷々として之を證據立つる事が出來ると思ひますが、今日世上の問題になつて居る物價問題の如きは、結局我國經濟の微弱であるといふことの證據に外ならぬと思ふのであります。物價の騰貴は一面には其原因、通貨にもあるのですけれども、一面には供給が不足して居るといふ事が關係をして居るのである。供給が不足して居るといふ事は、我國に於て消費すべき所のものを諸外國に於ける價格が高いがために之を賣つて貨幣に換へ、之を補塡すべき輸入が無いから起つて來た事である。我國の貨幣

が大いに增加したと云ひますけれども、我國民經濟を動かして行く丈けの物資の供給に不足を告げたものであるから、物價の昂騰を招いたのであると思ひます。之は我國の經濟が極めて微弱であるといふ證據でなければならぬのであります。

第二の缺點は我國民に緊張して居る氣分が無いといふ事であります。諸種の會社事業等は起りました。又經濟界の景氣も甚だよろしいのでありまするが、然しながら國民の間に於て眞面目な氣風といふものは大いに薄らいだやうに感ぜらるゝのであります。

第三の缺點といふものは我國の經濟國是といふものは未だ徹底的に確立して居ないといふ事であります。例へば商工業を大いに盛にして、之を以て世界市場に臨むといふのであるか、又は農業立國主義に則るべきものであるかといふ事については十分なる理解を持つて居ません。又英吉利と結んで今後の經濟界に處する積りであるか、又は之から離れて經濟を立つる積りであるか。其他經濟國是といふものが國民の間に十分なる理解を得て居らんやうであります。斯くの如き事は今私が此處に說くを須ゐずして閣下の十分に御諒解になつて居る事と思ひますが、私は斯くの如くに思ひます。而して我國の經濟國是を確立するといふ事は、之は獨り農商務省の問題ではないので、國民を擧げて十分に研究をし、決心をしなければならぬ問題であるから、直ちに閣下の力によつて之を拵へる事が出來るものであるとは信じませんが、若し事情が許すならば少くとも此問題について、國民をして相當なる理解を得せしむるやうに努めて頂きたいと思ひます。

此第一・第二の缺點に對しては、之は主として當局者である閣下の御盡力を仰がなければならぬ事であると思ひます。で此等の事について細かい事を云ふ事は寧ろ禮を失する事であると思ひますから之を略しますが、私の觀る所を以てすれば、次の三つの點について御一考を煩はしたいと思ひます。

一つは自由放任といふ事について、——即ち自由放任論の危險であるといふ事であります。閣下は我國經濟を發展せしめて行く上に於て單純なる自由放任主義をお取りになるものであらうとは信じませんけれども、世の中では多少は斯くの如き誤解を持つて居るやうにも感ぜられます。勿論經濟の發展といふ事には國民の自覺努力が第一であつて、政府の施設の如きものは價値の少いものと云はなければならぬが、然しながら世上の云ふ自由放任の如きものは、之れ亦世を誤るの論であると思ひます。世上の自由放任といふ事は多く當業者からの聲であります。當業者は種々の束縛を受けるといふ事を喜びませんで此種

類の論を爲して居るのでありまするが、之が爲て當業者が目前の利益のみに馳つて、國家百年の計を捨てゝ單に大いなる利益を得ようといふ事に傾く危險ある點なのであります。今や諸國が官民一致して種々の國策を樹てゝ居る時に方つて、此等當業者の意思のみに任して何等之に檢束を加へないといふ事は、經濟社會全體から云へば、少くとも危險があると云へるのであります。殊に自由放任といふ事は優勝劣敗を認めるといふ事であるから、經濟力の強いものが勝つて然らざるものが破るゝ事になる。資本家又は當業者より觀れば甚だ都合の好い事でありませうが、之が爲めに困難するものも少くないので、其方から觀れば甚だよろしくないと云へるのであります。例へば資本家と勞働者の關係の如きものである。資本家から云へば國家が何等の干渉を爲さない事が便利であるかも知れませんが、其儘にして置くといふと資本家勞働者の軋轢を生じて、我國經濟の基礎を危くする事になるかも知れないのであります。今日の經濟社會に於て多少其兆候が見えて居る。之れ一例に過ぎないのでありますが、自由放任論が正しいものであつて、其以外のものが誤つて居るものとお考へにならぬやうに願ひたいのであります。相當なる程度に於て、相當なる方法を以て、經濟社會全部の爲めに私益を押へたり、又は此力の足りないものを補ふの方法を講じられん事を希望して已まないのであります。

尙ほ第二の點は我國の自給政策を訂正して頂きたい事であります。近頃我國に於て一派の人によつて唱へられて居る自給政策といふものは、私が說明するまでもなく甚だ危險なるものであります。其議論を極端に行へば、鎖國政策を行ふといふ事に同じやうな事になりはしないかと思ふのであります。勿論今日の戰時に於ては、斯の如き政策も已むを得ないかも知れないが、平時に於て之を行ふ事の出來るものであるや否やは大いに疑はしいのである。私が希望する所は、我國に於て發達し難いものを漫りに保護助長をするといふ事は、一派の自給論者が唱へて居る所ではあるが、之は我國全般の經濟の爲めには寧ろ利益無き事故之を已めて貰ひたい。單に我國の生產條件に協つて居るものを保護助長する事に訂正して頂きたい。之と同時に第二に一派の論者の言つて居るが如くに、我國の工業の原料の如きは我國並びに支那等のみからして之を增すと云ふ考よりは、寧ろ適當なる土地からして之を求め得るやうにして頂きたい。之を求むるに方つては、事外國とに關係があるのであるから其間に種々なる困難を見る事があるかも知れない、然しながら政府當局者の方針が之にあつたならば、相當なる解決をなす事が出來るであらうと思ひます。之を捨てゝ單に我國又は支那

等のみから工業の原料を仰ぐと云ふ事のみに固着する事になれば、結局は其工業を十分に發達せしむる事が出來ぬと云ふ危險があると思ふからであります。第三には、今回の戰爭に促されて生じて來た新規の事業も少くない。此等のものが戰後に於ては如何なる運命に遭遇するかも分らないのであるからして、今日からして此等のものの基礎を鞏固にする途を講じて頂きたいと思ひます。第四には、從來も政府當局者が熱心に行はれた事であるが、生產技術の奬勵に益々力を注がれると云ふ事を併せて、勞働者等の能率を增加する事に相當の考慮を廻らして頂きたいと思ひます。此等は畢竟上に申した我國の第一の缺點に關係して居る希望に外ならぬのであります。

第三に實業界の氣分を一新する事を努めて頂きたい。私の觀る所を以てすれば、實業界の最も惡い點は、事業と云ふもの丶利益は甚だ多いものと考へて居る事であります。戰爭其他の特別の理由に依つて、今日は或は大いなる利益を占めて居る者があるけれども、之は特別の原因あつて生じたる事であつて、事業界が常に斯くの如きものであるとするならば、夫れは大いなる誤りである。若し戰後の經濟界に於て利益が減少した時に於ては、事業界を擧げて大いなる困難を生じ、又六つかしき問題を生ずる事になると思ひます、故に此氣分を改むるやうに導かなければならぬと思ひます。之と關聯をして、我實業界の氣分は今日も尙投機的氣分が割合に强い。此危險と云ふものも上に述べたものと同じ事になる。故に今日の經濟界に處する策としては、相當に戒飭を加へて所謂引緊めて懸かると云ふ事に力を盡して頂きたい。此事は一派の實業家にとつては歡心を得る所以ではないけれども、我國の爲めには極めて必要と思ひます。之と同時に我國事業界の經營と云ふものが未だ經濟の法則に協つて居らんものが少くないのである。此事はよく閣下の御承知のある事であり、此の改良を施す機運を拵へるやうに導いて頂きたい。又常に多くの人に依つて言はる丶事なるが、殊に外國貿易などに就いて、我國の生產品は粗製濫造品が多い。之は我國の貿易を盛ならしむる所以でないと信じますから、之れ亦相當戒飭すべきものと思ひます。

現下の問題である米穀の供給と云ふ事は、之は根本的の解決をなすと云ふよりは、寧ろ焦眉の急を要すべき問題と信じますから、單に根本的の解決をなすまで之を捨て丶置くと云ふよりは、根本的の事は寧ろ之を後廻しにして、供給を潤澤ならしむる適當の方法を講じて頂きたい。之は或所までは今日の社會問題の解決に助けとなると信ずるからであります。又前内閣に於ては取引所問題に熱心であつた。之が爲めに非難すべき點もあ

るかも知れないが、私共を以て觀れば、此取引所の氣風を改めて或所まで改善の途を開いたものであると信じます。故に多少當業者の一部分からしては、再び元のやうな狀態に復へると云ふ事を希望する者あるかも知れないが、之は耳を假すべきでないと思ひます。徐ろに取引所の空氣がよくなつた事に乘じて、此商業機關をして相當に職分を盡すやうに改善をして頂きたいと思ひます。

要するに實業界の氣分を一新して頂くと云ふ事が私の希望に外ならぬのであります。此等の問題に就いて、細かく述べれば種々の事を言はなければならぬが、單に思ひ付いた二三の點を擧げて御裁斷を仰ぐに過ぎないのであります。



▽『保健』主筆醫士 伊藤尚賢先生著

最新刊

天然利用健康增進法

今や藥餌萬能の時代は去れり。見よ萬病を治する溫泉あり、オゾン漲る海水あり、紫外線を含む日光あり、大自然は赫々たる光と、新鮮なる大氣と、清冽なる水と、豐饒なる土とにより吾人を愛撫す。

歩行。旅行。登山。冷水浴。海水浴。溫泉浴。ラヂウム。溫湯浴。蒸氣浴。砂浴。芳香浴。日光浴。空氣浴。海氣浴。山氣浴。森林氣浴。其他。

▽定價九十五錢 ▽郵税八錢中判

▽改訂増補 **岡田式靜坐法** 實業之日本社編 六十錢郵税六錢

▽**體力精力增進法** 樫田醫學士著 五十錢郵税四錢

▽簡易斬新 **實用的強健法** 伊藤銀月先生著 七十錢郵税八錢

▽**禪と健康** 堀內陸軍中將著 六十錢郵税六錢

▽**胃腸の衞生** 野田醫學士著 五十錢郵税四錢

▽**腦の衞生** 樫田醫學士著 四十錢郵税四錢

東京南紺屋町 **實業之日本社發行** 振替東京三二六番

新保磐次先生著　【新刊】　定價參圓八拾錢

趣味の日本史 中巻

菊判總クロース
裝釘美麗
紙數八百九十頁
挿畫澤山
郵税内地十六錢

上巻 神代―平家沒落、**中巻** 源氏の勃興―戰國時代、下巻 安土桃山時代―大正の現代

萬人必讀の歴史として、太平記の後に日本外史あり、日本外史の後に趣味の日本史あり。津々たる趣味の間に古今の史實に通じ、我國民性の由來を知らんと欲する人士は速かに一本を購ひて以て燈下に親まれよ!!

本書は古今の正史・野史・記錄・軍書・物語・傳記の精粹を一大文章の中に鎔鋳して互に調和を保たしめたるもの、一讀の下容易に治乱興廢の跡を探り、世態人情の變遷を解し、文藝佳話の由來を知るを得べし。而も本書は傳說を尊重すると、同時に重要なる歴史的疑義の研究に意を用ひ、特に又現在に關係深き事實を收錄して、古今東西を比較對照するの料とせり。一例を擧ぐれば正宗の刀と現今の大砲の地金關係戰國時代の本草學と歐洲大戰の食品研究との關係の如し。

又泰時、時頼の慈仁、元冦の戰術刺戟、新田諸將の忠勇、謙信の天才的、信玄の研究的戰術等躍然活動して興味ある叙述は尚多數の挿畫を以て彩られ、紛糾せる戰國時代交互の關係并に其年次を簡明に叙し、地名には分註を以て現今の位置を細示する等周到なる用意を加へたり。

上巻八版

紙數體裁 中巻同様　定價參圓八拾錢 郵税拾六錢

東京日本橋本町 **金港堂** 振替東京八八一五番



偉大なる哉歌麿

野口米次郎

僕は倫敦でリケツ氏（美術家又一層驚くべき評論家として敬慕すべき氏の特色を僕は機會ある毎に隨所で語つて居る）の口から初めて、大英國博物館（ゼ・ブリチツシユ・ミユジアム）が珍藏する喜多川歌麿の三枚續大判物『婦人泊り客圖』の美を聞き、その後數日たつて、僕は該博物館を訪問し、ビンヨン氏からこの『歌麿』の逸品を見せて貰つて、『西洋がこれまで知ら無つた歌麿の艶な夢路に人を誘ふやうな情調の色から、彼の靈肉合致的な德川時代の平民藝術の趣味が急にむら〳〵と我我の胸に覺醒した』といふリケツ氏の嘆美の告白を成程と思つた。實際我我日本人も西洋の名畫を眺めて居ると、宛も魔法師の不思議な杖に擦られでもしたかのやうに妙に西洋人の心持になる、又それと同時に鋭敏な感覺性を與へられた西洋人が日本の純な特色ある藝術に接すると、きつと彼も日本人のやうな情調の人間と變化するに相違ない。其處が偉大な藝術に決して古今も東西もなく、"The best art always comes from Nowhere." で時間も空間も超絶して如何な國人の靈感をも誘致する所以である。この歌麿の『婦人泊り客圖』の美！ 纖細な描線から出來た夏の蚊帳一張（肉筆では兎てもかうい完璧に近い愉快な藝術の効果は得られまい）、内と外とに各三人の女、内の女の顏は靑い蚊帳のため一層白く浮いて見へ、微かに離れた又春の夢のやうに極めて近い二箇の美麗な感じの混和が畫面に深い情調の印象を與へて居る。この感じが所謂歌麿趣味だ。見給へ、この畫面に投げられた大きな靑い蚊帳の影

のなかゝら、宛も水中から浮上つた花のやうに三人の女が座つて居る。又見給へ、外に立つて居る三人の女の着衣又殊に右手の女が纒まうとして居る着物の麗はしい配置！　六人の女その何れを見てもなよ〳〵した艶麗な情調の音律に生きて居る。ウヰスラーならばこの繪を必と『綠と紅と藍の整調』とでも題することであらう。鶴屋版寛政七八年頃の作品で、歌麿が全盛時期の最高潮に達せんとし或は已に達して居た時代の製作であるから、六人の女殊に蚊帳の外の三人の肢體が如何にも細長く神經過敏の柔軟を人格化したものといふことが出來る。僕の友人フヰケ氏は歌麿の the restless haunting type と云つて居る。實際彼が四十歲に入つてからの作品では彼の審美感念の誇張を女の上に亂用して居る。僕の書いた一英詩の句に "tall as a dream" といふのがある。歌麿の寛政時代の末に屬する女の恰好は實に夢のやうに背が高い。

　僕は昨年日本橋の常盤木俱樂部で『歌麿墓碑建設追善遺作展覽會』を一覽して上記の『婦人泊り客圖』三枚續を再び見ることを得て、日本にもまだ此繪が存在して居るのを喜んだけれども、倫敦のリケツ氏がこれを見たならば果して以前と同樣な嘆美の告白を繰返すだらうかと疑ばざるを得無つた。といふのはこの日本の三枚物には殘念乍ら大英國博物館所藏のそれが華かに明瞭に現示して居る調色が無つた。勿論最初には完全にその調色を持つて居たに相違ないがそれが憐れむべくも褪色して居たのである。『日本に存在する歌麿』としては結構な部に屬する物であるが、唯僕がこれ以上に完全な狀態の同畫を倫敦で見たのを不幸(或は幸)とした次第であつた。して又僕は、魔法師の『時』がもつと適當に褪色させて畫面に一層優美な整調を謀つてくれたならばと思つたものもこの歌麿展覽會にあつたことを此處に書添へる。魔法師の『時』よ、僕等はお前に非難の聲を浴せかけることもあると同時に、お前に澤山の感謝を呈せねばならぬ場合も經驗して居る。ある繪(歌麿の版畫ばかりで無く其他の日本の繪も同樣に)はお前のお蔭で、黑、黃、綠、紅の種々な色に於ける激烈な對照が漸次に融和せられ、又紙の地色の白も時代に接觸して自然に一種倦怠の情調を帶びて來て新しい版畫が到底顯はすことが出來ぬ所の悲哀に近いやうな平靜な清澄さを呈して居る。僕はかういふ繪を見ると何んなにお前といふ魔法師の『時』に感謝するであらう。お前が時の魔術を善用した場合の『歌麿』位特別な價値ある版畫は無いのである。

　僕一箇の意見では、歌麿は美人を通じて(天明時代の彼が二十八歲から三十五歲に至る上半期は概して勝川春章と北尾重政に私淑し、又下半期はその當時の大家淸長の感化を受けた美人を

描き、寛政時代の三十六歳から四十七歳に至る中ば頃から所謂歌麿式の美人を創造して絕對的獨立の態度を示して居る）自分を表現した抒情詩人であつて、稀有な情緒が動き、又更に驚くべきは、その動いて居た情緒が卒然靜定するに至つた瞬間を美人の題目に捕へた天才畫家であつたのである。彼が取扱つた題材と完全に合一融和して少しも破綻の痕跡を見せぬ技工に彼の女性的感受性を見ることが出來る。天才の人は凡て女性的であるやうに、彼も鈴木春信と等しく、その範疇の畫家であつたに相違無い。又春信と同樣に歌麿は獨唱曲の名家で、決して大掛りなヲケストラの作者で無つた。彼は抒情詩人である。一名の美人或は數名の美人を題材に取扱つた彼の抒情詩はその表現法に千變萬化がある。然し彼の藝術の基調は單純である。又彼は情調の婦人美を頂點まで力說しやうとした結果屢々誇張に渡つて無意識に一種の悲哀を人に咬るのである。僕は淸長や北齋の美人を見ては到底感ずることの出來ぬやる瀨無い哀調をこの歌麿の美人——細長い首と脊の非常に高い美人に味はふのである。單純を基調とした藝術的衝動の音律は無變化で、人に倦怠の情と單調の感じを起させ聽ては悲哀の壓迫に堪へられなくさせるものだ。歌麿の藝術もそうである。實際彼の藝術は完全でしかも危險なるものであつた。彼の藝術は彼と共に滅亡するより外に路が無い位絕頂に達したものであつた。第二の歌麿（彼の歿後二代歌麿と名乘つた拙劣な畫家はあつたけれども）が彼の弟子のなかゝら出なかつたのを見ても、如何に彼の藝術が人に開拓發展の餘地を殘さなかつた完全のものであつたかゞ察せられる。

此處に『靑樓十二時の內丑の刻』の一枚がある。不自然に細長い肩からずらりと落ちた着物の工合、所謂歌麿式の特調を誇張した hyper-aetheticism の非難は甘んじて受けねばならぬ彼晩年に屬する作品ではあるが、この繪が齎らす寂寞と嬌嫩の深い印象に對して僕は感動するものである。遊女の足元にひつくり返つた上草履の末に至るまで歌麿は微細な神經質的な藝術の注意を拂つて居る。この繪から昔靑樓の丑の刻に響く遊女の誠の祕密を聞くものは僕ばかりであるまい。斯ゝる一枚物を眺めて居ると、僕は切切として私語に異ならぬ抒情的バイヲリンの聲に撃たれるやうな心持がする。昨年の歌麿展覽會で僕は初めて愉快な褪色を見せた一枚物二枚を見た。それは『婦人手業麻積み』と『正銘歌麿筆玉屋花紫』である。前者は薄靑色の整調を着物全體に施して、それを伴奏的に助ける黑と紅と白い手、所謂一絲も亂れない藝術の完璧を提供した。而して後者に見る麗はしい毛髮と細い筆を口にした女の豐麗な情趣！『歌麿に女の香氣がある』といふ言葉は平凡だが眞實であるのを點頭せ

る。俗に『無線太夫』といつて、遊女の顏と手を肉色の線、着衣には無色のから刷を施し、又黄、紅、綠、紫等を平面的に配置して裝飾美の深い理解を示した一枚物『座せる太夫』(寛政九年頃鶴屋版)がある。畫面の上部に卷物を描いて『錦織歌麿形新模樣』と題して中に美人畫の製作に關する趣旨の一端を書いて居る。僕は嘗てこの繪の纖細な描線とロセチの描いたリヽス以上に嬌嫩巧詐を極めた姿勢の表現に動かされて英詩一篇を書いたことがある。

"Too Common to say she is the beauty of line,
However, the line old, spiritualized into odour,
(The odour soared into an everlasting ghost
from life and death.)
As a gossamer, the handiwork of dream.
'Tis left free as it flaps:
The lady of Utamaro's Art is the beauty of zephyr flow.
I say again, the line with the breath of love,
Enwrapping my breast to be a happy prey:
Sensuous? To some so she may appear,
But her sensuousness divinized into the word of love.
To-day I am with her in silence of twilight eve,
And am afraid she may vanish into the mist."

『彼女を線の美だといふのは餘りに平凡、
だが線は古くて、靈化して香氣となつて、
(その香氣は生と死とから翺翔して永久の靈となつて居る)
絲遊のやうに夢の手細工、
自由に浮動を恣にして居る。
歌麿の藝術の美人は流れる微風の美である。
私は再言する、――その線には愛戀の呼吸があつて、
私の胸を包み、遂にその幸な餌食となつて仕舞ふ。
官能的？ある人にはそう見へるかも知れない。
だが、官能的な彼女は愛戀の言葉と神聖化されて居る。
今日私は彼女と共に暗明な夕方の沈默のうちに居る。
而して私は彼女が霧散して仕舞はんかを恐れる。

西洋の蒐集家が歌麿のsilver printsといつて莫大な金を惜しまない美人の胸像がある。この雲母摺大首物は重もに天明七八年頃から寛政の上半期に渡つて製作せられ河喜や蔦屋の出版に懸つて居る。歌麿がまだ所謂歌麿式を發揮するに至らない時の

作品でその何れを見ても、淸長の影響を打捨てようとしても斷然たる態度が取れず、不卽不離の間にその感化を畫面に朝霧のやうに薄すりと漂はして居る。顏面の描法（取扱つた女に依つて眼尻を稍圓くしたり又細長く引いて居る）や衣服の整調に纎細と大膽とがよく融和した技巧の研究を適用して、新鮮で華麗な歌麿の獨自性を開拓せんとする彼の努力を見ると、實際この種の繪で彼の畫家としての眞實な仕事は初まつたものといふべきであらう。妖艶極まる所謂歌麿式の女だけを知つて此等の胸像を見ない人は勿論歌麿の全部に眼を通したものとは云はれない。實に純な平穩な眞摯な藝術心が畫面を支配して、描かれた美人の無垢な初心さは春信や祐信と多少の共通點を持つて居る。殊に繪に依ると白い雲母地と紅、綠、黃等の配合如何にも秀麗明快の極致を得て居る。その點から西洋の浮世繪研究者は歌麿をthe "first colourist of Japan" と呼んで居る。（又歌麿藝術の絕頂をこの雲母摺大首に期する論者も西洋に少くない。）歌麿はこの時代に澤山の大首物を寶摺又鼠摺で、前記の河喜や蔦屋の外若狹屋とか鶴屋などから出版させて居る。重な題材は兩國の高島ひさ、淺草の難波やおきた、富本豐ひな、遊女花扇或は雛鶴などゝいふ當時一粒選りの美人に取つては居るが、勿論其等の美人の眞實な胸で無く、畫家は單に之れを借りて女性美の表象としたのである。假令何んな特殊な名前が附いて居るにしても、決して一人の美人の反映で無く、百人千人の美人が不思議な彼の魔術で合體して一枚の畫面に宿つたものと見るのが正當であらねばならぬ。彼の藝術は箇人性を發揮したもので無く寧ろそれを犧牲にして、美と愛戀の大きな一般的聖靈に組付いたのと云へる。歌麿の美人の罷はしさ、——それは有らゆる舊日本の女性美が彼の描いた美人に完全なその表象を得たからである。

然し僕は何處までも彼の畫家としての卓越は抒情詩的一人立ちの美人畫に限られて居るといふ說に固守するもので無い。實際複雜な圖案に成功した奇蹟の畫家としての歌麿の實證も僕は多くの場合に見て居る。が、概して彼は『說話の詩人（ナレチーブ、ポエト）』としての不成功は、北齋の五板續の『靑樓の畫』に於けると同樣で、無意味に澤山の人物を起たしたり又坐らしたりして單調な薄弱な氣分を畫面に漲らしては居まいかと思はざるを得無い。其點では淸長はずつと歌麿以上の巨腕家であつたかも知れぬ。橋口五葉氏は『やまと錦繪』の歌麿の部に六枚續の『兩國橋上橋下の圖』のなかで橋下三枚の右の端だけ（船から船へ移らうとする藝者が中心で、色彩の配合と川舟や橋柱や水などの關係上に特殊な成功を收めた繪）を揭載して、こう書いて居られる、『初めから大畫面を一圖に作り、これを六つなり三つなりに切つてや

つたものでなく、一枚毎に構圖をたて、これを續け合せ、其綜合によつて大畫面をなすの計畫をたてたものらしい。從つて猶き物のどの一枚をとつても、それ丈で圖柄が纏まつて居り、決して全體の爲めに部分を犠牲に供する様なことはして居ない。寧ろ稍全體を二次的の位置に置く觀がある。別々に見れば面白いものがつなぎ合せて却て興味の淺くなるものがある。兩國橋の圖の如きは其一例である。』

然し僕は複雜な構圖に成功を收めたもの丶實例として五枚續『青樓歳末大煤掃圖』を擧げたい。最初の三枚には頭拔けた藝術の流動と發展を見ないと思ふけれども、其次の二枚に至つては破天荒の妙を構圖に放散して居る。僕は初めてこれを見た時『雲を破つた太陽の光線、又は見へざる路を辿つて登る香氣のやうな藝術だ』と叫んだ。如何にも此繪では彼は摩訶不思議な妙技を演じて居る。大煤掃に多忙なこの女護島の住者が手拭冠つた色氣ある態度、兎ても歌麿ならでは傳へることの出來ない情調の響がある。又『見立忠臣藏』の十枚で、彼は構圖の上藝術の中心歸聚の秘術を種々な手法で示して居る。この繪などは倫敦の ゼ・ナショナル・ギヤラレー に懸つて居るホガースの Marriage a la Mode同様別々の挿話を生氣ある潑溂たる筆で物語つて居るものだ。然し繪が語る挿話を拔にして見ると、藝術的構圖——小規模ではあるが一種壁畫的な權威を與へる——としては、『養蠶之圖』の方が『忠臣藏』に遙か勝つて居るであらう。他の繪師でも『忠臣藏』は眞似ることが出來るかも知れぬが、この『養蠶之圖』に至つては歌麿獨占の境地であると云はねばならぬ。

僕が小十年も以前に小石川の古本屋から買つたこの『養蠶之圖』(原畫の表題は『女織蠶手業草』と書いてある)の校正摺の端物がある。機を織つて居る繪の二枚を一枚に計算して都合六枚ある。僕は其當時これ等の繪の完全なるもの丶調色が何んなに傑出して居たであらうかは知らなかつたが、この校正摺に顯はれて居る手で擦ると直ぐ消へそうにさへ思はれる極めて神經質な纖細の描線の美に撃たれて買つたのである。之れは必ずしも最初の版の校正摺で無いかも知れぬが、決してそう新らしいもので無い。何うしてこの校正摺が今日殘つて居るに至つたかといふ徑路は誰も知ることが出來ぬ。たゞ僕は破壞的な『時』の追究を不思議に逃れて今日僕の書齊に安全な避難所を發見したこの校正摺の運命を考へては、之れを時々箱のなか丶ら出して眺め、今更ながら歌麿の繪の描線の力で魅せられるのを喜んで居る。浮世繪の美は變化する色の配合に懸つて居るには相違無いが、その描線の精巧優美を觀賞するのもまた研究者の重大な任務で無くてはならぬと思ふ。澤山な場合では彩色の爲め折角

描線の美が置くれて仕舞つて居る。今僕のこの校正摺の『繭を糸にくり取る圖』に於ける火の燃え工合、又機を織つて居る圖で臺へ上つて居る女の右の手から垂れた細い一本の糸の柔軟さ精緻さ殆ど譬へるに物無しといふ趣がある。實に歌麿の描線は古今獨歩と云はねばならぬ。

歌麿の美人が遊女であらうと又藝者であらうとも、女神の品格が漂つて居るといふものは必ずしも日本を理想的に見る弱點に捕はれて居る西洋人ばかりではあるまい。よし歌麿の美人が女神でも之れが浮世の範圍を脱せぬ點で我我と深い接觸點を持つて居る。日本人の官能的發動が靈化する最後の瞬間に、木犀か沈丁花の馨のやうな悲痛の聲を發すると僕は思ふが、歌麿の美人畫を見るといつもそういふ感じを僕は起す。彼の繪を眺めて居ると、絹擦れの花車な音が夏吹く微風のやうにふはりとした肉の情調を齎らすと思はざるを得無い。我我日本人の文明、少くも徳川時代で歌麿の生存中の天明寛政享和頃の文明は、官能的と精神的との間に何等の區別さへ認めなかつた、云ひ換へると官能的のうちに精神的を見た點に僕は非常な興味を持つて居る。歌麿の美人畫はそういふ文明の一表象に過ぎぬ。

廣重や北齋まつた豐國はいつ何處でも、時と場所を構はずに樂むことが出來又批評することも出來るけれども、歌麿の美人畫となるとそうは出來ぬ。その理由は外でない、歌麿の美人に對する場合は丁度生きた女に接する場合と同樣、最も適當に完全な心情（ムード）無しでは正確に觀賞することが出來ぬからである。歌麿の藝術を適當に評價しやうとするには是非とも見るもの丶肉體の力が充實して居無くては駄目だ。肉體の力が充實して居ると自然に所謂批評の遊戲に落ちる心配が無い、又肉體の力そのものが心情（ムード）の一部となつて麗しい感情の節奏を保つことになる。元來藝術の批評なるものは、畢竟するに健康をそこねた空腹の瘦せた人間の遣る遊戲の一種たるに外でない。（場合が多い僕は必ずしも此處で皮肉の言葉を弄して居るので無い。）（僕は歌麿の美人を眺めて居ると、僕は實際白狀するが、一種の悲痛に擊たれるとがあつて、恰も生きた美人に接してその肉體の美で自分が負傷の苦痛を感ずるやうな場合がある。僕が歌麿の美人に對すると無暗に若返つて卒然赭顏を呈することがあるといつても、これは歌麿の藝術が劣情に訴へる所があり、又僕自身が下等な人間であるからだと思はれては僕は迷惑する。實際（僕は斷言する）眞實なる精神的靈性は肉體の適當な協力を得て初めてその完全な美と力を發揮することが出來る。所謂靈肉合致の場

合間のみ完全な表現を見るのである。僕は歌麿の藝術を感激欽仰する、自然に彼の生きた藝術が自分の貴重な一部となつて來るやうに感ずる——生氣ある自分の肉や靈の直接同胞となつて來て、何うしても彼の藝術を自分の箇人的愛情から全く分離して考へることが出來なくなつて來るのである。かういふ感じを與へるのは、日本に所謂美人畫家澤山あるけれども歌麿を外にすると、清長と春信位のものだ。僕は歌麿を愛すると同程度に清長春信兩人を愛し敬し更に又愛するものである。而して僕は彼等の藝術のなかに僕の生命があるとさへ云ひたいのである。彼等三人の美人畫には有らゆる日本の女の美、愛戀、情熱、悲痛、喜悦、一言でいふと日本の女の夢と生命が見へたり又隱れたりして生き〳〵浮動して居るのである。彼等の美人には日本の女の香氣があつて、その香氣が僕を何んとも云へぬ心の境地へ運んで行くのである。

理想的に歌麿の美人畫を眺めて夜の數時間を費やそうとするには、部屋をまづ蠟燭の光で薄暗くせねばならぬ。實際蠟燭の光は部屋を明くするより寧ろ薄暗くするものだと僕は思つて居る。その薄暗くなつた隱密の空氣のなかで歌麿の美人を眺めるのだ。僕數年前の英京滯在中に屢々新派の藝術家或は文學者が月の第一火曜日に會合するフリツ街（倫敦での羅典系人種の植民地）の夜のレセプシヨンに出掛けたことがあつた。レセプシヨンの部屋（僕はこの家に大變見事な大理石の階段がうねつて出來て居たことを話さねばならぬ、この家に以前はヴエネシヤンの公使が住んで居たさうだが成程何處かに貴族的な追憶が漂つて居るやうに思はれた）に數葉の『歌麿』が壁の上に掛つて居た。段々夜が更けると集つた連中盛んに酒杯を上げ煙草を吹くので、部屋のなかゞ霧で一杯薄暗くなる、その霧のなかゝら歌麿の美人がをぼろに見へるのであつた。その美人の眩惑的な姿——將に烟霧のうちに消散しやうとする瞬間の姿、如何なる言葉でも形容のしやうが無い一種の優美を示したことを僕は今日でも忘れることが出來ない。歌麿の美人畫は是非共かういふ薄暗い部屋で觀賞したいと思つて居る。その部屋のなかゝらは西洋種のもので昔の日本の空氣を破るものは皆な取捨てねばならぬと思つて居る。此處にミレーの農夫の繪だとか或はウヰトマンの詩集或は又カーペンターの『民主々義の方へ』があるとする、僕は其等を歌麿の美人畫と同一の部屋に置くことを——少くも歌麿を特に眺める場合には——全く好まない。僕が創造したいと希望する空氣は何處までも非箇人的であらねばならぬ。近代的箇人主義や科學的な箇人格に觸れ或は傷付いて居る空氣は好ましくない。永久にその空氣は柔かで灰色で麗はしくなく

てはならぬ。さういふ灰色で柔かな麗はしい空氣のなかで、初めて昔の日本の女の愛戀や感動や生の喜び又痛みを實際に感じ又想象することが出來るのである。

非道德は不道德でないやうに非人格は不人格で無い。非道德は頭初から窮屈な野暮な道德を認めない放肆な境地の精神狀態であつて、非人格には粗雜な下卑た不人格が接近することが出來ぬ純白がある。而して非人格の原始的な生氣のなかゝら一種の個人格が產れる場合がある。斯かる特種の場合の藝術は西洋には澤山なく、これを見るには是非共昔の日本に眼を向けて求めねばならぬ。古代の日本の最も高尙な藝術性は則ち非人格から產れた個人格のニユアンスに外ならぬ。して又歌麿の藝術、彼が理想化した遊女の女護島の繪畫的物語も個人格が非人格のなかゝら產れた特殊の場合の藝術である。灰色で柔かな女性的空氣のなかで、靜にしみ〴〵と彼とたつた二人切りで共に愛戀を談じ或は女性美を語るのは如何にも興味の深いことであらう。僕にこういふ場合——歌麿と共に鹽辛い理屈張つた現實的な人生を餘所にして婦人美を藝術の表象とする談話に耽る場合があるとしたならば、僕はきつと彼にかういふに相違無い。

『君が生きて居た時代には文部省展覽會みたやうなものが無つたかのを僕は祝福する——君は空虛な恐喝や俗惡な機智を丸一の曲藝のやうに玩弄した六枚屛風を上野公園へ擔ぎだす必要が無かつた。君は幸運な時代に生れたものだ。君はいつも直接に人民にぶつかつて、君の繪畫上に於ける努力は衝動的に同情し得る公衆から報ひられた——所謂審査員などから等級付けられたのでなかつた。だが、僕は君も一度は官憲から罪を强ゐられて入獄させられるに至つたことを知つて居る。して見ると君の時代にも、美と繪自身を見ずに先づ第一道德と教訓とを發見しやうとする警視廳のやうな不自然なものがあつたのだ。この野暮な警視廳はその職責を誇張することの外にその存在を說明する道あるを知らない。道德と教訓とを目的として却つて不道德と不教訓とを暴露して平然として居る蠻勇者である。かういふ無學な蠻勇者を喜ばしたに相違ないと思はれる繪も君は澤山描いて居る——無邪氣な子供や乳房に乳が溢れる美人の母親の繪などが——幾年たつた後西洋に於ける日本の警視廳の役員式觀賞家を喜ばせるであらうと君は生前に豫期して居たか。何うか。然し君の藝術家としての本領は、情に荒んだ髮の恰好が素敵に大きい首の骨が無茶に細長い背の頭抜けて高いそして着物をいつもきちんと着ることを知らない人生の悲哀と喜悅とを細い眼で七三の割に見て居る美人になつたのは勿論だ。君の美人畫は餘りに多く君自身、云ひ替へると君の夢の表象であつたであら

う。恐く君は自分の愛戀と情を餘り赤裸に白狀したので、一枚の美人畫が出來上ると、それを君は手離すのを悲しんだに相違無つたと思ふ。君は自分の美人畫が餘り接近して人に眺められたり又批判され或は觀賞されたのを不安に感じ又恐れたことであらうと僕は思ふ。僕は君の藝術心を多少了解して居ると思ふが何うか。』

歌麿の美人に頭腦の存在を問ふやうな批評家があるとすると、それは彼の藝術とは全然沒交渉の低級な道德論者であらう。『馬鹿が飛込むと天女は逃げる』の句があるやうに、理智が飛込んで多辯に喋べり初めると必と眞實の美は勝手口からそつと跣足で逃出すに相違あるまい。理智はいつも自分丈けの主張者である、獨斷論者である。して理智は藝術の調和などに向つて何の考慮を與へずに無遠慮にそれを破壞することを快事として居る。歌麿の藝術は則ち非理智の藝術である。僕が嘗て歌つた左の詩の如き藝術が彼の藝術であつた。

『藝術だ（さう云はして貰ひませう）
蛛網のやうに、香の空中に懸つて、
柔かで、生き〳〵と音樂にゆれて居る。
（生に浸潤した藝術に何んたる悲哀があるでせう！）
その音樂は瞬間の烈しさに生き又死し、
暗示を以てその生命として居る。
現實の黄昏に遊ぶ蛾の光で、
瞬間の殘酷な餌食となつて間も無く死ぬであらう。
驚異の創造だ（さう云はして貰ひませう）
衝動の金線の上で踊つて居る。』

我我は歌麿の藝術を觀賞する權利がある、それで澤山だ。彼が何んな着物を着て毎日何んな食物を口に入れ、幾時間眠つて毎日幾時間仕事をしたかといふやうな彼の一生涯の詳細な事實をよしんば知つて見た所で何の役に立たぬであらう。僕は彼の正確な傳記が世間に傳つて居らぬからとてそれを悲しまぬ一人である。が、様々な人の研究を土臺として考へると、一年位どうでもよいが彼の生年を寶暦三年とするものと四年とするものとの二說がある。從つて彼の歿年も五十四歳で文化二年ともなり又五十三で文化三年の二說に分れる。然し兩說共に確實な根本資料に依つたもので無い。又いづれは日本人の說を信じてからのことであらうが、西洋の浮世繪研究書には一概に彼を鳥山石燕（本姓は佐野、名は豐房、正德二年江戸に生れて天明八年に死んだ）の子となつて居る。これは眞實でないらしい。この武州川

越産れ(名人忌辰錄に依る)の歌麿(本姓は小川氏、幼名市太郎、諱は信美、字は豐章)は幼少の時已に江戸に出て、その當時根岸に住んで居た石燕に就いて繪を學んだもので、石燕とは師弟の關係であつた。石燕の畫風は多少の變化はあるが狩野派範圍のもので、詰り歌麿も最初は狩野派風の敎育を受けたものである。(今日殘つて居る歌麿の繪のなかには狩野風の手法を追つたものも發見される。)安永時代には吉原の大門口に住んで細見の版元として聞へた蔦屋重三郎の食客となつて居たやうである。勿論彼のこの生活が將來『繪畫に於ける遊女の傳記者』として顯はれるに至つたことゝ大きな關係あつたに相違ない。彼は毎夜吉原の歡樂鄕を彷徨して女の妖術の奴隷となつたものか何うかは知らぬが、この當時の吉原は單に物質的な肉の樂園としてのみ取扱はれべき場所でなく、女の美貌や歌や酒の集會地であつたと同時に、詩や感情が藝術的に發達の頂點に達して居たのも此處であつた。彼はこの吉原を一種の研究所と見て、彼の官能的放逸が精神的反省と合體して藝術的理想の境地へ漸次に入込んだものと思つて間違はあるまい。天明三四年彼が三十一二歳の頃には彼は蔦屋の食客ではなく、繪畫の上では師石燕の畫風を遠さかつて、その頃評判の勝川春章や北尾重政の影響を受けて錦繪の作家(これまでは重もに黄表紙の挿繪に手を染めた經驗だけであつたが)として顯はれるに至つた。彼が春章重政から轉じて清長の感化を受けるに至つたのは自然であつた。清長は彼より年長でその當時美人畫家として第一流の大家であつた。又彼は一方に花鳥蟲魚の寫生から自己獨特の境地を拓こうと努力した。その重要な收穫として今日尊敬されて居る彼の作物のなかに先づ第一『蟲撰』や『鹽干のつと』等を數へる。

彼の三十六歳から四十七歳に至る寛政時代殊にこの時代の下半期は彼の全盛期で、寛政八九年から十一年頃にかけて如何に彼が一斑的繪畫の成功を恣にして居たかは、自分の錦繪に『正銘歌麿』といふ落欵に本家の印を捺して贋作と區別した事實でも推察することか容易である。實に彼がその當時評判の美人を題材に使つて自由自在に表現した所謂歌麿式の情調が如何に人を動かしたかは想像するに難からない。享和文化時代は彼の衰頽期でこの時代の彼には潑溂たる生氣が無い。今日非常に澤山の作物が殘つて居るのを見ても彼がこの時代の多作濫作は人に悲慘の感を與へずには置かぬ。文化元年の出版にかゝる繪本青樓年中行事二冊(一九の詞書入り)は歌麿の作としては特別論する程の價値が無い。又同年に描いた『太閤五妻洛東遊觀之圖』は一身上に禍を招いて入牢の上手鎖の刑に處せられた有名なものだが、その價値は單に史料の上に於てのみである。圖は秀吉

が妻北の政所、淀君、松の丸殿、三條殿、加賀殿、石田三成等と一所に醍醐の花見を描いたものだが、調色描線共に混亂して中心歸聚の統一を全然缺いて居る愚作である。

歌麿の歿後『今日二代歌麿』として知られて居るもの彼の寡婦に通じて一所に成つたといふ說が西洋の浮世繪研究書には一般に書いてあるが、橋口五葉氏は歌麿には寡婦が無かつたと記して居る馬琴を信じて、『寛政二年八月二十六日彼の妻は死んだ其後は再び娶らず』と書いて居られる。

日本の美術史は長いが、その中でも浮世繪の美人が顯はれたのは最も深い興味がある頁である。而してこの浮世繪の美人を一番理想化して優艶精緻の表象とした畫家は則ち歌麿其人である。そりや、不自然な彼の美人を誹つて所詮は衰頽藝術に外ならぬと評するのも人々の勝手だが、僕自身は彼の美人を眺めて如何にも不思議に自分と近くて親しい、古いけれども極めて新らしい女性的藝術の精神に觸れる感じがする。時代は變化する、現實的になる、從つて實際的問題の上に醜くなる。所で僕は歌麿の美人の實際的影響が更に一層大きくなるのを希望する。歌麿の美人にあやかつて僕等現代人はもつと肉體的に麗はしくなつては如何

附記。僕は昨年『歌麿墓碑建設追善遺作展覽會』では豫想した如く失望したと敢て云はざるを得無つた。もつと作品が日本に所有されて居さうなものだと思はざるを得無つた。それに反して僕はこれも昨年であつたか、『廣重六十回忌追善紀念遺作展覽會』では豫想した如くに滿足した。代表作が完全に日本に所有されて居て廣重の價値が一層高まつたやうに思つた。そして又日本には歌麿の代表作が日本に少い事實を見て、僕は（皮肉に聞へるかも知れぬが）歌麿の眞價が益々高まるやうな感じを持つたのである。代表作が澤山に日本にある廣重と、代表作が日本に最早や少い歌麿とを考へると、その作品が日本に有らうと有るまいがそれは本人の廣重と歌麿との價には關係が無い、――代表作が澤山日本にある廣重勿論喜ぶべきだが、『代表作が日本に少い歌麿』を特別に悲しむ必要も無いと思つた。然しその代表作が日本に無いと我々は彼を完全に觀賞する便宜が無い。であるから今日日本に殘つて居るだけの作品でも（版畫にせよ又肉筆ものにせよ）將來は外國に賣飛さずに日本國內に保守して置いて貰らいたい。又歌麿ばかりで無い。其他優秀な版畫の名品は一枚でも國外に出さぬ決心をして貰らひたい。

雨夜双紙

魚の妖・蟲の怪

田中貢太郎

岩魚の怪

村の男は手ごろの河原石を持つて、岩の凹みの上で、剝いだ生樹の皮をビシヤビシヤと潰してゐた。その傍にはまだ五六人の仲間がゐて、潰した皮粕を固めて笊の中へ入れたり、散ばつてゐる樹の皮を集めて、その手許に置いてやつたりした。

其所は木曾の御嶽つゞきの山の間で、小さな谷川の流れを中にして、兩方から迫つて來た山塊は、手前の方は幾らか緩い傾斜をして、山路なども通じてゐるが、向ふ側は、頂に女の髪を振り亂したやうな綠樹におほはれた筍に似た岩が、層々として聳えてゐた。岩の上には所々石南花の眞紅の花が咲いてゐた。谷の上に見える狹い空には、午近い暑い陽がギラギラしてゐたが、谷底は秋のやうに冷々してゐた。

彼等は、谷川の淵で毒流しをして魚を捕る爲に、朝早くから下の村から登つて來て、川縁の樹の皮を剝ぎ、椒の實や蓼などと一所に潰して、毒流しの材料を作つて居る所であつた。

『これ程ありや、あまる程ある、もう、よかよか、』と、皮粕を入れた笊を斜にしながら、一人の男が云つた。

潰す材料も、もう殘りすくなくなつてゐた。

『そんぢや、飯でもやつて、一休みして、始めるかの』と、一人は體を起こして、兩手を先さがりにウンと擴げながら脊のびをした。

七人ばかりの村の者は、平らかな岩の上に車座に坐つて、辨當を使ひはじめた。各自が家から持つて來た盛相飯(もつさうめし)は後にして、眞中に置いた五升入りぐらゐな飯鉢の中にある團子を、指で撮んで旨さうに喫ひ出した。團子は煮た黒い黍團子であつた。

團子を喫ひながら捕るべき魚の話をしてゐた。

『でつかい山女(やまめ)が居るぞ。』と、一人が云ふと、一人は團子を呑み込みながら云つた。『こゝには、岩魚(いはな)が多いよ、』

白い法衣を著た僧が傍へ來て立つてゐた。團子を撮んで口に

入れやうとした一人が眼をつけた。『お坊さんじや、』

他の者もその聲に氣がついて僧の方を見た。僧の方に脊を向けて坐つてゐた者は、體をねぢ向けて仰向くやうにした。

僧は菅笠を著て、竹杖を突いてゐた。綠樹の色が薄すらとその白衣を染めて見えた。

『お前さん達は、此所へ何をしに來てゐなさるのか』と、僧は優し味のある聲で云つた。『毒流しに來て居る所じや、』と、はじめに僧を見付けた一番年下に見える若い男が云つた。

『毒流し……魚を捕る毒流しかの、』

『左樣じや、』

『それは殺生じや、釣る魚なら、餌の爲に心迷ひのした物だから、殺生の內でもまアまア好いとして、毒流しは罪咎のない物まで、一所に根だやしにする事になるから、それは好くない事じや、』

誰れも返事をする者がなかつた。そして仲間同志で、あちこちと顏を見合はし合つた。

『殺生はやめるが好い、魚の生命も、お前さん達人間の生命もおなじ事じや。なにによらず、生物の生命を取る者は、その報ゐを受けずには居らん、やめるが好い、やめるが好い、私は出家じや、噓を云ふて、人を嚇かしはせん。』と、僧は又云つた。

『それも左樣じや、ふン……』と顏の赤い額の狹い男が、腕組をして首をかしげながら云つた。

『左樣じやなア、そんぢや、もうやめるか、』と、若い男の右側にゐる顎髯の延びた男が云つた。『まア、飯を喫ひながら考へやう、』と僧の前にゐる體を曲げた男が云つた。

『お坊さんも、一つどうで御座います。團子が澤山ありますが、』と、顏の赤い男が云つた。

『左樣か、それは有難い、一つ戴かう、』と、僧は其所へ坐つて杖を傍に置いた。僧の前にゐた男は、體を横の方に片寄せて、僧を一座の中へ入れるやうにした。その男の右にゐた顏の赤い男は、團子の鉢を僧の方に寄せた。

『これは戴きます、』と、僧は三つばかり取つて掌に入れながら、その一つをモクリと口に入れて、一息にのみくだした。

若い男は、ふとその容が眼についたので、お坊さんは空腹であつたなと思つて、おかしかつた、僧は後の團子もはじめのやうに、モクリと口に入れて、皆一息にのみくだした。

僧が喫ひ出したので、彼等の手も團子に行つた。そして僧に聞えないやうな小さな聲で、毒流しを中止するか、決行するかに就いて、相談し合つた。

『やめるとするか、お坊さんの云ふ事じや、』と、若い男は、そ

の隣にゐる前歯の一本無くなつた顔の大きな男に囁いた。

『そんな事があるもんか、あの坊主の云ふ事よ、』と、その顔の大きな男は、嘲けりの色を口元に浮めて、若い男に囁きかへした。

　團子が無くなつたので、盛相を開けて、その柝櫞（わげもの）の器に入れた粟飯などを喫ひ出した。顔の赤い男は、盛相の蓋に玄米で焼いてあるグタグタの飯を別け、起つて行つて、熊笹の莖を二本折つて來てそれを添へて僧の前に出した。

　僧は辭退をせずに、又その飯を喫ひ出した。僧の喫ひ方に好奇心のある若い男は、そつと僧の方を見た。僧は一箸飯を口に入れては、仰向いて咽喉をうねらして、如何にも喫ひにくさうにしたが、それでも一箸一箸と口に入れて行つた。彼はあのお坊さんは、おかしな物の喫ひ方をする人だなと思つてゐた。

　飯がすむと、皆谷へおりて行つて、水を飲んだ。犬のやうに流れの上に口を浸して飲む者もあつた。僧も村の人の後から谷へおりて行つて、岩の端に俯向き、菅笠を水に濡らさないやうに、片手を笠の縁にかけて心持ち反らしながら、口を流れに浸してゐた。

『おい、どないにする』と、顔の赤い男は、團子の鉢を麻布に包みながら云つた。

『どないにするもんけ、やらうよ』と、顎髯の男が云つた。

『お坊さんが、あんげに云ふじやないか、』と、顔の赤い男は迷ふてゐた。

『生物を殺せと云ふ坊主はないぞ、』と、顔の大きな男は、傍からその男を見た。

『そりやまア、左様じや』と、顔の赤い男が云つた。

　僧が岩を傳ふてあがつて來た。顔の大きな男は、その方に注意しながら、顎髯の男に云つた。『こんげに構が出來た後に、やめられもならんし、』

　僧はあがつて來て、顎髯の男の前に立つた。『矢張り毒流しをやる積りかな、』

『これから相談をして、やめるなりなんなり致しますが、昨日から構をして、今朝は今朝で二番鶏から起きて來て居りますし……』と、顎髯の男は云つたが、腹の中では僧の言葉をあざ笑つてゐた。

『お前さんは、どうもやる積りらしいが、殺生をしてはいかん。魚でも人間でも、生命の欲しいのは一つだからな、』

『私がひとり、どうと云ふ事はない、相談して皆がやめると云へば、やめても好い。』

『どうぞ殺生しないやうに、物の生命を取つた物は、屹とその報ゐが來るからな、』

『皆と相談します』
『それでは、私はこれから行くからな、』と、僧はあたりにゐる人々の顔を一わたり見て、齋にあづかつた禮を云つて、『どうぞ殺生しないやうにな、』
　僧は靜に山路のある方にあがつて行つた。人々の眼に、僧の眼の淡い藍色の光が顫へついてゐた。
『あのお坊さんは、どこから來たらう、』と、若い男が云つた。
『どうぜ乞食坊主じや、この山の上に人里でもあると思ふて來たらう、』と、顎髯の男が面倒くささうに云つた。
　僧の姿はもう綠樹の蔭になつた。人々は頭を集めて、中止か決行かに就いて相談をはじめた。
『お前だちが厭なら、俺は一人でもやるぢや、』と、顎髯の男が云ひ張つた。
　迷ふてゐた者も、その言葉に力づけられて、毒流しを決行する事になつた。で、皆がすつ裸になつて、皮粕の入れてある笊をはじめ、魚を入れる笊や、しやくひ網を持つて、谷におり直ぐ其所の谷水が一坪ばかりの所に澱んで、小さな淵をしてゐる所から皮粕を入れてみた。
　人々は眼を光らして、水の上を見てゐた。きざみ煙草一服吸ふ位の間を置いて、青白い五寸ばかりの魚が、腹をかへして浮いて來た。それは山女であつた。
『や、一つ浮いた。』と、誰れかゞ云つた。
　しやくひ網を持つた者は、手早くそれをしやくつて捕つた。十疋ばかりの小さな鮠も水の泡のやうに浮んだ。續いて二つばかり青白い魚が浮いて來た。腹の黃ろな細長い胴體が浮いて來た。その胴體は鰻であつた。
『鰻だ、鰻だ、』と若い男が嬉しさうに叫んだ。
　山女と岩魚とを十疋ばかり捕ると、その淵を棄てゝ下の淵へと行つた。上流の毒汁が幾分でも流れ込んでゐるので、もう五つ六つの鮠が腹をかへして片泳ぎをしてゐた。其所にも又皮粕を入れた。山女や岩魚が又七八疋半死になつて浮いて來た。
　一行は下へ下へと降つて行つた。そして淵を見ると、皮粕を入れて、半死になつて浮いて來た魚を捕つた。
　陽が傾いて谷の間が陰になつた時分に、今までよりは大きな淵にでくはした。
『此所には居るぞ、』と、顎髯の男が云つた。彼は皮粕を入れる役になつてゐた。
　皮粕は他の淵の倍も入れられた。二三疋の岩魚が先づ浮いて來た。その後から山女が一つ浮いて來た。
『淵がでつかいけに、藥がきかないぞ、』と、顔の大きな男が云

つた。
顎髯の男は、又皮粕を入れた。木の枝を持つてゐた誰かゞ、それを入れて、水の中を掻きまはした。一尺ばかりある岩魚が腹をかへして浮いて來た。
『や、出たぞ、出たぞ。』と、皆が一所に云つた。
しやくひ網を持つた者は、岩を傳つて行つて、下へ流れて行かうとする魚をしやくひあげた。山女も三つ四つ浮いて來た。しやくひ網を持つた男は、又それをしやくひにかゝつた。と、四方が急に薄暗くなつて、頭の上の木の葉がザザザと鳴りはじめた。大粒の雨の雫が水の上にポトポトと落ちて來た青暗く沈んでゐた淵の水が急に動きだしたかと思ふと、白い大きな藍色の魚の背が見えて來た。人間のおとな程ある氣味惡い大きな岩魚が、白い腹をかへしながら音もなく浮んだのであつた。
雨は烈くなつて、谷はますます暗くなつてゐた。
大岩魚は、そのあたりの谷川にたまたま居る事があると云はれてゐる物で、頭から尾までが、五尺ばかりもあつた。人々はその鰓を藤葛にとほして、二人がかりで擔つて來た。
その夜、一行の者は、この大岩魚を肴にして、その日の慰勞をやると云ふ事になり、一行に加はつてゐた者の家を宿に頼んで、魚の料理にかゝつた。庖丁を持つてゐる者は、顎髯の男であつた。
『あの坊主の云ふ通りになつて、やめて居つたら、こんな魚が拜めるけい。』と、彼は蹲んだなりで得意さうに云つて、先づ庖丁を腹からおろした。
若い男が松明を點けて、その明りを俎の上に落してゐた。顎髯の男は、魚の腹へ庖丁が通つたので、手先をさし入れて腸を引き出した。と、その中から今日晝飯に怪しい僧にも別け、自分達も喫つたやうな黍團子が三つばかりコロコロと出て來た。顎髯の男は、ウンと云つて背後に倒れて氣を失つた。

蠅供養

火鉢に翳してゐる右の手の甲に、一疋の蠅が來てとまつた。まだ二月の餘寒の强い頃にあつては、蠅は珍らしかつた。九兵衛は、もう蠅の出る時候になつたのかと思つたが、それにしても餘り早すぎるのであつた。
九兵衛は手を動かして蠅を追ふた。蠅は前の帳場格子の上に

行つて、手足を動かしはじめた。其所は京の寺町通松原下ル町にある飾屋であつた。店には二三人の小僧がゐて、は入つて來る女客に頭の物をあきなふてゐた。九兵衛はもう蠅の事は忘れて近々大阪の方へ嫁入する親類の娘を祝ふてやる贈物の方に心をやつてゐた。

飾屋の奥の部屋では、女房と娘とが向き合つて針仕事をしてゐた。娘は十七八の人形のやうな顔をした女であつた。女房は時々娘の縫方に細かな注意をしてゐた。縁側の障子には、下半面に朝陽が薄赤く射してゐた。

女房は紅い小さな切れを膝の上でつまふとした。一疋の蠅が何處からともなく飛んで來て、女房の鋏を持つた手にとまつた。

『まア、もう蠅が出たよ、』と、女房は不思議さうに云つて、蠅を見詰めた。

娘は嫁入する事になつてゐる親類の娘に對する妙な嫉妬を感じて、その娘の缺點などをそれからそれと考へてゐたので、蠅をちよいと見ただけで、何も云はなかつた。

『この寒いのに、なんぼなんでも、あんまりぢやないか、』と、女房は又云つた。

『すこし早いやうですわねえ、』と、娘は何か考へながら氣の無ささうに云つた。

『早いとも早いとも、時知らずの蠅ぢやよ、』と、女房は娘の方を見て、そして蠅の方に眼をやると、もう蠅は見えなかつた。

『……もう何處かへ行つたよ、何處へ行つたらう、』と云つてそのあたりを見廻はしたが、蠅の影は見當らなかつた。

午が來て家内同志で午飯を喫つてゐた。亭主の九兵衛が空になつた茶碗を出すと、その傍にゐた女中がお給仕の盆を差し出した。と、その盆にとまつてゐたのか、一疋の蠅が九兵衛の茶碗を持つた方の手首にとまつた。

『又蠅が居る、』と、九兵衛は驚いた。

九兵衛と向き合つてゐた女房も、さつきの蠅の事を思ひ出した。『あなたの所に居りましたか、私の所にもさつき一疋居りましたよ、』

『さうか、今朝帳場で見たよ、』と云つて、九兵衛が、茶碗を盆の上に載せると、蠅は二人の膳の間になつた。疊の上に移つた。

『まアどうした蠅でせうね、本當に時知らずぢやありませんか、』と、女房は箸をやめて、疊の上に眼をやつた。

『ちと早いな、』と云つて、九兵衛は飯の入つた茶碗をとりあげた。

女房と女中の間にゐた娘は、ふと思ひ出した。『それはさつきの蠅でせうか、』

『左樣かも知れんよ、今頃そんなに蠅が居るものか、』と、女房は云つた。

「店に居つた奴も、これかも分らない。』と云つて、九兵衛が疊の上に眼をやると、もう蠅は居なかつた。『あゝもう何處かへいつたな、』

やつ時分になつて、九兵衛が帳場で茶を飮んでゐると、蠅の影が又見えた。蠅は帳場格子の上から机の上におりた。それと前後して、表座敷で親類の老人と話してゐた女房の耳元でも、蠅の羽音が微かにした。

夜になつて、親子三人が行燈の下で話してゐた。九兵衛が何か云ひながら、見るともなしに見ると、行燈の横の障子に墨をつけたやうに、一疋の蠅がとまつてゐた。

『又居る。』と、九兵衛は不吉な物を見付けたやうに眼を見張つた。

『蠅、』と、女房も顏を持つて行つた。『さつきの蠅でせうか、あれからお爺さんと話してゐる時にも、耳のはたを飛びましたよ、』

『俺の所にも、おやつに茶を喫んでゐた時に居つたよ、』

『おんなし蠅でせうか、潰しませうか、』

『潰さずに撮んで外へ捨てやう、』と、九兵衛は兩の掌を持つて行つて、紙の上にじつとしてゐる蠅を中へすくひ込んだ。『戶を開けてくれ。』

女房は緣側に出て、雨戶を細目に開けた。外は暗かつた。九兵衛は後から行つて、掌の中の蟲を向ふへ突き放すやうに捨てゝ戶を閉めた。

翌日の午時分、九兵衛と女房とは、茶の間で火鉢を中にして、親類の娘の嫁入の事に就いて話してゐた。

『叔父の所ぢやから、簞笥位は買ふてやらんといかんぢやらうな、』と云つて、九兵衛は見るともなしに女房の右の肩先を見ると、一疋の蠅がとまつてゐた。『又、蠅が來たぞ、』

『何處に、』と、女房が顏を動かすと、蠅は九兵衛の膝頭に移つた。

『昨日の蠅でせうか、』

『左樣かも分らんな、』

『煩ひから潰しませうか、』

九兵衛は兩手の掌を窪めて左右から持つて行つて、直ぐ掌の中へすくひ込んだ。『潰さずに何處か遠くへ捨てさせやう。店から袋を持つておいで。』

女房は默つて部屋を出て行つたが、直ぐ店で使ふ小さな紙袋を持つて來た。『清吉が堀川の方へ用達しに行くさうぢやから、あれに捨てさせませう、』

九兵衞は女房に袋の口を開けさせ、その上に手を持つて行つて、下の方から蠅を出し、急いで袋の口を捻ぢた。女房はそれを持つて、再び店の方へと行つた。

夕方になつて、親子三人で夕飯をはじめやうとしてゐた。女中は湯氣の立つ鍋の中から煮た物をしやくふてゐたが、それがそれぞれ三つの椀には入ると、一所に盆に載せて女房の方に出した。女房は先づその一つを九兵衞の膳に載せやうとして、椀を差し出した所で、蠅が來てその手首にとまつた。

『あ、』と女房は何か恐ろしい物でも、とまつたやうに見詰めた。

『蠅か、』と、九兵衞は煩ささうな顏をした。

『今朝の蠅でせうか、』と、女房は左の手を持つて行つて追ふた。

九兵衞は椀を受け取つた。『まさか、今朝の蠅ぢやなからう、』

蠅は二人の眼前をチラチラしてゐたが、やがて九兵衞の右の腕の上にとまつた。九兵衞は左の手を持つて行つて、掌で伏せ、そつと指に撮んだ。『おんなじ蠅が戻るか戻らんか、ためして見る、お豐、臙脂を持つておいで、』

娘が臙脂を持つて來ると、九兵衞はそれを羽にも體にもべとべと塗つて、又紙袋に入れたが、朝になつて、直ぐ近くで店を出してゐる弟の勘右衞門が伏見へ行くと云つて寄つたので、その袋を賴んでやつた。

蠅は一疋であつたと見えて、その日は一日誰れも蠅の姿を見なかつた。その日は薄曇のして寒い日であつた。夕飯のあとで九兵衞は蠅の事を云ひ出した。『今日蠅の居らざつた所を見ると、矢張り蠅は一つであつたらしいな、それとも二疋居つて一つは昨日捨てゝ居らんやうになり、一つは今日捨てに行たから、それでもう蠅が居らんと云ふ事になつたかも知れんな、』

『それとも昨日の奴が戻つたかも分りませんよ、』と、女房は物の陰影を見てゐるやうな眼付をした。

『この寒いに、そんなに蠅は澤山居らんぢやらうが、堀川あたりへ捨てた物が、戻つて來やしないだらう。』

『左様でせうか、どうも私はあの蠅が戻つて來たやうな氣がしますよ、』

女房の眼前の行燈の障子に蠅の影が見えた。『又蠅が』、と彼女は恐ろしさうに云つた。

九兵衞は横から顏を持つて行つて、一眼見た後に膝を寄せて

行つて、兩手で蠅をすくひ、それを右の指先に輕く撮んで行燈の戸を開けて、燈火の光に透して見た。羽にも腹の下にも、塗つたまゝの臙脂がついてゐた。九兵衛は、ふと氣がさした。蠅は指の下をすべり拔けて、彼と女房との頭の上あたりを靜に飛んだ。

『臙脂がついて居りますか、』と、女房は大きな聲をするのが恐ろしいと云ふ風に聞いた。『うむ、』と、九兵衛は頷いて見せた。

彼の心は何かに行き當つてゐた。彼の心には先月亡くなつたお玉と云ふ女中の事が浮んでゐた。若狹の生れで、宇治の方に伯母が一人あるだけで、他には親も兄弟も無い女であつた。圓顔の小作りな女で、飾屋へ四五年も奉公してゐる間に、著物は一枚もこしらへずに、百目ほどの銀をためた。

『そんなに錢ばかり集めて、どうします、』

ある日、女房が冗談はんぶんに云ふと、お玉はかう答へた。

『お父さんとお母さんの位牌をお寺へ立てたいから、それで集めて居ります。』

そして、昨年の秋になつて、お玉は常樂寺と云ふ寺へ兩親の位牌を立て、祠堂料として銀七十目を收めたが、その殘りの三十目は主人に預けてあつた。それが冬になつて病氣になつて、次第に重くなつて來たので、宇治の伯母の許へ引取られて養生してゐたが、たうとう先月の十一日に亡くなつた。――九兵衛はふと、預つてまだそのまゝとなつてゐる女の錢の事を思ひ出した。

『お玉に錢を預つてゐたな、』と云つて、彼は女房の顔を見た。

女房は九兵衛と眼を見合はしただけで、聲を出さなかつた。蠅はまだ頭の上の方で羽音をさしてゐた。

『あんなにして、親の位牌をたてた女ぢやから、あの錢で供養でも受けたいと思ふて居るかも分らんな、』

『左樣でございますよ、』と、女房は體をこはばらせたやうにしてゐた。

『あれの死んだのは、何時であつたかな、』と、九兵衛は考へて、『十一日か、……それで、さうすると、明日は四十九日ぢやな、』と、又少し考へて、『よし、明日は勘右衛門に賴んで、我家から三十目足して、六十目にして、通西軒と端光寺とに三十目づつ收めて、供養をしてやらう、』

蠅はもう見えなくなつてゐた。そして朝になると、臙脂をつけたその怪しい蟲は、又何處からともなく出て來て、九兵衛と女房との傍をチラチラと飛んだ。二人はもう蠅の事を云はずに、默つてその姿を見てゐた。

朝飯がすんだ所へ、勘右衛門が呼ばれてやつて來た、蠅は女

房の膝頭にとまつた。

『蠅が戻つて來たよ、』と、九兵衛はその顔を見た。

『なに、あの蠅が戻つた、』と、勘右衛門は呆れて眼を見張つた。

『それ、その蠅だ、』と、彼は女房の膝頭の蠅に指をさしながら、女の供養の事を話して、『で、御苦勞でもお前にお寺へ行つてもらひたいが、』

『行きませう、それが宜しう御座いませう、』と、勘右衛門は承知した。

女房が勘右衛門に渡す銀を取りに起たうとすると、蠅は九兵衛の右の手の甲に移つた。勘右衛門も、九兵衛も、じつと怪しい蟲を見てゐた。

女房が布施にした二つの紙包みを持つて、坐に戻つて來た。と、今まで九兵衛の手の甲にとまつてゐた蠅は、コロリと疊の上に落ちて死んだ。

三人はそれを見詰めた。そして、その眼を蠅から放して互に見合はしあつた。

蠅の死骸も一所に寺にやる事になつて、小さな箱に入れて、勘右衛門が持つて行つた。そして先づ深草の通西軒に持つて行くと、自堂上人は、蠅に加持土砂をふりかけた。

次に瑞光寺に持つて行くと、慈明上人は經を讀んで、蠅を山上へ葬つて、卒都婆をたつた。これは元祿十五年に於ける京の巷説の一つである。

明治神宮外苑に建設すべき聖徳記念繪畫館の懸賞設計について

黒田鵬心

一

代々木に造營中の明治神宮は、現在の青山舊練兵場を以つて其の外苑とし、二三の建築物及び運動競技場其の他の設備をする計劃を立て、既に憲法記念館は、北邊權田原の方面に移建せられてゐる。而して信濃町方面に於いては、明治天皇御大葬の葬場殿趾に記念建造物を建て、其の前に聖徳記念繪畫館を建築する事となり、其の設計圖案は廣く一般から懸賞競技として募集された。

建築の懸賞設計については、從來賛否種々の説があつたが、建築の性質によつては、特定の建築家に設計させるよりは、一般の懸賞設計による方が適當である。例へば公共的建築物であつて、夫れが國民全體を代表するとか、戰捷を記念するとか、一世の偉人を記念するとか云ふ場合には、一人の建築家に任かすよりは、一般建築家の競技による方が、其の建築の性質に適當し、其の意味を强める事になる。此の理由から國民全體を代表する議院建築の如きは、一國內全體の建築家の設計を集めて、其の優秀なものを採るのが最も上策であると云ふのである。

聖德記念繪畫館及び葬場殿趾記念建築物の如きも、其の性質上懸賞設計によるのが、最も適當してゐる。國民たるものは何人も明治天皇の御聖德を記念し奉らんとの熱情と誠意とを有してゐるのであるから、其の記念建築の設計も亦國民の內から、國民を代表したものでなければならぬ。此の點で余は聖德繪畫館の懸賞設計には大に贊成してゐたのである。

併し、如何に建築の性質上、懸賞設計が適當であつても、其の懸賞募集規定と審査員の如何によつては、決して奬める事が出來ない。規定が不完全であつたり、審査員が不當であつては、折角の懸賞設計も其の功能を現はす事が出來ない。

聖德紀念繪畫館の場合は、規定にも別に缺點はなかつたし、審査員も畫家の一人も入つてゐない事が、やゝ物足らなかつた位で、建築家としては、塚本、伊東、佐野の三博士が居られ、申分はなかつた。募集の發表が六月半ばで、締切が九月半ば、卽ち其の間僅に三ケ月だつたのは少し時間が不足であつたが、暑中休暇を含んでゐたので應募者には都合がよかつたであらう。

さて締切となつてみると、時日の僅少であつた割には、應募數も多く、總數百五十六通に達し、其のすべてが比較的整つてゐた事は、後に公開された結果をみてもわかる。當選圖案は、一等が小林正紹氏、二等一席が渡邊仁氏、同二席が長谷部鋭吉氏、三等一席が渡邊仁氏、同二席が久留弘文氏、同三席が竹腰健造氏、四等一席が下元連氏、同二席が松淵清助氏、同三席が北澤五郎氏、同四席が吉武東里氏であつた。

而して當選圖案は、其の他の圖案（殆んど全部）と共に十月五六の兩日、憲法記念館內に陳列して公開された。余も幸に一覽したので其の感想を記してみやうと思ふ。

二

建築の懸賞設計に於いて審査後、其の圖案を陳列するのは當然の事であつて、從來も三菱本社、大阪市公會堂其他屢々行はれたが、何れも當選圖案のみに限られ、今回の如く落選全部を陳列公開したのは、聞いた事がない。これは頗る進步したやり

方で、審査の公平を示すと共に、落選圖案にも亦大に學ぶべき所あるがあるので、斯界に與ふる利益を增す譯である。審査員としては、非難を受ける機會が多くなる譯であるが、自信ある審査であれば、公開しても何の憚る所は無い筈である。又當選者は落選圖案と比較する事が出來、落選者も亦他の落選圖案と比較する事が出來る。而して第三者にとつては殊に多くの興味を與へ、利益も尠くない。何れにしても當選圖案のみを公表するよりも利益と興味とが多い。今回當局者が總べての圖案を陳列公開したのは、確かに懸賞設計の一大進歩であつて、吾人は當局者の所置に贊成する者である。

さて全部の圖案を通覽して、直ちに氣のつく事は、先年懸賞募集をした明治神宮の寶物殿の當選圖案の影響が多い事である。一層之れを露骨に云へば、寶物殿の模倣の多い事である。同じく明治神宮に關する建築物であつて、寶物殿と繪畫館とであるから、其の性質もやゝ似てゐるし、誰しも考へつく事であるが、前者の模倣は甚だ面白くないと思ふ。

次には外國の博物館や美術館を模倣したものも可なり見受けた。繪畫館と云へば、直ちに外國の立派な美術館が頭に浮ぶのであらうが、此の模倣も亦面白くない。募集の條件の內には、樣式に關しては我が國現代藝術の精華を現はすといふやうな漠然たる事が書いてあつたが、それから考へても、外國の美術館の模倣では困るのである。

前の寶物殿を模倣し、若しくは寶物殿から胚胎したと思はれるものは、主に日本式を土臺としたものであるが、日本式で寶物殿と關係なく、可なりいゝものもあつた。併し當選圈內に入るべき程のものも亦見當らなかつた。後の外國の美術館を模倣したものは、クラシツク式が多かつた。この內には秀逸も中々多く、當選圈內に入つたものもあつた。併し今回上席を占めたものは、寧ろ新しい式のものであつた。即ち一等の小林氏の圖案、二等一席の渡邊氏の圖案ともに、洋風の最も新しいものである。クラシツク式でもなく、又我が國の洋風建築に最も多いルネツサンス式でもなく、一層新しい樣式である。それが果して我國現代藝術の精華を現はしてゐるか否かは問題もあらうが、クラシツク式やルネツサンス式よりは、確かに要求に當嵌つてゐる。和洋を渾然打つて一丸とした新日本式とも云ふべきものが現はれゝば、之れに越した事はないのであるが、今の應募の成績では、殘念ながら其の域まで達したものはなかつた。

三

當選圖案について短評を加へてみると、まづ一等の小林氏の

は、十分威嚴を供へてゐる事と、繪畫館と葬場殿趾記念建築物との前後の關係が巧妙に出來てゐると思ふ。低くて大きな繪畫館と高くて小さい葬場殿趾の塔とはよく釣合を保つてゐる。樣式も混成的のものであるが、全體としては新し味があり、しかも穩健である。誰がみてもまづ一等は動かないものであらう。

二等一席の渡邊氏のは、前者に比べると、ずつと新しい點が多い。中央が可なり高くなつて威嚴を持つてゐるが、葬場殿趾記念建築物の方は、低くなつてゐる。プランに於いて一般拜觀人を背面から入れるやうになつてゐるのは、不便であるし、感じもよくあるまい。比較的簡單な意匠で、さつぱりしてゐる所が特色であるが、何となく洗練を缺いてゐる樣に思はれる。

二等二席の長谷部氏のは、中央が非常に高く、其の奇拔の點と雄大の點とに於いて人の膽を奪ふものがある。館の中央は明治天皇の御肖像を建て、兩方に高い記念柱を立て、建築を賑やかにし、其れ等の比例も面白く出來てゐる。實に此の圖案は茫漠たる點に於いて、此の懸賞設計全部を通じて類がないのみならず、日本人の設計として、我が建築界の珍である。又此の設計が浮彫を多く利用してゐる事も、繪畫館として應はしい事で、優れた點である。配景圖と配置圖の描き方も中々巧みであつて、場中に異彩を放つてゐる。

三等一席は二等一席と同人たる渡邊氏であるが、此の方は大分變つて、中央は高いドームとなつてゐる、さつぱりしてゐる所は似てゐるが、拜觀人の入口を前に取つた所などは全く違つてゐる。葬場殿趾は、低くて墓のやうである。

三等二席は久留氏である。中央は低いドームで、前面にコロネードを持ち、西洋の美術館風に出來てゐる。殿趾記念建造物は、細くて高いドームで、繪畫館と對比をなしてゐる。

三等三席は竹腰氏ので、中央に高い高塔を有し、繪畫館と殿趾記念建造物とは、アーケードで聯絡し、其の廊下の美しさは、休憩室から見た圖でよくわかる。千駄ケ谷の方の聯絡道路から見ても調和よく出來てゐるのは、用意周到と云はねばならぬ。西洋風ではあるが、何となく垢拔がし、リファインしてゐる。圖も巧に達者にひかれてゐる。

四等一席は下元氏のものである。一體に簡單で、多少倉庫のやうな感じもある。中央に低い角塔をつけたのは一寸變つてゐる。殿趾の建築は頗る小さい。

四等二席は松淵氏の圖案で、中央にドームを置き、前面にはコロネードを配列してゐる。まづ比較的平凡であるが、無難の作である。殿趾記念物は細長い高塔である。

四等三席は北澤氏ので、前者と同じく、中央にドームをつけ、

前にはコロネードをつけてある。三席のと共に相等の價値あるものである。

四等四席は吉武氏ので、中央に高いドームがあり、玄關口には大きなアーチがある。洋風の最もリフアインされた設計で、圖面も中々手際よく出來てゐる。

四

當選發表の當時、新聞紙によつて盛んに好成績を報道されたので、期待の大きかつたせいか、實際をみて多少失望した。併し同時に百數十の懸賞圖案を見た事は頗る愉快であつた。而して當選者が何れも新進の若い建築家であるのは、懸賞設計の有意義なるを證して喜ばしい事であつた。一等の小林氏の如きは、工手學校出身で、廿九歳の技手である。二等一席の渡邊氏も大正元年の工學士である。而して二等二席の長谷部氏が明治四十二年出の工學士で當選者中では最も古いのである。聞く所によれば四十年以前に卒業した工學士連で、しかも嘖々たる名ある建築家が少からず應募してゐると云ふ事である。之等の先輩を凌いで、若い工學士や、工手學校出身者が優賞を得た事は、全く懸賞競技の效果である。

今や建築界多年の懸案たる議院建築の設計も懸賞競技に附せられてゐる。恐らく多くの建築家は之れが設計に努力してゐる事と思ふが、此の明治神宮外苑建築の懸賞設計に比べては、數等の優秀な設計を、なるべく無名の若い天才から得たいものである。(七・一〇・一七)

古峯ヶ原の紅葉

遲塚麗水

一

狐の嫁入すといふ日なり、西の空には澹き日影の霓とばかり雲間を漏れて、山村水郭綺錯して秋青人に媚びたれど、吾が乘れる車のあとさきには、小雨、絲のごとくふり來たりつ、前幌の

蹊より覘ひ見れば、車夫の冠れる饅頭笠や、はをれる紺の合羽はしとゞと濡れて、惨として古峯ヶ原街道のぬかるみ路を歩むなりき。

下野の古峯ヶ原は、昔より修験者の道場として名高き處なり、徳川氏の頃は、日光の輪王寺の支配の下に在りて、三年の間この道場に苦行を積まざれば、日光黒髪の山入は許されざりしほどの、峻厳なる法規と戒律とのありしなり、原と呼ばるゝが爲に、疎林遠く圍み、細徑斜めに通じ、暮の太鼓、晨の法螺、雲にひゞき煙に迷ふ曠野のさまを想はすれど、その實は日光と足尾との間にはさまりたる峻嶺にて、麓より山の嶺の古峯神社の道場までは嶮岨五十八町と註せられ、雲木天に參してをのづと神寂び、胡猿曉にさけび、鵂鶹夜になのりて、行く人の腸を斷つ、わけて幕府のころは、山に天狗の大小眷屬の棲めりといひ傳へて、その道場より出す火防の護符は、武州三峯の狼の繪姿を刷れる盜難除の護符と共に關八州の家毎の門に貼らるゝほどに崇敬せらる、いく先つ年、吾れ端りなくもこの山を踰へて足尾に出で、ひたすらに秋の紅葉の美觀に接したり、舊蹤恍として夢のごとし、この日又た前度の遊びを想ひ、今年の秋の紅葉やいかにと、やがて汽車の人となりしなり。

正午少し過ぎて、鹿沼の驛にをり立ちたり、驛を出づれば、車夫あり左右より余に乘車を勸む、左なる車夫は屈强の青年にて、紺の香高き法被をはをり、淸らかなる護謨輪の車なれど、右なるは五十に餘る老傖夫にて、襤褸の筒袖に枯れたる葱の葉のごとく皺みよれたる半股引を穿き、曳ける車は今の世には珍らしき鐵輪のものなり、乘り心地の輕快なるは前の車なるべけれど、吾は緩漫の遊びなり、五里の路に日は高かければ、刻を割りて走るの要なし、一日の糧を與へんためには、貧しき後の車に乘るを善しとす、さりながら、兩車齊しく吾を客にせんと勸む、吾は車を選ぶに惑へり、地に落ち散りたる藁屑を拾ふて二本の籤をつくり、これを二人の車夫に抽かしめて、長き籤を抽き當てたるものゝ車に吾は乘らんといふ、貧しき者福を獲たり、吾は欣然としてその車に乘る。

二

車頭行く〳〵尖白の一峯の、亂山のうちに抽くを指點しつゝ黑川の滸を度る、黑川のその名にも似ず、瀨には白を噴き淵には藍を湛へたり、その川に傍ふて負郭の稻田幾千頃、もみぢする三鴨、多氣、深岩の山は風煙の外に匂ひて、刺繍せる屛風とばかり晝靜かなるこの町を圍むなり、菊澤山の菊澤神社は、萬里小路藤房卿が三衣一鉢に身を窶し世を遯かれ、不二行者と名の

りて棲遲したる山なりといふ、先つ年の遊びに詣でたり、里の人山陰の荒草裡に一基の石卒塔婆ありしを發きて一面の古鏡と數百枚の古錢とを獲、古き記錄と口碑とによりて藤房卿埋骨のところなるを知り、その趾に社殿を修造して之を祀り、今や縣社に列せられしなりと、この卿晩年の事蹟は杳として尋ぬべからず、妙心寺第二世の授翁和尙こそ、嘉遯の後の身なれと言ひ傳はるれどもこれさへその徵證はたしかならず、雲の悠々、水の退々、この山、この里、或は又たこの人の草を結ひ鉢を置きしところにて、その石卒塔婆は、南朝戰歿の人の亡靈の冥福を祈らんために建てたるものにあらずやなど想はる。

町を過ぎていくばくもなく、衡門深く鎖し素封家らしき人の邸あり、長々と打ち繞らせる黑塀のうちに、庭樹のたゞすまゐも趣きあり、泉石の風致も凡ならずと覺えしが、晝靜かなる深院の雨戸は鎖されて、斯る廣やかなるやしきのうちに、人の氣はひも稀なるらし、如何なる人のすまゐかと車夫に問へば、ぬかるみの路を蹈々として歩みつゝ車夫は語る、此處はこの界隈に聞えたる某大盡の住みたりし邸なるが、幾年の前に主人は世を捐てたりその主人といふは年三十ばかり、亡くなりし先代よりの巨萬の資産を擁して、老ひたる、譜代の番頭に家事一切を打ち任せ、をのれは父祖の遺し定めたる家憲にしたがひて、毎月幾百圓の費用を受け、儘まその遊豫の資とはなしたり、やがて東京のある華族の姬君を妻とし迎へて、吾が代永へに榮あれとことほぎしが、その輿入の荷物は七日に亘りて運ばれ、婚禮の日の祝儀につゞいて、賀宴月の半ばに至るまで催されたり、輿入の當日、われもその伴人のうちに加はりて、遙かに姬君の姿を拜したり、﨟たけき高髷に、綾にしきの裲襠、高髷の上よりは、丈なす淡紅色の羅を被きてをはせり、老女に手を取らせつゝ貸切の一等車よりなよ〳〵と降り立ちて、驛の改札口より直ちに迎への車に乘り、幌深く卸させて、曳く人一人、先綱を執る人一人、後押の人二人、都て四人の靑侍に車をひかせて、前後の車數十輛、『風も光るばかりのさまにて、この邸へと練り入りたり。

車夫は當時の事を語りて、狐のごとく振りむきて、

『檀那の前ですが、その時は手前共まで鍋一把に酒は鷹冠のまゝ柄杓で汲んで飮み法題、紅白の水引かけた祝儀包まで下さいました』

美しき新妻を迎へたる大盡は、尙且その家憲の爲めに、一定の金を老番頭の手より受けて、その日一日を暮すのみなりき、唯若夫婦のなぐさみとして、一週に一度づつ、東京より名高き講談師や落語家を呼び寄せて、その物語を聽き、一夜を笑ひ過

して遣り還す、繁華なる東京より、寂しき田舎に來られし嫁御寮には、この一夜のみが最も娛しき時にて、その外は女夫同志のかけ向ひにて、をかしきこともなく、興あることもなく、口を開いて笑ふといふこともなかりしなり、或時わたくしは、文士より講釋師にうつりたりといふ風谷とやら人の聘ばれ來りしを、車に載せて送迎せしことあり。文士にてありしと聞くからに優形の男と思ひしに、いたく肥えふとりたる五十男にて、眼大きく鼻ふとく、頭髮を毬栗に刈りて、打ち見たるところ劍術使かと怪しまる、この大兵の人を載ぜて、痛くも草臥れたりと語る、

三

路は常に黑川の滸に傍ひたり、川の瀨の蛇籠の碧なす水はせかれて、亂紅點破す落葉のいろ〳〵、山の秋や濃かるらむ、時雨にわかに降り來りしかば、車夫は車を停めて幌を卸せり、語りつぎていふ。

一年を過ぎても、懷姙の沙汰もなし、二年を過ぎても、惡阻の模樣あらず、せめて女夫の仲に幼き子にても擧げなば、寂寞の家庭より、團欒の和樂はうまれなむとひたすらに禱りし甲斐もなく嫁となりて三年に及べどもそのけはひだになし、時をりは夫の友達の來り訪づるゝこともあり、品を盡して饗すが例なれど又た外に出でゝ酒のまむとすることあり、老番頭恭しく一封の金を紙入に容れて主人に擎ぐ、受けてこれを懷にして出で遊ぶ、やがて微醉を帶びて歸り來れば、老番頭手に十露盤を持ちて又た恭しく主人の居間に侯し、料理代若干、祝儀若干合せて金若干圓、殘金若干圓と帳簿に記入し、遺されたる紙入の中の餘金をしらべ、之を收めて立ち去るなり、車夫浩嘆して曰ふ。

『何十萬圓の財産をもつてゐるといつたつて、是れぢやあ俺等の方が餘程樂ぢやありませんか』

主人はやがて病をもつて死せり、あとに殘れる妻、亡夫の追念に幾月かを度りしが、それも日に疎くなりて、浦若き身の、落花啼鳥時には春を懷ふの情に禁へず、一週に一度は東京より聘び來りし講談師も落語家も來ず、事なくては寡婦の居を訪づるゝ人も打ち絕えて、岑寂日に加はり、新刊の小說綺語の類購ひて讀まざるものなく、惓み來れば庭園を逍遙してその悶を消せんとしたれども、終に堪へかねて强いて離緣を乞ひ求めて終に東京に歸り去れり、事は數年の前に在り、大盡の家、今はその親戚の子を養ふて、老番頭は依然として新主に事へをれりと物語る。

われ、車上に安居してこの老車夫の物語を聽き、その人情の機微に接觸したるを感嘆せり、車頭やがて深岩の觀音山を見る、

全山皆な石灰岩なり、山の勢は太はだ奇峭、山腹に洞窟ありて白衣大士の龕を含めり、今ま石材會社ありて、山の石を伐り出し、盛んに四方に輸すといふなり、繪がくべく又た詩すべきの山も幾年の後にはまさに夷げらるべし。

東大蘆の村に入りて、黑川は常に車傍にそふて流れたり、某といふ、次の村に岐るゝ路のかたへに、大いなる欅の木あり、その陰は十數牛を蔽ふに餘りあり、躄勝五郎の雨宿したる樹なりといふ院本箱根山靈驗記にあるその人にて、美姫初花に躄車を曳かせて函嶺の靈泉に浴し、業病平癒して仇を復せる烏有先生なりと思ひしに、かゝる鄙にかゝる遺蹟を留めたりしか、或は思ふ勝五郎はこの國の人なりしかを、こゝを過ぎて遙かなる田の中に一堆の塚ありて馬頭觀世音を祀れる小祠立てり、傳へ曰ふ源賴朝の愛馬磨墨の産れたるところ也と、この邊の農家、家に傍ふて多く黃菊を栽えたり、今や盛りに花さく、その花を摘み把りて、席に載せ、日に晒す、靖節先生村居して酒なきの時、この花を摘んで把に充て、悠然として南山を觀てゐたりし時、白衣の人あり酒を載せて來りしといふが、先生も菊花の膾を好みしものと思はる、この村の花も食用菊にて、乾して菊膾の料とするなりといふ、又たコスモス多し、菊の酣黃に交りて紅紫繽亂し甚だ綺麗なり、野菊は內地に原生すれど、觀賞の花は支那より舶來したりといふ、その菊の字は、實に米を掬ぶ掌の形に象どりしもの、この花のいまだ全だく開らかざるの形になぞらへて面白し、

川の右岸に、二宮尊德翁の、曾つて荒蕪を拓きて美田を得たりといふその田に稻の豐かに穰れるを看て、行くほどにやがて古峯ケ原の麓なり、鹿沼より五里にして稍や遠し、雨全く霽れて夕陽人に媚びたり

四

麓の茶店に入り憩ひて老車夫を勞ひ還す、茶店の古女房、車夫とは懇意のなかと見えて、石原の御前様より托されしとて、黃ばみたる白綸子、古りたる紫縮緬などの解きほどきたるを取り出し、綸子を黑に、縮緬を茄子紺いろに染むるやう鹿沼の上方屋へ持ち行きたもれといひて渡す、石原氏は古峯神社の宮司なりと豫ねて知れり、この人の室は、伯爵某の君の妹氏にてあるよしも聞き及べり、さては古りたる衣裳を解いて、都ぶりの流行の色に染めなすため、紺屋に托すなるべし、大いなる柄繪の紋を染ぬきたる風呂敷に、車夫は叮嚀にそれを包み、空車に載せて去れり。

麓の宿の爐に踞して、うそ寒むの榾火にあたる、宿の女房あつき茶を侑めて、峠の紅葉けふ明日が盛りなりなど語る、山路

に行き難まん人の扶けにと、樺、石楠、冬青、檉などの枝にて五尺ばかりに伐りたる杖の束ねたるが店先にありて、旅人の撰むがまゝにす、その一本を抽き取りて價を問へば、代は受けずといふ、靴を脫ぎて腰にゆひつけ、靴足袋の上に草鞋を穿き、結束してあるほどに、茶の洋服にゲートルを脛に卷き、肩より鞄を掛け、鳥打帽子をかぶりたる、三十五六の髭男、入り來りて框に憩ふ、女房、愛想よく茶を侑めしが、とこの人の鞄の間より漏れ出し簞を見て、慌たゞしく、檀那はその木簞を什麽なさりますと問ふ、髭男簞の名は何かは知らず、古峯ケ原神社に詣でゝ下山のみちすがら、峯の峽の草叢に簇がりて生へゐたるこの簞の、餘りに見事なるものなれば採り來れり、笠の裏に筋の正しく通りたれば毒簞にてはあらず、家に歸りて賞味せんと思ふなりと答ふ、女房顏の色を變へて、毒ならで何とすべき、この簞は月夜簞といひて、若しこれを食する人あらば、一と時とは俟たず、血を吐いて命を終るなり、あな怖ろし、早く門前の川に投げ棄てたまへといふ、その簞を見るに、松簞よりは笠のいろ淡く、莖は蠟よりも白かりき、夜るこの簞の簇がり生へる處を見るに、白光皎々として四邊を照す、月夜簞の名ある所以なり、大毒ありて善く人を殺す、毒ある簞の證據には銀貨を出してそのをもてに摩りみたまへ、銀貨は忽ち黝くなるべしといふ、試むるにその言の如し、髭男謝していふ、そなたの言葉徴つせば、われもわが妻子等も、殆んど危うかりきと、門邊に走り出でゝ、鞄を倒まにして簞を川に投げ捨てたり、傍に見てありしわれも、その人の爲めに運命の奇瑞を祝福し、更に又た深く人生の逢遭を感愴したり。

五

宿を出づ、日既に斜めなり、山の懐より湧く黒川の、せゝらぎに浮ぶ紅葉黃葉をひたゞし、韓紅に水くゞる谷の看めは げに神代も聞かず覺えたり、山中の紅葉の盛觀想ふべき也、右も左も見上ぐるばかりに高き峯にて、杉檜の黒く生ひしげりたるが十重にも二十重にも累なりて、雲の扉を深く鎖せり、溪に沿ひて五町ばかりも行きしところに、木欄橋の水を渡りて高く架かれど、この夏の大水にて橋杭を流されて橋は半ばより斷えたり、橋の下を行くほどに、溪の中に、橫はれる石と石とに渡されて柴の小橋の危うげなるがありき、渡りて彼岸の山の陰を行けば、杉山檜山こゝに盡きて、兩岸の山は都べて紅葉黃葉なり、滿山の紅彩は折からの夕陽に照射されて、煥として燃えんとす。

日光の紅葉はその名夙に顯はれたり、たゞし其の美觀は馬返より劒ケ峯の邊なり、鹽原の紅葉は、鹽の湯の邊最も好し、碓氷、御岳、木曾、杉谷、會津より越後に出づる阿賀川畔、遠く

して高尾、箕面、讃岐の寒霞溪、九州のぬるでの紅葉、北海道隨處の紅葉、凡そ天下に紅葉の名所は數ふるに遑まあらずして、壯美の觀はとり／＼なれど、凡そ紅葉にのみは限らず、山水の遊びは一にその風興と情趣とあつて會神し默契す、今まこの山を觀るに、斧斤千年いまだ曾つて入らざる針葉樹林の荒莽として立つ峯のつゞきて、木魑石鬼の棲處かと疑はるゝあるに、更に又た蓊鬱たる濶葉樹林の峯ありて、中に流るゝ黑川の溪を界に互にその秀を競ふ、紅葉の山は對す常盤の山、その紅葉の山を觀れば、濃淡の紅ゐの色を盡し、淺深の黃の色を盡し、朱酣し、紫眩し、綺錯として峯を彩る、常磐の山を仰げば、佛頂青を潑らし碧頭綠を堆め、絕えて他色を交えず、深碧は爛紅と相映帶し、酣黃は古蒼と相浣襯す、われ四方に遊びて紅葉黃葉の美觀に接したれども、いまだこの山のごとき壯麗の秋に逢ひたることはなかりき。

行く／＼紅葉の山を仰ぎ看つゝ、一町毎に立てる短碣を辿る、暮色漸く催し、石頭洩々として晩雲の起るを見る、雲と路を爭ひて進むほどに、いつしか日は暮れ果て、双行の松並木人は迷まず、一板橋を渡れば一境忽ち豁けて當面に茅葺屋根の大厦を見たり、古峯神社は是れなり、月あり牙のごとし、黑き杉山の端にかゝる。

巴の紋を染めぬきたる幔幕の陰に立ちて大玄關に人を喚ぶほどに、雲つくばかりの大男應とこたへて現はれ出づ、鄉貫氏名をなのれば、いざ此方へと導きて、宛ながら老鼠の啼く音に軋む大廊下を谷に枕みし廣やかなる一室に通したり、獨り寂しく山を登りて來て見れば、何地より詣り來にけむ、こゝには早や幾十人の參籠者ありて、常陸山、大刀山の膂力をもつてするも扛げがたかるべしと想はるゝ大いなる青銅の獅咬火鉢を圍みて、團欒しゐたり、室の天井よりは、絕えて久しく逢はざりし眞鍮洋燈の、濶き紙笠をかじげて懸りたり、綿入に袷の羽織して、襯衣股引を穿きたれど、寒ければ褞袍の借衣して、その人の中に割り込みてわれも座を占む、山と盛りたる炭火は白き爐をかつぎ、五德に掛けたる鐵瓶は、沸りて蓋を跳らすなり、若き老ひたる婦人連も四五人ありて、これは別の火鉢を圍みて座せり、われも人も時の間に親しくなりて、かたみにぞ鄉里の物語などす、多くは東國の人なり。

深院の寂寞を破りて板木の鳴る音す、風呂に入れよとの相圖なり、つれ立ちて釘の頭の星とばかりほのくらき洋燈の火に光る長き廊下を湯殿へと辿り行く、廊下の左右は皆な團體參詣者の宿る部屋にて、五百人の調度と夜の具を備へたりと聞く、湯殿は東京の錢湯よりも大いなり、岩清水を堪へ沸かせし檜風呂

一時に十數人並び浴して猶ほ綽々として餘裕あるなり、長き樋をもて泉を引きて槽に盈て、四もに溢れて水晶簾を懸けたるは殊に心地よし、快浴して故の部屋に還れば、夕べの天狗饗應といふもの始まれり、そはこの道場にある力者どもが、大盤に飯器を盛りて、五十人にても百人にても、ある限りの客に對して一時に饗ひの膳を供し、飯よ汁よと出さるゝ器を、電光石火と受け渡して、些の凝滯するなきことなり、山入の祝儀として、人毎に一陶の酒をも添へたり、衆皆な危座の膝を並べて、上戸は盃を把り下戸は飯くふ、菜は石豆腐の味噌汁に木の子と芋、蒟蒻の煮〆、澤庵の香の物なり、別に酒客には小さき手碟を添へ、鹽辛やうのもの少し盛らる、嘗め試むるに、香魚のうるかに似て、膏膩はこれに過ぎたり、何かは知らず酒を下すに妙なり、飯を行る力者曰ふ、鶫(つぐみ)の腸(わた)の鹽辛なりとその制を問へば鶫の腸を採り、寒泉に洗ひ淨めて壺に入れ、鹽を和して密閉す一年の後始めて食ふべしと、山中の珍饌はこれに十々目を刺したり、われその一碟を盡し、力者に乞ふて又た一碟を盡せり。

太靜太寂、山は太古のごとし、夜の九時、鼕々として太鼓は鳴り渡る、祈禱の式の始まるなりき、行き見れば正面大玄關のひた奥の神壇の前に人々は蹲踞せり、一對の繪蠟燭、何來の風にまばたきして、をぼろに漆のごとき昏を照せば、昏の底に神龕夢かとばかり啓けり、唯だ見る白衣の祝人、幻の姿を微かに明るき燭火の下に現はして、蒲伏して再拜し、嚴そかに祝詞をまをす、斯くのごときもの十數分時、やがて太鼓は再び鳴りて式は玆に終り、祝人の白き姿、昏のうちに消えて行く、散じ去る人の跫音、長き廊下の板敷をどろ〳〵と踏み鳴らし、少時は喧びすかりしが、やがて鎭まりしては夜は浸々と闌けて行きて、唯だ、老鼠の梁に啼く聲のみす。

六

この社、世々石原隼人といふ人の管掌するところなり、石原氏の祖先は、優婆塞役の小角に事へし修驗道の行者にて、即妙童鬼の子孫なりといひ傳ふ、幕府の頃、修驗者の統領たりしことは前に說けり、維新の後は神道に歸し、日本武尊を祀る、その神體は尊の御衣の袖なりといふ、社寶のうちに、僧辨慶の書きたる供用證文といふものあり、義經に隨ふて奧州に入るみちすがらこの社に宿りて糧米を借りたる時に差し入れし證文なり、征路は史家の說と相合はず、疑ふべき也。

鴉も棲まぬみ山の道場は、太鼓の音に曉繚く明けたりけり、玄關の前にある鐵の天水桶の、浮ける紅葉を淺く封じて薄氷するを見て、孤枕の夢圓かならざりし昨夜の寒はさこそと知られたり、をのが寐ねし蒲團を簇みて、さて例の風呂場に行きて口す

すぎ顏を洗ふ、一條の褌布を裸身に掛けしのみにて、樋の水を頭よりうち澆き、垢離する壯夫もありき、合掌してぬかづきつゝ、唵阿毘羅吽欠と呪文を唱ふるなり、朝寒むの火鉢を圍みてあるほどに、太鼓は復た鳴りて昨夜と同じき神前の式あり、さて朝餐の膳に對して、舌を爛らす熱飯に味噌汁をすふて後、志の紙包を呈して火防の護符を受け、假初の緣淺からずこの山の道場に一夜を共に過したる部屋の人々にも別れを叙して、七時こゝを立出でたり

朝の雲、地に屯して路を奪ふ、古林のうちを魚貫して行くほどに、忽ち絕壁の上に出でたり、半敷の雲を抽いて起つは、山な鑄る足尾の煙突なりき、一とすじ細き樵の路を走せ下る、中禪寺湖より湧くといふなる渡良瀨川の上游にわたせる橋の欄干に靠れつゝふりむけば、山は紅に谷は碧に、粉として爛漫たり、『人生斯の如くんば自から樂しむに堪へたり、何ぞ必しも局束として人の爲に羈されんや、嗚呼吾が黨の二三子よ、安ぞ老に到るまで更に歸らざるを得ん、』われは覺えず韓昌黎の山石行を朗らかに吟ずるなりき。

今秋美術界の收穫批判（二）文展評

文展 日本畫管見

小杉未醒

昨夜小生は、小生の旅行仲間と共に、京の三條の萬屋と云ふ旅人宿に泊りました、路連れは皆若い連中で、夜宴深更に及んだにも係らず、朝は早くから寢床の中より鎌首を差し出してゝ元氣の好い冗談を云ひ合つて居ます、宿の三階の張り出しに、東京ならば物干しのある邊に支那風の古びた物見が出來て居る、其處に紙と鉛筆とを持つて上つて、中央公論の爲に文展の管見を草しやうと思ふ、此の秋は何處も同じ永い秋霖に飽いたが、昨日からカラリと上つた日和になつて、今朝は蒲團着た姿の東山、比叡山までけさやかに見亙されます、京に來て京の風景を見ると、每に彼の四條派の起る所以の者が首肯かれる、

しかし彼の畫風は、結局京人の好くない半面の露出であり、表皮のみに留まつた寫景で、其處には迎合と安住とより他には生まれざる可き運命を持つたものでせう、此の畫派はしかし絹の白地の光澤には善く出合つた行き方です、南畫の如きは、ともすれば絹の上の墨色に紙ほどの妙味を認めないが、四條派は絹の光澤をよく生かして居る、此處に或る媚びを持つ事を得ます、故玉章氏は古四條派の正統の打ち留めの大家であつた、安住と迎合とを尤も露骨に自認して仕事をした、その正直さが、眞の藝術鑑賞以外に、小生に面白く思はれる處がある、藝術々々と云ひつゝ手に任せて同じやうな圖柄を濫發する掛軸造りの大家の多い當世から見れば、彼の故人が製作法の驚く可き練達の手腕をば、得意になりて印刷器の如く働かせて居たのは、却つて一種の痛快をさへ感じます、疑義のない處にはともかく力があります。

栖鳳氏も玉堂氏も出は四條派と云ひながら大分其の間に工夫新案なども加はつて居るやうですから、明治四條派とでも名をつけ直さねばなるまい、安住と迎合とは今も猶古の如くついて廻つて居ます、栖鳳氏の河口は併しながら余りに見物を愚にしたものです、彼れは一尺幅位の小品にして、氣の利いた表裝をして四疊半に納まるべき圖柄である、大體今の日本畫は餘白が多すぎる、餘白が多いのは普通で、描き詰めたものは又、骨折つた作と稱されて特別なものにさへ受け取られて居るやうです、文展などには餘り此の餘白の多いのは現はれない。所謂努力の作で、筆數が多ければ藝術價値も充實して居ると、單純に思ひ做して居るらしい、内に求めるものが眞のアーチストで、外に索めるものは必ず一の職人に過ぎません、繪は餘白が一番骨の折れる處である可きです、本來何の圖柄でも何んな大きさの割合にも合ふと云ふ譯はない、竪に細長いものでなければ、現はせない圖柄があつて、始めてそれが長い掛軸にされる、細長くない圖柄を要求して其處に横物が出て來る、始めに尺五の五尺と云ふやうな定まつた大きさが提供されて、思案に餘つた燒筆を擦るから、廣大な餘白が、天ともつかず地ともつかずに剩されます。つまり金持ちは毎に此の只の絹の白地を高い畫の坪數の割合で仕拂はせられる次第となる譯だ、

關雪氏の木蘭を小生は百穗氏の牛屛風と並べて場中の注目すべきものとする、併し孰れを採るかと云へば、無論牛を採る、牛は作者の目的が、見る者の心とピタリと合ふ、作者の感じが素直に見る者の感じとなり得る、百穗氏は注意された線で割られた、物の塊りを投げ出す力を持つて居る、是は今の畫[illegible]氏のみの獨見であつて、その内多少の摸倣者を生ず可き一種の作

畫法であるでせう、去年の刺客豫讓の屛風の、二つの塊りもカナリ簡素に力強く人を捉へた、しかし彼れには、背後に刺客列傳と云ふやうな物語が控えて居る爲に、豫讓の顏などに遂不足の點を生じ易いが、一體物語や神話を題とした繪と雖も、見る人は必ずしもその事蹟に通ずるに及ばず、作者は又その事蹟の奇を以て畫面を補ふ事を陋とすべきもので、譬へはジヨツトのサンフランシスコ僧正が鳥に說法する畫などを引合ひに出して見ても、ジヨツト自身は、或は此の聖僧の有難味を俗人に畫き現はさんとしたのかも知れぬが、今の我等の目で見れば、只その人物と木と鳥との素朴な又崇嚴な形狀の配置、及びそれ等が組み合つて自然に釀成する或る神秘的な氣分を滯りなく受け入れ得る、聖僧の傳に通ずる通ぜざると多く關しません、關雪氏の木蘭にしても、必ずしも若い時に木蘭女が男裝邊塞に赴くと云ふ詩に、感激した覺えのない人でも此の圖を見るに資格の不足はない筈だ。

小生は去年の豫讓と此の木蘭とを並べて見たかつた、材料としては兩方とも中々面白い材料です、關雪氏は作畫力の强健な人です、しかし畫の持つて居る感じは豫讓の方が强い、つまり前に云つた、塊りをうまく働かせる力を百穗氏が持つ所以である、木蘭の畫面には、支那邊地の感じはよく出て居るやうです、日本人の支那繪は、どうも日本の支那繪になり勝ちです、(此の良否は又複雜で必ずしも確かには分てません、要するに出來上つた上の問題です)關雪氏のは丸切り支那の支那繪になつて居る、白い二匹の滿州馬も、馬としての骨格は所々に疑はしい處もあるが、特別の馬種の感じはよく出て居ます、

一知半解の文學論を始めるのも恐縮ですが、故澁柿園の歷史小說は、言葉までも古めかしく用ひてあつて、道具立萬端往古の世界になつて居ながら、どうも氣分が通つて居ず、藝術品とは受取れなかつた、是と同じ種類で、古代の物語を扱つた畫が非常に多いやうです、芥川氏の古い時代を材にした小說には、會話は丸切り今の正男さんやとし子さんの會話でありながら、何處ともなく今と違つた世界であり、そして却つて此の中に活動する人々が今の我々と同じやうに色々混み入つた憤怒や嫉妬や滑稽を持つて居る、斯う云ふ種類の畫は今の處餘り見當りません、すぐに頭に上つて來る此の後者の例は、五年前の小林古徑氏の異端です、淸方氏のためさるゝ日は、美人畫として面白い思ひ付きに相違ない、技巧は實に冴え返つて垢ぬけのしたものと思ふ。たゞどうも表情が芝居めいて居る、心の激動が餘り方々に現はれすぎて居る、畫の中の振り事です、後ろには連中出語りと云つたやうな感があります、之は併し冷嘲の言葉では

ありません、或部分まで表情の戯曲的なるも好いと思ふけれども、一方に小林氏の異端と云ふものが印象されて居るので、勢ひ比較して見たくなる、比較すると古徑氏の複雜を收めた靜止を採りたくなる、裾の模樣の靑海波なども、少し道具方の氣が利きすぎはしなかつたらうか、

天風氏の麒麟の屛風も場中で注目すべきものです、彼の無邪氣な怪奇はさして小生の氣にならない、人間と獸との配置が、高い屛風によく合つて、恰も支那人の裝飾法を思はせる、但しジラフをすぐに靈獸麒麟にしたのは、天風氏の猛斷であらうか、何樣在來の麒麟では明治屋の看板めいて却つて面白くないかも知れぬ、しかし頸の周りや四肢の要處々々に、赤い毛を渦卷かせて、之を以て古の麒麟の火焰に代らしたのは、天風氏の窮策、識者の微笑ある所以でせうか、けれども元々在來の型の火焰と雖も、立ち直つて考へて見れば滑稽なものである、因習に依つて人は驚かずなる、大正型の麒麟が、或は天風氏の爲に出來るかも知れない、

小生は是より以上各個々の細評は出來ない、面白くない畫を面白くなく評して居る事は、小生にも損害であるし讀者にも無益の事です、院展二科に比して、文展は尤も多くの出品數があり、尤も多くの普通作を並べて居る、是等押すな押すなの普通作の背後には、併しながら又此の十倍の慘然たる失望の普通作が在る事を思ひます、南京城に貢院の廢址と云ふがあります。是は諸州縣から各幾十數百の鄕試の俊才を出して來たのを纒めて、進士とかの選拔試驗をする處であつたさうです、此の書生達は貢院の三尺四方の房かけばかりの、一區劃々々々に三日も四日も立て籠つて、切ない考試に落第しまい落第しまいと瘠せ衰へて精根の限りを使つた事でせう、今は草茫々と瓦にも庭にも茂つて、白晝尙ほ此等文章の幽鬼の哭聲をも聞きさうです。文展の橫手に、落第品の容れ場のバラツクを見出す時、小生はすぐに此の貢院の廢址を想ひ出す、斯う云ふ話の一節を覺えて居ます。

『丁度期日切りつめて出品畫が出來ましてな私は車屋に預けるのも不安ですから、自身で俥について行きました、雨が降つていやな天氣でしたが、家の棟で烏が頻りに鳴きました、家内も私も默つて居ました、私が出たあとで、家内は恰んど跣で近所の易者へ驅けつけたさうです、すると易者は易を立てましたが、是れは當方には行きたい氣があつても、先方の親達と云ふやうなものが、どうも八釜敷くて話が屆きますまい、と云つたさうです、易者は緣談と間違ひたやうでしたが、つまり易は中りましたので、イヤホンに御笑ひ草です』

日本畫家は殊に文展通過不通過が、物質的に大きな影響となつて現はれる、何日しか畫の爲の畫を忘れて、文展の爲、乃至審査官の爲の畫となるのもまことに無理もないと思ふ邊も生じます、院展の出品者は、多くは青年で、反撥力を失はない連中のやうですが、文展のは戸籍的に一家をなした人々が多いやうです、故に前の話の一節などよりもモツト手酷い悲しみや失望が、中々多いと思ふ、是を今にして如何ともする事は出來ない、只局に當る人々は、隨分念を入れた製作を出し、鑑査は偏に全力的公平の見地ならん事を希望する、地方的の勢力範圍などが、審査官の新任命ある毎に云々されるが、是などは當然注意して他の疑惑から遠ざかられたい。(完)

文展の印象

正宗得三郎

○

文部省の展覽會は年々外觀には榮えるけれども、其内容に於てはだん〳〵惡くなつて行く感がある。其理由の一つとしては、日本畫に於ては有數な美術院の或る一部の人が文展を去つたと云ふ事もあり、尚ほ今年より京都派の中堅たるべき國畫創作協會の連中も亦出品しない。殊に洋畫部に於ては最も英氣あり意味ある連中は皆二科又は院展に走り、文部省展覽會の洋畫部は僅かなる老年の人達と、殘餘に無氣力の青年の作を集めたに過ぎない。文部省展覽會が根本的改革をやらない限りは、此無生力なる事を挽回する事は出來ないであらうと思ふ。隨分詰らない畫でも、前の審査員といふ緣故や、推薦といふ緣故の下に多く集められる弊もある。之れは官營の展覽會としては已むを得ない事情もあるであらうけれども、年々是等の人を作つて無鑑査の出品を集める時には、展覽會はます〳〵だれて來る。それに今年は此中にて人氣ある和田三造氏なども審査員を辭し又出品してない樣な都合で、幹部連の作品なり青年に對する力なりは甚だ稀薄な感がある。私は文部省展覽會二部の批評をするに就て、卒直に云ふと今年の文展の洋畫は同感し得るものが極めて少い。實は殆んど一枚として感動し推讃する作に接しなかつた事を物足らなく思ふ。從てさういふ極く高い調子に於て批評する事が不可能であるからに、あの百十七點の內なるたけ數多くの作に對して、極く平凡微溫的なる感想を洩す事にしよう。

○

今年文部省展覽會の第二部に集まつた洋畫は約千點あつて、其內から八十餘點を飾に懸けたものである。併し集まつた作品

なり、それを濾した篩なりは、やはり文展的智解とコンペンションなものに過ぎなかつた。私は文部省展覽會の如き官營の、或る意味では陳列館然たるものは、成るべく數多く陳列して、出品者にも多少自由を與へ、看る眼にも賑かな方が、文部省の趣意に叶ひはしないかと思ふ。

偖て畫の種類なり內容なりを玆に簡單に分類すれば、寫實主義、印象主義、裝飾畫派と多少の後期印象派の作を網羅して居る。其中で最も多いのは極く平凡なる寫實主義で、次ぎに印象派及び多少の後期印象派的色調を帶びた作と日本畫的興味を有つた裝飾畫派の一群れがある。之れを分類的に各個人に就て擧げるといふ事は談話上煩瑣であるからに、私は部屋の順序、陳列順に於て個人々々に對する感想を述べる事にする。

○

第一番は香田勝太氏の『靜物』である。此人の作は次の部屋にも一點あるが、氏の作は極て通俗的な寫生畫に過ぎない。前年までは能く屛風などに油繪具で裝飾風の惡戲をして居たが、今年斯ういふ寫生畫を出したのは當人にしては寧ろ取柄と云つても可からう。

辻永氏の『裝飾畫の秋』は極く甘い作品で、陰影と日向の照應、樺色と藍とのコントラスト、さういふ柔い情緒の下に作られたもので、裝飾畫と云ひつゝ其出立は寫生ではあるけれども、畫面の全部に於ける裝飾の排列、色や、筆、或は外輪の線などに於て何等の裝飾的注意も無く、其效果は生氣を缺いだもので、單に事件的にいろ／＼な物を集めたに過ぎない。やはり裝飾畫としても甘いものだ。

山本森之助氏の『波』。同氏の斯ういふ畫を觀ると、ずつと古い過ぎ去つた昔の作を偲び出して、私は寂しい感がする。以前より永いこと同氏は日本に於ける平明なる寫實家であるけれども、此『波』は自然の好風景を叙述した以外に、波其物の力も無く、大氣に包まれたる雰圍氣も無い、堅く小心に作つたものに終つて居る。せめて自然の新鮮の感じでもあればよいが。

岡田三郎助氏の二點『忍路』『北國の雪』は何方も白馬會當時の信條を其儘に、コラン系統の寫實に稍印象的強さと裝飾的情緒とを盛つた畫である。同氏の畫はやはり一種の凝り性で、美的情緒が何處かにある。一筆にも其感じを看る事が出來るが、畫面は何となく誠實の氣息が稀薄で、自然の感じを把持する事を逡巡ふて居る如く見ゆる。二つの中で『忍路』の方を自分は擧げたいと思ふ。構圖の仕切り方も惡くなし、色の感覺も新鮮である。何處か懷しみのある畫だけれども、そして色も明るく美しいけれども、それが光の光波とまで行かないのを殘念に思ふ。

筆觸も稍纖弱の感があつて頼り無く思ふ。『北國の雪』は稍自然を其儘圖按的に觀た所があるが、如何にも雪が單調で、地面から樹木、屋根に至るまで其變化が餘りに無さ過ぎる。同作家をもう一歩奮發さして、何うか自然の感覺に觸れさせたいものである。

中澤弘光氏の『かきつばた』。同氏には別に『桃さく丘』の風景の一點がある。私はやはり『かきつばた』の千菓子の如き畫よりも、即興的感覺の多い『桃さく丘』の方を推賞する。中澤氏は由來『かきつばた』の如き物語、或は構圖など、いろ〳〵な事物を畫合したものに興味を有つて居る人で、其意味で新しいスタイルなどを作つた人である。けれどもそれには內容的思想が缺けた爲めに、殆ど遣り人形にしかならなかつた。氏の手法には岡田三郎助氏の畫に見る如き美的情緒とも云ふべきものがあるからに、『桃さく丘』などに於ては非常に纖弱には思ひつゝも、或るやさしみ――自然の美はしき感興を得る事はある。唯之れ程華やかに明るい色でありつゝ、空間が無くて、何處かばさけた、實密した所を有つて居ないのは缺點である。

長原孝太郎氏のは『山村』の外にもう一點『李花』がある。色の感覺は稍鈍いけれども、氏の畫には下卑た所が無い。私は何時も同作者の高雅なる趣味性を掬みつゝも、同氏の作に同感出來ないのは、作者の或る主觀を何處までも徹底させて行かずに、曖昧の內に葬つて居るのを慊たらないからである。

太田喜二郎氏の『鞍馬道』『麥秋』は筆觸の大膽なる新印象派といふ風の描き方であるが、だん〳〵氏の藝術は荒びて來る。外光を重んじたと云ふにしては光の反動が無いし、自然のカラクテルを得やうとしたにしては餘りに色が散亂として居る。『麥秋』の如き構圖と光とを重んじた作が、今後何ういふ風に結ばれて良い結果を得るかは疑問である。

吉田博氏の『淵壁』。吉田氏とか中川八郎氏とか石川寅治氏とかいふ人達の作は、畫其物の本質を觀やうとすると間違ひで、同氏等のは自然の景色を觀やうとするのである。或は山の奥とか高山とか、或は寒灣とか北海道とか樺太とかいふエキゾチツクな、又好風景な趣味に作者自身も興味を唆られて居るからに、素人などが氏等の畫を好くのはその爲めだ。

田邊至氏は『ギター』の外に『七面鳥を飼ふ人』がある。何方も平面的流暢なる寫生があるが、何れも深味が無い。『七面鳥を飼ふ』といふやうな題があるけれども、それは畫的興味から出來ので、さういふ內性を描いたのではない。而も畫的興味にしても寄せ集めの感じがあつて、色調に於ても質量の乏しい、煮えきらない感じを與へる。

次の室には水彩畫が纒つて居るから、それを纒めて批評すれば――

三宅克己氏の『諏訪の森』『落合村』、立花勇氏の『北國』、小川晴陽氏の『雪解の頃』、望月省三氏の『二子山と蘆の湖』等がある。三宅克己氏の水彩もやはり景を佝んだ寫生である。同氏の今度の寫生は何れも畫面を一度洗ひ晒したやうな感じがある。せめてあの中に生氣のある筆觸（タッチ）が貽つて居ればよいがと思ふ。望月氏の『二子山と蘆の湖』は感興的な所もあるが、まだ粗笨な出來上らないものである。小川氏の『雪解の頃』は事柄の面白味に墮したものである。

久米民十郎氏の『Madam Karina』は血の氣の無い畫ではあるが、西洋（むかふ）で描いた程あつて何處か他の畫と違ふプランを有つて居るのが取柄である。

石橋和訓氏の『肖像某氏の家族』『肖像松方侯』は何れも英國風の非常な達筆でグンぐ描いて居る。色も此中にあつてはこなれて見える方で、其趣味、其自然に對する態度などに就ては、私は全然反對であるけれども、さういふ自分の感じを拔いて、單に英吉利のアカデミツク風の藝術を傳へたものとすれば、能く其手法を傳へたものと云へる。併しそれ以外に取る所は無いと思ふ。

清水良雄氏の『二人の肖像』。井上よし氏の『靜物』松尾松濤氏の『網繕ひ』の中、清水氏の『肖像』は二人の顏だけが馬鹿に明るくて、玉子の如きぬらぐした不快な作であるが、努力しては描いてある。井上氏の『靜物』はほんにお菓子の如く、松尾氏の『網繕ひ』には光の光波が少し厭味たらしいが、先づ無難に出來た方である。

次の室に織田明氏の『山の小池』がある。此人は隨分古い人であるが、之れだけ同氏が努力したといふ事は注目して可い。場所も面白いが、併し遠いも近いも同じやり方で分明しない。遠近に從て疎密を覺得する事を考へてないやうだ。細かく描く事は惡くない事だが、繁雜になつては駄目だ。

抽木久太氏の『湖上の初夏』は餘りに圖面や樣式に囚はれ過ぎて居るだらうと思ふ。其爲めに畫に生氣が無くつて、圖面は何時も玩具のやうな感じがする。今度のも隨分無理な仕切圖で、中に在る玩具の如き點景人物は、景情を助けるよりも寧ろ圖面を害つて居る。又氏の色は冷たい靑があるかと思ふと突如として眞紅な赤があつたりして、色の質量に對する感じの鋭敏を缺いてゐる。も少し卒直な頭と手法で自然に向へばよいと思ふ。

飯田勇氏の『運河の橋』は洞察力の缺けた畫であるけれども、又惡擦れた所の無い畫だと云ふ事が出來る。遠景の頭擬りさう

な感じがするのも、色のふやけて見えるのも、氏の洞察力の足りない、レアルの色の稀薄な所に原因して居るのだと思ふ。

權藤種男氏の『初秋』は一寸何が有りさうに見えて何にも無い畫である。畫面は堅くこち／＼として、空間の無い乾燥した結果となつて居る。

淸水敦次郎氏の『寺島の工場』はフランドル派のやるやうな、又日本の草土社連中のやうな、殆どモノクロームの馬鹿に細い畫でありつゝ、その印象は深くない。そして自然の物象は寧ろ失はれて居る。

五味淸吉氏の『姬むかしよもぎ』、熊岡美彦氏の『編物する二女』は兩人共或るテクニツクを有つて居りつゝ、其效果は非常に厭らしく見える。それは何故かと云ふに、氏等の趣味の不美術的な處に原因して居るからであらう。

柳敬助氏の『野田大塊翁肖像』。以前柳君はも少し自然の洞察力を有つて居る人であつたが、此數年間發表した作は何うも淺薄を免かれない。此肖像も人の顏とバツクとの關係も無ければ、人の塊りの强さも無い、極く平凡なものになつて居る。

第十六室の北島淺一氏の『大川の雪』は一寸感興のある畫であるが未だ幼稚たるを免かれない。

和田英作氏の『壁畫落慶之圖』は大變大きなもので、隨分描くのに大變だつたらうと思はれるけれども、此畫の一番の缺點は餘りに物質の色を拾ひ過ぎた弊と、風俗的興味に囚へられてゐる事とである。も少し大きな明暗で調子を着けたら、も少し好い效果を得たらうと思ふ。折角の努力も之れでは好い結果を與へて居ないと思ふ。

竹中良吉氏の『自畫像』は隨分メランコリツクで薄汚い感じのする畫だが、何處か强味のある畫だ。

有島さとえ氏の『聽いて居る女』、田中藏六氏の『婦人の肖像』山田隆憲氏の『眞夏』、山田亮一氏の『鐵砲百合』、内野猛氏の『港の夕』は皆初期の白馬會系統の作とも云ふやうな、極く淺い寫生主義から出立したものである。中で『港の夕』は取立てゝ注目する所は無いけれども、作者の穩當な自然の觀方を認める事が出來る。大久保作次郎氏の『とげ』もやはり白馬會主義の作で、光りの光波といふよりも、空間の中に微温的な情緒のある、甘いものを甘く描いたものだ。

奥瀨英三氏の『菜園』は日本的のセザンヌなどの筆觸を模したものであるが、セザンヌの如き物と物とのヴアリユーも缺けて居るし、其アクセントは物を說明する事になつて、マツスの感となつてない。從て畫面は煩く感じらるゝ。

小林萬吾氏の『甕を戴ける女』、岡四郎氏の『海峽』鈴木良吉氏

の『婦人觀覽席の一隅』等の中では、小林氏の作が良いだらうと思ふ。少し色の趣味が好くないけれども、形も比較的取れて居る穩當の作の方である。岡氏の『海峽』は餘りに草色がいやに青々して自然らしい感じを失つて居るし、鈴木氏の『婦人觀覽席の一隅』は興味的の作であるが、其テクニツクが如何にも甘い。

大野隆德氏の『靜かなる流と夕映えの山』。氏は一昨年示した『高原に働く人』以後良い作を出して居ない。それに濫作が多いやうだ。數多く努力することは善い事だが濫作は困る。之れまでの作品の中には景と人物とが調和された纏つたものもあつたが、今年の作品は無理に擴大された畫面で、感興に走つたと云ふよりも粗雜である。實際氏の如き直寫生と構圖とを同時に組立てる畫には、最も適切なる體像を見出さなくては至難なる事であらうと思ふ。空に群がる雲も、遠くの山も、近い河も、同一の調子、同一の筆觸で、緊張さ充實さを缺いた粗笨のものになつて居る。モチイフに對しては多少山間の感じに面白い所が無いでもないが、畫の效果が如何にも惡い。

南薰造氏の『雪の中の小村』『樂器をもてる二人の男』の中『雪の中の小村』は遠近を顚倒したやうな所があつて、遠くが強く、近くが弱い。例へば手前の人物でもほんとに消えるやうだ。洞察力を缺いで平面と立體との感じを失つてゐる。又雪の色感は何と云ふ單調な觀方であらう。何方かと云へば『樂器をもてる二人の男』の方が同君を語るに最も適切であらう。何處か抒情的な氏の氣稟があつて、モチイフに對するハイカラの氏には斯ういふ畫題は最も適して居るのだが、其結果が多く劇的になるといふ事も考へなくてはならぬ。此畫は底に沈んだ中に良いものを發見しやうとした藝術であらうが、矢張單調に失して、微妙な感じといふよりも、冷たい寂しい感じになつて居りはすまいか。

黑田清輝氏の『赤小豆の簸分』はやはり吾々に不快の感じを與へない。岡田氏よりもも少し良い美的感覺の適切さがあるやうに思ふ。唯氏の藝術は年々其氣根が稀薄になり行くのは悲しいと思ふが、色の撰擇、筆觸の高雅なる事はやはり認める事が出來る。氏のエネルギーがも少し充實して勇氣を帶びて來れば立派なものにならうと思ふが、今の所纏まらない、出來上らないものに終つてゐるし、眞に感興的なものになりきらないのも惜しい。

齋藤與里氏の『春』は四季に對する感懷が形像されたものと見える。一見朗らかな點がある。丁度「朝日に匂ふ山櫻」とでも云つた風に、棚引く雲があり、睡つたやうな山があり、又櫻の枝には黃鳥が囀つて居る。遠くの高原には白い玩具のやうな羊が四五匹居るし、四五人の裸體は茹蛸の如く餘り氣持が好くない

が、之れ程道具立が多くつて隨分變なデッサンでありつゝ、此畫が觀者に餘り不愉快を與へないのは、氏の趣味性の統一に何か良い物があるからだと云ふ事が出來る。此畫などは極く興味中心の畫で、此興味を取つて了へば何も殘つて來ない。齋藤氏の畫を語るに便宜な爲めに滿谷國四郎氏の『源泉』『江畔漁商』を引合に出すは、何方も趣味の傳統たる所に日本的興味を加へた一つの裝飾的畫で、共に洋畫の容積を輕んじ、光の明暗、光波に重きを置いて居ないと思ふからである。滿谷氏の作は齋藤氏の作に比してモチイフなどに纏つた南畫的の味があるが、其色感に於て齋藤氏のデリケートな華かなのに比して稍鈍感であり、光輝が無い。あの黑い幹とか、人物の髮とか、青黑い木の葉なども能く調和をなして居ないし、色の厚味が少しも出て居ないのも缺點である。斯ういふ畫はも少し表徴的の藝術に入らなければ詰らないと思ふ。

兩氏に連關して牧野虎雄氏と片多德郎氏も同じ領域に入れても可いかも知れない。二氏とも銳敏な才氣のある有爲な作家である事は知つて居る。が此頃やつて居る氏等の仕事には餘り同感を有つて居ない。何となく劇的構圖で、表現の上に表徴的協調が行はれて、我々が見る直自然なる感覺を裏切つて居る。光や空氣を問題にせず、物像のカラクテルを得やうとして巧緻に後期印象派になり、立體派の智識を加へたりして居る。たゞ再現の藝術と云ふのでなしに、成心から成る一つの問題と部分的興味から出來て居る。但し齋藤氏や滿谷氏などよりも畫の本質に於てソリッドの部分がある事は好いと思ふ。だが斯樣な藝術は多く外觀の興味に囚へらるる傾がある。又部分的興味の集合より意識的に物を拔はれた爲めに、作者の冷たさが出てやしないか。一作宛を擧げれば牧野氏の『山懷の秋色』は調子がバサバサして統一が無いし、『麥扱く農婦等』は器用に達筆で描いて、氏の最も得意なチョコレット色と青藍色の青いのを用ひ、又デッサンは自然のカラクテルより更にやゝ漫畫的興味が加はつて居る。片多氏の『月下竹人』を見れば牧野氏より更に漫畫的に、深刻にカラクテルを得やうとして居るが、それが痛烈に描き出されて居ると云ふのでなく、やゝ遊戲的に傾いて居るのを殘念とする。唯氏等の藝術が下等になつて居ないのが好いかと思ふ。

金山平三君の作は牧野、片多氏等と共に文展中の好い部に屬する作であるが、私が何時も氏の作に就て批評する如く、多少平面は美があるが道學者的コンベンションに墮した所も亦多い。昨年の作に比して今年のはやゝ劣つた感じがする。何方かと云へば金山氏のは初期の印象派に屬するが、リアリスチックの根柢に曖昧と不銳敏の所がある。『諏訪湖の富士』『さびれたる寶域

子』は色調に稍明快な所はあるが、如何にも平板で、堅くつて、夕暮れの容氣に包まれた富士も微動せず、板を立てた如くカン〱して居る。而してそれは色ばかりでなく、氏の筆觸が何時も同一の筆觸である爲めである。例へば色に於て遠くの空のコバルトも、山も、水面も、或は手前の畠なども、殆ど同一の青藍色で、それに金茶色の光が僅かに存するのみである。此二つの色を繋ぎ合す補色も與色も無く、乾燥したる冷たい官學的な感じが怜悧に與へられて居るに過ぎない。一體印象派には一面感覺的科學的理解があると共に、一面には心熱的情念が燃えて自然を把持するに頗る鋭敏であり、又感動してゐる。この客觀と主觀とが十分に融和されてそこに立派なる作品を得てゐる。金山君には心熱が最も缺けて居る。『さびしい寛城子』を見れば色調の如何にも突飛な事に驚く。青葉がほんたうの青であるし、地面がほんたうの金茶色である。遠くの數本立てる樹木と人家の屋根の關係も無く、空の金茶色に輝けるのにも何の關係が無い。手前も同樣で、あの木の葉の繁りは周圍の柵なり道路なりに關係なしに青い。其點景人物は隨分怪しいものである。金山君の畫が感覺的表現で、何人にでも穩當には受取られて居るけれども、私は氏の藝術が官學的な意義のものを更に向上さしてほしいと思ふ。も少し本質的に氏の立場が作られれば更に光を增すのだ。

藤島武二氏の『草の香』もやはり印象的と見て可い。然し硬張つて抑揚の乏しい畫であるが、全部に向つてヴァリユーの充ちた感じが多少ある。此畫は滯歐中に描いた小さい畫を大きく引伸ばしたといふ事であるが、如何にも小さい畫の方が好いらしい。色なども明るくて華やかだと云ふよりも、寧ろ作り物だといふ感じがあつて物足りない。

中村不折氏には『智の閃き』『異品之萠芽』が二點ある。氏は肉體のデッサンに自信が有るといふ事だが、此頃ではそれも餘り感心が出來ない。氣品が有るべくして少しも氣品が無く、一つの挿繪のやうに見られるのが甚だ物足りない。氏の如く日本の古畫のやうな感じを油繪に出さうとするのは愚だと思ふ。今の新らしい智識なり感情なりに於て立派な作品を造れば、後に於ては古畫と同一の價値を與へられるものであると思ふ。氏などは隨分無駄な事をして居る。

○

日本畫に對しては專門家でないし、ほんの極く味はうといふ位の氣分で観たので、批評などするのは僭越かも知れないが、自分の注意を惹いたものだけに就て簡單に所感を述べる事にする。

日本畫は一體洋畫などの厚く深く自然の實相を得やうとする

に對して、常に感覺的でなくてはならない。そして其描法は其線を有意に働かさなければ日本畫の效果は乏しいものとなると思ふ。然るに多くの日本畫は妙に氣取つて、自然の實感が無く、又傳統的趣味も無く、極く曖昧なものが多いのは遺憾の一つである。今年の作中で自分の感興を惹いた作としては、鏑木淸方氏の『ためさるゝ日』、平福百穗氏の『牛』、結城素明氏の『夏山三趣』、松岡映丘氏の『山科のやど』等の數點である。竹內栖鳳氏の作は紙本の半截などに描いたものには一寸好いものがある。簡單な茶懸けに描いた作などには、洗錬された技巧に於て好いものと思つたのもあつたが、毎度文展に出す作、殊に此二三年の作は詰らない畫ばかりで、昨年の『日稼ぎ』なども隨分努力した作であつたにも拘はらず、失敗の作たるを免がれなかつた。今年の『河口』も隨分詰らない水彩畫のやうな效果しか出てゐない。一體今年のやうに京都派が衰へたのは、一つには國畫創作協會の連中の作が無い爲めもあるが、菊池契月氏や都路華香氏のやうなワザとらしい畫の多いのも確かに一つの原因だ。京都の是等の人達が妙な『氣取り』をして居るのは何うしたものか。あの都路華香氏の玩具のやうな船や、菊池契月氏の人形のやうな人物は何うであらう。

鏑木淸方氏の『ためさるゝ日』は多少劇的構圖であるが、斯ういふ畫題としては已むを得ないものであらう。寧ろ何方かと云へば此畫の意味を爲して居るのである。小品でもある爲めか、能く纏つた、傷の無い、色でも線でも整つた作である。私の趣味から云へば、色彩が更に濃厚で此感じが出てゐれば更に好かつただらうと思ふ。少し薄く手際過ぎる感じがする。

平福百穗氏の『牛』は多くの日本畫中に一點洋畫風の、多少明暗から觀たる寫生と機微とを捉んだ所のある畫である。それでありつゝ一双の此六曲屛風が何處となく未製品の感じを與へるのは、餘白が大き過ぎた事も原因であらうが、構圖上物足りなさがある。一體日本畫の生命とするのはムードといふ事であると思ふ。物と物との感じ合ひ、情合ひ、さういふものが生命となつて來るのであると思ふ。牛を單に牛だけ描くといふ事も勿論よい事であるが、あの六曲一面にしては少し構圖として纏りが惡いかと思ふ。地面が牛ほど描けて居たら此儘で收つたかも知れない。牛が何うして居るといふ事を尋ねられた時に、此畫面が一方直寫生でありつゝ、それをそのまゝ裝飾的に纏めた處から、其處に批難の點もあるだらうと思ふ。併し私は此純朴で敏感性のある作者を、墮落した日本畫の中で見出した事は、ほんとうに拾ひ物であると思ふ。

松岡映丘氏の『山科のやど』は全體から見れば少し散漫な感じ

がある。一體此人の畫は人物と自然の背景との情合に缺けて居る感じがある。其處には氏の理知的觀念のある爲めにも依るが、此『雨やどり』にしろ『おとづれ』にしろ、人物と自然との關係が餘り能く行つて居ないやうに思ふ。『雨やどり』でも『おとづれ』でも右方の端はそれが能く行つて居るが、左方は何方もぎごちなく思はれる。例へば『おとづれ』に於ける筧なり庭の一隅なりを見れば、竹、椿、筧、鳥其物が堅くつて溶け合つて居ない感じがする。『雨やどり』の門外の流れなり、『おとづれ』の田などの詫びしさの所は好いけれど、椿や雜草や或は楓葉などが造り付けの如き感じを起させる。それは單に古土佐の描法の爲め丈でないやうだ。人物に比して遜色がある爲めではないか。も一つの缺點は遠く離れて見た時に、烏帽子とか靴などが眞黑に塗つてある爲め、張紙をした如く見える譏りがある。やはり雨の中なり空氣の中にあるのだからに、もつとこなれた調子を有つた方が溫情が適切ではないか。併し品のある好い畫の部類に屬する。

結城素明氏の『夏山三趣』は寫生に稍土佐繪風を加味したものだが、纖巧の線に比して色が强過ぎる。それにつゞいて遠近の感じが乏しい爲めに、山の大きさに不明瞭な處がある。又細かい情合ひが、或る部分は線描きに、或る部分は濃厚なる色に塗沫されてゐる爲めに、浮かんで來ない感じがある。

其外に橋本關雪氏の『木蘭』は昨年の『倪雲林』から觀て餘程見劣りがする。構圖も探偵物の如きものであり、線が非常に不快である。木の一つ一つの皺などを描いた描寫も厭味だし、馬なども品の無いものである。第一線の煩瑣なだけ色調が亦た突飛である。樹間の木蘭が特別に濃厚な色彩を有つてゐるので全然別物の如き感じがある。一寸希臘劇にでも出さうなあのスタイルなり感じなりも自分は好かない。川合玉堂氏の『暮るゝ山家』は上半面が好く、下半面が失敗して居る。あれほど深さを作るには手前に線をハツキリ引けば面も引緊まつて來るにと思ふ。

日本畫に對する自分の感想は大體右の數點に過ぎない。

○

彫刻は一度觀たけれど、批評をするにはもう一度觀直す必要があると思つて居たが、時間が切迫したので其機會を得なかつた。その印象中やゝ頭に殘つて居るのは堀進二氏のポートレー一點位のものである。

時論

法學博士　吉野作造

陸軍擴張に反對す

昨今新聞の傳ふる所に據れば、寺内内閣は辭職と共に陸軍擴張計畫、即ち廿五年間の繼續事業として、費額二十億圓に達する軍團編成案を原内閣に引繼いだといふ事である。又一說に據れば、來年度から直ちに新規計畫に基く擴張は差控へる事に折合が着いたとも云ふ。何れにしても陸軍方面には近き將來を期して大々的擴張の計畫ある事は疑ない。其名義が擴張であるか、充實であるか、又は編制替であるかは問ふ所でない。又今年提出するか來年提出するかも我々に取つては同じ事だ。唯擴張其事については斷じて反對の意見を有するものであつて、而して今より之を國民に警告して置くの必要を認むるものである。

反對の理由は之に伴ふ必然の結果たる增稅を非とするが爲めではない。勿論無用不急の事業の爲めに增稅をする事には斷じて反對せねばならない。併し陸軍擴張が實際緊急必要な事業であるならば、增稅も亦已む可からざるのみならず、今日の國民は之れ以上の增稅に堪へぬ程の窮境に陷つて居るとも思はれない。一部の政客は動もすれば民力休養の名の下に廢減稅を唱ふるけれども、併し彼等の所謂廢減稅の結果は少數の納稅者の利益を計る事に止り、決して多數國民の負擔を輕くするものではない。若し眞に多數の國民に一層の休養を與へんとならば、第一に爲す可き事は稅制の整理であらう。從つて現在の如く租稅の負擔が下に重く上に輕く、而かも新たに起す租稅は常に比較的下に重き方面に漁さらるゝと云ふ從來の慣例から推せば、此上增稅する事は如何にも多數民衆を壓迫する事になる。それでも予輩は未だ我々國民には、眞に必要とあらば少し位の增稅に堪へぬ事は無からうと思ふ。況んや稅制の整理をなした上ならば、公平なる基礎の上に銘々相當なる租稅の增課に必ずしも反對するものではない。故に增稅を非なりとする單純な論據から、陸軍擴張に反對する議論には與しない。故に問題は陸軍の擴張其事が緊急必要の仕事か否かに歸する。之が緊急必要の仕事なら、今の儘で多少の增稅をするも又止むを得ない。此上增稅し

ては民百姓が困ると云ふなら、先づ斷乎として税制の整理をするがいゝ。

予輩の反對する所以は、直截に陸軍擴張其事を、不急無用の仕事と信ずるからである。新内閣は國防の充實を以て、産業交通の改善發達、教育の刷新と共に、其全力を傾倒すべき三大政綱として居るが、國防の充實を緊急の時務とする點に於ては全然同感である。此點から觀て海軍の充實乃至擴張は目前に迫つた緊急の問題である。今日の我國の海軍は世界に於ける海軍の近時の長足の進歩を暫く度外としても、海國たる日本の立場から觀て餘りに貧弱である。然し海軍擴張の必要を說くは今予輩の直接問題とする所ではない。轉じて陸軍は如何。歐洲戰爭の經驗に鑑み、或は編制替をするとか、或は特科隊の整頓をするとか、或は飛行機隊なり裝甲自働車隊なり、其他各種の新設備をする事も必要であらう。之が爲めにする若干費額の要求に對しては國民は喜んで之を應諾するであらう。唯然しながら内容の整頓充實以外に如何なる名義を以てするにしろ、此上に規模を擴大するの案に對しては絕對に反對の意を表せざるを得ない。

獨り日本ばかりではない。西洋諸國に於ても從來の歷史上、陸軍の擴張には兎角反對が多い。夫れにも拘らず、政府が紛々たる群議を押し切つて無理な擴張を斷行する。其中に外交上の紛議が起り、之が遂に戰爭となつて、無理に作つた軍隊が大いに用をなす。「それ見た事か」と云うて先きの反對論者を屏息せしめ、軍閥をして獨り先見の明を誇らしめた例に乏しくない。普露西の國會議員が對列國關係の平安狀態を夢想して盛に反對の聲を擧げたに拘らず、所謂鐵血演說を以て議會多數の言論を壓迫し、斯くして作つたる軍隊が直ちに普墺戰爭の用をなした。日本でも日清戰爭なり、又日露戰爭なりに於ては常に之に類した經驗を積んで居るので、陸軍擴張論者は動もすれは、他日臍を噬むの悔を貽すべきを以て傲然として反對論者に迫まんとする。併しながら歷史は常に繰り返すが如くにして又必ずしも繰り返さない。繰り返すと繰り返さゞるとは一に繫つて時勢の變に在る。時勢の變を知らずして何時でも歷史は繰り返すものと觀るのは迂愚之れより甚しきはない。然らば何を以て時勢の變なりと云ふか。一に曰く、來らんとする戰後に於ける國際主義の隆盛、二に曰く、我國の周圍に於ける軍國の絕滅卽ち之れである。但し一に就いては人に依つて其見解を異にする者はあらう。故に暫く之を爭はない。が大いに讓つて戰後は依然戰前と同樣に軍國主義の旺盛を極むるものと假定しよう。斯くても事實として爭ふべからざる第二の事實は斷じて我々に陸軍擴張の

口實を提供するものではない。

戰後に於て軍國主義旺盛を極むべしとすれば、之に應じて我も亦軍國的經營に力を注ぐの必要あるは云ふを俟たない。併しながら我國にして戰前に於ける獨逸の如く、手當り次第に侵略的經營を逞うせんとせざる以上、自ら退き守るに充分なる力を養へばいゝ。從つて國防整頓の範圍目標は、我と接觸すべき敵の勢力の打算である。而して海上は彼我の接觸を甚しく困難ならしめざるも、陸上は領土相近接する特殊の國を除いては、彼と我と相接觸すると云ふ事は先づ絕對にない。之れ海軍に於ては或は英米を顧慮し、或は獨佛を顧慮して我擴張計畫を立てざるべからざるも、陸上に於ては專ら我と相接觸する邦國のみを眼中に置いて可なる所以である。然らば支那が依然として呉下の阿蒙たり、露西亞が軍國として全然崩壞し、假令他日復興し來る事ありとするも、危險なる軍國としての復活に非らざるの極めて明白となれる今日、我國の陸軍が何を目標として擴張計畫を立つべきやは、明々白々一點の疑を容れない所ではないか。

斯く言へば、擴張論者は、或は露西亞の崩壞に伴ふ獨逸勢力の東漸を說くかも知れない。又參戰の結果として戰後に殘るべき米國の大陸軍を說き來るかも知れない。併しながら米國は如何に大陸軍を擁するとも、之を以て我に壓倒し來る事は事實の上に於て之を許さない。且つ又米國の如き財政の饒かな國でも、今度の戰爭に支給して居るやうな給料を拂つては、到底平時何百萬と云ふ大兵を養ふには堪へまい。給料が安くては生活程度の高い、且つ又勞銀の高い米國では兵を得る事は困難である。故に米國が戰後大陸軍國となるべしと觀るのは、全然謬妄の見たるのみならず、假令なつたとしても、彼の畏るべきは陸軍に非らずして、寧ろ其海軍にある。若し夫れ獨力東漸の說に至つては獨軍勢力の不振を極むる今日に於ては、最早一片の杞憂と認むべきではないか。獨逸が勝つものならばまだしも、あゝ負け込んで降を敵の軍門に乞ふに至つた以上、少くとも列國は將來決して露西亞を彼の跋扈に委するものではない。假令列國の壓迫が十分功を奏せずとするも、露國民の超國家的思想と趣味とは、決して獨逸軍閥の跋扈を許すものではない。露西亞が國家的に崩れたから、獨逸の思ふ通りになると觀るのは餘りに露西亞人を知らざるの言である。露西亞が獨逸の軍國主義に壓倒さるゝの危險と、獨逸の軍國的民衆が露西亞の超國家的趣味に捲き込まるゝの危險と何れが多いか、蓋し智者を俟たずして明かである。獨力東漸を以て我が陸軍擴張の口實となすが如きは、來年の雨に、晴天の今朝雨傘を持つて出るよりも尙遠い用意である。要するに今度の戰爭は、東洋に於ける我國の國防的地位

を、少くとも陸軍の方面に於ては全然一變した。縮少の理由はあるけれども斷じて擴張の理由はない。從來軍閥並びに軍閥に左右せられたる歷代政府の統治方針の誤りが、植民地に於ける排日思想を興奮せしめた結果、之が警備の爲めに今俄かに軍備を縮少する事は出來ないかも知れぬ。彼等の過去の罪は偶々彼等に縮少反對の口實を與へて居るのであるが、彼等が歐洲戰爭と云ふ異常の事變に依る國民の眩惑に乘じて、急遽擴張の計畫を遂行せんとするならば、我々は斷じて之に反對の聲を擧げなければならない。

勿論特科隊の整頓とか、新規計畫の增設とか云ふ個々の部分的擴張には必ずしも反對する者ではない。此等は擴張と云はんよりは、寧ろ充實と云ふべき性質のものであらう。何れにしても彼等が隱す所なき說明を與へて我々に要求する以上、我々は眞卒に其是非得失を研究して贊成すべきものには快く贊成するを厭はない。唯一般の主義として何等の名目を以てするに拘らず此上規模を擴張すると云ふ事には原則的に絕對の反對を叫ぶ者である。故に之が爲めにする增稅を否認するは勿論、所謂「現在の歲入の範圍內に於て」する擴張にも反對である。(新內閣は此意味にて軍閥の要求を容るべしとの說がある。國民の監視を要する所である) 又何時ぞやの政府でやつたやうな、陸軍部內に於ける他の方面の節約に依つて得たるものを財源として擴張すると云ふやうな、一見尤もらしくて極めて不合理な案にも斷じて贊成は出來ない。斯くして無理に節約し得べくんば、寧ろ之を取上げて他の急を要する事業に差し向くべきである。

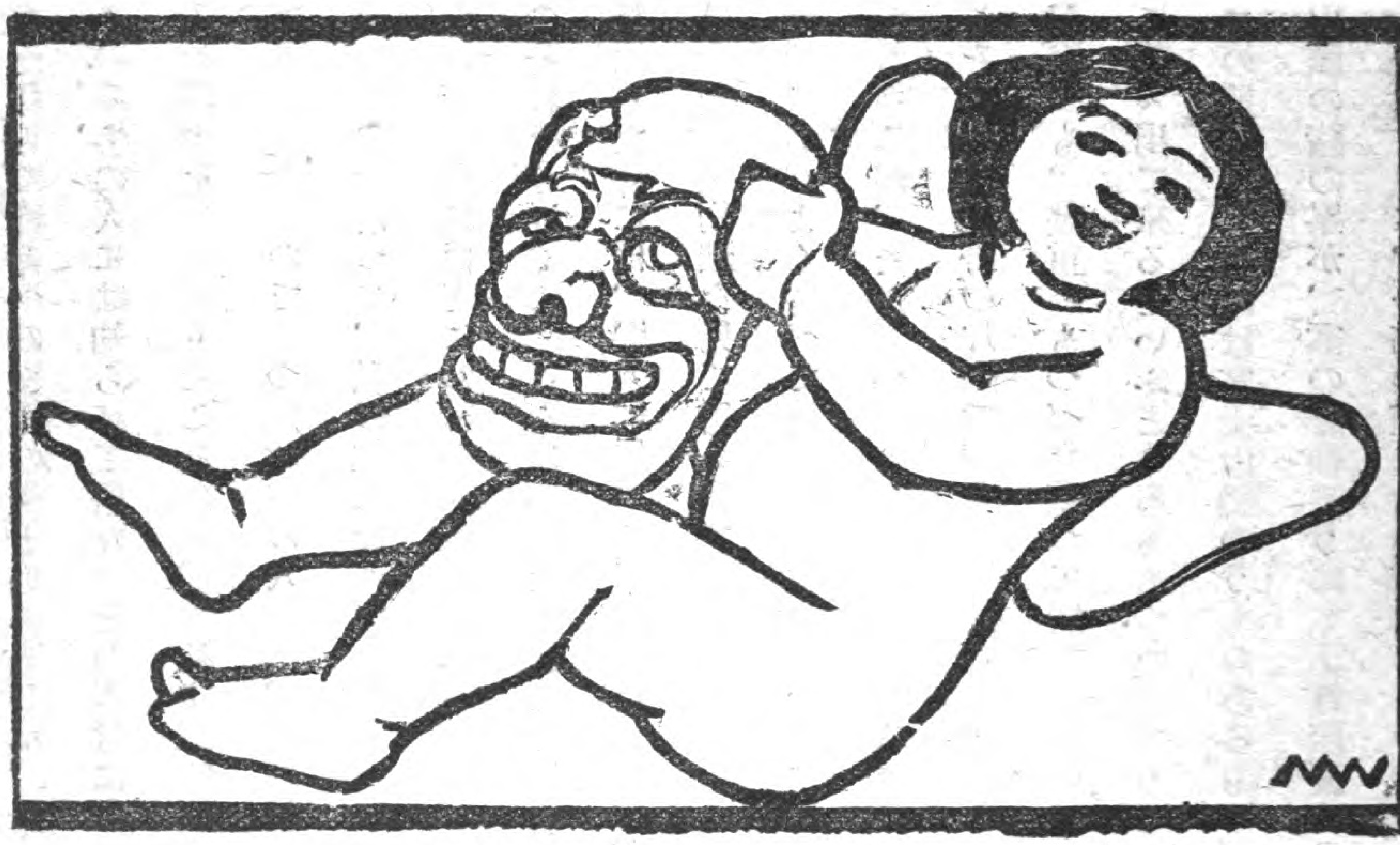
言論自由の社會的壓迫を排す

言論の自由を尊重すべき事、之を妨ぐるものを斷じて排除すべき事は國家の文化政策の上から觀て極めて必要なる事は云ふを俟たない。而して言論の自由を壓迫するものに國家的なるものと、社會的なるものとの二種類ある。而して世人多くは政府を通して來る前種の壓迫のみを觀て、動もすれば民間の頑迷なる階級より來る後種のものを看過するのは予輩の常に遺憾とする所であつた。尤も言論壓迫の事實の最も普通に表はるゝのは其政府より來る場合である。殊に寺內內閣は此點に於て最も辛辣を極めて居つたから、予輩も屢々之と抗爭したのであるが、然るに近時我國言論界の暗礁とも目すべき國體擁護の旗印の下に、第二種の言論壓迫が初まりつゝあるのを觀て、先に寺內內

閥の壓迫政策に反對の聲を擧げたと同じ意味に於て、再び又此處に反對を絕叫せざるを得ざるを遺憾とするものである。

事は大阪朝日新聞に關係する。同新聞の最近の論調が國體を冒瀆し、朝憲を紊亂するものとなし、浪人會と稱する一團が起つて盛んに攻擊の矢を放つて居る。朝日新聞の論調の何たるかは今暫く之を問題としない。日本國民の識者階級中、心から國體冒瀆、朝憲紊亂を念とする者あるべからざるの疑なき以上、區々文字の末に拘泥して、之を論難攻擊するは別に其途がある。假令(よし)んば眞に彼の態度を以て憎むべしとするも、之を攻擊すべくんば甚だ大人氣ないとは思ふが、彼の「新時代」の如く每號青筋を立てゝ怒號するもよからう。或は現に問題となつて居るが如く法廷に之を訴ふるもよからう。併しながら一村山翁を途上に要して暴力を加ふるが如きは以ての外の曲事である。各新聞では餘りの馬鹿氣た事として默殺して居るのではあるまいかと思ふが、此頃東京市中に於ても所謂浪人會の朝日新聞攻擊の演說會が開かれて居る。試に之を傍聽するに、言辭甚だ不穩を極め、極端なる暴力的制裁の續行を暗示するにあらずやと思はるゝ節もあつた。傍聽者中此等攻擊の動機に就き忌はしき風聞を耳語する者あつたけれども、予輩は辯士中教養ある知名の紳士が之に加つて居る事から推して之を信じない。けれども斯くの如き形で言論に一種の脅迫を試みるのは決して喜ぶべき現象ではない。尤も當の朝日新聞の態度に關する評價如何に依つては、之に對して極端な手段を講ずるも或は恕すべき點ないでもなからう。故に絕對に之を非とすべからざる點もないではなからうが、唯教養ある紳士が斯の如き極端なる形で、自由なる言論の發表を壓迫するのは、兎に角大正の今日の一大不祥事である。而して予輩は序に、何事にも神經過敏なる我警察官憲が、斯の如き不穩の言動の取締につき、餘りに寬大なるを遺憾とする旨を一言して置く。





お絹とその兄弟

佐藤春夫

私はかつてK縣T郡のNといふ村に住んだことがある。考へると、全く妙な心持がする。あんな片田舍へ、一たい何のつもりで、住まうなどと思ひ立つたものであるか、今日になつて見れば少々物好きすぎたと思ふ。けれどもその時には、私は本氣にその村で一生をおくるつもりだつたのだ。それはつひ二年ほど前のことである。けれども私は、それがもう十年ももつと昔のことであつたかのやうに思ふ。若しかすると、私はその田舍の一年足らずの生活の間に、十年も年をとつたかも知れない。私はその村で非常にさびしい思ひをしたのだから。

私自身がさびしい心持を持つて居た。けれども、その村そのものもなかなかさびしい場所であつた。言はゞその點がその頃の私の氣に入つて居たのだつた。そこは、東京からでも横濱からでも、或は八王子からでも、それぞれ七八里とは離れて居なかつた。それで居

てそれらの都會への交通の便といふものは、殆んど全く何もなかつた。そこは以前、鐵道の枕木を產出した地方としてそのみちの人には知られて居た。そのN村は、神奈川と八王子とを行き來する汽車の道からは、一里以上もそれて居た。その汽車を一度乘りそこなふと、無駄に三時間も待つて居なければならなかつた。そんな場合を考へると、この汽車は寧ろ不便なものであつた。村の人人は、僅に圓太郎馬車で神奈川へ行くか、それでなければ歩くのである。その馬車の立て場までだつて、私の住んだあたりからは一里近くの道である。それでも村の人人は、一向に不便を感じはしなかつたのだ。それほどこの村の人人は、單純な生活をしてゐたからである。ちよつと考へると、このわれわれが今居る東京のそれほど近くに、こんな不便な荒廢した田舍があることは、不思議なほどである。實際、私も最初に偶然この地方を見出した時には、圓太郎馬車に搖られながら、道ばたの田や、畑や、沼や、橋や、森の木立や、桑畑や、雜木の丘や、桃や梨の果物畑を見て居るうちに、いつの間にか忽然と目の前に展開されて來た天地に氣がついて、驚いたものであつた。しかしよく考へて見ると、大市街の直ぐ近所にこそ、反つてこんな場所が出來もするのである。それは床しいことでもあるが、また考へさせることでもある。

そこは武藏野の片隅で、その野原が盡きてしまつて、これから山國にならうといふ地勢であつた。そこには平凡な丘が幾つも、幾重にもつづき重つて居た。その丘の或る場所からは、上古の人間の遺して行つた石の鏃が、大雨の後などに時々出て來るといふところもあつた。さうしてT川の上流で、その流域だけが僅かに打ち開けた田圃であつた。南の丘の遠いうしろには富士山脈のうちのあるものが見えた。場所によつては富士山も、その眞白い頂だけが見えた。秩父山脈の諸の峯が、雲の層のやうに——實際夏のうちは雲だとばかり思へた——かすかに黑く西の地平に見えて居た。そんなところに、一筋の道に沿うてそれもやつと片側だけ、飛び飛びに、或はまた道からはずつと距たつてその代りには

丘の懐に抱かれて、古い草葺の屋根がいくらかかたまつて居た。それらは、人間がむかしどんな場所を擇んで自分達の住居にしたかといふことを、實例で示してゐるやうであつた。そんな家の一つに私は住んだのだ。

私は初めN村のうちの字Iといふところに、お寺の一室を借りて居た。しかし三月ほど後に、同じ村のうちの字Kといふところで、一軒の家を借りることになつた。KはIよりも、もう半里以上も上であつた。それだけに一層不便であつた。

私達がIからKへひつ越しをした時に、その家へ案内してくれたり、荷物を運ぶ手傳ひをしてくれたり、煤けた障子を家の前の溝で洗つてくれたりした女があつた。その女はなかなか小まめに親切に働いてくれた。その女はそんな緣から、その後、私の家へよく遊びに來るやうになつた。私の妻（この女は後に離別したが）は、話相手がないままに、よくその女といろいろな話をしたり、また時々洗濯物を賴んだりして居たやうであつた。

ほんたうに親切な人だ。」

妻はさう言つて、よくその女をほめて居た。その女はおきんといふ名であつた。さうして、村の桶屋の萬平の妻であつた。年はそのころ三十五六であつた。或はもつと若かつたかも知れない。併し、正直に言へば醜い女であつたから、實際、幾つであらうともそれがあまり重大な問題ではなかつた。おきんは色が黑かつた。その顏の形が栗に似て居た。平たい、ひしやげた顏で、頭が大きくつて顎がなかつた。よく、太つて居た。亭主の萬平はきりぎりすのやうな顏をして居た。さうして瘦せて居た。彼等はいかにもそんな田舍にはありさうな人たちで、さうして都會では決して見られない種類の人たちであつた。その萬平は犬が好きだといつて、私の犬を見に來ることもあつた。萬平は滅多には來なかつたが、おきんの方はよく遊びに來た。秋の夜長になるに從うて、いろいろと畑で出來るものを手にさげては、おきんは

ふりつづく秋雨のなかを、遊びに來た。さうして何かと話して居た。おきんは仲々話好きらしかつた。或るそんな雨の晩のことである。おきんはひよつくりと、彼の女の身の上話を始めた。私は妻とおきんとが常にどんな話をして居たかは知らないが、この晩はたまたま私もその火鉢の傍に居たから、おきんの語を聞くことになつた。おきんの話は思つたより面白かつた。私はつひ感心して、その話をおしまひまで聞いた。見たところ何の變つたところもないこの女が、そんな珍らしい運命を堪え忍んで來たかと思つて、私は深い淵を見つめるやうな心持でつくづくとその女の顏を見た。私は多少感動した。それはおきんが私たちに起させやうと試みたものとはよほど違つて居たかも知れないが、兎にも角にも私はその話に心をひかれた。ところがそれがおきんにはうれしかつたものと見える。おきんの話を聞いて、私ほど耳を傾けた人は今までないと言つて、おきんは私に感謝した。おきんはそれ以來、閑あるごとに私たちを訪ねた。さうして何度でも何度でも、その身の上話をくり返した。思へば私は我儘な男である——その田舍へ孤獨を求めて來ながら、半年とはたたないうちにもうそんな淋しい田舍にも滿足出來なかつた。私はどこことも知らないところへの鄕愁（それは心と體との）から、もの每にいらいらする心持を起すやうな心身の狀態になつて居た。それでおきんの話も、たうとうおしまひに私を腹立しくした。私はおきんの顏を見ると逃げるやうになつた。私はそれほど、それに惱まされたほど、度々、その話を聞いたのだ。おかげで私はおきんの話を、今でも、ほとんど彼の女の言葉どほりに語ることが出來る。

おきんの生れたのは甲州のMといふ靈場の附近である。おきんは六つの時に母に死に別れた。さうしてその村のお寺で育てられるやうになつた。おきんはそのお寺の住職のことを「和尙さん、和尙さん」とさう言つてなついた。そのころおきんは、自分の父は母よりも先に死んでしまつたので自分は身なし兒だ、といふ風に思ひ込んで居た。それは亡く

なつた母がおきんにさう教へて居たからである。けれどもおきんはふとしたことから、「和尚さん」が自分の父ではないかといふことを、子供ごころにも考へるやうになつた。といふのは、おきんが村の學校へ通うやうになつてから、「やあい！　坊主の子、坊主の子」と、さう言つて、男の子などから毎日からかはれたことである。最初、おきんはそれを、自分がただ和尚さんに養はれて居るから、外の子供たちがそんなことを言うものと考へて居た。と同時、何故ともなくもしやほんたうに、和尚さんが自分のお父さんではなからうかとも疑はれた。さうして、和尚さんが、おきんの疑うたとほり、おきんのほんたうのお父さんであつたといふことは、間もなく子供のおきんにもわかつて來た。それは和尚さんの臨終の床でである。それを叔母さん（おきんの母の弟の妻）が教へてくれたからである。その時、おきんはたしか八つであつた。

かうして今度はほんたうに身なし兒になつたおきんは、母の弟である叔父の夫婦にひきとられた。叔父はお寺とは十五六里も離れた村に住んで居た。その叔父夫婦には子供が無かつた。それでおきんはその二人から非常に可哀がられた。さうして一年半ばかり經つた。

或る日の暮れのことであつた。叔父の家へ見知らない若い男が訪ねて來た。その若者は、そんな田舍では見られない町場の風俗であつた。帽子を冠つて居た。さうして旅裝をして入つて來た。叔父とその若い人とは、機嫌よく話し合つて居た。叔父は、叔父たち二人のそばでそれを見て居たおきんを呼びかけて、

「これやお前の兄さんだぞ。」

と、言つて聞かせた。おきんは自分にそんな大きな兄さんのあつたことを、この時初めて知つた。叔父と、兄だと言はれたこの若者とは酒を飲み出した。それは多分秋であつたらう。何でも爐に火を焚き出したころだつたのをおきんは

覺えて居る。おきんは物珍らしさに二人をぢつと見て居た。さうして自分のことが話されて居るのだと知つた。どういふわけだか、そのうち二人の聲がだんだん高くなつて來て、二人は喧嘩をしさうになつた。叔母は入つて來て二人をなだめた。叔父はごくおとなしい人で、めつたに慍つたりなどはしなかつたのに、この時には大へんに慍つた。さうして叔母がなだめてもなかなかきかないで、大きな聲で言つた。「子供のころから家を飛び出して、おふくろの死に目にも逢ひに來ず、おやぢの葬式にも來なかつたものが、今ごろどのつらをさげて、この家の敷居をまたげられるか」叔父はまたかうも言つた。「われのやうなごろつきに、どうしてこの子が渡されるものか。これはもうおれの子になりきつてゐる。兄、兄と、何を笠に着ることがある。」叔父は叔母を突き退けた。兄は立上つた。兄は非常な大男であつた。「私はその前から泣いて居ましたが、(と、おきんは言つた)兄の立上つたのを見た時には身慄ひが出るほど怕しくて、泣きやんだ程です。」それでも、おきんはその兄につれられて行かねばならぬことになつた。兄はおきんに「こんな田舍ではない賑やかな町場へつれて行つてやる」といつた。

兄がおきんをつれて來たのは八王子の町であつた。おきんは兄と一緒に、或る家の二階に住むことになつた。その家にはお婆さんがたつた一人きりしか居なかつた。兄はおきんをつれて來る時に、おきんと一緒におきんの持物を、母や父がおきんに遺して置いてくれたものを、すつかり叔父から受取つたのである。多分、兄はうまい事を言つて正直な叔父夫婦をたぶらかしたのであらう。さうして八王子へ來ると、兄はもう直ぐその晩から、そのお婆さんの家へはとまらなかつた。子供のおきんを一人のこして置いて、どこへ行つたかわからなかつた。さうして三日に上げずかうしてうちを開けた。三日も四日もつゞいてうちへ歸らないこともあつた。するとそのお婆さんが、二階へとぼとぼと上つて來て、「かわいさうに、悪い兄さんを持つて。兄さんはまた今夜も歸つて來ないねえ。お前もさびしいだらう。下へおいで。

さあ、さあ、おばあさんとねんねしやう。」

　さう言つて、お婆さんは、そんな晩には、きつとおきんを自分の蒲團のなかへつれて行つた。おきんは兄が歸つて來なくつても、別だんさびしいとも何とも思ひはしなかつた。あの時、怕ろしい兄だと思つた心持は未だに消えなかつた。おきんは兄になつかうにも、なついてゐるひまがなかつたのだ、かうして兄がうちをあけてばかり居たのだから。けれどもたつた一つ、おきんには兄さんが歸つて來て欲しいとおもふ理由があつた。それはかうである。兄の歸らない晩には、かうしておきんはお婆さんに抱かれて寢た。たとひいやでもさうせずには居られなかつた。二階では、もし夜なかに目が覺めたりなどした時、おそろしくて一人では寢られないからである。併し、お婆さんと寢ると、いつでも、おきんは次のやうな會話をしなければならなかつた。——さう言つておきんは、その會話を次のやうに眞似て聞かせた。「兄さんはまた惡いことをして遊んで歩いて居るんだよ。それに女もあるんだよ。お常もあれにあんまり心配をかけさせられて、それでたうとう死んだのだ。」

「お婆さん、誰が死んだのよう？」

「お常だよ。」

「お常？」

「うん。」

「お常たあ何だんべえ？」

　するとお婆さんがいふのだ。

「うらが娘のこんだあ。」

それからお婆さんはいろいろと、そのお常といふ娘の話をした。さうしてしまひには、きつと、

「考へればお常も可愛さうだ。お前も可愛さうだ。うらも可愛さうだ。うらが一番可愛さうだ。」

さう言つてお婆さんは、しまひにおいおい聲を立てて泣いた。泣きながらまだ何かを言ひつづける。

「お婆さん、そんな話はもうよすべえよう。」

さう言つておきんも泣いた。さうしておきんは泣き寢入りに寢入つた。

このお婆さんはもうすつかり腰が曲つた居た。老ひぼれて子供のやうになつて居た。さうして毎晩同じことをおきんを相手にして口說くのであつた。―

「うらた娘のこんだあ。」

と、いふ。

「考へればお常も可愛さうだ。お前も可愛さうだ。うらも可愛さうだ。うらが一番可愛さうだ。」

と、いふ。さうして耐へ情のなくなつたお婆さんは、聲を上げておいおい泣く。

「お婆さん、そんな話はもうよすべえよう。」

と、さう言つておきんも泣く。

お婆さんはその話をしないことはなかつた。毎晩毎晩、その同じことを同じ言葉で、幾度でも幾度でも繰り返すのであつた。おきんには、夜になつてそれを言ひ出されるのが何よりも悲しかつた。さびしかつた。氣味が悪いやうで恐ろしくもあつた。それを聞くのがつらいばかりに、おきんは兄さんが歸つて來てほしいと思ふやうになつた。しかし兄は滅多には歸つては來ない。折々、歸つてくることがあつても、なかなかうちへはとまらない。兄は叔父の家から持つて

來たおきんの簞笥を開けては、母の著物やらおきんの著物やらを持出して、夕方になるとどこかへ出て行つてしまふ。さうしてそのまま二日三日どころか、一週間も歸つて來なかつた。或る日、兄は十日ぐらゐも家を開けて置いてから、見なれない人を二人もつれて、またひよつくり歸つて來た。さうして兄のつれて來た人たちは、二階にあつた簞笥を二階からおろし始めた。兄もその人たちのあとから直ぐ出て行つたが、そのまままた當分は歸つて來なかつた。けれどもしばらくするうちに、またひよつくり歸つて來た。こんどは誰もつれて居なかつた。さうしておきんにむかつて、「よく留守をして居た」とさう言つてほめた。兄は今までこんなことを言つたことは無かつたのに。それから兄は、町へ行かうと言つておきんを誘うた。おきんは今まで、八王子へ來てもまだ一度も町へ行つた事はなかつたのだ。連れて行つてくれる人がだれもなかつた。よぼよぼのお婆さんは、毎日家にばかり居たのだから。おきんは兄の誘うてくれるままに町へついて行つた。さうしていろいろなところを步いた。或るところまで來た時に、今まで默りこんで步いて居た兄は、不意に立ちとまつた。さうしておきんの手をひいて、ごく優しい聲でおきんに言ひかけた。

「お前は今日からよその子になるんだよ。いゝかい。」

さう言つて置いて、兄はちようど前にあつた一軒の家の表障子をがらりと開けた。おきんの手をひいて、そこへ這つて行た。さうして上り框へ腰をかけた。さうして兄は言つた。

「おとつつあん、連れて來たんだがね。」

見ると、その家のなかには男の人が二人ゐて、何か話をしてゐるところであつた。兄がさう言うと、そのうちの二人は一度に私——おきんを見た。さうしてそのうちの一人が言うのである。

「うん。その子か。それや年の割にや大きいな。」

するともう一人が言うのである。

「さうさ。それならもう二年もすれやあ、糸とりにもなれよう。」

兄とその人たちとは兼ねて相談がしてあつたものと見える。兄は「ちや、たのんだぜ」といふやうなことを言うかと思うと、自分だけ一人でどこかへ行つてしまつた。おきんを見て「年の割には大きい」と言つた方の男が、その後永い間、おきんの父になつた。さうして父らしい、悪い父らしい權力をおきんの上に振ふやうになつた。けれどもおきんはこの養父から、何一つ世話になつたことは、おきんが三十幾つかになつた今日までに、それこそただの一度もないのである。その時にだつて、おきんはその人からお茶一杯ふるまつて貰ひはしない。その家の上り框へ腰を下しすらしない。

實際、おきんはその時兄が居なくなると直ぐそのまま、養父ではない方のもう一人の人、「それならもう二年もすれや糸とりにもなれる」と言つた人につれられて、或る家へ奉公させられることになつた。それがおきんの十の年のことである。

おきんのつれられて行つたのは、八王子の直ぐ近在の或る家であつた。その家では機を織るのを商買にしてゐた。さうしておきんの外にも、雇女が十人ぐらゐも居た。何れも娘ばかりであつたが、皆もう年ごろで、おきんだけが小さかつた。おきんは勿論、機を織ることは出來ない。その外、糸を卷くことも出來ない。何も出來ない。只おきんの仕事は人人が經糸の縞をこしらへてしまつた時、その長い經糸のかたまりをちきりへ——機の抽になる木へ卷きつけるときに、その抽の木をおさへたりぐるぐる卷いたりする人の手傳ひをして、その卷かれる糸と糸との重なる間へ竹ぎれをはさんだりすることであつた。また機織りの娘たちが仕事をするところで、娘たちが過つて梭をとり落したりするやうな場合に、おきんはそれを拾つてやる役もした。年をとつた娘たちは、おきんをいいなぶりものにした。監督をするやう

な人が誰も見て居ないやうな時には、その娘たちはわざと梭を落して見て、おきんにそれを拾はせた。あちらでもこちらでも同じやうなことを始める。さうしてしまひには、こごんで梭をとつてゐるおきんの頭を蹴つたりする。さうして皆して、囃し立てて笑ふ。こんな時に主人でも這入つてくると、その娘どもは人間の足音を聞いた鼠のやうに、すばやく、そらぞらしくしいんと靜まりかへつて、仕事をつづける。さうしてそんな騷ぎのおこりはおきんであつたやうなことを、皆していふ。おきんは、「何をめそめそ泣きやがるんだ」といつてよく主人から叱られた。打たれもした。晝や、八ツの休みや、夜などにはその娘たちはいつでもみだらな話ばかりして居る。さうして仲間はづれのおきんも、しかたなしにその娘たちのそばにでも居やうものならば、機織り娘どもはすばしこくそれを見つけて、「おきんは子供のくせに男がある」の「男の話をききたがる」のと言つてからかふ。おきんはこんなことで、この娘たちから日に幾度泣かされたかわからない。おきんはしまひには、休みの時間にその娘たちに見つからないやうに、ひとり物置の隅などへかくれたりして居た。機織り娘たちはおきんが居なくなると、からかふものがなくてさびしいものだから、おきんを捜し出しに來る。さうして、先づおきんをうまく甘えかして置いて皆のところまで連れ出す。さうしていろいろとおきんをいぢめる。おきんはまた、穢い身なりをして居るといつてはよくいぢめられた。皆して、「あれは乞食の子だ。だから、お小使ひもなければ、お盆にだつて歸るうちもない。さうして着物はいつでも一枚きりだ。やあい！　乞食の子。乞食の子。」「乞食の子だから虱がたかつて居る」「皆そばへよると虱がうつる」さう言つて、その機織り娘たちはよくおきんを囃したてた。おきんをなぶりものにした。實際、機織り娘たちの言ふことはほんたうであつた。おきんには小使錢をくれる人もなかつた。お盆の日が來て皆それぞれと、着物を着かへて出かけても、おきんは別にどこと云つて行くところも無かつた。着物はきたきりであつた。夏から秋になつて來ても、おきんは着更へるものもなかつた。

ところが、この家にもひとりのお婆さんがあつた。さうして誰一人かまつてくれないおきんを見て、子供のおきんに身の上をたづねた。それがはじめで、お婆さんはおきんに目をかけてくれるやうになつた。秋もずつと末になつた頃、おきんがまだ單衣もの一枚しか身につけて居ないのを、お婆さんはやつと氣がついたものと見えて、お婆さんは自分の古ぼけためくら縞の單衣を解いて、それをおきんの袷にしてくれた。もつと寒くなつた時にはその同じ袷を解いて、今度は綿入れになほしてくれた。藁くづや糸くづだらけの頭を見て髮を洗へと言つて手傳つてくれた。ほんたうにおきんの頭には虱が巣をくつてゐた。お婆さんはこんなに親切にしてくれた。それに機織りの娘たちももうおきんをいぢめることにも飽きたと見えて、一ころほどはげしくなぶるやうなこともなくなつた。しかしおきんが吻としたのもほんの一ときであつた——或る日のことである、機織り娘のひとりが五錢の白銅をなくしたと言ひ出した。するともう一人がさう言へば自分のも足りないやうだと言ひ出した。すると別の一人が、私はおきんが買ひ食ひをして居るのを見たと言つた。皆はその場ですぐさまおきんを疑ひ出した。おきんはそのことに就いて言つた——私は今日までずい分いろいろな苦しい目にも會つて來たけれども、人樣のものを盜むどころか、道におちて居るものをだつて拾つたことはない位です、と。(なるほど、おきんのさう言つたのは本當に相違ない、と私も信ずる。おきんは正直な女であつたから)そこで疑ひをうけたおきんはいろいろと正直に言ひわけをした。しかし人人の疑ひは晴れたとは思へなかつた。おきんは長い間、物置きの藁の上で泣いた。さうしてたうとうあまりの口惜しさと悲しさとに、その晩あてもなくこつそりその家から逃げ出した。さうしてひとりで八王子へ廻り出た。

村はもう夜更けのやうに靜かであつたけれども、八王子へ出てくると、そこはまだ明るい宵の口であつた。おきんはうろうろと八王子の町を歩いた。あの兄と一緒に住んでゐた家を、あのおきんを抱いて毎晩泣いたお婆さんの家を搜さ

うと思ひついたのである。けれどもおきんにはそのお婆さんや兄とゐた家はどうしても見つからなかつた。それは、おきんがその家やその家に行く道をよくおぼえて居なかつたのかも知れないが、兎に角、ここだと思ふあたりにはその家はなかつた。そのうちに夜がふけさうになつた。おきんは途方にくれてゐるうちに、ふと子供ながらに氣がついた。いつか兄につれられてほんの五分ばかりゐたことのあるあのうちへ、そこから奉公に出されたあのうちへ行つて見やう。さうして兄のゐどころをたづねて見やう。さう思つておきんはその家を搜した。搜しあてた。その家へ行くと、あの時の男の人がゐて、何だつて今ごろ歸つて來た?と詰つた。そこでおきんは子供としては出來るだけ細かに、事のなりゆきを泣きじやくりながら話した。その男はただ「さうか」と言つた。さうして「兄は今は八王子には居ない。だが心配をすることはない。ここのうちへとまればよい。おれはお前のおやぢだから。それにそんな悪いうちなどへはもう行かずともよい」さうその人は案外にも親切に言つてくれた。

　その翌日の朝、おきんがゆふべまで奉公してゐた家の主人が、おきんを搜して連れもどすためにその家へ訪ねて來た。自分でおきんの父になつたのだと名告つた男は、その訪ねて來た人を見ると、非常におこつた――「ひとの家の子をつかまへて、乞食の子呼ばはりをした上に、盗人(ぬすっと)などと難くせをつけやがつて、いくら子供だからつて辛棒しないはあたりまへよ。それをよくもづう〳〵しくむかへになんぞ來られたものだ。うちへ歸つて來たからこそいいやうなものの、盗人と言はれた口惜しまぎれに、若し間違ひでもし出かして居て見ろ。手前たちは何だつておれに顔むけするつもりだつた。」さう言つて吐鳴つた。それをかげでききながら、ほんたうにいい氣味だとおきんは思つた。さう吐鳴られておきんを連れ戻しに來た筈の人は、默つてそのままかへつてしまつた。するとおきんの名儀上の父は、愉快さうに家内のものの顔を見て笑つた。この日、おきんはこの父から二十錢の銀貨を一つもらつた。おきんがこの父からものを貰つたと

いふのは、あとにもさきにも全くこの時限りである。それほどにこの父は上機嫌であつた。この時の上機嫌の理由は、この父のその後のいろいろな仕打ちと考へ合して、おきんにはずつと後になつて初めてわかつた。この父はあの機を織る家へ、何年かの年期をきつて前給金で、おきんを奉公させて居たのであつた。おきんが年期を勤め上げずに逃げてかへつた時に、おきんの養父は「よくやつた」と思つた。さうしてもう一度、おきんを、二重に給金をとらせるためにどこかへ奉公させやうときめたのであらう。あの二十錢の銀貨はおきんへの褒美であつた。事實、おきんは、その日――逃げて來た次の日、早速別の家へ奉公にやられた。

二度目におきんの行つたうちは、やはり近在の村であつた。それは糸を紡ぐ家であつた。しばらくゐるうちにおきんは糸をとれるぐらゐになつた。糸をとるのをおきんは好きであつた。一たい糸とり臺といふのは、一つの大きな部屋のなかに澤山に列んで居る。おきんの居た家にも十五やそこらはあつた。さうして大きな水車の力がもとになつて、列んで居るそれぞれの糸とり臺が一つ一つ一度に動くのである。おきんは子供だつたから屑のやうな惡い糸をとらせられた。このうちではおきんはそれほどいぢめられはしない。つまり誰もおきんなどの相手にはなつてくれなかつたのだ。結局それがおきんには反つてよかつた。それにおきんの腰をかけて居る臺の隣りの臺に居た子は、極くおとなしい、優しい娘であつた。この家でもおきんが一番小さかつたが、その次がこの子だつたらう。よく糸のことなどでいろいろおきんに敎へてくれた。その子は何といふ名であつたか、それをおきんは折にふれて、時々思ひ出さうとするけれども忘れてしまつたまま、のどもとまで出てくるやうで居ながらどうしても思ひ出せない。その子は無口な沈んだ子であつた。一日中ほとんどめつたに口も利かない、ただ口のなかで小聲で何か唄をうたつて居るのが癖であつた。その唄の節をおきんは今も耳の底にはつきり覺えてゐる。けれども文句の方は少しも覺えてゐない。それで、その子は色がくつきりして、可愛い

い顔である。おきんはその子の側にゐるのが妙にうれしかつた。ところが或る日のことである。この娘が不意に姿が見えなくなつた。はじめ、おきんのそばに人が坐つてゐないのを見て、仕事を見まわりに來た人が、おきんに、その娘はどこへ行つたかと尋ねた。おきんも知らないから「知らない」と答へた。その人は皆に尋ねた。皆どうしたのだらうと口口に言つた。或る一人がその子がさつき井戸ばたで釣瓶から水を飮んでゐたのを見たと言つた。その子は二時間もたつてまだ歸つて來なかつた。そのうちに夕方になつた。暗くなつた。皆は一層心配しだした。うちへ歸つたのかも知れないと言ふので、そのうちではその子のうちへ使を出した。夜おそくなつてその使ひは歸つて來たが、うちにももどつては居ないといふので、使と一緒にうちからはその子の父親が心配してついて來た。さうして迷子になつたのだらう、神隱しに遇つたのだらうといふので、村の人たちを集めて、その子を夜通しで捜すことになつた。けれどもその子はどうしても見つからなかつた。さうして皆ももうそのままにして置くより外には手の盡し方もなくなつてゐた。ただいろいろと取沙汰をするばかりであつた。すると、その子が見えなくなつてから一日おいて、三日目の夕方である。不意にどしんと大きな音がして、家の屋根全體ぶるぶるとふるへ出した。皆びつくりして、一かたまりになつて家の庭へ出た。初めは地震かと思つたのだ。ところが庭へ出て見ると、その家の草屋根の上へ、おとつひ見えなくなつた子がぼんやり、仄白く突立つて居る。皆は二度びつくりした。梯子をかけてやると、その子はやつと下りて來た。「それからが面白いのですよ」(と、おきんは言つた)その子の言ふのを聞くと、その子は天狗にさらはれたのだつたのです。その子が井戸ばたで水を飮んでゐると、ふいに大きな人が出て來て、その子を上の方へ持ち上げて行つたのださうです。さうしてどことも知れない山のなかへその子を連れて行つたさうです。山のなかにはやはり同じやうな天狗が澤山集り合つて居ましたが、その子を見ると、その天狗の中の一人が言ひますには、

「それはいい子だからかんぺんしてやらう。」するとその子をさらつて行つた天狗も、「さうか」と、さう言つたさうです。さうしてその子をもう一度ずつと高いところへつれて行きましたが、そこから帶をもつてぐつと突き落したさうです。氣がついて見ますと、落ちたところはその家の屋根だつたさうです。その子は、それから一層陰氣になつて一週間ほどといふものは誰にも一言ものを言ひかけませんでしたよ。ええ、さうですその子は十五か六ぐらゐでした。

「私が天狗にさらはれた人を見たのはこれが初めてでございましたよ。」

そんな事もあつた。けれどもおきんには何の變つたこともなく、おきんは十四の春まで糸とりになつてその家で奉公をした。あの父が迎へに來て、たうとうそのうちからひまをとることになつた。おきんは慣れたこの家からひまをとるのが名殘惜しかつた。おきんは、それから八王子の遊廓の近くにある小料理屋の小女になつた。おきんは初めつからこんな家に居るつもりではなかつた。おきんは女中たちや客からいろいろ不愉快な思ひをさせられた。主婦からは氣がきかないといつて叱りつけられた。客はわざわざわかりにくいやうに符牒をつかつてものを注文した。おきんがわからなくつてまごつくのを見ておもしろがつた。いろいろなものを言ひつけて、おきんがそれを下へとりに行くと、それは何も無いものであつたりする。聞いた人たちは面白がつて笑ひころがる。併し、おきんにはそれが何でおかしいのかわからない。今思へば皆それはみだらなことであつたらしい。さうして主婦からは馬鹿だといつて叱られる。この家には大きな女中が三人もゐるのに、その女中たちはいつも客のそばにばかり居るので、ものを運んだり、用を言ひつかつたりするのはいつもおきん一人でしなければならない。そのうちは小さいくせにむやみと客の多いうちであつた。おきんは日に何十ぺんとなく梯子段を上り下りしなければならなかつた。それはどんなに足のくたびれるものであるか、實際に

それの經驗のない人たちには、いくら言つて見ても到底わかるものではない。それにそんなうちのことであるから夜は極くおそい。そのくせ朝は朝で割合ひに早い。しかし朝いちばん早く起きるものは、おきんである。主婦が床のなかからおきんを起すのである。さうしておきんは人人の朝の食事の用意を一切させられた。おきんはわれながら感心するほどよく辛抱をした。けれどもやがてこの家からもやはり逃げ出すやうなことになつた。

この家を逃げ出すに到つたことの理由に就ては、おきんは全く說明をしなかつた。その代りには次のやうなことを、次のやうに詳しく話をした。

おきんはどうしても逃げ出さねばならないと決心をした。しかし、こん度はあの父の家へも逃げて行くのはいやな、逃げて行けないやうなわけがあつた。さうして、逃げるほどならば甲州の叔父の家まで逃げねばならないと決心をした。しかしおきんはちつとも金を持つて居なかつた。給金はあの惡い養父がもつて行つたのであらう。客は外の大きな女たちには金をくれて居たけれども、誰もおきんにと言つてくれるものはなかつた。またおきんはほしいと思ひもしなかつた。それでもおきんは五十錢や七十錢はためて居たやうにも思ふ。しかし、金があつたところで、甲州まで汽車に乘れるものやら、どうして乘るものやら、叔父の村へはどう行くものやら、そんなことは皆目おきんにはわからない。第一叔父の村の名をさへ忘れて居た。ただその村のことははつきり目に見えるやうに覺えて居る。行けば解るだらうぐらゐに考へて居た。おきんは迷うた。夕方になつた。おきんは今夜こそ逃げ出さなければと考へた。おきんはお湯に行くと言つて家を出た。手には手拭ひと、糠ぶくろをさげて居た。その家ではお湯へ行く時には湯錢と糠とをくれることになつて居たから。ありたけの錢は以前からいつでも身につけて居た。さうして外におきんが持ち出すやうなものは何もなかつた。しかしおきんは遠い甲州まで行く道のことを案じると、まだほんたうの決心は出來てゐなつた。おきんはお

いふのは、あとにもさきにも全くこの時限りである。それほどにこの父は上機嫌であつた。この時の上機嫌の理由は、この父のその後のいろいろな仕打ちと考へ合して、おきんにはずつと後になつて初めてわかつた。この父はあの機を織る家へ、何年かの年期をきつて前給金で、おきんを奉公させて居たのであつた。おきんが年期を勤め上げずに逃げてかへつた時に、おきんの養父は「よくやつた」と思つた。さうしてもう一度、おきんを、二重に給金をとらせるためにどこかへ奉公させやうときめたのであらう。あの二十錢の銀貨はおきんへの褒美であつた。事實、おきんは、その日——逃げて來た次の日、早速別の家へ奉公にやられた。

二度目におきんの行つたうちは、やはり近在の村であつた。それは糸を紡ぐ家であつた。しばらくゐるうちにおきんは糸をとれるぐらゐになつた。糸をとるのをおきんは好きであつた。一たい糸とり臺といふのは、一つの大きな部屋のなかに澤山に列んで居る。おきんの居た家にも十五やそこらはあつた。さうして大きな水車の力がもとになつて、列んで居るそれぞれの糸とり臺が一つ一つ一度に動くのである。おきんは子供だつたから屑のやうな悪い糸をとらせられた。このうちではおきんはそれほどいぢめられはしない。つまり誰もおきんなどの相手にはなつてくれなかつたのだ。結局それがおきんには反つてよかつた。それにおきんの腰をかけて居る臺の隣りの臺に居た子は、極くおとなしい、優しい娘であつた。この家でもおきんが一番小さかつたが、その次がこの子だつたらう。よく糸のことなどでいろいろおきんに敎へてくれた。その子は何といふ名であつたか、それをおきんは折にふれて、時々思ひ出さうとするけれども忘れてしまつたまま、のどもとまで出てくるやうで居ながらどうしても思ひ出せない。その子は無口な沈んだ子であつた。一日中ほとんどめつたに口も利かない、ただ口のなかで小聲で何か唄をうたつて居るのが癖であつた。その唄の節をおきんは今も耳の底にはつきり覺えてゐる。けれども文句の方は少しも覺えてゐない。それで、その子は色がくつきりして、可愛い

い顔である。おきんはその子の側にゐるのが妙にうれしかつた。ところが或る日のことである。この娘が不意に姿が見えなくなつた。はじめ、おきんのそばに人が座つてゐないのを見て、仕事を見まわりに來た人が、おきんに、その娘はどこへ行つたかと尋ねた。おきんも知らないから「知らない」と答へた。その人は皆に尋ねた。皆どうしたのだらうと口口に言つた。或る一人がその子がさつき井戸ばたで釣瓶から水を飲んでゐたのを見たと言つた。その子は二時間もたつてまだ歸つて來なかつた。そのうちに夕方になつた。暗くなつた。皆は一層心配しだした。うちへ歸つたのかも知れないと言ふので、そのうちではその子のうちへ使を出した。夜おそくなつてその使ひは歸つて來たが、うちにもどつては居ないといふので、使と一緒にうちからはその子の父親が心配してついて來た。さうして迷子になつたのだらう、神隠しに遇つたのだらうといふので、村の人たちを集めて、その子を夜通しで捜すことになつた。けれどもその子はどうしても見つからなかつた。さうして皆もうそのままにして置くより外には手の盡し方もなくなつてゐた。ただいろいろと取沙汰をするばかりであつた。すると、その子が見えなくなつてから一日おいて、三日目の夕方である。不意にどしんと大きな音がして、家の屋根全體ぶるぶるとふるへ出した。皆びつくりして、一かたまりになつて家の庭へ出た。初めは地震かと思つたのだ。ところが庭へ出て見ると、その家の草屋根の上へ、おとつひ見えなくなつた子がぼんやり、仄白く突立つて居る。皆は二度びつくりした。梯子をかけてやると、その子はやつと下りて來た。「それからが面白いのですよ」(と、おきんは言つた) その子の言ふのを聞くと、その子は天狗にさらはれたのだつたのです。その子が井戸ばたで水を飲んでゐると、ふいに大きな人が出て來て、その子を上の方へ持ち上げて行つたのださうです。さうしてどことも知れない山のなかへその子を連れて行つたさうです。山のなかにはやはり同じやうな天狗が澤山集り合つて居ましたが、その子を見ると、その天狗の中の一人が言ひますには、

「それはいい子だからかんべんしてやらう。」するとその子をさらつて行つた天狗も、「さうか」と、さう言つたさうです。さうしてその子をもう一度ずつと高いところへつれて行きましたが、そこから帶をもつてぐつと突き落したさうです。氣がついて見ますと、落ちたところはその家の屋根だつたさうです。その子は、それから一層陰氣になつて一週間ほどといふものは誰にも一言ものを言ひかけませんでしたよ。ええ、さうですその子は十五か六ぐらゐでした。

「私が天狗にさらはれた人を見たのはこれが初めてでございましたよ。」

そんな事もあつた。けれどもおきんには何の變つたこともなく、おきんは十四の春まで糸とりになつてその家で奉公をした。あの父が迎へに來て、たうとうそのうちからひまをとることになつた。おきんは慣れたこの家からひまをとるのが名殘惜しかつた。おきんは、それから八王子の遊廓の近くにある小料理屋の小女になつた。おきんは初めつからこんな家に居るつもりではなかつた。おきんは女中たちや客からいろいろ不愉快な思ひをさせられた。主婦からは氣がきかないといつて叱りつけられた。客はわざわざわかりにくいやうに符牒をつかつてものを注文した。おきんがわからなくつてまごつくのを見ておもしろがつた。いろいろなものを言ひつけて、おきんがそれを下へとりに行くと、それは何も無いものであつたりする。聞いた人たちは面白がつて笑ひころがる。併し、おきんにはそれが何でおかしいのかわからない。今思へば皆それはみだらなことであつたらしい。さうして主婦からは馬鹿だといつて叱られる。この家には大きな女中が三人もゐるのに、その女中たちはいつも客のそばにばかり居るので、ものを運んだり、用を言ひつかつたりするのはいつもおきん一人でしなければならない。そのうちは小さいくせにむやみと客の多いうちであつた。おきんは日に何十ぺんとなく梯子段を上り下りしなければならなかつた。それはどんなに足のくたびれるものであるか、實際に

それの經驗のない人たちには、いくら言つて見ても到底わかるものではない。それにそんなうちのことであるから夜は極くおそい。そのくせ朝は朝で割合ひに早い。しかし朝いちばん早く起きるものは、おきんである。主婦が床のなかなかおきんを起すのである。さうしておきんは人人の朝の食事の用意を一切させられた。おきんはわれながら感心するほどよく辛抱をした。けれどもやがてこの家からもやはり逃げ出すやうなことになつた。

この家を逃げ出すに到つたことの理由に就ては、おきんは全く說明をしなかつた。その代りには次のやうなことを、次のやうに詳しく話をした。

おきんはどうしても逃げ出さねばならないと決心をした。しかし、こん度はあの父の家へも逃げて行くのはいやな、逃げて行けないやうなわけがあつた。さうして、逃げるほどならば甲州の叔父の家まで逃げねばならないと決心をした。しかしおきんはちつとも金を持つて居なかつた。給金はあの惡い養父がもつて行つたのであらう。客は外の大きな女たちには金をくれて居たけれども、誰もおきんにと言つてくれるものはなかつた。またおきんはほしいと思ひもしなかつた。それでもおきんは五十錢や七十錢はためて居たやうにも思ふ。しかし、金があつたところで、甲州まで汽車に乘れるものやら、どうして乘るものやら、叔父の村へはどう行くものやら、そんなことは皆目おきんにはわからない。第一叔父の村の名をさへ忘れて居た。ただその村のことはつきり目に見えるやうに覺えて居る。行けば解るだらうぐらゐに考へて居た。おきんは迷うた。夕方になつた。おきんは今夜こそ逃げ出さなければと考へた。おきんはお湯に行くと言つて家を出た。手には手拭ひと、糠ぶくろをさげて居た。その家ではお湯へ行く時には湯錢と糠とをくれることになつて居たから。ありたけの錢は以前からいつでも身につけて居た。さうして外におきんが持ち出すやうなものは何もなかつた。しかしおきんは遠い甲州まで行く道のことを案じると、まだほんたうの決心は出來てゐなかつた。おきんはな

湯屋の前を何べんか行つたり來たりして、考へた。どうしても本當の決心はつかなかつた。そのうちにふと誰かに、どこへ行くのだと聲をかけられた。お湯へ行くのだと答へると、その人は別に疑ふ樣子もなく、さうかと言つた。おきんはこの時初めて決心が出來た。その人に逢つたのが何故にそれのきつかけになつたのだか、それはおきん自身にもわからない。すれ違つたその人の姿が見えなくなつた時、おきんはただその人とは反對の方へ、一さんに駈け出した。さうして苦しくなると歩いた。時々また駈けた……もう駈けられなくなつて歩いた……無我夢中で歩いた……

氣がついた時には、おきんはどこだかわからないところに自分が寢て居るのを見た。あたりはただもう煙のやうに眞白であつた。そのうち、おきんにはだんだん自分の居るところがわかつて來た。それは山のなからしいのである。おきんは濡れた草の上に寢てゐた。眞白だつたのは夏の朝の山の、深い霧であつたのである。あたりがだんだん見えるやうになつて、霧は下の方から上へ、だんだんと晴れて行つた。そのうちすつかり霧がなくなると、おきんの直ぐ目の前には高い峯がすつくりと聳え立つて居るのが見えて、その峯には頂上にだけ少しばかり、朝日がかつとまともに照りつけて居た。おきんはただあたりを見まわして居ると、樹と樹との間の細い山道から、鹿の皮でこしらへた山袴をはいた白髪のお爺さんが、ひとり、不意に出て來た。そのお爺さんは初めはおきんが居るのに氣がつかなかつたものと見えてすたすたとおきんが寢て居る傍まで歩いて來たが、急に二三歩とびのいた。お爺さんはぢつと見据えて、自分の眼を疑ふやうな樣子であつたが、しばらくしてお爺さんは口を切つた。

「お前、そんなところで何してゐるのだ。」

おきんは起き上りながら、自分は叔父のうちへ行くつもりだといふと、お爺さんは、叔父のうちはどこだと言つた。

おきんはどうしてか返事が出來ないでゐると、そのお爺さんは重ねて、「何とか村か。それとも何とか村か。何とかか。」と

その近所にあるらしい村の名を二つ三つつゞけて言つた。それはみんなおきんの知らない名前ばかりである。おきんは思ひ切つて、

「甲州だ。」

と言つた。

「甲州?! お前一たいどこから來た!」

「八王子からだ。」

するとお爺さんは二度びつくりして、ちようどおきんを見つけた時のやうに、また二足三足とびのいた。それから彼は、おきんがびつくりして飛上つたほどな聲で叫んだ。「お前には狐がついてるぞ。そらそら!その目を見!」

さう言つて、お爺さんは子供がするやうに、おきんの顔をつつ突くやうに指ざした。おきんははいつと思つた。その時お爺さんはさも安心したといふ風に、

「ああ、よしよし。いま狐奴がおちた。何といふ目をして居たのだ。おれやほんとうに魂消たぞ。」

さう言つて、やつとまたおきんのそばへ寄つて來た。さうして、お爺さんは、八王子からこんなところへくれば、甲州などへは出られないで全く反對に川越の方へ出ること、ここはどちらかといへば八王子よりも川越に近いこと、それにしても、八王子からここまでの間の道筋が女や子供の通れる場所ではないことなどをこまごまと說明をして、一晩に歩いて來たのだとおきんから聞いた時には一層驚いた。狐につかれてゐたのだ。このあたりには惡い狐が居るんだからとひとりでうなづいてゐた。さうして狐につかれて居たおきんの目がどんなにおそろしかつたかといふ事をくりかへしくりかへし言ひながら、おきんを、ともかくもと自分の家の方へみちびいた。そのあたりにはおきんの背丈けほどな大きな

山百合が澤山咲いて居た。おきんはその一つをさわらうとして、ふと氣がついて見ると、その手には手拭ひと猿ぶくろとを未だゆふべのまゝにしつかりと握つて居た。おきんはほんたうに狐につかれて居たのであらう。さう言へば、おきんにも思ひあたることがある。それはおきんが一さんに駈け出してから、時々うしろをふりかへつて見たが、何度見ても何度見ても、その都度おきんのすぐうしろには、一すぢに列んだ八王子の遊廓の灯が、すぐ近くにきらきらと見えて、いくら歩いてもいくら歩いてもそれが決して見えなくはならなかつた。初めからしまひまで同じ近さで追つかけて來て居た。おきんはただもうその灯影が遠くなるやうに、遠くなるやうにと一心にそればかり思ひつめて歩きつづけて居たのであつた。お爺さんから「狐につかれて居る」と言はれて、はつと思つた刹那に狐はおちたのであらう。おきんもさう思ふ。お爺さんもさう言つた。さて、お爺さんの家といふのは一軒家で、しかもひとりきりで、お爺さんは炭燒きであつた。おきんはお爺さんのすゝめてくれるまゝに、しばらくお爺さんの小屋に居た。お爺さんはおきんを氣の毒がつた。さうして「秋にもなれば自分は山を下りて行く、さうすればまた八王子へなり、それとも甲州へなり行く人を捜してお前のつれを見つける序も出來やう」さう言つておきんを慰めた。

おきんはどういふわけか、よくかうしてお爺さんやお婆さんにばかり慰められる。

おきんはこゝまでをほとんど一息に話しつゞけた。さうしてこゝで突然言葉をとぎらせた。さうしてこんなことを言つた。

「それから私はたうとうおしまひに、こんなところ——といつては惡いのですけれども、こんなところへくるやうになつたのです。あの兄が私を渡して行つた人は、あとから聞けばよほど惡い人で、何でも博奕うちの親分であつたのださ

うです。私はさんざんその人に苦勞をかけさせられて――その人は、私の親だ、親だといつては、私の行くさきざきをつけまわしたのです。つひ五六年前までは生きて居たのです。で、私がこの村へ來て、萬平と一緒になる時にも、籍を入れやうと思つたけれども、籍もその人の方にあるらしいので、その人がまた何を言ひ出すかわからないと思つて、人にも相談して、私が二十五になるまで待つて、二十五になつてから私たちは自由結婚をしたのです。」

自由結婚といふその言葉をおきんは使つた。多分、その當時人々が使つたのを聞いて覺えてゐたのであらう。

おきんは「たうとうおしまひに云々」としか言はなかつた。けれどもおきんが何を渡世にしてゐて、この村へ流れて來たのかといふことは直ぐわかる。さうしておきんとても、今更、それを私たちにかくしたのではなかつたのだ。私たちがちやんと想像するとおもつて、その言ひづらい事を言はずにすませたのであらう。實際、私たちも誰からともなく、おきんはその村につひ數年前まではあつたといふ一軒の或る種の田舍茶屋の女になつて、初めてこの村へ來たのだといふことを、聞くともなくいつか耳にしてゐた。けれども村の人たちもおきんを惡くは言はなかつた。口々に親切な、人の好い、きさくな女だと言つてゐた。あのIのお寺の大黑でさへ、人のことなら誰彼の別なく何とか言はずにはゐられなかつたその大黑でさへ、私たちがおきんの世話によくなると言つた時に、「あの人ならば親切で正直ないゝ人だから」と言つたほどであつた。おきん自身でも、自分はいゝ人だといふことを自覺してゐるらしかつた。さうして然うであるやうにと心掛けてゐるらしかつた。といふのはおきんは次のやうなことをも言つたから。おきんは言つた――おきんは自分自身がさまざまの目にあつて來たから、難澁してゐる人がよく目につく、一たいおきんの住家は八王子から横濱の方へ行く街道にあたつて居た。さうして道に沿うて少し小高いところにあつた。おきんが自分の家でいろいろ働いてゐる時などに、ふと下の道を見なれない人が通るのを見かけることがある。重さうに足をひきひき屈託ありげに通る。そん

な人は問うまでもなく、金が無くつてその代りには心配をどつさり持つた人たちに相違ない。普通の人ならば、この便利な世の中に、八王子から横濱あたりまで何を好んでとぼとぼと歩くものか。おきんはさういふ人たちをしばしば見る。或る時には若い男と女とで歩いて行く人たちが目についた。或る時には男であか兒を抱いて行く人が目についた。或る時にはおきんの家のそばの木かげに休んで、一時間もつと以上も歩き出さうとはしない若い女を見た。その女は子を孕んで居たのではないかと思ふ。或る時には、水を一杯といつておきんの家へ這入つて來て、横濱までもう何里かとたづねて、がつかりして居るらしい老人をも見た。おきんはそれ等の人々には、いつでも何とか一こと言葉をかける。そんな時に親切な言葉といふものがどんなに力になるものかを、おきんはよく知つてゐる。それから三錢なり五錢なり、或る時には握り飯なり芋なり、何でも手もとにあり合せたものを與へる。頼まれゝばもとよりであるが、頼まれない時にでもさうである。失禮だが欲しくはないかとおきんの方から聞くと、それらの人々は先づぢつとおきんを見てから、「もらひ度い」と答へる。それは十人が十人までほとんど同じ様子である。それからものを渡すと、いろいろと禮をいふ。さうしてその親切は決して忘れないといふ。或る人は無理におきんの名をたづねて、自分は東京まで行くのだが、かへればきつと禮狀を出すなどと約束をする。そんな人も三四人はあつた。けれども未だ誰も禮狀をくれた人はない。おきんは禮狀をもらひ度いとは思はない。たゞ時々その人たちがどうしたらうと思ひ出す。さうして自分のむかしのことを思ひ出す。「併し」とおきんは言つた。「世間といふものはなかなか口やかましいもので、私がそんな風にしてその人達に五錢なり十錢なりをやつて居るところを見た人があつたと見えて、おきんは自分たちが乞食をせんばかりの暮しをしてゐながら、身分不相應にも人にほどこしなどをしてゐる。といふやうなことを言はれたのを聞いたことがありました。それからといふものは、私はそんな時にはいつでも人にかくれてこつそりと、或る時には三四町も後をつけて行つてか

ら、誰も居ないところを見すましてそつと握り飯などを渡したりしなければならなくなりました。

そんな風なことをおきんは言つた。さうしていろいろそれらの種類の人々について、一つ一つもつと詳しく話したけれども、それは彼の女自身の身の上とは違つて、何度も何度も繰り返したのではなく、たつた一度言つたゞけだつたから、私はあまりよくは覺えておかなかつた。それ故、それをこゝへ描き出すことの出來ないのを殘念に思ふ。が、兎に角、おきんといふ女はそんな風な女であつた、さんざ世の中でいぢめられて來て、それでもおきんはやつぱりいつまでも人がよかつた。その上ごくきさくでもあつた。さうして時々柄にもなく、つまらぬ駄洒落などをいふこともあつた。そんな時に私はふと茶屋女としてのおきんに會うやうに思つたりした。「たゞどうも」と或る人は言つた。「おきんさんはもとがもとだけに、あれでなかなか浮氣もので、男が好きで困る。そこへもつて來て、萬平さんがまた無類のいゝ人ときてゐる。おきんさんは今も、自分のうちに來てゐる元〆めといゝ仲だといふことです。毎晩、夕方になると元〆めの山の小屋へ出かけて行く。途中で人に逢うと、桶をこしらへる木ぎれを山へもらひに行くのだと言ふさうです。さうして山へ行くと元〆めに風呂を焚いてやつたりするんだといひます。この間もSの御祭りで山で働いて居る若いものが、皆二時頃まで遊んで來て小屋へかへつて見ると、おきんさんは未だ小屋に居たさうです。毎晩おそくなつて元〆めと二人で歸るのを、萬平さんは別に何とも言はないんですね。今までにだつてずい分そんな話はあつたのですよ。萬平さんは時々、道具をもつたまゝ出仕事に行つて、一月も近在をまわり歩いてくることがありますからね。」おきんに就て、私はそんな事も噂されてゐるのを聞いた。

おきんは或る時、私たちが別に何もそんなことを勿論問ひもしないのに、今のやうな噂はみんないゝかげんな嘘だと言ひ譯をしてゐた。

「私の身の上はまるで小說のやうなのでございますよ。」

さう言つて置いて、おきんはまたこんな事をも言つた──

おきんはあの兄とは、ほんの小供の時、あの時あゝして別れるともなく逃げられてしまつたきり、たうとう二度と會うことがなかつた。そればかりか、兄がどこで何をしてゐるものやら、おきんはそれをさへもとより知らない。知れないのは兄ばかりではない。叔父や叔母との消息もばつたり絶えてしまつた。おきんは叔父や叔母のゐたあの村の名を覺えて居なかつた。さうして誰に尋ねやうにも、おきんのそばにはそれを知つてゐる誰も居なかつた。かうしておきんは二十何年間といふものは、親身の人たちとは全く別れてしまつてゐた。おきんは叔父や叔母はもう死んでゐるかも知れないとも思つた。

それがつひ三四年前になつて、思ひがけなくも再會出來ることになつた。

三四年前の夏の初めであつた。おきんの家へ見ず知らずの人が突然尋ねて來た。その人は橫濱から來たと言つて、旅商人のやうな人であつた。初めは商人とばかり思つてゐたのが何も商ひ物らしいものを持つて居なかつた。その人がわざわざおきんを訪ねて來たのであつた。その人はおきんを見ると「つかぬことを問ふやうだが」と言つて、先づおきんの生れを問うた。さうして突然にも「もしやお前さんには二十年も前に生き別れた兄がありはしなかつたか」と言ひ出した。おきんはびつくりした。といふのは近頃ではもう、兄のことなどを思ひ出すことさへなくなつて、時々思ひ出しても、もう一度會へようとも、會はうとも考へはしなかつたからである。おきんはその妙な人からさう尋ねられた時には、卽座には返答も出來なかつた。さうしてたゞその人の顏をつくづくと偸み視た。けれどもその人が果して兄かどうか、おき

んには見別けられなかつた。おきんは兄の面影をもうすつかり跡かたもなく忘れてしまつて居たのである。たゞ兄ならもう少し大男な筈だが、とおきんはその兄と叔父とが喧嘩をしさうになつた時の昔のことを思ひ出して、さう思つた。

返答をしかねてゐるおきんを見てとつて、その見ず知らずの人は言つた。

「私は頼まれて來た者だが、人からお前さんのことを聞いて、私の捜すやうに頼まれたのはお前さんに違ひないと思つたのだ。」

おきんは、成程、それではやつぱりこの人が兄ではなかつたのかと思つた。それが兄の當人ではないと知れると、おきんは今さら何となく不氣味であつた。兄は一體、今何をして居るのであらう。さうして何をたくらんで自分を見つけに來たのであらう。萬平に心配をかけるやうな事でなくてくれゝばいゝが…………。それとも兄が何か悪い事をして、實際そんな悪いこともし出かさないとは限らない人だから、今來て居るこの人はもしや警察の人ではなからうか。そんな風にさへ疑はれた。さうして胸がどきどきして來た。併し、まさかとも考へ、それにさう言はれて見ればそんな兄は知らないとも言へたものでもないと思ふと、その兄に逢つて見たい、逢ひたいといふ心持が急にはげしく湧き上つた。おきんは手短かに身の上を明した。するとその人は「やつぱりさうであつたか」と言つた。それからその人の頼まれたといふ人、即ちおきんの兄らしい人のことを「方丈が」とさう言つた。聞けばおきんの兄(?)は、今、横濱の野毛のAといふお寺にゐて、そこの持職になつて居ると言つた。さうして、見つけ次第不幸をかけた妹に逢ひ度いと言つたと傳へた。兄の年を考へ合したり、いろいろと聞いてゐるうちに、何もかも符合した。それが確におきんの兄に相違ないと思へて來たい。けれどもまだおきんはその人のいふのを信用出來ないやうな氣もした。又、若しや世の中に自分と全く同じやうな身の上の、さうして全く別の人が居て、その妹をその坊さんが尋ねて居るのではなからうか、最後にそんなこ

とをさへ考へて見た。おきんはちようどその日は日といふ家へ風呂桶を直しに行つて居た萬平を、仕事先きへ迎へに行つて、歸つて來た萬平ともよく相談をした上で、會つて見ないうちは未だほんとうとも嘘ともわからない不思議な兄に會うために、その日即刻、その人と一緒に横濱へ出かけて見ることにした。おきんはその兄にあつてももう顏などは忘れ果てゝゐたならどうしやうなどゝ心配した。併しうれしい事にはそれが本當の兄であつた。さうして途々いろいろと考へて見ても、どうしても思ひ浮べられなかつた兄の顏は、不思議にも本當の兄を見た瞬間に、

「あゝ！然うだこの人だつた！」

と、急に思ひ出された。おきんはその時、別にうれしい悲しいといふことはなく、たゞぼんやりとしてしまつて、庫裏の土間に突立つて居た。

兄はおきんのその後のことに就ては一言も問ひはしなかつた。さうしてたゞ自分のことばかりを、落着いてではあるがあとからあとからと語りつゞけて、一言ごとにおきんに詫びてゐた。兄はやつぱり大男であつた。五十以上の人にも見えた。子供のころに父の寺で小僧をしてゐるのがいやさに寺を逃げ出したこと、それから田舍廻りの役者にもなつた。博奕もうつた。巡査になつたこともあつた。とそんなことゞもを兄は長々とおきんに聞かせた。さうして初めはそれほどでもなかつたものがこの四五年來といふものは、おきんはもとより、兄や叔父などにしきりに會ひたかつたこと、おきんには一番會ひたかつたこと、さまざまにして叔父や兄の居どころだけは捜し出したけれども、おきんがどうしてもわからなかつたこと、そのため兄自身でも一度ならず八王子まで出かけたりしたこと、もう今では殆んどあきらめて悲しんで居たといふこと、そんな事などを順序もなく、丁寧な言葉で兄は言つた。おきんは兄の話を聞いてゐるうちに、おきんにはこの兄より外に未だ外にも兄があつたことを初めて知つた。けれどもよく聞くと、それはおきんや話をして

居るこの兄とは腹違ひなので、年も四十近くも違つてゐた。さうしてその兄といふのは、今は東京に居て、淺草の有名なN・H寺の格式の高い僧になつて、人々から尊敬されてゐる――それは私などとは違つて（とその時兄は言つた）極くおとなしい立派な人で、逆はずに一途に修行した人であつた。兄はその兄とも相談をしておきんを捜した。「今、お前が見つかつたと言つたなら、その兄もどんなにか喜ぶことであらう。」さう言つて兄はおきんにむかつてその兄にも一度是非會ふやうにと言つた。けれどもおきんはその兄といふ人には少しも會つて見たいとは感じなかつた。それも無理ではない、兄とは言ひながら腹違ひではあり、それに見たことはもとより、噂にだつてこの時に初めて聞くほどだつたから。さうして身分とてもあまりに違ひすぎて居る。それよりも會ひたいのは叔母や叔父である。兄から叔父や叔母と聞いた時には、未だ生きて居たかと思つて全く飛び立つやうな思ひであつた。けれどもおきんはそれを言ひ出せなかつた。それを言ひ出すことは何となく兄に遠慮があつたのである。けれども、いよいよ兄はその叔父と叔母とのことを言ひ出した。叔父夫婦はまだ生きて居た。さうしてやはり甲州――のしかし以前の村ではなく、或る山の中の水力電氣の會社に山番をしてゐた。「その叔父を以前から、是非とも一度訪ねたい訪ねなければならない、と思ひながら、一つにはその閑もなく、それより、自分の今までして來たことを考へ直して見ると、いかにも氣後れがして、ことに叔父叔母には、おきんのことを初め顏むけのならないことばかりで」と兄は言つた。さうして兄はおきんと八王子で別れてからも、再三叔父のところへ行つたことがあつたこと、そのころ信州や甲州のあたりをうろついてゐたことなどをも手短かにおきんに話した。こんなわけで、手紙だけは出しては居たけれども、其の後まだ一度も會はないで居たのださうである。さうして初めのうちはお前が見つかつたなら、その時こそ先づお前に行つてもらつて私の詫びをしてもらはうと思つて居た。けれどももうこの頃では、お前は見つからないものとあきらめて、或は死んでしまつたかとも考へたりして、そのうち自

分ひとりで行かうと決心をしたところであつた。併し、かうしてお前が見つかつた上は、やつぱり先づお前に行つてもらはう」さう兄は言つた。さうして「自分も一緒に行つてもいゝけれども、目の前に盆をひかへて出られない。ちようど幸にも自分の知る人に、その山の會社の技師になつて居る人があつて、その人は東京へ會社の買ひ物に來た序に、今横濱へかへつてゐる筈である。さうして二三日のうちには再び山の方へ行く都合だと聞いた。それ故もしもお前の都合さへ惡くないならば、その人と一緒に行つてはどうだ。それならばお前の亭主の方へは私からそのわけを言つて使ひを出す。それとも都合で今度の時でもいゝ。一旦田舍へ歸るか。さうじてもう一度直ぐ亭主もつれて出直してくるか。」さう兄はおきんに相談して言つた。いろいろ兄のいふことを聞いてゐるうちに、いつ流れ出したものか、おきんは顏中が涙で濡れて居た。それがぽたぽたと膝の上へ落ちて來て、初めてそれに氣がついた。おきんは若し本當に兄であつたならばかうも言つて見やう、あゝも言つて見やう、と馬車のなかで考へ考へして來た事が、兄にむかひ合つて見ると何一つ言へなかつた。そればかりか何を言はうと考へながら來たのか、その事すら忘れてゐた。どういふわけであの惡い人がおきんの養父になつたか。あの八王子のお婆さんはどうしたか。お常といふのはそのころの兄さんの妻であつたか。そんな事なども何一つ問へなかつた。おきんはむかしのことに就てはたうとう一言も言はなかつた。さうしてたゞ問はれるままに亭主の萬平のことや、七年になるけれども二人の間には未だ子供がないことなどを話した。夜が更けて、しまひに兄は默り込んでしまつた。さうして、突然、さも重大なことを尋ねるやうな口調で、

「お前幾つになつたのだ」

さうおきんに問うた。

「ちようど三十です」

おきんは答へた。けれども、兄は默つて居た。それで今度はおきんの方から。

「兄さんは?」

と、問うた。

「四十一だよ」

と、兄は答へた。さうしてやつぱり默つて考へ込んで居た。

…………おきんは自分が逢ひたい折からではあり、兄のすゝめてくれるまゝに、山に居るといふ叔父と叔母とに、直ぐ會ひに行くことにした。兄はいろいろと土産ものをとゝのへてくれた。さうしておきんには新らしい單衣物をそろへてくれた。それを人に頼んで夜どほしで縫つてもらつた。かうしておきんは技師といふ人に連れてもらつて、甲州へ旅立つた。甲府の少し手前のKといふところで汽車を下りた。登りになつて居る坂道を二里ほど步いた。夕方になつて、技師は道ばたの或る一軒家へ入つて行つた。この技師は極く無口な人で、道中でもあまりおきんに話しかけたりなどしなかつた。それ故、どんなわけでおきんが叔父たちのところへ行くのだが、それを知らなかつた。技師はその家へ來ても、此處だとも何とも言はなかつた。併しおきんはその家へ這入る時に、直ぐこゝだなと感づいた。家のなかにはお爺さんとお婆さんとが居た。さうしてその外には誰もゐなかつた。技師は歸つて來た挨拶をしたり煙草を吸つたりして居た。お婆さんは二人にお茶をすゝめてくれた。おきんはその間ぢつとお爺さんとお婆さんとの樣子を見て居た。お爺さんもお婆さんも、いたつて丈夫らしく、髮もどつさり生えて居た。しかしそれがすつかり眞白な白髮であつた。そのお爺さんお婆さんこそ、疑ひもなくおきんの叔父と叔母とであつた。それに相違なかつた。さて何と言ひ出したものであらう。おきんの用意して來たことは、この家のなかへ這入るとすつかり無駄になつた――といふのはこのお爺さ

んとお婆さんと、即ちおきんの叔父と叔母とは、おきんのことをその技師の妻君だとばかり思ひ込んで、すつかりひとりぎめにさう決めてかゝつて居る。さうしておきんを「奥さん、奥さん」といつて、技師と同じやうにもてなしてくれた。「今から上へ行つたところで、今日はどうせ用のない事だらうから奥さんと一緒に今夜は、あばら家だがこゝへとまつて行つてはどうだ。さうして明日の朝、朝涼のうちに行けばよろしいからう」さう言つてお爺さんとお婆さんとは、二人して技師にすゝめた。技師はもう一息のことだから、序に行つてしまはう。それに今夜は月夜だから明るいと言うと、「あなたはそれでもよからうが、奥さんは女だから、きつともうよほどくたびれて居なさるに相違ない」などゝ叔母が言つた。その叔母の聲が昔の聲にそつくりであつた。技師は「さあ」と言ひながらその場に困つて居るやうに無愛想に立上つた。どうしてもとまつてはくれないのか、といつてお爺さんとお婆さんとは技師とおきんとに挨拶をした。送り出される挨拶をされておきんは一層困つた。しかたがなしに、また技師の後へついて途方にくれてその家を出てしまつた。すると、技師はふりかへつて、おきんに、

「あなたの來たのはこゝぢやなかつたのですか」と、訝しさうに言つた。

さう言はれて、その時におきんは氣をとり直した。さうして直ぐさま、今來た叔父の家へ引きかへした。技師には道連れになつてくれた禮をつひ言ひ忘れてしまつた。

家へ這入ると、

「叔父さん！　叔母さん！　私は二十年前にお別れしたおきぬですよ。おきぬですよ。」

さう叫んだとき——心は言葉に連れてどつとこみ上げて來た。おきんは思はずそこへ泣き倒れて居た。

「おきぬか！本當か………夢ではないか。」

叔母はよほどしばらくしてからやつとさう言つた。

「まだ生きて居たか。」

最後に叔父がさう言つた。

「目がかすんではつきりと見られない」叔母がまたさう言つた。さうして泣いた。みんなして泣いた。夕方のうす暗い中でも、灯をともしてからも。

「私の本當の名はお絹といつたのです。それが方々を歩いて居るうちに、つひおきんに變つてしまひました。」

おきんは、ふと氣がついたやうに、最後にそんな説明をした。(七年九月―十月)

嘆きの門

谷崎潤一郎

三

駿河臺の方からお茶の水橋を渡つて、左の方へ一丁ばかり行つたところ、ちやうど本郷元町の停留場のあたりを右へ曲つた坂路の左側に、數年前から住んで居る四人の家族があつた。その家は檜の板塀を繞らした、門の入口から奥まつた玄關へ行く間に扇骨木と檜葉の植ゑ込みのある、小じんまりした古めかしい二階建てゞ、さほど目に附く構へでもないけれど、春になると塀の內から往來へ伸びて居る木蓮の枝に、點々と薄紫の花が咲くので、たびたび彼の路を通る人は多分氣が附いて居る筈である。四人の家族と云ふのは、五十あまりになる品のいゝ母親と、三十二三歳の、母親に顏つきがよく似た息子と、二十ぐらゐに見える息子の妻と、お茶の水の尋常小學校へ通つて居る可愛らしい男の兒とで、その外に三人の下女が使はれて居た。

彼等が此處へ住むやうになつたのは、そんなに古い話ではない。何でも明治が大正に改まつた年の暮れに、當時賣家になつて居た今の邸宅を買ひ取つて、何處からか引き

移つて來たのである。その折の家族の數はやはり四人であつたが、四人とも女ばかりで、その當座今の若主人の妾は見えなかつた。さうして、二十二三の、血色の青黒い、傷々しく面窶れのした、瘦せぎすなヒステリカルな婦人が一人加はつて居た。現在若主人の妻になつて居る婦人は其の頃漸く十四五歲の小娘で、針仕事や子供の守りを勤めて居る小間使ひに過ぎなかつた。隣り近所の人々は、暫くの間、女中たちから「御隱居樣」と呼ばれて居る老母と、「奥さま」と呼ばれて居る瘦せた婦人と、「坊つちやん」と呼ばれて居る赤ん坊と、三人だけが重な家族であるらしく想像して居た。けれども程なく、小間使ひの小娘が外の奉公人と違つて「御隱居樣」を「お母樣」と呼び、「奥樣」を「姉さん」と呼んで居るのを發見して、彼女も主人側の一人である事が明かになつた。彼等四人は、年中淋しく愼ましやかに暮らしを立てゝ居るらしかつた。時々、天氣の好い日などに妹娘が乳母車に幼兒を載せて、明神さまへ遊びに行つたりする外には、めつたに客の訪れる風もなく、家の中は子供のあるにも似ず、いつも大概空家のやうにひつそりして居た。隱居と夫人とはどうかすると二階の椽側の籐椅子に凭れて、氣のなささうな顏をしながら、ぼんやり往來を眺めて居ることはあるが、それすら極めて稀であつて、物見遊山は愚か、つひぞ一遍でも彼等が着飾つて家の外へ出て行くところを見た者はなかつた。その癖出入りの商人の噂に依れば、暮らし向きはそんなに不自由でもないらしく、第一家の構へを見ても相當に餘裕のある人々には違ひなかつた。「あすこの內には男つ氣は一人もないやうだが、何で暮らして居るのだらう。」「あの顏色の惡い、瘦せた奥樣は後家さんだらうか。それとも亭主があるのだらうか。」などゝ云ふ取り沙汰が、屢々近所の者の口の端に上つて、久しい間疑問の種となつて居た。「いや、あの女はたゞ者ではない。どうしても藝者上りだ。きつと誰かのお妾だらう。」——かう云ふ說が、中でも一番尤もらしく受け取られては居たものゝ、しかし妾の旦那らしい人間が、一と晩でも通つて來るのを見たと云ふ者はないのであつた。妹娘の美しい器量も、勿論評判にならずには居なかつた。

彼女が痩せた婦人の實の妹であることは、ぱつちりとした眼もとや高い鼻筋の恰好が爭はれない證據ではあるけれど、ちよいと見ると二人は全くあかの他人のやうに顏の感じを異にして居た。圓顏の、色の白い、肉附きのいゝ、歳のわりには背丈のたつぷりした阿姉めいた體に、派手な矢絣の銘仙か何かを着て、つやつやしい髮を桃割に結つた彼女の姿には、いかにも處女らしい無邪氣と愛嬌とが輝いて居て、乳母車を挽きながら晴れ晴れしい聲で子供に唱歌をうたつて聞かせたり、冗談を云つたりする折のてきぱきした言葉づかひや、活潑な擧止から察するのに、彼女はむしろお轉婆娘ではないかと思はせる程であつた。陰氣さうな、じめじめした家族の中で、たゞ彼女だけが花やかに生き生きと日を送つて居るやうであつた。隱居と云ふのは、此の姉妹の實の母親かどうか、それも長らく近所の問題になつて居たが、やがて老婆と彼等とは義理の間柄であると云ふことが、誰からともなく知れ渡つた。

　引き移つて來てから半歳ばかり、彼等四人は斯うして何の變化もなく其の家に住んで居た。が、明くる年の五月時分、例の塀越しに咲いて居た木蓮の花が散つた頃に、或る晩遲く、珍しくも表門の戸を微かにとんとんと叩く音が兩隣の家に聞えた。つゞいて女中が門の扉をぎいと開いて、外に立つて居る客をひそやかに內へ連れ込んでしまふと、再び門はぴつたりと閉ぢられたらしい樣子であつた。それきり、家の中はもとのやうにしーんと靜まり返つて居たが、それから二三時間過ぎた眞夜中ごろの事である。不斷は容易に話聲すら洩れた例のない二階座敷から、一と言二た言口早に浴びせかける激しい男の怒罵が聞えて、俄かにどたばたと二三人の立ち騷ぐ足音が荒々しく響いて來た。騷ぎはほんの二三分間で止んでしまつたけれど、息を堪へて忍び音に泣いて居るらしい女の聲は、その晩夜つぴて絕え間なく續いた。左隣に接して居る下宿屋の二階では、殊に其れがはつきり聞えたので、朝になつてから其處に泊つて居る學生たちの間に一としきり賑かな好話柄となつたのは云ふまでもない。ゆふべのあれはたしかに男の聲だつた、いよいよ彼の女の亭

主が歸つて來たのだと、誰も彼もがさう推量した。

けれども、其の明くる晩から邸の樣子は舊の如く再びひつそりとしてしまつて、男の聲は遂にそれなり聞えなかつた。男は未だに泊つて居るのか、或ひは昨夜のうちに出て行つたのか、その邊もとんと分らなかつた。男が彼女の夫であつて、あの晩以來ずつと家に居附くやうになつたのだと云ふ事が、始めて明かにされたのは其の後一週間ほど立つてからであつたらう。しかし、夫が戻つて來たからと云つて、内の模樣は少しも變つた風はなく、依然として陰氣で淋しさうで、要するに四人の家族が五人に殖ゑたゞけであつた。此れも出入りの商人の觀察であるが、旦那と云ふのは二十六七の氣むづかしい顏つきをした、此の家の主人にふさはしい、無口な不愛想な男ださうで、働き盛りの年頃だのに別段何處と云ふ勤め先もないらしく、彼の書齋と定められた二階の座敷に朝から晩まで閉ぢ籠つて居る。それで居ていつも柔かい大島の綿入れに對の羽織を着流して、漆黑の髮の毛をくつきりと分けて、靑白い圓顏の眉の間に險相な皺を刻んで居ると云ふ噂であつた。すると或る日、出入りの商人のうちでも一番おしやべりな八百屋の小僧が、此の一家に關するやゝ詳細な報告を臺所のおさんどんから聞き出して來た。その話に依ると主人は老母の實の悴で、つひ此の間大學を卒業した文學士ださうである。が、惜しい事には學生時代から道樂の味を覺え初めて、それが未だに止まない爲めに、御隱居さまも奧さまも苦勞の絕えた例がない。現に今の奧樣ももとは赤坂の藝者であつたのを、若旦那が其の時分存生中の父親にせがんで無理往生に落籍させて貰つたのである。結婚した當座は、いゝ鹽梅にすつかり身持ちが改まつて、兩親もほつと重荷を卸したやうな氣がしたが、その狀態は決して長くは續かなかつた。ちやうど去年の夏、二人の間に子供が生れた頃から、夫婦の仲は却つてだんだん疎くなつて、又しても若旦那の家を明ける度數が殖ゑて行つた。さうして冬の十一月に、父親が肺炎を煩つて病死してからと云ふものは、頭の抑へ手がないのを幸ひ、ますます我が儘が募つ

て來て、三日も四日も內へ歸らないことが屢々であつた。その爲めに奧樣はヒステリーになる、それでなくても體の弱い御隱居は、明け暮れ氣に病んで塞ぎ通して居る。家の中は始[illegible]す暗い憂の雲に鎖されて、奉公人までが主人に氣がねをするせゐか、花やかな笑ひ聲一つ立てる者はないやうになつた。で、一家が今の場所へ引き移つたのは、父親の四十九日が濟んでから間もないことで、若旦那は引越しの前の晩から新橋邊の待合へ姿を隱してしまつたのであつた。その後御隱居と奧樣とは每日のやうに旦那の歸りを待ち侘びて居たにも拘らず、十日立つても二十日立つても歸つて來ない。やうやう一と月も過ぎた時分に或る日神戸の消印のある長い長い手紙が御隱居宛に屆いたらしかつた。手紙には何と書いてあつたか、勿論下女には精しい事は分らないけれど、旦那はいつの間にやら上方の或る藝者屋の主になつて、以前新橋の何龍とか云つた女と其處に同棲して居るのであつた。御隱居の口振りから想像するのに、旦那は多分今の奧樣を離緣しなければ永久に內へ歸つて來ないと云ふやうな文言を、手紙に書いて寄越したのであらう。その時から家の中の陰鬱な空氣は一層重くなり優つて、奧樣などは奉公人にさへめつたに口を利かれなかつた。御隱居は直ぐに神戸へ宛てゝ返辭を出した。「亡くなつたお父樣にお前があれ程お賴み申して、立派に籍を入れてやつた嫁を、殊に子供まで生んだ今更になつて、離緣をするなどゝ云ふ無法なことが出來るものか、考へて見るがよからう。嫁や子供が可哀さうなのは云ふまでもなく、私も此の頃はめつきりと體が弱くなつたし、此の先あまり長生きは出來まいと思つて居る。お前の身持ちが直らないうちは、私は死ぬにも死に切れないから、どうぞ今の內に了見を入れ換へて、一日も早く歸つて來て貰ひたい。」と、大方そんな風にしたゝめてやつたのであらう。それからたびたび御隱居と旦那との間には文通があつたが、奧樣からはたつた一二遍手紙を出したゞけであつた。聞けば旦那は、奧樣の顏は勿論、筆蹟を見るのも厭だと云つて、返辭はいつも御隱居の方へしか寄越さなかつた。

「ですが旦那様もあんまり勝手なお方なのよ。神戸の藝者と云ふのはどんな別嬪か知らないけれど、内の奥様だつてお嫁に入らしつた時分には、ほんとにお綺麗なお美しいお方でしたわ。旦那が苦勞をおかけになるから、今のやうに見る影もなく窶れて居らつしやるのだけれど、大事にしてお上げになれば直きに又もとのやうに御綺麗におなりなさいますわ。それにね、さう云つては何ですけれど、黒人上りには似合はないしとやかなお方で、御隱居様にも大さうお氣に召して居らつしやいますのよ。」

かう云つて、その下女は夫人の爲めに同情のある辯解をした。

そんな事が初まりで、追ひ追ひと下女の口からいろいろの事情が洩れ傳はるやうになつた。――何でも今から一と月ばかり前、四月の中旬ごろの話である。突然神戸から隱居の許に便りがあつて、「いよいよ東京へ歸ることに決心をした。今月の廿日の晩にはそちらへ行くから其の積りで居てくれろ。」と云ふ意味を、極めて簡單に、而も端書へ無雜作に認めた書面が舞ひ込んで來た。あれ程内を嫌がつて居た者が、何の爲めに急に歸る氣になつたものやら、此れから改心して眞人間になると云ふのか、居所がなくなつて仕方がなしに戻つて來るのか、その邊の意向はハッキリ分らないにもせよ、兎に角一家は半年ぶりに愁眉を開いて、二十日の晩を樂しみに待つて居た。が、その日になると一同は待ちぼけを喰はされて結局主人は歸つて來なかつた。「氣紛れな男のことだから大方中途で了見が變つたのだらう。」隱居はかう云つて今更呆れもしなかつたが、二三日過ぎてから又端書が來た。「先日は少し差支へがあつて出發する譯に行かなかつた。廿六日の朝には必ず東京へ着く。」と云ふ文面である。今度はまさか嘘でもあるまいと思つて居ると、やはり其日も終日待ちあぐんで遂に姿は見えなかつた。「今度こそは間違ひなく、[illegible]三日の晩遲く歸る。」と云ふ三度目の知らせがあつた時には、誰もあんまりあてにしないで、其の日の夜の九時ごろにはいつものやうに表門の戸を締めて、十時には皆寢てし

まつた。と、意外にも十一時過ぎになつてから主人はヒョッコリ歸つて來たのである。兩隣りの家で、夜更けに邸の門の板戸をこつこつと叩く物音を聞いたのは、ちやうど其の折の出來事であつた。戸を明けに行つた下女は、暗い往來にしよんぼりと彳んで居た主人を案内して、玄關から直ぐに二階の座敷へ連れて上つた。「よもや」に引かされて眠られずに居た隱居と夫人とは、つゞいて後から梯子段を上つて行つた。――こゝまでは下女も知つて居るが、その後夫婦と親子との間にどんな話があつたのか、彼女は自分の部屋へ戻つて寢てしまつたので、精しいことは知る由もない。たゞ、それから二三時間も立つたかと思はれる時分に、急に二階で「馬鹿！」と云ふ主人の怒鳴り聲が聞えて、何事か起つたらしい亂暴な足音が響いたので、驚いて驅け附けて見ると、夫人が――大方持病のヒステリーの發作に襲はれたのであらう、――剃刀を逆手に持つて、夫と母親とが左右から止めるのも聽かず、その鋒を喉にあてながら、眞靑な顏をして總身をぶるぶると顫はせて居た。例の妹娘を初め、二三人の女中たちが一度にどやどやと其の場へ走つて行かうとするのを、隱居は眼の色を變へて制しながら、

「しツ、しづかにおし！　もう大丈夫だからお前たちは下へ行つて寢ておくれ。」

と、叱り付けるやうな調子で云つた。同時に剃刀は夫人の手から主人に捥ぎ取られてしまつて居た。

その晩の事件はどう云ふ工合に收まつたものか、明くる日から主人は此の家に落ち着くやうになつたのである。けれども夫婦の間柄は相變らず冷淡で、已むを得ない用事の外にはめつたに言葉を交すらしい樣子もない。夫人にばかりか、母親に對してさへ主人は面の憎いほど不愛憎で、その爲めに家庭はますます不愉快な氣分に包まれて行く一方であつた。あんなむづかしい顏つきをして居るくらゐなら、何の爲めに内へ歸つて來たのだらう。ほんたうに若旦那は氣が知れないと、奉公人は寄ると觸ると陰口をきいた。子供が可愛くなつて歸つて來たのかと云ふのに、決してそんな風でもな

かつた。夫としての愛情のない彼は、父親としての愛情をも、微塵も持つて居ないのであつた。たまたま子供を彼の傍へ抱いて行く者があると、「うるさいから彼方へ行け。」と云つて、突慳貪に叱り飛ばした。

「どうして内の旦那様はあゝなんだらう。あの鹽梅ではいつ何時また内を飛び出すかも知れやしない。」

さう云つて下女は愚痴をこぼした。

以前は簡單な「岡田寓」と云ふ標札が門の柱に打ち附けてあつたのに、若主人が戻つてから間もなく、「岡田敏夫」と云ふ新しい陶札に貼り換へられた。隣りの下宿屋の書生たちが、さてはあの主人が青年詩人の岡田氏であつたかと氣が附いたのは、その時以來の事であつた。さうして彼等は前よりも一層の興味と好奇心とを持つて、二階の窓から主人の書齋を覗き込むやうになつた。なぜかと云ふのに、岡田は其の頃やうやく世間に認められかけた新進の作家で、その徹底した享樂主義の思想と、官能の匂の高い、極端に人を蠱惑するやうな生々しい色彩を帶びた、一種の新しい技巧に充ちた詩風とが、そろそろ文壇の注意を集めて居る時代であつた。「成る程あの男が岡田なら、そのくらゐな不身持ちは當り前だ。たしかに岡田式を發揮して居る。」と云つて、彼の不行跡を面白がる連中もあつた。

「それにしても此の頃は毎日二階に閉ぢ籠つてひどく謹愼して居るやうだな。それとも何か書きかけて居るのか知らん。」

と云ふやうな觀察を下す者もあつた。彼等は何かしら、又しても隣りの家に事件の持ち上るのを望んで居た。

岡田の謹愼は、果して彼等の豫期したやうにそれ程長くは續かなかつた。彼の作詩が月々の文學雜誌に次ぎから次ぎへと發表せられて行くうちに、彼の放蕩生活は再び始まつたのであつた。夜が更けてから表門の戸をこつこつ叩く音が、その後屢々彼等の眠りを脅やかすやうになつた。夫人のヒステリーは其れと同時にだんだん激しくなると見えて、二階

の騒ぎも一再ならず近隣の人々を驚かした。あまり度び度び夫人が剃刀を振り廻すので、遂には一切の刄物と云ふ刄物を彼女の傍へ置かないやうにしたと云ふ事が、いつもの下女の口から知れ渡つた。もう此の頃ではあの機嫌のよい妹娘までが、隱居や姉の憂鬱に感染して氣の毒なくらゐ塞ぎ込んで居る。何が醉興で主人は此れほど內の者に心配をかけるのか、二日も三日も家を明けては歸つて來ると面を膨らして居るが、あれでも惚れた女の前へ出るとニツコリ笑つたりするのだらう。藝者遊びと云ふものはそんなにも面白いのか知らんと云つて、下女がつくづく慨嘆したと云ふ話が、下宿屋の連中を一としきりおかしがらせた。そのうちに、昔夫人が赤坂で藝者をして居た時分の、文藝俱樂部の寫眞を見附けて來た者があつて、それが彼等の手から手へて持つて廻された。寫眞は彼女が十八九の頃の正月に寫したものであらう、きらびやかな松竹梅の裾模樣のある出の衣裳を着て、褄を取りながら立つて居る姿は、まるで今とは別人のやうに水々しく立派であつた。さうして、島田に結つて少し斜めに向いて居る橫顔のふつくらとした頰の肉附きや、愛嬌のある眼もと口もとは、妹娘の顔だちにそつくりで、彼女が結婚してから僅か二三年の間に、どれ程夫に虐げられて痩せ衰へたかを語るには充分であつた。

「此の女は美人には違ひないが、しかしあんまり浮世繪式で型に嵌まり過ぎて居る。だから間もなく飽きられてしまつたのだ。もう少しエキゾチツクの所がなければ岡田氏の氣に入る譯がないよ。僕はむしろ岡田氏に同情する。」

彼等のうちにはそんな殘酷な批評を下す者さへあつた。

岡田の主人が上方から戾つて來た後、一年半ばかりは斯う云ふ狀態で過ぎて行つた。其の間に岡田敏夫の名前が詩壇にますます高くなり、夫人の容態が日に月に險惡に赴き、妹娘の美しい器量が次第に濃艶の度を增して行つた外には、別段一家に此れぞと云ふ變化も起らなかつた。然るに、ちやうど大正四年の正月のことである。月の中ごろに背中へ腫

物を發して一週間ばかり床に就いて居た夫人は、或る朝急に危篤に陥つて其の日の午後には心臓痲痺で死んで居た。それは實際近隣の人々は云ふまでもなく、彼女の一家の者に取つても、其の日になるまで夢にも豫想しなかつた不幸な出來事であつた。心臓痲痺で死んだと云ふのは噓ではなからうか。夫人の死は恐らく自殺ではないだらうか。と云ふやうな風説が期せずして人々の耳に囁かれた。悔みに行つた人たちが聞いて來た話に依つても、彼女の病氣が餘り世間に例のない、不思議な性質のものである事は爭はれなかつた。何でも今から十日程前の晩に、いつもの發作に襲はれた夫人は、何處から見付けて來たものか隱して置いた西洋剃刀を持ち出して騒ぎ廻つたことがあつた。その際彼女は三人の女中たちが取り縋るのを振り解きながら、刄物を奪はれまいとして身を藻搔いたはずみに誤つて左の掌を一寸ばかり切つたのださうである。勿論、盛んに暴れ狂つて手の附けられない折であるから、傷口を消毒することも繃帶をすることも出來なかつた。夥しい血潮がたらたらと着物へ垂れるのも構はずに、夫人は體がへとへとに疲れてしまふまで泣き喚いて居た。明くる日、彼女が平靜に復してから掌を檢べて見ると、思つたよりも深い傷で、ぱつくりと開いた切り口の下に赤い肉が盛り上つて居る。兎に角醫者へ行つて洗つて貰つたらいゝだらうと云ふ隱居の言葉ではあつたけれど、不斷から醫者にかゝるのを餘り好まない夫人は、昨夜の事が耻しいのと、一つには大した事もあるまいと思はれたので、女中に萬瘡膏を貼らせた上から繃帶で縛つたなりにして置いた。いゝ鹽梅に、傷口は化膿するやうな憂ひもなく段々直つて行くらしかつたが、それから二三日立つた時分に、俄かに彼女は背中が痛いと云つて苦しみ出した。その痛み方は甚しく激烈で、到底起きて座わつて居るには堪へられない程であつた。彼女は布團の上へ打倒れたまゝ、果ては背中を蝦のやうに圓くして呻りながら苦しみ拔いた。さうかと云つて其處に腫物が出來た譯でもなく、體の內部にも何等の異狀はなし、恐らく神經痛の激しいのであらうと、醫者はさう云ふ診斷を下した。ところが、その後一日二日立つと、今度

は肩から七八寸下の方の、恰も背骨のまん中のところが奇妙にムツクリと腫れ上つて來たのである。それを見せられた醫者は、始めて誤診をした事を悟つたらしく多少狼狽の色を示した。さうして、此れはたしかに筋炎と云ふ病氣だと云つた。つまり先達剃刀で切つた左の掌の傷口から何かの黴菌が血液の中へ這入つて、其れがとうとう背中へ膿みを持つたのだと云ふのであつた。

「しかし決して御心配なさることはありません。切開して膿を取つてしまへば直きに痛みは止まるでせう。」

かう云つて、醫者は早速手術をしてくれた。尤も其の時、外科の手術は大事を取つた方がいゝから、大學へ行つてやつて貰へと云ふ隱居の意見があつたにも拘らず、本人が其れには及ばないと云ふので、今までの醫者に任せたのであつた。手術後の經過は思ひの外によく、明くる日の朝には痛みも殆んど感じなくなつて、此の分ならば二三日うちに全快するだらうと、本人も端の者も安心し切つて居た。現に其の朝、飯を濟ますと彼女は蓐の上に起き直つて新聞を讀んで居たくらゐであつた。すると、午前十時頃に「氣分が惡いから少し横になる」と云つて彼女は再び枕に就いた。それから急に容態が險惡になつて、刻一刻に體溫と脈膊とが恐ろしく高まつて行つたのである。何でも十一時に醫者が駈けつけて來た時分には熱が四十度以上に昇り、心臟が非常に苦しいと云つて、彼女は切ない息の下から其れを頻りに訴へて居た。が、醫者がむづかしいと云ひ出す迄は、誰も彼女の病勢がそんな絕望的な狀態にあるのだとは氣が付かなかつた。

「背中へ吹き出した毒が運惡く血液に交つて一遍に體中へ循つてしまつたのです。かう云ふことは丈夫な人にはめつたにない筈なのですが、餘程平生から衰弱して居らしつたのでせう。此れは壞血病と云つて內部の諸機關が悉く毒に侵されて、云はゞ體中の血が腐つてしまつたのですから、どうにも手の盡しやうがありません。」と、醫者は氣の毒さうに辯解した。午後の一時ごろにはいよいよ危篤に陷つてとても助かる望みのない事が明かになつた。最後まで意識がハツキリす

して居た彼女は、カンフル注射をされる時はぱつちりと眼を開いて、「私はもう助からないのでございますね。」と云ひながら、既に覺悟を極めて居るらしい表情を見せた。あまりに不意の出來事なので、親類を呼び寄せる暇もなかつたし、それに、――下女の話から推量すると、親類と云ふ親類は主人の不身持ちの爲めに義絶の形になつて居たし、夫人の里方には此れぞと云ふ身寄りの者もなかつたので、――枕もとには隱居と妹と三人の女中とが附き添ひながら、今か今かと臨終の時を待ち設けて居た。ところへ不思議にも二三日前に家を出たきり何處かへしけ込んで居た夫の敏夫が、例の如く浮かぬ顏つきをしてぶらりと歸つて來たが、さすがに呑氣な彼も此の有樣に眼の色を變へて、慌てゝ彼女の病蓐の傍へ擦り寄つて行つた。

「あなたあたしはもう直ぐ死んでしまひます。ですからどうぞ今日だけは私をいぢめないで下さい。私の云ふことを聽いて下さい。…………」

息を彈ませて居る夫の顏を見上げながら、さう云つた夫人の聲は悲しかつた。

「…………お願ひですからどうぞ此れから坊やを可愛がつてやつて下さい。私を不憫だと思つたら、どうぞ妹を私だと思つて目を懸けてやつて下さい。さうしてもう、御母樣にも御心配をかけないやうに、孝行を盡して上げて下さい。どうぞお願ひでございます。…………あなた、分つて? 承知して下すつて?」

と、さもなつかしげな、仲の好い夫婦である事をたしかめるやうな馴れ馴れしい口調で云つて、片頰にかすかな笑みを浮べながら、彼女はしつかりと夫の手を捕へた。

「うん分つたよ。お前の云ふ事はよく分つたよ。安心するがいゝ。」

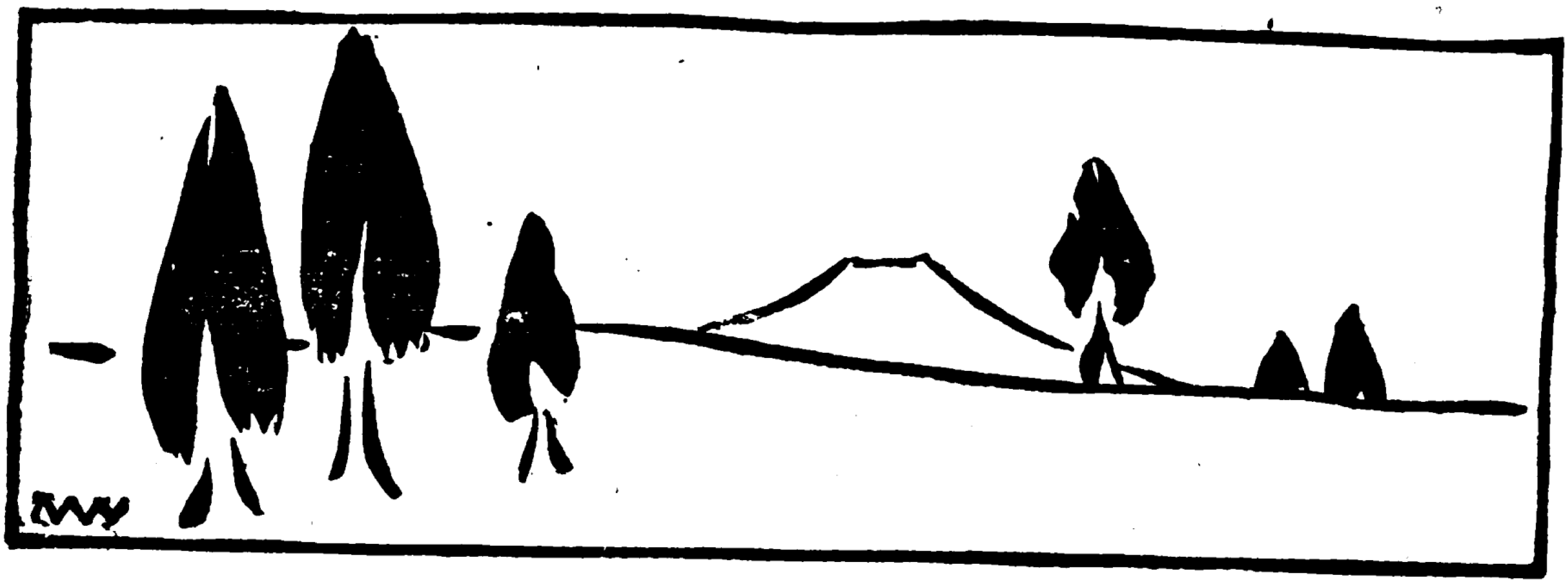
と云ふ夫の答へが耳へ這入るか這入らぬうちに、彼女はたうとう最後の息を引き取つたのださうである。

中一日置いて、三日目の午後に淋しい葬式が青山の齋場で營まれた。夫人の棺が馬車に載せられて邸の門を出て行く時、「あの奥樣は旦那が殺したも同然だ。」と云ふ路傍の人の惡評が、俥に揺られて棺の後から附いて行く夫の背中に浴せられた。

かうして岡田の家族の數は再び四人になつたのであつた。

それから暫く、敏夫は生れ變つたやうに神妙な人間になつて居た。彼の發表する感想文や詩の中にも今までに見られなかつた感傷的な悲哀な情緒が織り込まれるやうになつた。かくて夫人の一週忌が濟んだ大正五年の正月に、彼は亡妻の意中を察して、彼女の忘れ形見である幼兒の逸太郎が、母親のやうに戀ひ慕つて居る義妹の房子と結婚したいと云ふ希望を、自ら進んで申し出でた。それには無論老母も房子も異存はなかつたので、四月の末に滯りなく結婚の式を擧げた。房子の歳は其の時十八になつて居た。

二度目の妻を迎へてから今日までに二年餘を過して來た敏夫は、さういつ迄も最初のやうな殊勝な態度を續けて居る譯には行かなかつたが、しかし此の頃越前堀に「藤原寓」と云ふ怪しい隱れ家を持つて居ることは、まだ世間では誰も知らなかつた。（つゞく）



裏の沼

小川未明

私は默つてゐるが、心は恐怖に震へてゐる。思つてゐることを言ふのも、何となく氣味悪い。

私は、まだ十七になつたばかりだ。親もない。兄弟もない。故郷から遠く離れて來てゐる。外には、冷たな秋雨がしと／＼と降る。あの裏の沼に水が溜つたであらう。沼の周圍の景色や、いろ／＼な記憶を考へると切りがない。あゝ暗い空だ。どうしてこんなに毎日雨が降るのか。何となく國にでも歸つたやうな氣持がする。國の方もこんなに雨が降るだらうか。

つい此間、用達に遣られた時のことだ。私はS驛から電車に乘らうと思つて、其の方に行く電車の出るのを待てゐた。けれどなか／＼出るやうな様子がなかつた。仕方がないからプラットホームをあちら、こちらと歩いてゐた。人間といふものは、かうした時でもなければ、ほんたうの暇といふものが見出されない。路を歩いてゐる時でもせか／＼してゐる。飯を食ふ時でも何か考へてゐる。仕事のない時でも、全く氣を

許してゐるといふことは稀なものである。私と同じやうに電車の出るのを待つてゐた人は、他にもあつたであらう。けれど、皆な長方形な待合室や、何處かの隅の處に腰をかけて、其日の新聞を讀んでゐるか、煙草を喫ひながら、お互の顔付や、様子でも眺めてゐるか、また實際的な考へ事にでも耽つてゐるかして、一見暇らしく見えてもなか〳〵さうでない。其の代り、また私のやうな飛び離れた空想に耽つたり、馬鹿らしい惱ましさにも心が囚へられなかつた譯である。

私は、全く暇であつた。こんな時がさう長くつゞくものでない。今日の晩方までには用達をして家に歸つてゐるであらうと思つた程に、かうして電車の出るのを待つのも、五分か十分であるばかりか、其の時間は、この一日の幾十分の一にも當らないだらう。其の僅かな時間が、極めて長いやうな、怠屈で堪らないやうな、而して、何うしたらいゝだらうかと殆んど身の置き所に苦しんだ位に、あちらへ行つたり、こちらへ來たりして體を動かしてゐた。ほんたうに、ひまといふものは決して樂なもんでないといふことを此時、私はまた知つたのである。

驛の構内には、幾筋かのレールが入り亂れてゐた。幾筋あるか殆んど其の數が算へきれない程多くあつた。これが皆な何かの役に立つのだらうが、恐らく、終日一度も汽車や、電車が其の上を通らないで濟むものもあつたであらう。一日位でなく、曾てまだ一度も役立てられずにゐるものもあつたであらう。其等のレールは雨に打たれ、空氣に酸化して其の上に赤錆が出てゐる。而して、其の線路は痴鈍に眠りつゞけてゐる。其の間に、絶えず休みなく使用されてゐるレールが六本ばかりあつた。これは、汽車や電車の上下する線路と、別に此處から岐れて彼方に行つてゐる二本の線路とである。其の六本は白銀色に光つてゐる。而して、秋の半曇りのする光線を映してゐる。何となく神經質な色合だ。是等の線路は決して休まる時がない。一日に幾回となく地鳴りを打つて走つて來る重い貨車や、客車や、汽罐車で壓潰さ

れさうに頭を踏まれる。四邊が眞暗になつた夜中でもさうである。私は、こんな無神經な線路にも幸福と、不幸福といふやうに、其れを支配する運命といふものがあることを感じた。しかし、やはり其の何れにあつても決して壞滅といふことから脫れないであらう。一方が青白く摺り減されて行く間に、一方は赤黑く朽ちて行くのであつたから。

私は、ふとプラツトホームの柱に凭れかゝつて、何か赤い表紙の書物を覗き込んで立つてゐる十五六の少女を見た。其れが何となく私には慕はしく思はれたのだ。腕も、短かい袴から下に出てゐる足も、太く圓々と堅さうに肥へてゐた。綠色に光澤のある長い髮は肩から後方に垂れてゐた。眼も。口付も、私の好きな少女であつた。私は、よくかういふ好きな女を見ることがある。けれど、直に何處へ行くか知らず互に別れてしまはなければならぬことを悲しく思ふ。而して、この少女は靴を穿いてゐる女學生であつた。學校が終つて家に歸るのであらう。彼女の身に付いてゐるものと思ふと、靴にかゝつてゐる白い埃までに、私は一種の愛着を感じた。

私は晲と、其の少女の横顏を見た。全體の姿を熱い瞳の中に映した。而して、誰か人が自分を見てゐはしないかといふ氣恥かしさに、私は、時々少女に脊を向けて異つた方向を見た。

直ぐ、僅かばかりの距離を隔て其處には、煙を吐きつゝある汽罐車が控へてゐた。ちやうど眞黑な怪物が息を切らしてゐるやうに、吐き出す煙の色が白く量が少なく、頻りに熱苦しさうに、嗄れた聲を立てゐる。ともすると、釜の中の水が切れてゐて、今にもこの汽罐車が爆裂しはしないかといふ恐れを抱かせた。次の瞬間に、爆裂して自分は、少女と共に此場に打倒れることを想像した。傷付いて血に塗れた二人が、苦しみの中から相憫れむ有樣を私は眼に描いた。

不意に一歩後退りをした。いよ〳〵今にも汽罐車が甚い音を立て爆裂するやうな氣持がしたからだ。

「人を轢く汽罐車はきまつてゐる。運轉手は其の車に乘り止むことを忌む」と、いつか何かの時に新聞に書いてあつた記

事を私はこの時思ひ出した。

「この汽罐車は、人を轢殺したことがあらうか？」と、私は、其の油に光つて、厚味のある重さうな車輪がレールに深く喰入つてゐる樣を見守つた。而して、次にこの汽罐車の番號を讀んだ。黃銅で黑い鐵に 2417 と浮き出して書いてあつた。私は後日、何かの役に立たないものでもないと考へて、其の番號を記憶に止めた。いつかまた新聞に、ある處で汽罐車が衝突したり、脫線して轉覆したり、墜落したりすることがあつて人命を損つた時、其の記事の中に、汽罐車の番號が書いてあつたなら、其れと照し合せて見る興味を持つことが出來ると考へたからである。

こんな殺風景な空想に私は大分頭を疲らせた。ふと忘れてゐた樂しい氣休め場を思ひ出したやうに、其時まで靑い柱の處に佇んでゐた少女の圓々とした手や、足に、惱ましい瞳を移したのであつた。

ちやうど其處へ電車が左右から來たのである。私の希望は外れた。彼女は彼方へ行く車に乘つた。二人はかくて永遠に分れてしまつた。しかし、私は長く其のことを心の裡で悲しまなかつた。これまで、もつといろ／＼なはかない、悲しい經驗に觸れて來て、人生のことは、すべて思ふやうにならないことを知つてゐるからである。私は、また車室の內を見廻したり、窓から外を眺めたりして、別な自分に適した空想の種を探した。而して、新しい空想に對しても、また幾分の興味を感じたであらう。

用達をすまして、私は淋しい路を步いて效外のある停車場の方へと急いだ。曇つた空は、今にも雨が落ちさうな模樣であつた。眼を上げて、遠くの森や、近くの林を見た。木々が凋落を前に控へてゐるせいか、夏の頃のやうな輝きや生氣は自然の何處にも見られなかつた。視野は、やがて灰色の地平線によつて遮ぎられてゐる。私より、この黑く濕つた、曲りくねつた路を步いてゐる者は他に見えなかつた。

汽車の笛が頻りに鳴つた。此時、私は圃の彼方を通る線路の上に汽車が停つてゐるのを見た。仔細ありげに、火夫や、運轉手が車から下りて、汽罐車の周圍を慌てながら何かしてゐる樣子である。汽罐車は煙突から頻りに煙を上げてゐた。其の煙が、あるかなしかの風に亂れて空間に網の目のやうに散つてゐる。其處は停車場から約七八丁ばかり隔つた野原の中である。レールの敷いてある土手に立つたら、遠く眞直に霞んだ停車場の建物が見えるにちがひない。何か故障が起つたのだと思つた。

客車の窓からは、幾つも白い顏が覗いてゐる。

「こゝに腕が落ちてゐる」と、何者か叫んだ聲が、圃の上の寂寞を破つて鋭く耳に聞えた。

「轢死だな」と、私は心に思ふと、胸がどき／＼と躍つた。何うしても、其の傍まで近づいて見る勇氣が起らなかつた。圃には、まだ僅かばかり取り殘された野菜があつた。私は、其の圃の中に踏み込んで、遠くからこの樣子を眺めてゐた。すると程なくして黑い物が汽罐車の下から引き出されるのを見た。其れがぐた／＼としてゐる處から察すると、轢かれた人間は死んでゐるらしかつた。定めし血が、土や、線路や、石塊に附着してゐるだらうと思はれた。私には、また體の轢かれた切口が想像された。たゞ男であるか、女であるかは分らなかつたが、其れを強いて、知らうと思はなかつた。何となら、忌はしい、いつまでも眼から取れないものを其れまでにして見たくはないからであつた。

怪物のやうな汽罐車が、傲然として前方を睨んだまゝ控へてゐた。さながら、自身の犯した慘事に關して、全く無意識であるものゝ如くであつた。鈍然として曇つた日の光線にも、汽罐車の胸に付けてゐる黃銅の番號は、はつきりと光つて分つたのである。私の瞳は其れを讀んだ。2417――私は茫然として認識を疑つた。而して、もう一度讀んだが、尙ほ眼を信ずることが出來なかつた。しまひには神經質的に幾度も其の數字を繰り返して讀んだ。

これは最近に恐怖を感じた事實であるが、私は誰にも語らず默つてゐた。其れは感じたことをすべて語るといふことは不可能である上に、誰も、自から經驗した程に、不思議に感ずる者はないと考へるからである。

恐らく、この後も默つてゐる積りだ。けれど心は時ならぬ恐怖に襲はれることを私は何うすることも出來ない。

あの後、幾日もつゞいて空は曇つてゐた。いまだにからりとしない。かうして、秋になつて、うす暗く雨が降る日には故郷へ歸つたやうな氣持がするのだ。

家の坊ちやんは病氣で臥てゐる。家内の者から隔離されて、靜かな室の中に白い敷布の上に其の小さな痩せた體をちぢめて横へてゐる。

私はよく牛乳を持て行く。けれど坊ちやんは牛乳を飲むことを厭がる。何んだか氣味が悪いと思ふのだらう。私にはさう坊ちやんの思ふ理由が分らない。この賑かな人通りのする、自動車の澤山に通る、樂隊の音がしたり、赤い旗が閃めき、美しく電燈が輝き、瓦斯の光りが路を晒らす街に産れて、街で育つた坊ちやんには、恐らく牛が怖しいものに思はれるのだらう。而して、あの幅廣な胸に下つてゐる乳房から出る、溫かな白い乳を汚ないものとでも思つてゐるのだらう。

私は、坊ちやんの年頃には、北の故郷の山澤に育つた。不思議なものといへば、あの牛の大きな黒い眼である。私は、其の牛の眼を思ひ出すたびに涙ぐむ程の懐かしさを禁ずることが出來ない。

秋になると低地に冷たな水が溜る。水は繁つた草の根に悉く廻つて、其の叢の茂つた葉の間から靜かな顔付を濕らして、寂しい暮方の空を仰いでゐる。此處の空は、人里稀れな山と澤と野原の上を平等に見下してゐた。しかし空は是等のすべての存在にはあまり注意してゐないやうであつた。而して、たゞ氣持よく其れ自からがうす青色に冴えてゐた。

また空にはちやうど花瓣を撒いたやうに、小さな雲のちぎれが思ひ思ひに、飛んでゐた。これが下の水の上に幽かに映つてゐる。草の葉は半ば黄色くなつて、また中には紅色に色付いたものもあつた。而して。秋も漸く次第に老ける頃には莖に結んだ、鈴生の小さな實が熟し切つて、稀には莢を破つて、黒い種子を現はしてゐるのもあつた。其れが水の上に溢れて落ちる時に、發する靜寂な小さな音は、たゞこの自然が自から驚くより他に知るものがなからう。

夕暮が迫つて來ると、澤から、山合から、また水の面から、淡い白い霧が立ち上る。而して、其れがいつの間にかある一處で合致する。この廣い、ゆつたりとした地上が一面にこの柔らかな息で銀色の燻しを吹きかけられたやうになつてしまふのである。この時一疋の牝牛が、この草原の淺い水の中に四本の足を浸して、心安げに立つてゐる。

野山を驅け巡つて疲れて來た私は、此處でこの牛を見出した。牛は白と赤毛の斑であつたから、私は直に「斑や」と呼びかけた。而して傍によつて頭や、鼻筋を撫てやつた。牛は大自然の寂寥に打たれてゐたのを思ひがけなく慰められたやうに、默つて大きな眼をうるませて首垂れてゐた。この時、私だけが肅殺とした大氣の裡に默り込んだ動物の心を理解することが出來た。

「寂しいのか」と、私はやさしく言つて寄り添つた。足に纏る水は、暗く光つて、頬に觸る空氣より更に冷たかつた。而して、天も地も、祕密を守るやうに音を立てなかつた。眼の中にありありとして尙ほ活きてゐるこの景色を、私は、いかなる言葉で現はしたらいゝだらう。

ひよろひよろとして伸び上つた木立は、狂女の佇むやうに空の下で身戰ひする。其の影は、黄色な雲の影と混つて、暗く悒鬱の色を帶びた水の上に刻み込まれたやうに落ちてゐる。西の山の端を血の如く眞紅に染めて日は沈んだ。黒い、黒い山が、だんだん此方へ近く迫つて來るやうに、益々鮮かに、大きくなつて見られた。牛は、そんなことは分らぬも

のやうに、水の中に立つてゐる。私は、この何も知らない迷つて來た牛に對する憐憫の情が募つて來た。而して、無言のまゝ柔和な神祕的な眼に暫らく見入つてゐた。恰かも限りない、なつかしみと、悲しみとがこの暗い、底の分らない眼の中から湧き出て來るやうであつた。私は、牛が默つて、穩かに瞬きをするのを眺めてゐるうちに、時が經つのを知らなかつた。さながら闇がこの深い感情を湛へた眼の中からいつしよに湧き上つて來たやうに思はれた。而して、其の闇は四邊に擴がつてあらゆるものを隈なく包んでしまはんとしてゐた。牝牛の白い幅廣な胸から垂れ下つた乳房がこの時まで私の眼の中に映つてゐた。私は、其れを見ると忘れてゐた母が戀しくなつた。而して、私は、この溫かな懷かしみの深い乳房にぶら下つて、可愛らしい口付で、半ば眼を眠りながら乳首を舐る小牛の姿を眼に描いたのであつた。このことは堪らなく私をして憐れみの心を深からしめた。

小牛は、今頃どんなに母親を探してゐやう。小供を遺して、こんな處に獨り迷つて來てゐる牝牛はどんな心持でゐやう？　私はいろ〳〵に考へると、この飛び出た牝牛の大きな瞳は濕れて涙ぐんでゐるやうに思はれた。

日は、だん〳〵暮れて行つた。水鳥が白い靄の中で羽ばたきをした。耳を傾けたけれど遙か牧場の方に當つて人の叫ぶ聲もしなければ、また何方からも人の步いて來る氣はひがしなかつた。私は、寂寥と冷氣のために小さな體が顫ひ始めた。牛は、やはり水の中に立つてゐる儘で眠としてゐた。どんなことを思つてゐるのか、其の柔和な大きな眼は、夕闇の中に黑燿石のやうな穩かな光を含んで開いてゐた。

私は、ついに堪らなくなつて、

「オーイ」と、聲の出る限りに叫んだ。而して、誰か此處にやつて來るのを待てゐた。

「坊ちやんは、なぜ牛の乳を飲むのを厭がるのだらう？」と、私は思ひながら、默つて其の寢姿を見守るのである。

三方の窓から射し込む光線の中に坊ちやんは横はつてゐる。手や、足が痩せてしまつて、體にかけてゐる蒲團を取り除けたなり、毛を拶りとつた後の雀の死骸のやうに肩の骨が皮の下に飛び出て、肋骨が數へられるまで胸の肉が落ちてしまつた哀れな姿が見られるだらう。この蒲團の中に人間の體が横はつてゐるとは思はれないやうに、蒲團は疊の面から、あまり腫れ上らずに平になつてゐる。何處に坊ちやんが存在してゐるのかも分らない位だ。もう幾日も家族の人々から離れて、かうしてたゞ一人この室の内に、靜かに默つて臥てゐるのであるが、其れでもやはり坊ちやんがこの世界に、存在してゐるのだと言はなければならぬだらうか。

全く坊ちやんは、何も言はずに默つてゐる。而して、大きな落込んだ眼を見開いて、氣味悪いやうに虛空を見詰てゐる。そんな時もあれば、眼を閉ぢて眠つてゐる時もある。

もう直に、この世から去つて、永遠に皆なから別れて行く日が來るといふことを坊ちやんは知らう筈がない。誰もそんなことを言つて聞かせる者がないから。けれど、また全く、其れを知らずにゐるとも思はれない。人間の靈魂には變事の來る前に豫覺といふものがあるからである。其れで、坊ちやんの小さな心にもある不安を抱くにちがひない。しかし坊ちやんは何も言はずに默つてゐるのだと解するより他に途がない。

この地上にあるものは、どんなものでも、いつか一度は滅びて、影も、形も、全く無なつてしまふのである。其の中にも人間は、決していつまでも長く生きてゐるものでない。たとへかうは考へても、坊ちやんは、こんなに年も少なくまた知るべき未來も知らずに、二たび來ないこの世界から、死んで行くといふことは、私にとつてこの上ない悲しい事實である。

何といふ暗い日だらう。外を覗くと細かな雨が降つてゐる。坊ちやんの枕許には、コツプに入れた白い牛乳がいつし

か冷たくなつて、上に薄皮の張つたまゝ身搖ぎもせずに置かれた時の姿でゐる。

何分位經つたであらう。私は、此處に坐つて、坊ちやんの眼を醒すのを待てゐるのだ。其間にいろ〳〵のことが頭に浮ぶ。坊ちやんが帽子を被つて、マントを着て、去年の冬街の中を私といつしよに歩いた。恐らく、もう、あんなことは二度と坊ちやんの身の上にはないだらう。坊ちやんは、たとへ生きてゐるとはいへ、この室の中から二たび外に出ることが出來ない。赤い旗が閃き、樂隊が通つたりする賑かな街へはもとより、日の照らして白く乾いた往來の上へも、また梯子段を下りて、其處には箪笥があり、其の上にはいろ〳〵の玩具などが飾られてゐる、家族の者等がゐる下の室ですら、踏むことがないだらう。而して、死んでしまつたら尚更さうした機會がないだらう。最後の息を引取る刹那まで、この儘、この室の裡にこの姿で橫はつてゐるのだと知ると、何處に坊ちやんの自由な生の存在といふものが認められるのだらうか?

この時、私は悸然とした。今迄、死んだやうに眠とした小さな坊ちやんの體が動いたのである。蒲團から外に覗いてゐた坊ちやんの着てゐる黑地に拔いた飛白縞がぴく〳〵したのである。私は、生命のない飛白縞が獨りで動く筈がない、これは坊ちやんが、まだ生きてゐる證據だと思つたのだ。

空間に於て、ある物體が動く――不思議な現象でないか? 其れは怖ろしくはないか? この力は何處から來たのだらう。坊ちやんが確かに生きてゐるからだ。坊ちやんといふものが存在してゐるからだ。死が來たら、全くこの動く力が無なつてしまふだらう。

坊ちやんは、街を步かなくても、またこの室の內から外に出なくてもやはり生きてゐる。而して、この生と死とは、大變な事實の相違であることをこの一刹那に於ても知らなければならない。

冷たな、寂然とした室の、灰色の光線の中で、さながら其れ自身が生きてゐるやうに飛白縞が微かに動いてゐる。私は、神經質的にぢつと其れを見守つてゐる。

しかるに、二三日前のことであつた。家族の人々は、坊ちやんを近々に死ぬものときめて、其の柩を馬車に乘せ、馬車が其れを郊外の火葬場へと送る、其の道筋や、この雨降りで泥濘を歩く際の困難なことや、いろ〳〵のことなどについて話し合つてゐるのを私は襖の蔭から聞いてゐた。

私の眼に、其の郊外の淋れた森や、林や、圃の景色などが映る。いつか用達に行つた時に通つた、あの路である。あの同じ路を中途から右に曲つて、黄色く色づいた森が、鉛色の空の下に默つて坐つてゐるのを見たが、火葬場はあの方向に行くのださうである。

私は、あの日、轢死者のあつたことは、歸つてから家の人々に語つたけれど、其の汽罐車がS驛で見た2417の番號の付いてゐた同じものであることについては話さなかつた。たとへこれを言つても、誰も、私が思つてゐる程に不思議を感じないであらうから。而して、他人が感じないといふことを知りつゝ語ることを私は好まないから。

私は、永久に默つてゐる。

八九年前の夏のやがて逝かうとする頃であつた。私の祖父は氣が狂つたと言はれた。けれど、私には、何うしても祖父が氣狂になつたとは考へられなかつた。

氣が狂つた人といふものは、眼付が凄くなるとか、氣が猛々しくなるとか、何處か普通の人とは變つたところがあるものであることを私は小供心ながらに信じてゐた。けれど、私の祖父に限つて何處にそんな變つたところがあつたら

う。たゞ、祖父は其頃から、あまり物を言はなくなつた。また幾分か陰氣らしく見えた。とは言ふものゝ、やはり私の顔を見る時は、いつもと變りがなく微笑んで迎へた。而して、祖父は大抵たゞ一人、別な室の裡に坐つてゐた。私は、たび／＼祖父が物も言はず淋しさうな顔付をして坐つてゐるのを見た。而して、とことは何といふことなしに心で祖父を氣の毒に思はせた。

祖父の坐つてゐる室の窓を開けると、外の山が見えたのである。山の頂きには松が生へてゐて、其の木の頭が揃へたやうに平になつてゐた。ある時は、青い空が、この木の頂きに接吻するやうに垂れ下つてゐる。白い雲が山を越へて溪を見落しながら、海の方へ行く時もあれば、また風の具合で反對に山が深く歸つて行く時もあつた。更に角空がよく晴れて、木々の葉は活々としてゐるのに、祖父は、窓を覗いて其れを見やうともしなかつた。また、家の外に出て日の光りを浴びて路を歩いて見やうともしなかつた。終日、うす暗い室の裡に默つて坐つてゐるのを私は寧ろ不思議に思つた。

「おぢいさんは、氣が狂つたらしいよ」と、母が言つたり、たま／＼父が厄介者らしく祖父のことを言つたりするのを聞くと、私は、却つて心の中で、母や、父に對して、激しい反感を抱いた。

けれど、私は、だん／＼とこれまでのやうに、しげしげと祖父が獨りで爬としてゐる室の内へ行かなくなつたのは事實だ。やはり何となく氣味惡く感じたからである。

實際、祖父は、私に對しても、いつからともなくあまり物を言はなくなつた。うす暗い窓の障子の方を向いて、哀れな、孤獨な祖父は、

「早く、裏の沼に水が溜まればいゝ」と、獨言をいつてゐた。私が、傍にゐても、祖父は氣付かないものゝやうに、窓の障子の方を見詰て、ある時は同じことを繰り返して言つたこともあつた。

しかし、私共は夏の間は安心であつた。其の沼の水は少なく減つてゐる。而して、秋になつて雨が毎日のやうに降りつゞいて、低地といふ低地には一帶に水が溜り、私の村がさながら水郷の如く、枯れかゝつた草の葉の間から覗いた水が鉛色に曇つた空の下に白く光り、水鳥が濕つぽい晩方の空氣に羽摯を打つて、病めるやうに、ひよろ〳〵と畦に立つた並木の頭を越えて、海鳴りのだん〳〵と高く聞える濱の方へと飛んで行く。其の季節が來なければ、山の麓に眠つてゐるやうな沼に水が增さなかつたからである。

祖父は、容貌の大柄な中風氣のある酒の好きな人であつた。死ぬ十日ばかり前からは、家内の者には、誰とも飯を食ふ時に顏を見合はしても、默つてゐて物を言はなかつた。私が、ある日祖父の室へ行つて見ると、いつも坐つてゐる處に祖父はゐずに、椽側に出て、默つて俯向いて草鞋を造つてゐた。

祖父は、何が原因で家内の者から、かうして一人遠く離れて行くのか、私には分らなかつた。私は分らないながらに、いつか祖父は氣が狂つたのだらうと思ふやうになつた。

ある日、私が山へ行つて遊んでゐると、隣の女房が私を迎へに來た。

「おぢいさんが、死になすつたから、早くお歸んなさい」と、告げた。私は、驚いて、息を切らして山から駈け下つた。あの時の女房の靑ざめた顏と、驚いて駈け出した時の自分の姿とを永久に忘れることが出來ない。家に歸つて見ると、祖父は庭頭の柿の木に繩をかけて縊死を遂げてゐた。

父も、母も、其れから二三年後、村に疫病が流行した時に、——他にも澤山の死亡者を出したが——二人は病氣に罹つて枕を並べて死んだのであつた。これがために、今では、祖父と私の兩親との間柄について、當時のことを聞きたゞすべき何の緣も持たない。

祖父の死は、果して氣が狂つた結果であらうか。年々私にはこの疑ひが深くなる。

私は、何處にゐても、秋になると、而して雨が降ると、裏の沼に水が增す時分だと思ひ出すのである。もし、あの時の季節が夏でなくて、秋であつたなら、祖父はきつと思つたやうに裏の沼に身を投げて死を遂げたであらう。さう考へるからである。

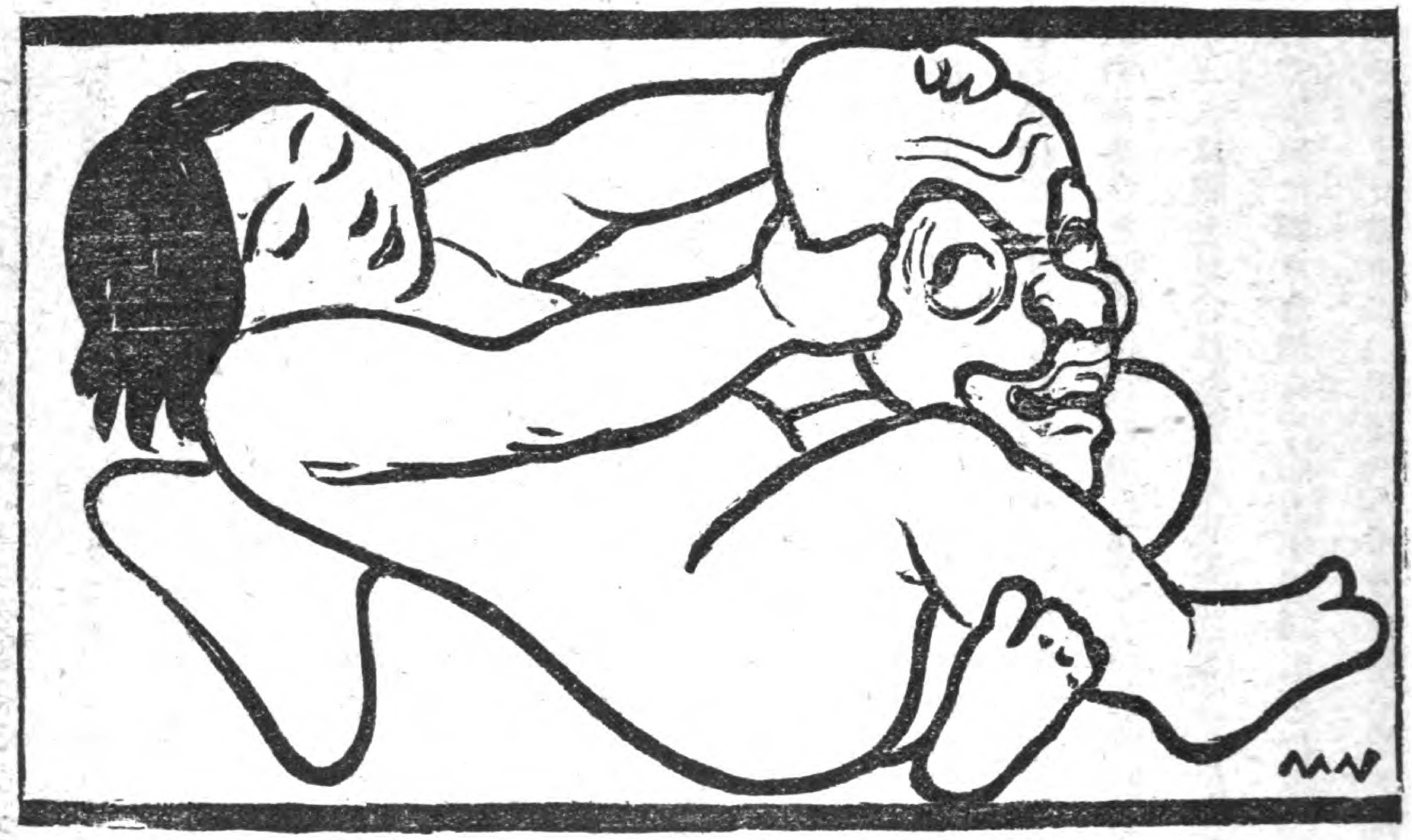
このことについては、曾て人に向つて話したことがない。飽迄深い疑ひを胸に抱いて默つてゐる。けれど、私の心はたへず、恐怖に戰いてゐる。

私は、この短かい半生に於て、已にさまざまな痛ましい人間の死態を見た。何のために神はかうして吾等に命を與へたのだらう。またいかなる理由によつて、こんな酷たらしい命の奪ひ方をするのだらう。

これから恐らく後の半生を私はたとへ滿足に生き得たとて、このことだけは分らうとは思はない。

私は夜が明ければ默つて追ひ使はれる。而して、日が暮れると默つて疲れて眠る。たゞこれを人生と考へてゐる。

——一九一八、十作——



青木の出京

菊池寛

一

銀座のカフエ〇〇〇〇で、同僚の杉田と一緒に晝食を濟した雄吉は、其處を出ると、用事があつて上野方面へ行かねばならぬ杉田と別れて、自分一人勤めて居る△町の雜誌社の方へ歸りかけた。

夫は六月には入つて間もない一日であつた。銀座の舗道の行路樹には、輕い微風がそよいで居たが、夫は塵を立てる程强いものではなく、行き交ふて居る會社員達の洋服は大抵白つぽい合着に更へられて、夏には適はしい華美な色のネクタイが、その胸に手際よく結ばれて居た。又、擦れ違ふ外國の婦人達の初夏の服裝の薄桃色や水色の上着の色が、快い新鮮(フレッシユネス)を與へて呉れた。

雄吉は、食事を濟した後ののんびりとした心待に浸つて居た。其上、彼は此頃漸く自分を見舞ひかけて居る幸運を意識し、享樂して居た。長い間認められなかつた彼の創作が、漸く文壇の一角から採り入れられて、今迄は餘り見込の立たなかつた彼の前途が、明るい

一筋の光明に依つて照され始めて居た。彼の心にはある一種の得意と、希望とが混りながら存在して居た。殊に、彼は自分の暗かつた青年時代を回想すると、謙遜な心で今の幸運を享受する事が出來た。

彼は、兎も角も晴やかな浮揚的(ジャイヤント)な心持で、歩き馴れた舗道の上を歩いて居た。彼の心には、今の處何の不安もなければ憂慮も存在して居なかつた。全く安易な、のう〳〵とした心易さであつた。他人が見たら、彼は少し肩を聳やかして居たかも知れぬほどの得意さへ彼の心の裡に混じつて居た。彼が、銀座で有名な〇〇時計店の前迄來た時であつた。彼はふと自分の方へ動いて來る群衆の流の裡に、ある一つの顔を見出した。見覺えのある顔だと、彼は思つた。夫はホンの一瞬間だつた。靑木だ！　と氣が付くと、彼の脚はピッタリと、その舗道の上に釘付けにされたやうに、止まつてしまつた。が、釘付けにされたものは彼の脚ばかりではなかつた。彼の凡ての感情が、その瞬間その動作を止めて、心の裡で化石してしまつたやうに思つた。彼のその瞬間迄、のんびりとして居た心持が、膠のやうに、急に硬着してしまつた。彼の心全體が、その扉を悉く閉ぢて武裝してしまつたと云ふ方が、一番此時の心持を云ひ現はして居るかも知れなかつた。雄吉は身體にも心にもスッカリ戰鬪準備を整へて、靑木の近よるのを待つた。

初て靑木を發見したのは、ホンの二三間前であつたのだから、靑木が雄吉に近よるのは、二、三秒も懸らなかつた。雄吉の心持にも劣らない程の大きい激動が、靑木の心の裡にも存在しない筈はなかつた。その上、靑木に雄吉の殆ど仇敵に對するやうな凄じい眼の光を見ると、心持眸を伏せたまゝ近よつた。

二人は眼を見合はした。雄吉の眼は相手に對する烈しい道德的叱責と、ある種の恐怖に燃えて居た。靑木の眼は夫に對して反抗に輝きながら、而も不思議に屈從と憐憫を乞ふやうな色を混じへて居た。二人は夫でも頭を下げ合ふた。

「やあ！」雄吉は、硬ばつたやうな聲を出した。

「やあ！」青木はしはがれて顫える聲を出した。雄吉は、先刻から青木に對して何んな態度を取るべきかを、必死に考へて居た。青木の出京！　夫は彼に取つて夢にも豫期しない事だつた。而も、その青木と不用意に、銀座通で出會すなど丶云ふ事は、彼の豫想すべき最後の事であつた。彼は狼狽してはならないと思つた。彼は過去に於て、青木と交渉した事に依つて、自分の人生を棒に振つてしまふ程の打擊を受けて居た。その打擊を受けてから六年の間に、彼は、その爲に何れ程苦しみ、どれほど不快な思をしたか判らなかつた。が、その苦痛と不快とに堪へた爲に、彼は今ではその打擊を悉く補ふ事が出來た。今では、青木との交渉に依つて負ふた手傷を悉く癒す事が出來て居ると思つて居る。が、今でも過去に於ける苦痛と不快との記憶は、兎もすれば彼の心に蘇つて、彼の幸福な心持を擾き擾して行つた。そして、その打擊から起因する凡ての苦しみを苦しみ、凡ての不快を味ふ毎に、彼は青木を憎み且つ恨んだ。そして、今漸く夫等の打擊から立ち直つて、稍光明のある前途が拓かれやうとする時に、昔の青木が、五六年も見た事のない青木が、平彼靜な安易な生活を脅す如く、彼の前に出現したのである。

彼は、相對した敵の軍隊同志が、偵察戰を試みるやうに訊いた。

「何時來たんだ！」

「もう一週間ばかり前に來た。」と、青木は答へた。その力強い聲が、昔の青木そつくりである。彼は過去に於て、その力強い魅力のある青木の聲に幾度威壓されたか知れなかつた。而も、今自分は可なり得意な自信のある位置に立ち、青木は數年前失脚した儘田舍に埋れて居た筈だのに、その青木の聲から、ある種の威壓を受けるのが不快だつた。彼はその威壓を意識すると全身の力を以て、反撥せねばならぬと思つた。「何をしに、上京したのだ？　一體君は！」、夫はある意味の宣戰に近かつた。彼は、青木が上京して、その儘滯在するやうになるのを、何よりも怖れて居た。非常識に大膽

で、人を人とも思はないやうな性情と、ある種の道德感に缺陷のある青木は、雄吉に對して、又何んな事をやり出すか、判らなかつた。而も雄吉は青木の不思議な人格に對してある魅力と恐怖とを同時に感じさせられて居た。昔の通の青木が、その持ち前の圖々しさで、自分の生活を掻き擾し始めたら堪らないと思つた。

「何をしに、上京したのだ？」と、訊いて置いて若し青木の返事が、若しも彼の東京に永住する事を意味して居たら、雄吉は卽座に「僕は、君とは生涯何の交渉も、持ちたくはない」と、斷言する意志であつた。

「何をしに上京したのだ」と云ふ言葉は、夫丈では、普通な在りふれた挨拶を、少しく粗野に云ひ放つたに過ぎなかつた。が、雄吉がその言葉に籠めた感情は、青木に對する全身的な恨みと憎惡とであつた。雄吉は、後でその瞬間に、自分の眼が何んな惡相を帶び居たかを想ひ出すさへ不快であつた。まして、その眼を眞向に見た青木が、名狀すべからざる表情をしたのも無理はなかつた。その顏は、憤怒と恥辱と悲しみとが、先きを爭つて表面に出て來やうとするやうな顏付であつた。夫は凄じいと云つてもいゝ程の恐しい顏だつた。彼は生涯に、此の時の青木の顏に似た顏をたゞ一つ丈記憶して居る。夫は、彼が、脚氣を患つて品川の佐々木と云ふ病院に通つて居た頃の事であつた。

彼はある日、多くの患者と一所に控室に待ち合はして居ると、四十ばかりのデップリと肥つた男に連れられて、やつて來た十八ばかりの女が居た。雄吉はその男女の組合せが變なので、最初から好奇心を持つて居た。すると、其處へ醫員らしい男が現はれた。その醫員はその四十男と、兼てからの知合であつたと見え、その男に「何うしたのです、何處か惡いのですか」と、訊いた。すると、その男は丸切り事務の話をするやうに、一寸連れの女を振返りながら、「いや之が娼妓になりますので、健康診斷を願ひたいのです」と、云つた。夫はその男に取つては、幾度も云ひなれた言葉かも知れなかつた。が、娼妓になる爲の健康診斷を受ける事を、多くの患者や醫員や看護婦達の前で披露されたその女――恐ら

く處女らしい――その女の顏は、何んな暴慢な心を持つた人間でも、二度と正視する事に堪へなかつただらう。

女は心持顏を赤めた。そしてその二つの眼は血走つて爛々と燃えて居た。夫は、人の心の奥まで、突き徹らねば止まない眼付であつた。雄吉は、その眼付を今でも忘れて居ない。夫は恥ぢ、怒り、悲しんで居る人間の心が、恐く二つの眸から、ハミ出して居るやうな眼付であつた。もう、夫は三四年も前の事であつた。が、今でも意識して眸を閉ぢると、その女の顏が、彼の親の顏よりも、昔失つた戀人の顏よりも、如何なる舊友の顏よりも明確に、彼の記憶の裡に蘇つて來た。

然るに、今青木の蒼白い額の上部に、爛々として輝いて居る眼は、此娼妓志願者のその時の眼と、あらゆる相似を持つて居た。彼は青木を恐怖し憎惡した。が、その深刻な烈しい人間的苦惱の現はれて居る眸を見ると、彼はその心の底迄その眸に貫き徹されずには居なかつた。然もその青木は、つひ六七年前迄彼の畏友であり無二の親友であつた。雄吉は、その眸を見ると、今迄の心の構へが、タヂ〱となつて、彼は思はず何かしら感激の言葉を發しやうとした。が、彼の理性、夫は彼の過去六年間の苦難の生活の爲に、鍊えられた彼の理性が、彼の感情の盲動的感激を、グット制止して呉れた。彼の理性は云つた。「貴樣は青木に對する盲動的感激の爲に、一度半生を棒に振りかけたのを忘れたのか。強くあれ！　何んな事があつても妥協するな。」彼は、やつとその言葉に依つて踏み止まつた。

「僕は、一週間ばかり前に上京したのだが」と、青木は云つた。彼の眼付とはやゝ違つて、顫を帶びた哀願的な聲であつた。が、雄吉は思つた、青木のこんな聲色はもう幾度でも聞き飽きて居る、今更そんな手に乘るものかと思つた。が、青木は又言葉を繼いだ。「實は明日の四時の汽車で歸るのだ。今度僕は北海道の方へ行く事になつてね。今日實は君に逢はうと思つて、雜誌社の方へ行つたのだが……」と、云ひかけて彼は悄然として言葉を濁した。雄吉は、今明に青木が

彼の憐憫を乞ふて居るのを感じた。雄吉と同じく極度に都會讃美者であつた青木が、四五年振に上京した東京を何んなに愛惜して居るかを雄吉は、しみぐ感ずる事が出來た。が、一人も友達のなくなつた彼は、深い憎惡を、懷かれて居るとは知りながらも、尙昔の親しく交はつた雄吉を訪ふて、カフエで一杯のコヒーをでも、一緒に飲みたかつたのであらう。雄吉は青木のさうした謙遜な卑下した望みに對して好意を感ぜずには居られなかつた。が、さうした好意は雄吉の心の裡に現はれた體裁のよい感情であつた。雄吉の心の底にはもつと利己的な感情が儼として存在した。

「明日の四時に歸る。而も北海道へ」と聞いた時、彼は青木の脅威から、スツカリ免れたのを感じた。明日の午後四時、今は午後の二時頃だから僅に二十六時間だ。その間丈、充分に青木を警戒する事は、何でもない事だ。今玆で、手荒い言葉を云つて別れるより、只二十六時間丈、彼の相手をしてやればいゝのだと思つた。否、或はその一部の六時間か、七時間か、相手をしてやればいゝのだと思つた。

「ぢや、玆で立話も出來ないから、つい其處のカフエ〇〇〇〇へでも行かう」と、雄吉は意識して穩やかに云つた。が、初てさうした世間並の挨拶をした事が、全く利己的な安心から出て居る事を思ふと、少からず氣が咎めた。

雄吉が、先きに立つて、カフエ〇〇〇〇へは入つて行くと、其處に居た二三人の給仕女は、皆クスツと笑つた。今出て行つたばかりの雄吉が、五分と經たぬ裡に、歸つて來たからである。併し雄吉は夫に對してニコリと笑ひ返す事は出來なかつた。彼の心は大なる脅威から、逃がれて居たとは云へ、まだ青木と云ふ不思議な人格の前にある種々の不安と輕い恐怖とを感ぜずには居られなかつた。

二

過去に於て、青木は雄吉に取つて畏友であり、親友であり、同時に雄吉の身を滅さうとする惡友であつた。

雄吉は、初て青木を知つた頃の彼に對する異常な尊敬を想出す事が出來た。彼の白皙な額と、その澄み切つた眼とは、青木を見る誰人にも、天才的な感銘を與へずには居なかつた。彼の態度は極度に高慢であつた。が、組の何人もが、意識的に、彼の高慢を許して居た。青木は傲然として、智識的に級全體を睥睨して居たのだ。雄吉が、初て青木の威壓を感じたのは、高等學校に入學した一年の初であつた。何でも、哲學志望の者のみに、課せられる數學の時であつた。數學では學校中で、一番造詣が深いと云はれて居る杉本教授が、公算論を講義した時であつた。中學に居た頃には、首席を占めた事のある雄吉にも、その聽きなれない公算論の講義には、スツカリ參つてしまつた。すると雄吉のつい傍に座つて居た青木――その時、既に彼の名前を知つて居たのか、夫ともその事があつた爲に名前を覺えたのか今の雄吉には判らない――兎も角、青木がスツクと立ち上つたかと思ふと、明晰な濕のある聲で何だか質問をした。夫は、雄吉には何の事だか、ちつとも判らなかつたが、飽く迄明快を極めた質問らしかつた。夫を聽いて居た杉本教授は、我意を得たりとばかり、會心の微笑を洩しながら、青木の疑問を肯定して、夫に明快な答を與へたらしい。すると、今度は又、青木がニツコリ微笑して肯いて見せた。頭のいゝ先生と、頭のいゝ青木との間には、靈犀相通ずると云つたやうな、微妙なる了解があつた。級全體は全く地上に取殘れて居て、たゞ青木丈が、杉本教授と同じ空間迄、昇つて行つたやうに奇蹟的な感銘を、雄吉達に與へずには居なかつた。殊にその頃は、ロマンチツクで、極度に天才崇拜の分子を、持つて居た雄吉は、一も二もなく青木に傾倒してしまつた。杉本教授が生徒としての青木を、尊重する度合と正比例して、雄吉の青木に對する、尊敬も、深くなつて行つた。

その上、青木の行動は極度にロマンチツクで、天才的であつた。雄吉はある晩十一時頃に、寄宿舍へ歸らうとして、大きな闇が湛へて居る運動場の緣を、辿つて居るとふと自分と擦れ違ざまに、闇中へ、吸ひ込まれるやうに、運動場の

方へ急いで居る青年があつた。その蒼白い横顏を見た時に、雄吉は直ぐ夫が青木である事を知つた。「青木君！　何處へ」、月夜でもない晩に夜更けて運動場の闇へと步を運ぶ、青木の心が、その時の雄吉には、一寸解らなかつた。

「一寸散步するのだ」と、云ひながら雄吉の存在などには、少しも注意を拂はずに、瘠ぎすな肩を聳やかせて、何かしら冥想に耽ける爲に、闇の中に消えて行く青年哲學者——雄吉はその時、そんな言葉を必ず心の裡に想ひ浮べたに違ない——の姿を、雄吉は何れほど淑慕の心を以て見送つたか分らない。

又その頃の靑木は、教室の出入に、キツト教科書以外の分厚な原書を持つて居た。雄吉などが、その頃初て名を覺えたショペンハウエルだとか、スピノザなどの著作や夫に關する硏究書などを、殆どその右の手から、離した事がなかつた。而も、夫を十分の休憩時間などに、拾ひ讀みしながら、所々へ靑い鉛筆で下線（アンダーライン）を引いて居た。

さうした靑木の天才的な智識的な行動——それを雄吉は後になつてからは衒氣（アフエクテーション）の伴つた可なり嫌味なものと思つたが、その當時は全く夫に魅惑されて、天才靑木に對する淑慕を、いやが上に募らせてしまつた。無論彼は意識して驅命に靑木に近づいて行つた。對等の友人と云ふよりも、彼の絕對的な崇拜者として、彼の從順なる忠僕としてゞあつた。

靑木と雄吉との交情が、何事もなく一年ばかり續いた頃で、其處に雄吉に對する大なる災難——夫は靑木に對しても矢張災艱に相違なかつた——が、萠芽し始めて居た。

夫は確か雄吉等が、高等學校の三年の二學期の事だつたらう。赤煉瓦の古ぼけた教室の近くにある一株の橄欖が小さい眞赤な實を結んで居る頃であつた。二、三日前から蒼白な顏を、愈々蒼白にして、雄吉が話をしかけても、鼻で扱（あし）ら

つて居た青木が、到頭堪らなくなつたやうに教室の壁に身を投げかけるやうにしながら、

「さあ！　愈々田舎へ歸るんだぞ！」と、吐き出すやうに叫んだ。夫は、雄吉に取つては、全く意外な事であつた。雄吉は、自分の君主の身の上にでも、災難が襲ひかゝつて來たかのやうに、狼狽しながら、

「君が國へ歸る！　何うしてだ？」と、訊いた。

「何うもしないさ、俺の親父が破産したと云ふ丈さ」と、青木は沈痛な、而も冷靜な調子で云つた。

青木の家は雄吉の知る限では、田舎の、可なりの資産を持つた商人らしかつた。青木が、級の中で最も多く、原書を買込む事實から云つても、彼が其時迄給與されて居た學資は可なり豐富であつたらしかつた。

「ぢや、學資が來なくなつた譯なんだね」と、雄吉は、此の場合にもつと適當した言葉が、外にあると思ひながら、到頭こんな平凡な事を云つてしまつた。青木は、雄吉の質問を如何にも下らないと云つたやうに、

「まあ！　そんな譯さ」と、云つた儘默つてしまつた。

センチメンタルで、ロマンチックで、感激家であつた雄吉が、突然青木の身の上に、振りかゝつた危難を知つて極度に感激したのは、無論の事であつた。彼は、何んな事があつても、青木を救つてやらねばならぬと思つた。雄吉に取つて、青木を救ふ唯一の手段は、やつぱり、今自分が世話になつて居る近藤家の金力に、縋るより外はなかつた。

雄吉は、さう考へると、その日學校から歸へると、自分が家庭教師兼書生と云つたやうな、役廻りをして居る近藤家の主人に、涙を流さんばかりに、青木の救濟を賴んだ。

「本當に、その男は天才なんです、教授連がスツカリ、舌を捲いて居るのです、後來屹度日本の學界に、獨歩する程の

大哲學者になりさうです」と、自分の云つて居る事に、充分確信を持ちながら、青木の效能を長々と述べ立てた。すると、主人の近藤氏は、實業家に特有な宏量な態度で、

「俺は、哲學と云ふ事は、何んな學問だか、一向心得んが、孰れ國家に有用な學問に相違なからうから、その方面の天才を保護するのも、決して無用な事ぢやなからう、君がさう迄云ふのなら、青木と云ふ人も、家へ來て貰つて一向差支へがない」と、かう云ひながら、何か堀出し物の骨董をでも買ふやうな心持で、青木を世話する事を引受けて呉れた。

雄吉は、此時程、近藤氏を偉く思つた事はなかつた。

雄吉は、自分の手で、青木を救ひ得た事を、何れ程欣んだか、知れなかつた。雄吉は、その翌日その吉報を齎して、いそ〳〵として登校した。その途中でも、彼は、青木がその報知に接して、何んなに欣ぶか、何んなに自分の親切を、感謝するだらうかと考へると、わく〳〵と自分の心が、鼓動するのを覺えた。

が、雄吉が、寄宿舍の窓に凭れて、鞦韆の一面に立つて居る運動場を、放心したやうにボンヤリと、見詰めて居る青木を見付けて、近藤氏の厚意を話した時――大なる興奮と感激とを以て、話した時、青木はその起きてから間もないと見え、極度に蒼白い顔の筋肉を、ビクリともさせずに、たゞ一言、

「さうかい！」と、云つたばかりであつた。雄吉は、青木の冷靜な、殆ど無關心な態度を、ある種の驚異を以て見た。自分の身の上に、湧いて居る危難を、物の數ともせずに、雄吉の親切などを、眼中に置いてない青木の態度を、雄吉は怒るよりも、むしろ呆氣に取られて、見詰めるばかりであつた。

「ぢやまあ！　近藤氏の世話にでもなるか、學校なんか何うだつていゝのだが、好き好んで廢すにも當らないからな」と、何時ものやうに　傲岸に云ひ放ちながら、ニヤリと青木に特有な、皮肉な、人を頭から嘲つて居るやうな、苦笑を

洩した。雄吉は、自分の全心を、投じた親切を、青木の爲にこんなに、手酷く扱はれながら、夫でも青木が、到頭自分の親切を受け入れて呉れて、自分の崇敬措く能はざる青年哲學者の危急を、救ひ得た事を、無上の光榮のやうに欣んで居た。

青木が、近藤家に寄寓して、雄吉と同室に起臥する事になつたのは、夫から間もなくの事であつた。今迄もさうであつたが、かう二人の生活が、事毎に交渉する事になつてからは、雄吉の生活は、悉く青木の意志の支配を受けて居た。近藤家から命ぜらる凡ての仕事は、悉く雄吉の負擔であつた。夫と反對に、近藤家から與へられる恩典の大部分は、青木が獨占した。が、雄吉はさうした自分の從屬的の生活を、少しも、後悔しては居なかつた。思索家、青年哲學者としての青木に對する彼の崇拜は、少しの幻滅をも、感じなかつたばかりでなく、青木との交情が進むに從つて、益々擴大され、かつ深められて居た。殊に、青木が三年になつて以來、校友會の雜誌に續け樣に發表した數篇の哲學的論文は、彼の青木に對する尊敬を、極度に迄煽り立てねば、止まないものであつた。一つは「ベルグソン哲學の缺陷」と云ひ、一つは「實在としての神」と、云ふのであつた。その二つ論文が、學校中に起した感動（センセイシヨン）は、可なり素破らしいものであつた。天才青木！　夫は、雄吉の級文での合言葉ではなくなつて、殆ど學校中全體にさへ、承認を求めるやうに迄進んで行つた。雄吉は、青木の天才が、かうした輝やかしい承認を、受け始めた事を、何んなに驚喜したか、分らなかつた。かうして、多くの人々から、認められるに付けて、青木の自信と傲慢とは、正比例して增進して行つた。確か彼が、近藤家へ移つてからの事であつた。その頃、京都大學の哲學教授で、名聲嘖々として、思想界の注目を惹いて居た北田博士が、珍らしく上京して、大學の講堂で講演をした。夫を聽きに行つて、歸つて來た青木は、雄吉の顏を見ると、何時ものやうに吐き出すやうな調子で、「北田博士から、あの哲學者らしい顏付を除けば、跡には何も殘りやしないぜ」と、

云つた儘、口を緘んでしまつた。雄吉は、北田博士に對しても、充分な尊敬を、持つて居たが、彼の崇拜する青木が、天下の大學者たる北田博士を、一言の下に片付けるその大膽さを、痛快に思はずには居られなかつた。

雄吉の青木に對する尊敬は、少しも變らなかつたが、近藤家に來てから、青木の生活は、妙にダレ出して居た。彼は無論、實家が破產したと云ふ事から、隨分大きい打擊を受けて居た上に、日常の生活に於ては可なり、享樂者であつた青木は、何と云つても不自由な寄食的生活と、月々給與せられる五圓と云ふ小額な小遣との爲に、その生活を可なり虐げられて居るらしかつた。彼は、見る〳〵裡に藏書――高等學校生としては極度に豐富な藏書を、賣拂つてしまつた。彼には、他人の家に寄食してからも、その享樂的な生活を更改する事が、苦痛らしく見えた。彼は藏書を賣拂つた金で、やつぱり本鄕邊のカフエで、香と味の強烈な洋酒の杯を、享樂して居た。その裡に、青木の身邊から、消滅するものはその藏書ばかりではなくなつた。何時の間にか、彼の懷中時計は彼の机上から、影を隱して居た。

そんな事が起つて居る裡に、段々雄吉と青木との二人を、襲ふ災害が近づいて來て居た事を、雄吉は少しも氣付かなかつた。雄吉は、青木のさうした放逸な生活も、天才的な性格には有勝な放縱として、寧ろ好意を以て夫を見守つて居た。

三月の試驗が、眼近に迫つて來た頃であつた。雄吉が何かの用で少し遲れて、學校から歸つて來た。すると、餘程前から歸つて居たらしい青木は、雄吉の眼の前に、いきなりある小さい紙片を擴げて見せた。

夫は、金錢上の取引などには、疎い雄吉に取つては、可なり珍らしい小切手であつた。而も、雄吉等學生に取つては、可なりの大金だと云つてもいゝ百圓と云ふ額面であつた。雄吉は、妙な不安と昂奮とを以て、青木の手中にあるその小切手を見詰めた。

「何うしたのだ、その金は？」と、雄吉の聲は、可なり上づつて居た。

「何うもしないさ」と、青木は何時ものやうに、冷靜であつた。「矢部さんがね、僕の窮狀に同情して呉れて、飜譯の口を探して呉れたのさ。可なり大きい飜譯なのだ、僕が困ると云つたものだから、之丈前金を融通して呉れたのだハヽヽヽ」と、彼は事もなげに笑つた。矢部さんと云ふのは、學校の先輩で、もう既に文壇にも充分に認められて居る新進の哲學者であつて、青木は二三度、此人を訪問した事がある。雄吉は、青木に向いて來た幸運を、自分の事のやうを欣んだ。夫と同時に、まだ學生でありながら、さうした大きい飜譯に從事する青木を、讃嘆せずには居られなかつた。

「それで、君に賴みたいのだがね、此の小切手を、一つ貰つて來て呉れないか、○○銀行支店と云へば、さう遠くないのだから、四時迄には行けるだらう。裏へ署名して判を捺すのだが、僕は判を持つて居ないから、君の名でやつて呉れないか」

雄吉が、青木の依賴を、唯々諾々として聽いたのは無論である。雄吉は、自分が青木の代人としてさうした大金を引き出すのを、一個の名譽でもあるが如く、欣んで○○銀行支店へ馳け付けた。

手の切れるやうな、十圓札を十枚、汗ばんだ手で握りしめながら、雄吉があたふたと、歸つて來ると、青木は鷹揚に

「やあ御苦勞〳〵」と、肯いて、雄吉から受取つた札を、數へるとその中から二枚を、雄吉の前に差出しながら、

「ホンの少しだが、取つて置いて呉れ給へ」と云つた。中學時代から、貧家に育つた雄吉は、二十圓と云つたやうな大金を、纏めて掴んだ事はさう度々ある經驗ではなかつた。雄吉は、自分の尊敬する君主から、拜領物をでも戴いたやうに低頭せんばかりに、

「やあ有難う」と、云ひながら夫を押し戴くやうにした。

八十圓を懷にした靑木は、線香花火のやうに燦やかな贅澤をやつた、彼は、級の誰彼を、その頃有名に成りかけて居た、鎧橋際のメイゾンコーノスへ、引張つて札びらを切つて御馳走した。そして、二晩も三晩も寄宿舍へ宿ると云つて近藤の家へは歸つて來なかつた。

が、一週間と經ち、十日と經つ內に靑木は、又元のやうに愼しい生活を、强ゐられて居るやうであつた。夫は、雄吉に取つては忘れられない四月の十一日の晚であつた。晚餐を濟すと、靑木は「一寸と散步して來る」と、云つて出て行つた儘、仲々歸つて來なかつた。雄吉は只一人、春の宵に在勝な不思議な憂鬱に襲はれて、ボンヤリ机に靠れて居ると、後の襖が、音も無く開かれたと思ふと、聞き馴れた小間使の聲がして、

「旦那樣が、一寸御用です」と、云つた。

「ハア」と、答へると雄吉は、氣輕に立ち上つた。又何時ものやうに到來物の禮狀をでも、書かされるのだなと思ひながら、長い廊下を通つて、主人の部屋へ行つた。何時もは、微笑を含みながら、雄吉を迎へる主人が、ニコリともしないで、苦り切つたまゝ坐つて居るので、雄吉は聊か勝手が違ひながら、坐つて禮をした。すると、主人は、

「甚だ不快な用事だが」と、云ひながら、その膝の上に置いてあつた紙入から、小さい紙片を取り出して、雄吉の眼の前に押しやりながら、

「何うだ、夫に覺があるかな」と、堅い凍つてしまつたやうな聲で云つた。雄吉は何だか見覺えがあるやうに思つた。彼は、怖る〱、夫を取上げた。雄吉の眼が、紙面を見詰めた瞬間に、彼の全身は水を浴せられたやうに戰いた。夫は紛れもない、百圓の小切手であつた。而も自分が、靑木の命令に依つて、唯々諾々として、〇〇銀行支店へ、引出しに行つた百圓の小切手に、相違なかつた。主人は、雄吉の顏面に現はれた狼狽を見濟すと、以前よりももつと冷たい聲で

「その裏の署名捺印は、お前のに相違なからうな」と云つた。雄吉はぶる〳〵顫へる手で裏を返して見た。其處には明確に過ぎると思はれる程丁寧な楷書で、廣井雄吉と署名されて、捺印されて居る。

「俺はもう何も云はない。最初その小切手が、俺の手文庫から紛失して居るのを發見した時、俺は女中か何かの出來心かと思つて居た。夫が俺の考違であつたことを、俺は遺憾に思ふ丈ぢや。俺は、貴君に對して別に法律上の制裁を與へやうと云ふのでもなければ、その金を返して呉れと云ふのでもない。只貴君が、俺の家を出ると云ふ事丈は、此場合、貴君が當然採るべき義務だと思ふ丈だ。只貴君の爲に一言云つて置くが、今度の事で貴君が何の制裁をも受けなかつたと云つて、是から後も矢張りかうした事を續けて居ると、貴君は社會的に存在し得なくなるからな」と、苦り切つた、然し紳士としての自分の品格を傷ける事を恐れるかのやうに、其の心に動いて居る雄吉に對する侮蔑と憤怒とを、飽く迄も冷靜に抑へて、居るらしかつた。

雄吉は只茫然として、凡ての考察を奪はれた人間の如く、主人と自分との間にある疊の縁を、ボンヤリと見詰めて居るばかりであつた。彼のあれ程迄に、尊敬して居る青木が、主人の手文庫から、小切手を盗み出したと云ふ事が、彼には夢にも豫想し得ない事だつた。また盗んだ物を、白晝公然と、自分に命じて、引出しにやつた青木の大膽さは、殆ど常識を備へた者としては、考へられない事だつた。併し、雄吉は主人の前に蹐まりながら、此事件から身を脱するのは、何でもない事だと思つた。

「あの小切手は青木が、持つて居たものです」と、云つてしまへば、自分丈は手もなく此の災難から脱する事が出來ると思つた。が、その時の雄吉は、青木の人格的魅力に、陶醉し切つて居た雄吉は、自分に降りかゝつて來た嫌疑を手もなく、青木に皆負はせて、自分一人浮び上るのに滞へなかつた。彼はその時、ふと青木の今迄の行動から、彼の道徳性

を檢べて見る氣になつた。青木は一體盜みをすると云ふ惡癖を、持つて居るのだらうかと考へた。すると、雄吉の心にふと、一月前の青本に關したある光景が浮んで居た。夫は學校の敎室で、青木が新しく古本屋から買つたばかりだと云ふ獨逸語の辭書を見て居ると、直ぐ横に居た同じ級の藤野と云ふ男が、

「オヤツ！　君は此の辭書を何處で買つたんだい」と、訊いた。すると、青木は何を無禮な質問をと云つた樣に例の如く高飛車に、「何だつてそんな事を訊く必要があるんだ。何處で買はふと、俺の勝手ぢやないか」と、冷淡に殆ど取付く島もない樣な返事をした。氣の弱い藤野は、青木の權幕に威壓されてしまつたらしく、その儘默つてしまつた。が雄吉はそれから暫くしてから、友達の誰かに藤野が、

「不思議な事があればあるものだね。僕が盜まれた獨逸の辭書を、青木君が何處かの古本屋で買つたらしいよ」と、云つて居るのを聽いた。その事を、青木に聽かせるのは只青木を不快にするばかりだと思つたから、雄吉は自分一人の胸の裡に止めて置いたが、今雄吉が近藤氏の前に在つて青木の過去の行動を顧みると、此の辭書の問題が彼の心に大なる疑念を湧かした。藤野の好意ある解釋、盜まれた本を青木が古本屋を通じて買つたと云ふ解釋——無論雄吉はその當時夫に就いて、何の疑念も懷かなかつたが——は果して正しいものだらうか。此の小切手の事件から思ひ合はすると、其辭書は藤野の所有から、何等の仲介なしに、直接青木の所有に移つたのではあるまいか。雄吉はさう考へて來ると、もう夫は動すべからざる事實のやうに思はれ始めた。

雄吉が、心の裡で青木の惡癖を確めて居るのを、近藤氏は雄吉が、苛責の心に責められて居るのだと思つたらしく、

「あゝもういゝ。彼方へ行つて休み給へ。君は見た所立派な體格を持つて居るのだから、心を入れ易へて奮鬪さへすれ

ば、一人前の人間に成れぬ事はない。さあもう彼方へ行き給へ」と、云つた。

雄吉の沈默を服罪だと、解釋した主人は、もう此の上責める必要もないと思つたのか、また此の不快な會見を早く切り上げやうと思つたのか、頻りに雄吉を促し立てた。

「實は、あの小切手は青木が持つて居たのです」と、雄吉は口迄迸つて出やうとする言葉を、抑へ付ながら、彼は懸命になつて、自分の採るべき處置を考へた。天才と病的性格と云ふ事を、彼は思ひ出した。盗癖のある青木、が、さうした缺陥にも拘はらず輝いた天分を持つて居る青木、かうした天才を保護し守り育てゝやる事が、我等凡庸に育つたものの當然盡すべき義務ではあるまいかと雄吉は思つた。自分が近藤家から追はれる！　其の事に依つて、何んな損害を受けても、夫は一人の天才の前途を暗くする事に比ぶれば、何でもない事ぢやないか、と雄吉は思つた。殊に、體格の强壯な自分なら苦學でも何でも、やれぬ事はない。之に反して青木、羸弱と云つてもよい青木に取つて苦學など云ふ事は、思ひも及ばぬ事だつた。かう考へて來ると、ロマンチックな感激とセンチメンタルな陶醉――夫等の物を雄吉は、後年何れ丈後悔し何れ丈憎んだか分らないが――とで、彼の心は一杯になつた。――俺は、青木の罪を引受けてやらう、さうすれば、青木も俺の犠牲的行動に感服して、その恐るべき盗癖から、永久に救はれるに違ないと雄吉は思つた。無論青木が歸宅して、彼が自分で責任を持つて、自首すると云へば夫迄だが、兎も角俺は青木の罪を引受けて、此の主人の部屋を出やう。主人は、俺の後影をどんなに蔑すみ卑しんで見送らうとも、俺は一人の天才、一人の親友を救ふと云ふ英雄的行動を、敢て爲した勇士の如き心持で、此部屋を出てやらう。雄吉はさう決心すると、不思議な程冷靜になつて、

「何うも相濟みませんでした」と、挨拶しながら主人の部屋を辭した。長い廊下が、眼の前の闇に光つて居た。雄吉は

芝居をして居るやうな心持であつた。凡ての理性が、眠れ返つて居る感情の片隅に、小く蹲つて居るやうな心持であつた。その時に、雄吉の頭に故郷に殘して居る白髮の兩親の顏が浮んだ。續いて、夫を倚みながら、無邪氣に遊び戲むれて居る弟妹の顏が浮んだ。雄吉は水を浴びたやうに、ヒヤリとした。お前は自分一人の妙な感激から、責任のある身體を自ら求めて危難に陷らしてもいゝのかと、彼の良心が囁いた。が、雄吉の陶醉と感激――人生の本當の物に對する感激ではなくして、人生の虛僞に對する危險なる感激――とに耽溺して居る彼には、さうした良心の聲は殆ど何の力さへなかつた。

彼はその夜、青木が歸るのが待たれた。青木がその小切手に對して、明快な辯解をして呉れるかも知れないと云ふ、空疎な希望もあつた。また青木が、自分の罪を自分で背負つて、主人の前に懺悔する。すると、主人は雄吉の潔白とその犧牲的行動とに、感激する。そして、雄吉の友情に免じて青木の罪をも、不問にして呉れる。雄吉はさうした馬鹿らしい空頼みにも耽つて居た。

青木が歸つたのは、十一時を廻つて居た頃であつた。彼は、矢張り何時ものやうにツンと取澄した彼だつた。雄吉が常に青木に對して持つて居た遠慮も今日ばかりは、少しも存在しなかつた。

「おい！　青木、一寸訊きたい事があるんだがね」と、雄吉は青木のお株を奪つたやうに冷靜であつた。

「何だ！」と、青木は雄吉の態度が少し癪に觸つたと見えながら、雄吉の眼の前に突立ちながら、答へた。

「まあ！　座れよ、立つて居ちや、一寸話が出來ないんだ。實は、此間の百圓の小切手だがね。あれは君！　本當に飜譯の前金として貰つたのかい」

「何だ、そんな事を疑つて居るのかい。此間君にも云つたぢやないか、僕が矢部さんと共同でベルグソンの著書を片端

から翻譯する事になつたんだよ。その前金として矢部さんが貰つて呉れたんだ」と、青木の答は、整然として一絲も亂れて居なかつた。その瞬間、雄吉は近藤氏の云ひ分の方を、何かの間違ではないかと、思つた程であつた。

「さうか。夫なら、甚だ結構だ。實は先刻、玆の主人に呼ばれて行つて見ると、主人があの小切手を出して、之に覺えがあるかと、云ふのだ。で、あると俺が答へると、主人はあの小切手は主人の手文庫に藏つて置いた物で、俺が盜んだのだらうと云ふのだ。が、君が本當に翻譯の前金として貰つたと云ふのなら大に安心した。ぢや之から主人の所へ行つて、辯解して呉れないか」

夫を聽いた時の、青木の狼狽さ加減を、雄吉は今でも忘れない。青木は彼が今迄裝つて來た冷靜と傲岸とが、悉く僞せ物であつたと、思はれるばかりに、度を失つてしまつた。彼の顏は、一時サツと眞赤になつたかと思ふと、以前よりも二三倍も蒼白な顏に歸りながら、

「君本當かい、主人が本當にそんな事を云つたのかい」と、青木は哀願的に殆ど顫へるばかりの聲を出した。

「本當だとも、今から主人の前へ出れば判る事だ」と、雄吉は儼然として云つた。彼はその瞬間、青木に對する自分の從僕的な位置が轉換して、青木に對して彼が强者として立つて居るのを見出した。彼は、夫が快かつた。

「あつ！　何うしやう、俺の身の破滅だ」と、悲鳴のやうな聲を出したかと思ふと、青木は雄吉の眼の前に頭を抱えながら、俯伏(つつぷ)してしまつた。今迄の倨傲な青木、絶えず雄吉を人格的に壓迫して居た青木が、今や全く地を換えてしまつて、其處に哀れな弱者として蹲つて居る。

「君は何うして、あんな非常識な、馬鹿な事をやるんだ。泥棒をやるのなら、もう少し泥棒らしい智惠を出さないのだ」と、雄吉は青木と交際し始めて以來、初て彼を叱責した。

「夫を云つて呉れるな。俺のは、全くフラ〳〵とやつてしまふのだ。俺は、その爲に何時かは身を滅すと、思つて居たのだ」と、さう云ひながら、彼はその蒼白な顔を擧げた。何と云ふ悲壯な顔だつたらう。盜癖と云ふ惡癖を、――意識を以ては何うとも出來ない惡癖を持つて居る人間の、苦惱と云つたものを、顔全體に漲らして居た。

「何うしやう廣井君！（青木が雄吉に君を付けて呼んだのは之が初てだつた）何うか、俺を救つて呉れ、俺は破産した自分の家名を興す重任を帶びて居るのだ。喰ふや喰はずで、逼塞して居る俺の兩親は、俺の成業を首を長くして待つて居るのだ。茲を追はれると、俺の此の身體で喰つて行く事さへ覺束ない。あゝ何うしやう、廣井君！何うかして俺を救つて呉れ！主人は君、告發するとか、そんな事は云ひはしまいね」

雄吉の心には、斯く迄に參つてしまつた青木に對する同情と、今迄自分を見下して居た青木が手を合はさんばかりに哀願して居るのを見て居る一種の快感とが、妙に混がらがつて居た。そして、その二つともが、彼が青木の罪を負はふと云ふ決心を、堅めるのに役だつた。

彼は、主人の部屋を出た時と同じやうに得々とした心持で、

「實はね、主人の前は僕が責任を負つて來たのだ。僕は君の爲に、此の罪を背負つて此家を出やうと思ふのだ。君を罪に落した所で、僕が君を此家に紹介した責任は逃れないし、又僕が何も知らないで小切手を引出しに行つたと云ふ事も、一寸辯解が立たないし、之が表沙汰にでもなると云ふのなら、別問題だが、此家を出さへすれば濟む事だから、僕も即座に決心してしまつたんだ」

之を聽いた時の青木の顔が一時に生氣を呈したのは無論であつた。が、青木はなるべくその生氣を押し隱すやうに涙を――それも嬉れし涙であつたかも知れぬと雄吉は後で考へた――ボロ〳〵と流しながら、「そんな事を、僕の罪を

君に委せて、僕が晏然と濟して居れるものか、僕は夫程卑屈な人間ではない。さあ一刻も猶豫すべきでない、さあ主人の所へ行かう」

雄吉は、後年になつてから、何故その時青木と一所に、主人の所へ行かなかつたかを悔いた。が、不思議な感激と陶醉とに心の底迄を、腐らされて居た雄吉は、威丈高になるばかりに、

「馬鹿な事を云つちや困る。君が、此家を出たら、何うなると思ふ。君はその弱い身體で、パンを求めるさへ大變ぢやないか。まして、學校を何うするのだ。君は自分で、自分の天分を愛惜する事を忘れちや駄目だぞ。僕は此家を出ても何うにでもやつて見せる」と、感激に溢れた言葉で云つた。

「君が何と云つても、君に代つて貰つては僕の良心に濟まない。何うか、僕に自白させて呉れ給へ」と、青木は叫んだ。青木の言葉も、まんざら僞だとは思はれない程感激して居た。

「が、孰ちらにして今夜は遲い。主人は寢て居るに違ない。夫よりか、君も僕も一晩ゆつくりと寢ながら考へよう」

青木も、夫に異存はなかつた。雄吉と青木とは、枕を並べながら、眠むられない一夜を明した。

雄吉の決心は、夜があけても、動いて居なかつた。が、主人に自白すると云つた青木は、夜が明けると、その事をケロリと忘れてしまつたかのやうに、たゞ眼に一杯涙を湛へながら「濟まない〳〵」と、口癖のやうに、云ひ續ける丈であつた。

其日の午後に、雄吉は僅かな身の廻りの物を仕末して三年近く世話になつた近藤家を去つた。

近藤家を去つた雄吉は、自分の壯健な肉體に賴る外に、何等の知己も持つて居なかつた。彼は、その翌日から直ぐ激しい

勞働に從事した。もう卒業迄は、僅かに三ケ月である。學校を出て大學に入れば、自活の道も容易に見出されると思つて居た。が、さうした苦しい奮鬪の裡にも、彼は青木から得る感謝と慰藉を、自分の苦鬪の原動力としやうとさへ思つて居た。が、其處に雄吉に取つて喰ふべき最初の韮があつた。青木は雄吉の豫期とは反對に、雄吉を敬遠し始めた。二人が曾つて話して居ると其處に奇怪な分裂が存在し始めた事を、雄吉は氣が付かずには居られなかつた。青木の事を雄吉は、何時の間にか青木！ 青木！ と呼び捨にして居る自分を見出した。彼は青木に對して命令的な威壓的な態度に出る自分を見出した。夫は、今迄の青木と雄吉との位置の轉倒であつた。今迄青木に蹂み付けられて居た雄吉が、奇拔な決死的な手段に依つて青木を征服して上から蹂み付けて居るやうであつた。傲岸で自意識の強い青木は、雄吉のかうした態度に何れ丈傷けられたか分らなかつたらしい。

「俺は貴樣の恩人だぞ、貴樣の沒落を救つてやつた恩人だぞ。俺の云ふ事に文句はあるまいな」と、云つたやうな意識が、青木に對する雄吉の態度の底に、何時も滔々として流れて居た。青木は、雄吉のさうした態度から來る壓迫を避ける爲であつたらう。敎室へ出て居る時にも、成るべく雄吉と、話をする事を避けた。雄吉が、夫を怨み憤つたのは、元よりであつた。二人の間には、大きい龜裂(ギャップ)が口を開き始めて居た。

高等學校を出ると雄吉は、學資を得る便宜から、京都の大學に入る事になつた。遉に雄吉との別離を惜んだ青木は、

「もう僕も、大學生なんだから、月に十圓や十五圓の內職をする事は、何でもない事だから、僕が働いて月十圓位は必ず君に送金する。夫は當然僕の爲さねばならぬ義務だ」と、青木はその大きい眼に涙を湛へながら感激して云つた。

雄吉の京都に於ける生活は、可なり苦しい悲慘なものであつた。彼は、ある人の世話で職工夜學校の教師をした。が、

夫は彼の時間の殆ど凡てを奪つて、僅かな報償を與へるのに過ぎなかつた。彼は、ノートを購ふにさへ、多くの不自由を感じた。彼は一時の興奮と陶醉との爲に、青木の爲に拂つた犧牲の餘りに大きかつたのを後悔し始めた。彼は、よく芝居で見た身代りと云ふ事を、考へ合はせた。一時の感激で、主君の爲に命を捨てる。夫は其場切りの事だ。感激の爲に理性が、盲目にされて居る其場限りの事だ。雄吉自身の場合の如く、その感激が冷めて居るのに、まだその感激の爲にやつた一時の出來心の恐ろしい結果を背負はされて居るのは堪らない事だと思つた。

青木が、涙を流しながら誓つた送金は、何時が來ても實現しなかつた。雄吉は堪らなくなつて二三度督促の手紙を出した。青木からは、夫に一通のハガキさへ來なかつた。彼は最後に殆ど憤に顫へて居るやうな文面の手紙を出した。夫に對しても、青木は沈默を守り續けた。

その頃ではもう雄吉は、自分の身代り的な行動を、心の底から後悔し始めて居た。夫と同時に、現在の苦學生的生活の苦惱が、ひし／＼と身に喰ひ込んで來た。其爲に彼は自分の過去に於ける馬鹿らしさと、青木の背信とを恨んだ。

が、雄吉の喰ふべき第二の韮は、もう其處に用意されて居た。雄吉が京都に來た翌年の春であつた。雄吉や青木と同じ級であつた原田と云ふ男が、故鄕の岡山から、上京する途で、京都に立ち寄つて雄吉を訪問した。彼は、雄吉の顏を見ると、直ぐ、

「君は青木の事をちつとも知るまいな。彼奴は此頃大變だぜ。スツカリ遊蕩兒になり切つてしまつてね。友人の品物を無斷で持ち出すやら、金を借り倒すやら大變だぜ。近藤さんの内も、到頭お拂箱さ。何でも近藤さんの内の貴金屬を隨分持出して、賣飛ばして居たんだつてね。彼奴のは丸切り出鱈目なんだ。後で露見しやうが、しまいがそんな事は平氣なんだ。彼奴は惡事をやるのまでが天才的だと云ふ評判だよ。……今だから、云つてもいゝが、彼奴は君が近藤さんの内

を出た時に、何か君が惡い事をやつたやうに、僕達の間に布令廻して居たよ。僕達は、無論少しも信じなかつたがね」と云つた。

雄吉は、夫を聞いて居ると、青木の爲に土足で蹂みにじられたやうに思つた。「貴樣は俺に恩を施した積で居るのか。貴樣から受けた恩なんか、此の通り蹂みにじつてしまつたのだ。貴樣が、一身を賭して俺の爲に保留して呉れた近藤家の保護を、俺は此方から御免を蒙つたのだ。」と、云つて居るやうな青木の皮肉な顔を雄吉は、マザ〳〵と想像する事が出來た。

雄吉の心を極度に迄傷けた事は、彼が青木の爲に拂つた犧牲の爲に、今尚苦しみ續けて居るのに拘はらず、青木が――雄吉のさうした苦痛に依つて漸く保留し得た保護を、夫程破廉恥に、夫程惡辣に、夫程背信的に、蹂み躙つた事であつた。雄吉は、全人格を以て青木を恨み、呪咀し、憤らずには居られなかつた。彼は青木に對する凡ての好感情を失ひ、滿身を彼に對する憎惡と侮蔑とで埋めてしまつた。而も、夫は、彼の苦學的生活が苦しくなれば苦しくなるに連れて深められて行つた。

青木が、大學でも不始末を演じて除名されたと云ふ噂を聞いたのは、夫から間もない事であつた。が、その時には埋もれて行く青木の天分を惜しむ程の好意も、雄吉の心の裡には殘つて居なかつた。

三

今カフエ〇〇〇〇の一隅の卓を隔てゝ、その青木は雄吉の眼前に坐つて居る。雄吉の心の裡に、ダニのやうに喰付いて離れない青木に對する惡感を、青木は少しも知らないのかも知れないと雄吉は思つた。青木に對する昔の好意が、自分の身を滅す事をも辭せない程の好意の破片(かけら)でもが、雄吉の心の裡に殘つて居るとでも、青木は誤解して居るのかも知れない

と雄吉は思つた。が、何う思つて居てもいゝ、もう僅に廿六時間だ。いや此會見をさへ手際よく切り上げれば、後は直ぐサッパリするのだと雄吉は考へた。

が、雄吉の前に腰かけながら默つて、眼を落して居る青木を見て居ると、彼は六年と云ふ長い間、田舍に埋れて居た青木の生活を考へずには居られなかつた。負惜しみが強くアムビシヤスであつた青木が、同窓の人達が大學を出て、銘々に世の中に受け入れられて行くのを見ながら、無味な乾燥な田舍に、その青春時代を腐らせて行つた焦燥(もどかし)さや、苦しさや、殘念さを考へると、雄吉は自分自身の恨みを忘れて青木の爲に、悲しまずには居られなかつた。

が、彼に取つては煉獄と云つてよい程の苦しい生活を嘗めて居たのにも拘はらず、青木は殆ど變つて居なかつた。雄吉のさうした憫みを受くるべく青木の顏は、昔の若さを殆ど失つて居なかつた。殊に青木の着て居る合着は、雄吉の合着よりも新しくもあれば、上等の品でもあつた。

雄吉には、青木のさうした無變化さが、少し物足りなかつた。雄吉の惡魔的な興味は、もう少し零落して、凋び切つて居る青木を見たかつたのだ。

雄吉は、何か話題を見付けやうと思つた。が、昔の生活を回想する事は、青木に取つても、雄吉に取つても苦々しい事であつたし、夫かと云つて、現在の二人の生活には話題となるべき何の共通點もなかつた。

「君はちつとも變らないぢやないか」

「あゝ變らないよ」と、青木は答へた。その聲は昔の青木と少しも變らないやうに、雄吉に取つては威壓的に響いた。

二人は又默つてしまつた。雄吉は、友達の噂でも話して見やうと思つた。が、級(クラス)の內の誰も、皆立派に成功の道に辿り付いて居て、誰の噂をしても青木に對して當て付けがましく、聞えないのはなかつた。雄吉は、やつと岡本と云ふ男の

事を思ひ出した。その男は大學を出るのも、一年遲れた上に、大學を出てからも職業がなくてブラ〳〵して居た。此男の噂なら青木を傷ける事はないと思つた。

「君は、岡本の噂を聞いた事があるかい」と、雄吉が訊くと、

「岡本！　あゝ彼奴か、彼奴はまだ生きて居るのかい」と、青木は突放すやうに云つた。「青木！　あゝ彼奴か、彼奴はまだ生きて居るのかい」と、云ふ方がもつと、自然らしく思はれるその青木が、かうした昔の儘の傲慢さを持ち續けて居る事が、雄吉には寧ろ淋しかつた。雄吉が話題に困まつて居る樣子を見ると、青木は、

「何うだい、君や桑野は勉强して居るかい、外國の物なんか、盛に讀んで居るだらうな」と、妙に皮肉に挑戰的に訊いた。夫は、昔の青木に殆ど變つて居なかつた。さうした靑木の攻擊的(アグレシヴ)な言葉に、今でも妙な壓迫を、感ずるのを雄吉は自分ながら不快に思つた。青木と雄吉との間に起つた交渉、夫を雄吉は胸に彫り付けて居るのに、靑木は夫をケロリと忘れたやうに雄吉に對して夫に對する何の遠慮も拂つて居ないらしかつた。

「君の單行本はまだ出ないのかい」と、青木は雄吉がタヂ〳〵とすれば する程、揶揄とでも取れば取れさうな質問を連發した。まだ三、四篇しか作品を發表して居ない雄吉は、單行本が出せる譯はなかつた。

雄吉は、向ひ合つて話して居れば居るほど、不思議な壓迫を感ぜずには居られなかつた。

六年憎み續けて來た青木、今ではもう彼の天分を尊敬した事さへ一つの迷妄だと、自分では思つて居る雄吉に取つて、青木は尙ある不思議な魅力と威壓とを持つて居た。久し振に顏を見合はした當座こそ恥しさに面を擧げ得なかつた程の青木が、紅茶を一杯啜つて居る裡に、何時の間にか、雄吉の上手に出て來て居るのを感じた。雄吉はその事が可なり不快であつた。青木が全然失敗の男であり、而も雄吉に對しては、トテも償ひ切れぬやうな不義理を重ねて居ながら、一

旦顔を見合はして居ると、彼の人格的威壓が昔のやうに儼として、存在して居るのが、雄吉は堪らなかつた。雄吉は、どうかして此の不快から逃れやうと思つた。が、青木と會つてから三十分にもならないのだから、體よく別れを告げる譯にも行かなかつた。

「何うだい！　君桑野の所へ行つて見ないかい」と、漸く雄吉は一策を考へた。桑野は、矢張り同窓の一人で、作家として一番早く世間から認められた男であつた。

青木も贊成した。雄吉は給仕女を呼んで勘定を拂はふとした。すると青木は何時の間にか、五圓札を持つて居て、「いや勘定は俺がしやう」と、云ひながら女中に五圓札を渡した。雄吉は強いて爭ふべき事でもないので、青木の爲すまゝにした。雄吉は、青木のさうした弱味を見せないぞ、零落はして居ないぞと云つたやうな態度が、可なり淋しかつた。

二人は、尾張町から上野行の電車に乘つた。ふと、雄吉は停留所の電柱の時計を見ると、丁度三時を示して居る。明日の四時と云へばもう二十五時間だ。二十五時間經てば、青木——雄吉にとつては、永久の苦手とも云ふべき危險性を帶びた此男は、東京に居なくなつてしまふのだ。もう少しの辛抱だと思つた。さう思つて居ると、青木は、

「君！雜誌記者なんて、隨分慘じめな報酬だと云ふぢやないか、年末の賞與がタッタ五圓と云ふ社があるさうぢやないか。君の方は何んなだい」と云つた。

雄吉は、又始まつたなと思つた。

「僕の方は、そんな事もないな」と、答へながら心の裡で二十五時間を繰返した。そして「桑野の所へ連れて行けば、桑野が又何うにか時間潰しをして與れるに違ない」と、思つた。（七年十月）

中央公論大賣捌所

東京	神田區表神保町	東京堂
同	神田區裏神保町	上田屋
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	京橋區西紺屋町	良明堂
同	日本橋區本石町	至誠堂
大阪市	北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛堂
京都市	七條停車場前	共盛社
同	四條西洞院	前田大盛社
朝鮮	京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

册數＼國別	內國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄕區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金口座は**東京三十四番**なり
一郵劵代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年十月卅一日印刷納本
大正七年十一月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長小石川一四四　振替東京三十四番　電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す